

うつせみのあなたに

第2巻

星野廉

目次

はじめに	
はじめに	2
もくじ	4
第1部 09.01.20～09.02.02	
09.01.20 それは違うよ	8
09.01.21 ま～は、魔法の、ま～	18
09.01.22 なぜ、ケータイが	29
09.01.23 お口を空けて、あーん	40
09.01.24 冬のすずめ	52
09.01.25 架空書評：彼らのいる風景	59
09.01.26 交信欲＝口唇欲	67
09.01.27 ケータイ依存症と唇	74
09.01.28 オバマさんとノッチさん	85
09.01.29 もしかして、出来レース？	95
09.01.30 カジノ人間主義	105
09.01.31 コラブログとモノブログ	118
09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー	127
09.02.02 こんなことを書きました（その2）	134
第2部 09.02.03～09.02.16	
09.02.03 1カ月早い、ひな祭り	140
09.02.04 神様になる方法	150
09.02.05 かつらはずれる	159
09.02.06 究極の武器はヒューヒューとももししなのだ	172
09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております	184
09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ	194
09.02.09 1人に2台のテレビ	201
09.02.10 人面管から人面壁へ	210
09.02.11 マトリックス	221
09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！	232
09.02.13 そっくり	242

09.02.14	「東京」CE無限大	253
09.02.15	架空書評：九つの命	263
09.02.16	こんなことを書きました（その3）	270
あとがき		
	あとがき	278
	『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル	279
奥付		
	奥付	298

はじめに

はじめに

本書を第2巻とするシリーズは、2008年12月19日から2010年3月11日までの間に書いたブログの記事を再録したものです。初めて開設したブログのタイトルは「ネガティブに生きる」で、ハンドルネームは「パリス・テキサス」でした。ヴィム・ヴェンダースが監督した映画、“Paris, Texas”（文字通りには、米国の「テキサス州、パリス市」という意味ですね）から取りました。大好きな映画です。邦題は、なぜか「パリ、テキサス」ですね。

どうして「ネガティブに生きる」なのかと申しますと、うつとの闘いと共存をテーマ、あるいは目的にしていたからです。つまり。「ネガティブに生きる＝頑張らない」ほどの感覚で、名付けました。

私のブログは、当初の日記的な色彩が薄れ、徐々にエッセイや論考に近いものになっていきます。ブログにしては長めの記事をほぼ毎日書いていたので、データとしての全体の量はかなり大きいです。したがって、いくつかに分冊する形で電子書籍化していく予定です。

ブログで長文の記事を投稿していた時期には、パソコンや携帯電話で読まれる文章であることを意識し、読者がモニターや液晶の画面で読みやすくするための工夫をしていました。具体的には、各段落を短くし、段落間の改行を頻繁に行うようにしました。また、1センテンスでの読点をなるべく多くし、中には読点を打つ個所で改行するといった少々乱暴な書き方もしています。

そんなわけで、今回の電子書籍化に当たっては、もとの文章がブログ記事であったことを、できる限り忠実に再現し、上述のような独特のレイアウトをそのまま反映させるように努めました。

*

以下は、過去に開設したブログの記録です。

- * 「ネガティブに生きる」 2008-12-19～2009-02-27
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-01～2009-03-09
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-03-10～2009-03-15
- * 「うつせみのあなたに」 2009-03-26～2009-04-08
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-04-06～2009-04-08
- * 「うつせみのあなたに」 2009-04-17～2009-07-17
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-08-01～2009-08-08
- * 「うつせみのあなたに・・・」 2009-08-11～2009-09-01
- * 「小品集」 2009-09-04～2009-11-14 (ハンドルネームとして「恵」を使ったブログ)
- * 「うつせみのあなたに」 2009-09-04～2009-11-19
- * 「うつせみのあなたに」 2009-11-27～2009-11-29
- * 「うつせみのあなたに」 2009-12-01～2009-12-11
- * 「でまかせしゅぎじっこうちゅう」 2009-12-02～2009-12-10
- * 「ヒト観察記」 2009-12-06～2009-12-10
- * 「うつせみついたうつせみのおと」 2009-12-08～2009-12-10
- * 「うつせみのな」 2009-12-12～2009-12-15

* 「うつせみのくら」(それまでに削除したブログ記事のバックアップを再ブログ化したもの)

* 「うつせみのあなたに」 2009-12-16～2010-02-28

* 「うつせみのうわごと」 2010-03-04～2010-03-11

ブログを作り、壊し、またもや、作り、壊し、の繰り返しです。お恥ずかしい限りです。とはいえ、以上の記事のバックアップは、ちゃんとすべて保存されています。実は、言霊が怖いのです。文章を捨てられない、消せない、つまり削除できないのです。冗談ではなく――。

このシリーズのタイトル、また現在もあるブログのタイトル「うつせみのあなたに」は、いろいろな意味に取れます。その意味の多重性については、本書で何回か触れています。そのため、意味の複数の解釈は保留にしておきますので、どうか想像してみてください。大きめの辞書で「うつせみ」と「あなた」を引いてみると、何通りかの意味に取れることが、お分かりになると思います。

本書は、『うつせみのあなたに』の第2巻です。このシリーズ全体に共通するのは、「代理の仕組み」、つまり「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いるという仕組みです。これをテーマに、さまざまな例を挙げたり、多種多様な素材を使いながら、話を展開していきます。

本書の読み方として、まず記事を読み解説は後回しにする方法以外に、第1部の最終記事「09.02.02 こんなことを書きました(その2)」、そして第2部の最終記事「09.02.16 こんなことを書きました(その3)」に収録されている各記事の解説に目をお通しになった後に、それぞれの記事をお読みになるのも、よろしいかと思います。

もくじ

はじめに

もくじ

第1部

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

09.01.22 なぜ、ケータイが

09.01.23 お口を空けて、あーん

09.01.24 冬のすずめ

09.01.25 架空書評：彼らのいる風景

09.01.26 交信欲＝口唇欲

09.01.27 ケータイ依存症と唇

09.01.28 オバマさんとノッチさん

09.01.29 もしかして、出来レース？

09.01.30 カジノ人間主義

09.01.31 コラブログとモノブログ

09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー

09.02.02 こんなことを書きました（その2）

第2部

09.02-03 1 カ月早い、ひな祭り

09.02.04 神様になる方法

09.02.05 かつらはずれる

09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ

09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております

09.02.08 架空書評：PDS ジェネレーションズ

09.02.09 1人に2台のテレビ

09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」Ⓔ 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

あとがき

『うつせみのあなたに第1巻～第11巻』の記事タイトル

第 1 部 09.01.20～09.02.02

09.01.20 それは違うよ

◆それは違うよ

2009-01-20 10:20:25 | Weblog

目でもいいです。耳でもいいです。鼻でもいいです。五感と呼ばれるものから、いわゆる第六感も含めて、考えてみませんか？

きょうは、そのことが気になるのです。五感、または知覚、または感覚です。厳密に言えば、その3つは「違う」らしいのですが、細かいことは気にしないようにしましょう。いずれにせよ、知覚って、

何のために、あるのでしょうか？

不思議です。謎です。神秘です。不可解です。よく考えてみれば、奇跡のような、嘘のような話です。だから、ヒトは宗教や哲学や科学を作ったのでしょうか。

大昔は、宗教も哲学も科学も学問一般もが一つだった時代が、長く続いていたらしいです。森羅万象を扱う人たちがいた。つまり「何でもあり」あるいは「何でも屋さん」の先生がいたわけです。

その人は、病気も治せるし、雨も降らせるし、大雨をやませることもできる。何をしてもいけないか、何をしなければならないかも、知っている。これから何が起るかも、自分たちの先祖が何をしてきたのかまでも、知っている。他の土地から来た人たちと交渉もするし、場合によっては、撃退するための指揮をとる。

もちろん、その人ができないことも、時々あります。みんなが見守る前で、大見得を切ってみたものの、

降ると言った雨が、降らない！

治ると言った病人が、治らず、死んでしまった！

大丈夫と言ったのに、よそ者たちに食べ物をとられてしまった！

絶対にこうなると言ったのに、予想が外れた！

これでは、立つ瀬がありません。で、その人は、考えました。みんなから頼りにされるだけあって、他の人に比べるとずるいのです。

わしは代理だ。

と、叫ぶ。その人は、「何でも屋さん」ではなく、「何でも代行屋さん」だと言うのです。もっとも、これは都合の悪い時だけです。普段は、「何でも屋さん」みたいな振りをしています。演技力が抜群なのです。実に、ずるい。こういうのを、頭がいいとも、言います。

では、何の代理なのか？

「何でも代行屋さん」は、たいてい天を指差します。代行屋さんによっては、目をつむる人もいます。どうやら、その人の閉じた目の裏あたりに、何かが見えたり、澄ました耳に何か聞こえるらしい。そのところは、普通の人には分かりません。

以上が、人の「知」の誕生を「紙芝居的 (= 神芝居的)」に説明したものです。なにせ、紙芝居ですから、あまり深く考えないでください。神、あるいは超越者 (= superman =

ヒトを超えた存在 = 超人) の誕生とか、シャマン (= シャーマン) の出現とか、宗教の発生とかを、連想なさるのは自由ですが。

*

で、五感に (※もし、そんなものがあるとすれば第六感にも) 話を戻します。

ヒトの知覚は、なぜ、あるのでしょうか？

生物学者でも古生物学者でも哲学者でもないので、あくまでも素人の考えですが、

「違いが分かる」

よくなるために、知覚が備わっているのではないのでしょうか？「なぜ、知覚があるか？」ではなく、「知覚が備わっている目的は、何か？」とか、「知覚が備わっていれば、どんないいことがあるか？」とか、「どういうふうに、知覚という機能を使っているか？」に注目したほうが、話があまりややこしくならない。とりわけ無精者の自分には、もってこいのメソッド (= やり方) です。

だいいち、素人が寝転がって考えるのには、「なぜ」や「どうして」は荷が重過ぎる。そうお思いになりませんか？ そんな大それた問題は、素人が口出しをしてはならない。赤恥をかくだけ。要らぬエネルギーを使うだけ。このご時勢ですから、省エネ、エコで、気張らずにいきましょうよ。

知覚があれば、「違いが分かる」。

インスタント・コーヒーの、かつての宣伝文句じゃありませんが、「違いが分かる」ということは、日常生活に思いをはせてみれば、何となく分かるような気がしませんか？

「この卵、腐っているわ」「あれ、うんちに血が混じっている。大変だ」(※冗談ではなく、気をつけましょう)「台所から、何かが焦げているような匂いがする」「このティシュペーパーは駄目。はなをかんでたら、鼻が赤くなってきた」「あの顔を見たか？ きょうの部長は、機嫌が悪いぞ」「あっ、〇〇ちゃんからのメールが来てる」「あいつ、着メロ変えたな？」「けさから腰と背中あたりがかゆくて仕方ない」「先生、このところ、自分から見て胃の左側に、時々刺すような痛みを感じるんです」……

やっぱり、知覚機能があれば、自分の体の具合も分かるし、身の回りの状況を判断できるし、悪くなりそうなことも予想できるみたいだし、これは便利だ。どんどん使おう。そんな感じがします。

これは、ヒトに限りません。あらゆる生き物が日々実行しています。ブドウ球菌も(※たぶん)、オカメインコも、朝顔も、コビトカバも、シーモンキーも、獲物(=滋養)を得るために、逆に自分が他の生物の獲物(=滋養)にならないために、必死かどうかは知りませんが、とにかく「知覚」している。知覚しまくっている。要するに、

違いが分からなければ、生き延びられない、サバイブできない、

というわけです。大変ですね。で、「違う」を難しく言うと「差異」と言います。「差」のつく言葉を、思い出してみましょう。

差別、無差別、差別化、落差、誤差、時差、差額、大差、小差、交差……。

次に「差異」の「異」はどうでしょう？

異物、異物感、異性、奇異、異様、変異、異色、異教、異教徒、特異、異化(※好きな言葉です、この言葉をダシにして小説を書いた女性の芥川賞作家がいます、多和田ヨーコ、とかいう方です、あとで正確な名を調べてみます)、異常、異状、驚異、異例……。

こう並べてみると、うーんと唸ってしまいます。存在感のある言葉たちばかりです。こう、お腹の辺りにぐっと来るものを感じます。

*

ところで、「間違う」「間違い」という意味で、

「それは違うよ」、

と、言いませんか？ different ではなく、wrong の意味です。ちょっと視点を変えて英語で言うと、その「違い」が分かったような気がします。つまり、「違う」には、大きく分けて2通りの意味があるということです。翻訳家や通訳者は大変だなあ、などと心配しそうになりますが、前後関係というものがあるから、たいていは、「大変な」ことにはなりません。ただ、「違う」に2通りの意味があるのは、「変な」だけです。何か、変。何か、不思議。

このブログでは、こういう時に、ある計算をよくやります。きょうも、やってみます。引き算です。

「間違い」－「違い」＝「間」

ん？ 何じゃいな、これは？ このブログをやっているやつは、変じゃない？ ちょっと違うんじゃない？ 間違っているんじゃない？ ヤバいんじゃない、ここが（※と言いながら、体の一部を指さす、そして回す）？ 危ういんじゃない？ アブネーよ、きっと、マジアブ。

ちょっと、聞いて（＝待つて）ください。

本気なんです。正気とは言いませんが、本気なのです。

と、このブログではよく書きます。で、さっきの計算式を説明させてください。

「間違い」－「違い」＝「間」

「間（＝ま）」というのは、「あいだ」とも読みますね。「あいだ」というのは、「隔たり」「距離」「離れていること」ですよ。空間、つまり「からのま」「からっぽ」「何もない空間」「空白」「無」「中身なし」「うつせみ」（※大好きな言葉です、よかったら、辞書を引いてください、2つの語があります）ということです。

「ま」、または「まあ」、または「まー」

って、口に出して、言ってみてください。口が開いて、空間ができますよね。それです。それなんです。「間」というのは。

やっばし、変だ、コイツ。

そうお思いになるのも、無理はありません。自分もそう思います。「間違い」と「違い」の違いは、変なんです。不思議なんです。だから、それを考えると、変になるのです。

えっ、変？

エヘンで、思い出しましたが、違いが分かる人というのは、「エヘン」と威張っているのです。さっきの話に出てきた、

「何でも屋さん」の振りをした「何でも代行屋さん」

が、そうです。あのお話は、大昔を舞台にした「紙芝居的（＝神芝居）」でしたが、実は、今、この西暦2009年にも、いるのです。あのお芝居は、大昔から現在までずーっと続いているのです。

*

で、「何でも屋さん」の振りをした「何でも代行屋さん」ですが、うようよ、います。あなたの周りにもいるはずです。ひょっとして、あなたも、そうだったりして。実を申しますと、この記事を書いているアホも、時々その振りをすることがあります。「こけおどし」「虎の威を借りる」「空威張り」「虚勢を張る」「張子の虎」なんて言い方もあります（※ただし、ちょっと横にそれると「張子の虎」「魂の抜け殻」「間抜け」にもなります）。ヒトであるかぎり、逃れない習性のようなのです。

そもそも、「威張る」とは「威=力（※パワハラのパワです）」を、「張る=貼る=示す=『これが見えぬか？ と脅す』」ことです。トラとか怪獣の「かぶりもの=ぬいぐるみ」を被って、ウォーっとか言って脅すことです。小さいころ、「おかあさんといっしょ」で、見たことがありますか？ あれです。

これが、SやMやLぐらいならいいのですが、LLやXL以上になると、事は重大になります。

憲法=法律=主権者=国民 → 国会議員

や、

その他諸々の議員・法律→ 公務員

や、

貨幣→ 企業家・財界人・金融業者・国庫管理人

という具合です。その

「→（※矢印）= 権限委譲= 代理 = 代行」

のところで、とてつもない「勘違い」=「ねじれ」=「ゆがみ」が生じて、「誤作動」=

「不具合」＝「犯罪的行為」が起（お）こっている。これは、怒（お）こらなければなりません。法治（ほうち）国家として、放置（ほうち）しておくわけにはまいりません。

どうしてなのか？ 説明させてください。

「→」は、預けただけ、貸してあげただけ、任せてあげただけ、「悪いけど、忙しいから、やってちょうだい」と渡しただけ、なのです。それを、自分のものになった、自分が大将だ、自分が持ち主だ、要するに、自分は偉い、と間違えてしまったのです。

さらに悪いのは、預け、貸して、任せて、渡した側までが、間違えてしまったということです。

上で挙げた、国会議員、公務員、企業家・財界人・金融業者・国庫管理人という、でかい面（つら）をした代理人たち（※「→」の右側にいる人たちです）の「勘違い」は、実際にはなほだしい。「つら」「つら」思うに、あい「つら」のために、国民は「つら」い目を我慢する必要は、本来は全然ないのです。それなのに、いつまで経っても、平行線。勘違い平行棒状態です。改まる気配は、まったくなし。そう「づら」？ ＝そうではありませんか？

話があちこち行って、ごめんなさい。実は、自分も焦っているのです。この goo ブログには 10,000 文字までという制限があるので、あまり、改行したり、長話をしたりすると、リミットを越えてしまうのです。

ですので、そろそろ、きょうのまとめをします。大雑把なまとめになりますが、お許し願います。

(1) 「五感＝知覚＝感覚」とは「違いが分かる」ためにある。

(2) 「違いが分かる人 or 分かった振りをするのがうまい人」は「偉い」と、他の人たちから言われる（※これは、言う人たちにも責任があります）。

(3)「偉い人」は、実は「何でも屋さん」ではなく、「何でも代行屋さん」である。

(4)「何でも代行屋さん」が「何または誰」の代理人かは、謎である。

(5)「何または誰」という謎を解くカギが、「違い」と「間違い」の「違い」にあるらしい。

(補足)「間違い」と「違い」の「違い」は「間」である、と読んだ、あるいは聞いたさいには、「まあ」とか、「まー」と、あきれて口を「開ける＝空ける」のでしたよね。(※開いた口を閉じるのを忘れないでください、念のため)。

*

では、飛躍します。大学などで働いていらっしゃる「偉い」先生方から非難される、あるいは罵倒される、あるいは嘲笑される、あるいは無視されるのを覚悟で言います。

アウフヘーベンしよう！

で、「アウフヘーベン＝止揚(※「しよう」と読みますね)」ですが、「しようがない」の「しよう」と似ていますが、ご面倒でも「止揚(しよう)」を辞書で引いてみてください。さっそく、そう「しよう」と言うだけであれば幸いです、面倒な方は、辞書を引かなくても大丈夫です。大したことではありません。「アウフヘーベン＝止揚」とは、要するに「飛躍＝こじつけ＝だじゃれ＝オヤジギャグ」なのです。さて、シリアスにいきます(※ほんまかいな)。

*「間(＝ま)」とは「隔たり」、つまり「差異」である。(※さいですか？(＝そうですか？)当ブログでは、何度か使ったオヤジギャグです。リユース、リ「サイ」クル、なんちゃって、失礼)。

*「差異＝différence」とは、たとえばジャック・デリダというフランスの、オヤジ

ギャグの達人（※哲学者とも言われています）が、シリアスに考え続けた「もの＝こと」です。そして考え続けた結果、別の名を持つ、「差異」の「双子の片割れ（※ちょっと顔立ちが違うだけの「さえん＝différance」奴なのです）」をでっち上げたのです。ただし、ややこしい話なのですが、いつか、この「もの＝こと」については別の機会に、書きたいなど、身の程もわきまえずに思っております。

*

とりあえず、きょうは自分なりに、今後の見通しを兼ねて、オヤジギャグをわめきます。そのダジャレの責任は、いずれ、とりますので――

「誰も責任とれなんて、あんたに頼んじゃいねーよ。ひっこめ」（※これ、幻聴を書き取りしたものです）

――このところ、時々こうした幻聴が聞こえます。難聴に加えて幻聴となると、自分としては、とても困るんですが、わめきます。よろしいでしょうか？ では、いきます。

（わめきの1）：マラルメの「さい」ころが、「賭ける」ことによって「書ける」ことの実践としての「詩作＝思索＝試作」の道具とされたように、「差異」は、このブログという場（＝間＝空間）で「さい」ころを振って出た「目＝芽」である。

（わめきの2）：偶然性の産物である「差異」という言葉に寄り添い、その身ぶりや表情を模倣し、奥には至らず、言の葉の表層をすりすり滑走しながら、psych(o)-（※「サイクとかサイコと読みます）＝靈魂＝心理＝精神＝脳＝動揺＝ショック＝驚異＝興奮＝「なんちゃって（※リーダーズ英和辞典など大きな英和辞典では、ちゃんと、この意味も載っています）」と戯れてみる。

（わめきの3）：間違っても、真理や概念や観念には至らない。いや、至らざるを得ない身ぶりを演じなければならないことは百も承知だが、そこ「ん」ところを、「うん」、と「ふん」ばる。それが否定語の意味の素（もと）たる「n」の使命（※しめい）。それを言っちゃあ、お「しめえ」（＝エポケー）よ、と罵倒されるのを覚悟のうえでの確信犯。えっ、ボケ（※うっかり、差別語を使いましたことをお詫び申し上げます）だって？

(わめきの4):「いたらぬ」者の「いたらぬ」ところは、許してくだ「さい」。「ころ」あ
いのみて、いつかまた「さい」を振りますので。

以上、痴態=遅滞=遅怠=延滞=艶態=差延=支離滅裂=アドリブギャグを、演じまし
たことを、お詫び申し上げます。「差異」については、「消えてしまいたい指数」が低け
れば(=抑うつ状態がひどくなければ)、あすにでも書きたいと思っております。

*

あすの予定を具体的に言えば、

「違う」ということが、ヒトがヒトとして生きるさいに、具体的に、どのような状況をも
たらし、いかなる災厄を招くか? その利点(※たとえば、人間らしく生きるということ)
と、その残酷さ(※たとえば、人間である限り避けることのできない差別)の両面につ
いて、自分の頭と体を使って考えてみたい。哲学してみたい。そう思っております。本
気です。

やっぱり、きょうも長くなってしまいました。モニター上の細かい文字の文章を、こ
こまで読んでくださった方に、心よりお礼申し上げます。

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

◆ま～は、魔法の、ま～

2009-01-21 10:36:37 | Weblog

自分の頭の整理を兼ねて、きのう書いたことをまとめてみます。

* 「間違い」－「違い」＝「間（※ま）」

* 「間」は、「あいだ」「隔たり」「距離」「離れていること」「空間」「からのま」「何も
ない空間」「空白」「無」「中身なし」「うつせみ」である。

* 「間」は、「差異（※さい）」とも言う。

ということでした。

さて、

ここで童心に帰りましょう。「ドレミのうた」を歌いませんか？ ただし、さびの部分
だけを、拝借します。例の「○は△△の○～」というやつです。では、こちらからリードさ
せていただきます。最初は、シリアスにいきます。

「間（※ま～）」は、真面目の、ま～。「間（※ま～）」は、まことの、ま～。「間（※ま～）」
は、まどもの、ま～。「間（※ま～）」は、マネーの、ま～。「間（※ま～）」は、マックの、
ま～。「間（※ま～）」は、真央ちゃんの、ま～。

何だか、面白くないですね。ちょっと、ネガティブにいきます。

「間（※ま～）」は、麻薬の、ま～。「間（※ま～）」は、間抜けの、ま～。「間（※ま～）」
は、負け犬の、ま～。「間（※ま～）」は、負け組の、ま～。

自分のことのように、悲しくなりかけました。気分を変えて、哲学的・文学的にいき
ましようか。

「間（※ま～）」は、間違いの、ま～。「間（※ま～）」は、曼荼羅（まんだら）の、ま～。

「間（※ま〜）」は、マンガの、ま〜。「間（※ま〜）」は、マイナスの、ま〜。「間（※ま〜）」は、マラルメの、ま〜。「間（※ま〜）」は、マルクスの、ま〜。「間（※ま〜）」は、万葉集の、ま〜。

こんなん出ましたけど、どうですか（※イズミさん、あなたは今、どうしていらっしゃるのでしょうか？）

要するに、

ま〜は、魔法の、ま〜。

と、お感じになりませんか？ 少なくとも、自分にとっては、「間＝差異」は魔法のように不思議です。以上の駄洒落がぜんぶ、「当たっている＝言えてる」ような気がするの、やはり間抜けだからでしょうか？ ふ抜けなのは、知っていましたが、間まで抜けているとは？ 魔が差したのに、違いない。とうとう、悪魔に目をつけられたらしい。

やはり、罰（ばち）があったのか？ そうかもしれない。それにしても（※いや、「だからこそ」か？）、摩（ま）訶不思議です。自分の誕生日が命日になる人がいるくらい、不可思議です。ねえ、小津安二郎（おづやすじろう）さん（※あなたは今、どうしていらっしゃるのでしょうか、千の風ですか）？ なぜ、ここで Ozu が出る？ やっぱし、魔が差しているのではないか？ きっと、魔法だ。やっぱし、オズの魔法使い？

*

ここで弁明をさせてください。いや、弁明などと格好をつける柄ではないので、言い訳をさせてください。

どうして、このブログでは、ダジャレとオヤジギャグに走るのか？

格好つけた弁明と、へなへなへろへろした言い訳の2つがあります。

(1) 弁明：戦略です。徹底的に言の葉の表層にこだわり、言語活動の必然性である抽象化に、あえて絶望的な抵抗を試みることを、具体的な言葉の身ぶり、および運動として実践するのを目的とする。言い換えれば、マラルメの詩作＝思索＝試作のツールであるサイコロのように、言葉に「賭ける」ことにより、「書ける」という当たり前のようで決して当たり前ではない、偶然と必然の共存を実践するため。

(2) 言い訳：お勉強は嫌い。本を読むのも苦手。無気力。アカデミックな権威とは無縁。友達なし。コネも引きもなし。事実上の無一文(=いい年をして親のすねかじり)。こうしたネガティブな状況にあるけれど、哲学がしたいんです。そのためには、自分の頭と体を使って考えるほか、ないじゃないですか。いや、それこそが哲学することだと思えます。アカデミックな場でするものだけが、哲学ではない。言葉と面白おかしく本気で戯れること(※これって鉄学の哲則です)なら、野垂れ死にする最期の最後の瞬間まで、できるんじゃないか。

※おまけの弁解：ひとりギャグを飛ばしながら、うつを紛らわすという、トホホな理由もあります。

というわけです。ご理解いただければ、うれしいです。本当に。

*

へこんできたので、ちょっと、格好をつけていいですか？では、いきます。

「差異」＝「間」とは、言語化するのが困難です。不可能といってもいいほど、難しい。

【ここで、1つお願いがあります。このブログ日記を読んだあとにでも、フランスにいたジャック・デリダという人が勝手に作った、différance(※différenceではなく)という語について、グーグルでぜひ検索をしていただければ、幸いです。いろいろな訳語がありますが、「差延(さえん)」(※さえんなあ、などと冴えないギャグを飛ばせば、ダジャレが大好きだったデリダさんは、お墓の下できゃっきやいて喜びますよ。もし、お墓にいればの話ですが)をキーワードに、ウィキペディアで検索されると、かなり良質な解説にたどりつきます。これが、てっとり早いでしょう。ただ、その解説に目を通して、

「ん？ こんな読む気はしない」と、少しでもお思いになれば、即、おやめください。頑張るのは、よろしゅう。】

繰り返します。

「差異」＝「間」とは、言語化するのが困難です。不可能といってもいいほど、難しい。

難しいのも当然です。「差異」＝「間」＝「空間」＝「からっぽ」＝「無」なんですから。＜何にもない状況 or 事態＞を、「何にもない」と言葉にしたところで、何にもないことに「変わり（＝代わり）」はないですよ。

でも、それをやっているのが、ヒト（＝狂ったサル）なんです。この難しい、または不可能なことを、やすやすとできると錯覚する。この鈍感さなしに、ヒトは生きられない。この鈍感さなしに、ヒトとして存在できない。と、ということなんです。

きのう、

「知覚することは違いがわかること」

だって、書きましたよね。たぶん、ブドウ球菌も、シーモンキーもやっている。つまり、生き物全部がやっているらしい。

ただし、ヒトの場合、それをやりすぎてしまっているんです。だって、月に仲間を送りこんだんですよ。今、こうやって、ネットであなたとつながっているんですよ。原子爆弾を、こしらえちゃったんですよ。世界で一番のベストセラーは、バイブルですよ。天然痘を、みんなで力を合わせて根絶したんですよ。ガレージで何かをつくり始めて、（中略）えげつない抱き合わせ商法で、世界中に何かをばら撒いて、お金＝貨幣を気の遠くなるほど儲けて、大邸宅をいくつも持ち、少しだけ他のヒトたちに与えて、ギゼン家じゃない、ジゼン家として、ソンケーされるヒトまでいるんですよー。ビールを飲みすぎてゲーッツ。

これって、やっぱし、やりすぎです。いいこと、悪いこと、含めて、やりすぎです。

*

もっと、身近な例を挙げて、「知覚すること」について、考えてみましょう。

知覚するのはいいけれど、他の人の、肌や目や髪の色や、顔立ちや、身なりや、体つきや、発音・発声や、訛りや、目には見えないところまで、知覚（＝差別）するなんて――。

また、知覚をする器官のうちで、欠けたり、具合が悪かったり、無いところがある人を知覚（＝差別）するなんて――。

それでいて、愛はこの惑星を救う、などという、甘い言葉＝美辞麗句に、涙流しながら、ポテチを食べ食べ、テレビを見ているなんて――。

自分を含めて、やりすぎです。でも、致し方ありません。

知覚っていいですけど、映画やテレビやパソコンのモニターを見ているのと、大差ないんじゃないか、と思います。見ているのは、影だったり、電気信号の線や画素の集まりだったりするわけで、「本物＝物自体＝現象自体」じゃないんですよ。バーチャル・リアリティ（※最近、この言葉を見聞きしなくなったような気がします。死語＝死後？）らしいのです。

脳細胞や脳神経なんて、理科も科学も苦手だった自分にはよく分かりませんが、とにかく、知覚（＝ちかく）は、離れたものや分かりっこないものを「近く＝ちかく」で見ている、または感じているように、錯覚させる、仕掛け（＝大嘘＝フィクション＝代理）なんですよ。

トンボは複眼で世界を見ている。さかなは魚眼で世界を知覚している。犬の嗅覚は、ヒトも利用するほど高感度。ウサギは聴覚がいいらしい……。すると、ヒトの知っている世

界像や知覚している「世界」や「宇宙」なんて、「スタンダード＝標準＝基準＝規範＝模範」なんかじゃない。

特権的でも、絶対的でも、まして「極めて優れて」なんかいないのではないか？「誰も、そんなこと、言ってねーよ」と言われれば、「さいですか？ ほな、さいなら」とすごすご引き下がるしかありませんが。

でも、言いたいです。

現実なんて、見たり感じたヒトなんて、本当はいないんですよ。見たり、聞いたり、感じたという言葉があるだけなんです。そういう言葉をほかのヒトに伝える、あるいは残すだけ。「どんだけ～？」と、尋ねられれば、「そんだけ～」なんですよ。はっきり、言えば。

まして、前世や未来や霊やオーラなんて、見たり感じたヒトなんて、いない。見た、感じたという、言葉があるだけ。それが、証拠に本を出すたびに、大儲け。テレビに出てしゃべるだけで、大儲け。「見ました」「聞きました」「感じました」という

「言葉」を切り売りするだけ

で、お金がどんどん入ってくる。

ああ、しんどー。もう少しまったり、いきましよう。

*

たとえば言えば、影絵です。小さいころ、片手を使ったり、両手を合わせて何かの形を作り、光と影の織りなす像を映し出し、いろいろなものが「見える」ことに、幼い心をときめかしたこと、ありませんか？ 不思議でしたよね。感動しましたよね。そこに、ぜんぜんないものが、あるように思える。それはそれで、素晴らしいことです。

影絵は、違ったもの、異なるもの、相反するとされているもの——そうしたものを、いとも簡単に影という形でつなげます。言葉は、影絵にとってもよく似ています。種を明かせば、一種の「錯覚」です。ここで言う

「錯覚」とは、Aの代りにAでないものをAと取り違えること

です。

だから、言葉があり、ダジャレがあり、言い間違いや聞き間違いがあり、比喩があり、こじつけがあり、言葉にいろいろな意味がくっつき、言葉が豊かになり、言葉がノイズでまみれ、誤解があり、理解がある。そして、「コミュニケーション」や「全然話が通じない」や「聞いても聞こえなかったことにする」ということが成立する。そんなふうにも、言えるように思います。

そうだとすれば、すばらしいことです。ま～は、魔法の、ま～。

やっぱり、魔法です。

要するに、影なんです。知覚とか、言葉とか、表象とか、情報とかいうものは——。「何かそのもの」ではない。「何かそのもの」には、ヒトは決してたどりつけない。だから、その影（＝代理）を「見る」「知覚する」という、仕組みを作り上げたというより、わけも分からず手に入れてしまったのです。「授かった」と言う人もいますが、自分は、ちょっと「違う」ような気がします。本当のところは、誰にも分からない。分かるなんていう人がいたら、それは人ではない。超人です。そんな人、いますか？

別に、喧嘩を売っているわけではありません。誤解しないでくださいね。念のために申し添えます。

*

今、申し上げたことは、「嘘だ、大嘘だ、デタラメだ、妄言だ、妄想だ……」とおっしゃる方がいるに違いない。それは十分承知しております。自分は、自分の思っていることを書くだけ。言葉として書くだけ。自信も確信も確証も、全然ありません。ただ、「そう思う」と書くだけです。

誤解しないでくださいね。自分は平和と平穏を愛しています。喧嘩は弱いから、しません。議論は、頭が悪いからしません。喧嘩にも議論にも、勝ったことなど、生まれて以来、一度もありません。それだけが自慢です。弱い者いじめは、やめましょう。喧嘩や議論するなら、強くて頭のいい人と、してください。どうやら、被害妄想の傾向が強くなってきたようです。

さて、「差異 = 間」に話を戻します（※あちこち振りまわして、ごめんなさい、首尾一貫とか筋道を立てることが苦手なのです）。

繰り返します。

「差異 = 間」は、言語化できない。

だから、

迂回（うかい）、つまり、「差異 = 間」のまわりを、おろおろ、うろうろするしかない。

あるいは、サイコロを振るように、どんな目が出るか分からないけれど、

賭けるしかない。

ヒトは、まさに絶望的な慢性的ギャンブル依存症に陥っているわけです。でも、大丈夫。ヒトはたくましい。鈍感さとすれすれの、たくましさを持っているからです。「見る」に代表される「知覚する」ことによって、森羅万象をつなぐという、魔法を手に入れて以来、その威力を信じている。

森羅万象をつなぐ「頑丈な鎖＝魔法」

とは、当ブログで何度も書いてきた、

「表象の働き」、言い換えると「Aの代理として「Aではないもの」を用いること」

にほかなりません。これはすごい「からくり」です。半端じゃない。すごい武器です。おそらく、この惑星で最強でしょう。だから、月にも行けた。だから、あなたも頑張っ、というわけです。

せいぜい（※こんな言い方は、他の生き物たちに対して、まことに不遜ですが）オオハクチョウか、チョウザメか、アカゲザルくらいの、「知覚する」能力を持っていれば、ヒトは、これほどややこしい事態・状況を日々生きることはないわけです。でも、ほかの生き物の持つもの以上のもの（※これも、不遜な言い方です）を、いったん手に入れたからには、しかたがありません。ヒトをやめるわけにはいかない。「どうにもとまらない」状態です。

正しい、間違っている、良い、悪い、違う、同じ、偶然、必然、原因、結果、意味、概念、観念.....何だか、やけくそに、いっしょくたに、してしまいましたが、今、列挙したような、目で見たり、手で触れたりできない「もの」や「こと」や「さま」も、はたまた、鉛筆、ダイヤモンド、自分の住まいにいるペット、自分の大切な手や足、目の前の愛用のパソコンやケータイ.....といった、見たり手で触れたりできる「もの」も、本当は、

ヒトからは遠く離れた、決して見たり触れたりできないもの

なのではないでしょうか？ 寂しいけど、悔しいけど、そうではないでしょうか？ でも、いいのです。みんながそうなのですから。

*

何だか、しんみり、しちゃいました。シンコペーションしましょう。シンコペーション？言葉に詰まったので、言葉のサイコロを振ってみたら、何だか「場違い」な言葉が出てきました。「間違い」ではなく、「場違い」。「場」……。これを考えると、大変なことになりそうなので、いつか、別の機会に書きます。

「差異」という言葉は、難しく響くので、「間」を使って考えてみましょう。間が悪い、間を取る、間が抜ける——というときの「間」というのは、説明しにくくありませんか？何となく、「イメージ」は分かるような気がするけど、言葉にしにくい。こういう場合には、やっぱり、魔法が必要なのです。魔法を使うと、いちおう言葉になり、これまた分かったような気がする。でも、あえて「イメージ」にこだわり、そこにとどまるのもいいですよ。すごく、こころよいです。

今、「イメージ」と言ったものですが、音楽、歌、絵、空に浮かぶ雲のかたち、バレエ（※バレーボールじゃなくて、ballet のほうです）、スポーツ、目的のない散歩、場合によってはゲーム——だったりします。「イメージ」のイメージが分かって、いただけたでしょうか？

言葉を、あまり意識しないものばかりです。

言葉は影絵に似て、「差異」をあっさりと「見えるもの」にしてしまう面を持っている、

と言えそうです。

「差異 = 間」を知覚することは、影絵を見ることに「似ている」。影絵のように、「きれいだ」。

そんな「見方 = 考え方」もできそうです。影絵は光と影の織り成す「まぼろし」です。漢字で書くと「幻」。「幻影」「幻灯」なんていう言葉もありますね。「幻灯」は「映画」のおとうさんか、おかあさん、みたいなものです。光と影の踊るさまを見ていると、何だか、ふわっというか、ぼーっとした気分になります。

幼かったころに、影絵を見て胸をおどらせた体験を思い出しながら、そっと目を閉じてみませんか？ 頭の中に残っている、きれいな映像と、当時の素直な感動にしばらく浸ってみませんか？ 思い切って、今夜にでも童心に帰って、手を結んだり開いたりして、影絵遊びをしてみませんか？

きょうは、これ以上、言葉は要らないと思います。

この行まで辛抱してお付き合いくださった方に、お礼申し上げます。

09.01.22 なぜ、ケータイが

◆なぜ、ケータイが

2009-01-22 11:43:42 | Weblog

何だか、きょうは、嫌な気分です。あることが、気にかかっているからなんです。実にイヤな気分です。自分が嫌いなものは、たくさんあるのですが、その中でも嫌いなことが、この2、3日間の新聞に載っているのです。「消えてしまいたい指数」にまで影響しています。きょうは、調子が悪いです。真剣に考えすぎてしまう悪い癖が出てきたようです。

これは、対峙(=退治=たいじ)しなければ、なりません。さもないと、あとを引きそうです。ポテチや、カップエビセンや、納豆の糸のように、あとを引きそうな予感がします。思い切って、はっきり、言います。

「禁止」って、嫌いです。

書いただけで、悪寒がするみたいに、ぞーっとします。「禁忌（きんき）＝タブー」という、これまた、イヤな言葉がありますが、「禁忌」が、じめじめ、じとーっ、だとすれば、「禁止」は、バン！とか、バシッ！とか、ブーン！とか、いう感じです。つまり、痛いのです。銃で撃たれたり、ギロチンで首をはねられたり、電気を体に流されたり——そんなふうに、痛いのです。

「禁止」という言葉を見たり聞いたりすると、ナチスドイツ、ゲシュタポ、治安維持法、特高、大粛清、強制収容所、ゲペーウー、公安、情報部、内務省、シュタージ、密告、拷問、盗聴、拉致、軟禁、監禁、投獄、監視……などという、恐ろしい言葉を次々と連想してしまうのです。

考えすぎ、なのでしょう、たぶん。被害妄想、なのでしょう、おそらく。杞憂（きゆう）、なのでしょう、きっと。でも、こういう強迫観念は、なかなか去ってくれない。

やっぱり、対峙（＝退治）しなければ、ならないようです。悪魔祓い（＝exorcise＝エクソサイズ）する必要がある。頭と体の中から、追いはらわなければならない。

はらう、払う、祓う、掃う

たった今、書いた言葉が、おまじないのように、感じられます。「まじない」って、「呪い」って書くんですね。「呪い（＝のろい）」と同じじゃないですかー。「マジ」に、怖いです。マジコワ。「まじゅつ」や「マジック」のように、気味が悪いです。

きのう、魔法という言葉で遊んじゃったのが、いけなかったのでしょうか？ 言霊——自分が最も苦手であり、怖いと心から思っている言葉です、本当は使いたくないのですが、使わないわけにはいかない、それほど、せっぱ詰まっているのです——のせいでしょうか？ たたり、ばち、でしょうか？

*

こんな時には、やっぱり、サイコロを振ります。マラルメのサイコロを。泉アツノ（※アツノさんをご存知ない方は、ウィキペディアなどでお調べください）さん、力をお借

りしてよろしいでしょうか？ 自分ひとりじゃ心細いのです。マジでお願いしますよー。
よかったー。アツノさんのOKが出ました。

では、サイコロを振ります。えいっや！

Silly。

「こんなん出ましたけど～」と、アツノさんの玉のようなお声。

Silly？ そんな馬鹿な！ フランス人だったステファヌ・マラルメが中学の英語の先生をしていたのは知っていますが、きょうは英語が出ました。しかも、「ばかたれ！」などと、ののしられるとはー。ショックです。マラルメさん、あなたに見放されたら、自分は生きてはいけません。もう1度、いきます。

Ass。

「こんなん出ましたけど～」

Ass ですか？ 再度、英語で罵倒されるとは！ もう、行く手も、なす術（すべ）も、なしだとおっしゃるのですか、マラルメさん？

いや、そんなはずはない。マラルメさんに限って、そんな「ばかな」ことは言わないはずだ。落ち着いて考えよう。

「Silly」「Ass」。silly ass。シリーアス。

読めた！

シリアス。まじめにやれ。マジで取り組み。

いつもこのブログでやっている引き算の

「Silly」－「Ass」＝！？

ではなく、足し算の

「Silly」＋「Ass」＝シリアス

だったのか？ ここんどこ、引き算ばかりしていたけど、足し算だったのか？ マラルメさん、恐れ入りました。「Silly」＋「Ass」＝尻アス。尻尻。でんでん。臀部（でんぶ）の「でん」。語源は違うみたいですけど、assには「お尻」という意味もありましたね。だから、シリアス。そうでしたか。すっかり忘れておりました、マラルメ先生。

ついでに、ちょっと、調子に乗ってもいいでしょうか、先生？ きょうのサイコロの目は、ひょっとして足し算だけでなく、掛け算でも解けるのではないのでしょうか？

「ばか」⊕「ばか」＝「まじめ」。

マイナス同士を掛け合わせると、プラスになる。つまり、Don't be silly. = Be serious. = 「まじめにやりなさい」という意味ではないのでしょうか？

わかりました、先生（せんせい）。

宣誓（せんせい）、きょうは、真面目に、正々堂々と取り組みます。

さすが、マラルメ先生。宣誓をしたら、すっきりしました。気が楽になりました。どうやら、おはらいができたようです。言葉のサイコロの目の通りに、きょうはシリアスにマジにやります。「禁止」と真面目に対峙し、退治してみます。いや、あまりにも手強

い相手なので、退治はできないまでも、対処してみます。

*

で、「禁止」です。みなさん、ここまで来るのに時間がかかって申し訳ありませんでした。なにしろ、手強い相手なのです。半端じゃないんですよ。

前置きが長かったですが、話は実に簡単なことなのです。この数日間の新聞、テレビ・ニュース、ウェブ・ニュースなどで、ご存知のように、

携帯電話の、校内への持ち込みや、校内での使用を「禁止する」という、「お上」（※嫌な言葉ですが、都合上使います）、この場合はその代理（※代理でも「お上づら」をしています、何しろ、「虎の威を借りる」は伝染るんです）である、文部科学省からの「お達し」（※これまた、嫌な言葉）が、出そうになっているとか。

ケータイの問題点や利点については、あちこちに書かれていたり、話題にされていることなので、ここでは触れません。みんなが（※もちろん、関係ない人もたくさんいます）、日常的に経験していることでしょうし、第一自分はケータイの是非とかいう、きな臭くて物騒な議論は苦手なのです。ディスカッション、ディベート、討論（＝闘論＝投論＝倒論）の類は、ノー・サンキューなのです。そういうことは、そういうことが好きな人同士で、やってください。

ですので、ケータイの使用（※特に小・中学生や高校生の）の是非は問わない代わりに、「禁止する」というヒト特有の行動について思うところを、持ち合せの乏しいデータと、自分の頭と体を使って、書いてみたいと思います。無精で横着な方法ですが、それしか、能（＝脳）がありませんので。

*

まず、素朴な疑問から書きます。

なぜ、ケータイが、

です。

いや、正確には、これは素朴な疑問とは言えないかもしれません。いや、正直言って、全然素朴な疑問などではない。こうなることは、ある程度予測がついていたからです。ということは、

やっぱり、ケータイが、

と言うべきです。

訂正します。こうなる気がしていた。こうなって当然だ。だんだん、そう思えてきました。歴史が証明しています。ところで、

手紙禁止令って、ご存知ですか？

「手紙禁止令」というのは、この国の場合だと、かなり長く続いていました。昔々から、江戸時代まで続いていました。でも、明治時代になって、「手紙禁止令」が解けたわけではありません。文明開化、つまり、他国、特に欧米に追いつけ追い越せという、国家の命運をかけた大事業が始まりました。

文字というものが、一部のエリートや特権階級のものでなくなり、「学校教育」という行政上の言葉の下に、せつせと「識字率」を高めることが、国家の目標になったのです。この辺りのことは、学校でお勉強しましたよね。全国規模での、寺子屋の公営化です。

「識字率」というのは、国家にとっては、「諸刃（もろは）の剣（つるぎ）」です。言い換えると、いい面もあるが、下手をすると、自分の身がヤバくなる、ということです。いい面を説明すると、文字の読み書きのできる国民の割合が、高くなることによって、他の国、特に欧米に対して、自慢できるようになります。つまり、文明国の仲間入りを果たしたことになる。これは、めでたい。

その一方で、そういう人たちが増えすぎると困る。なぜなら、「お上」＝「支配階級」が独占している、「知のスキル」が広まりすぎると、「知のスキル」の「有難み」が薄れるだけでなく、うかうかしているうちに「知のスキル」が、みんなのものになってしまう。

「知のスキル」は、その名の通り技能ですから、それを使うと知識や情報が扱えるようになる。つまり、「お上」だけがやっていたことを、みんながやり始める。ヤバい。最悪の場合には、乗っ取られてしまう。これは、一種の革命です。下克上です。危険です。だから、取り締まる必要が出てきたわけです。

やっぱり、「知のスキル」は、一部のもの（＝エリート＝選ばれた者たち）だけが握っているべきだ。以前ほど厳しいものではなくていいから、とにかく、あまり「知のスキル」が広まらないようにしよう。というわけで、緩めの「手紙禁止令」を継続することにしたのです。具体的に言うと、次のような感じです。

「変なこと（＝お上にとって都合の悪いことや、危険なこと）は、文字にしてはならぬ」

「まして、変なことを、手紙に書いて、仲間に送ることは許さん」

「怪しいやつ（＝お上にとって都合の悪いことや、危険なことをしそうな人）の書いた手紙は、わしら（＝お上や、その代理人たち）が勝手に開封して、何が書いてあるか、読むからな」

「変なこと（＝お上にとって都合の悪いことや、危険なこと）が、書いてあるのを発見したら、ただちに罰（ばつ）を与えるぞー」

「場合によっては、自分の命はないと思え」

というものです。

ここでいう、「手紙」とは、広い意味でとってください。他の人たちに、伝えたい、訴えたいことを文字にしたものです。すると、新聞、雑誌、本、宣伝文、パンフレット、標語などが、頭に浮かびます。日記の類も、含めてもいいでしょう。日記が他の人の手に渡れば、書いた人の思いが伝わりますから。

以上のことは、おとぎ話か、紙芝居の筋みたいなものです。ごく大雑把で、不正確な話です。でも、

「禁止」ということの、恐ろしさの一端

は、つかんでいただけたのではないのでしょうか？「禁止」を甘く見ちゃ、駄目ですよ。半端じゃなく、怖いんですから。へたをすると、拷問されますよ。あげくには、殺されますよ。

*

さて、ヒトには、他のヒトと言葉をかわしたいという欲望があります。生きるうえでの「基本的な」欲望です。基本的人権の、「基本的」です。誰もが、誰かと話したい、そして、つながりたいと思う。あるいは、誰かに文字で思いを伝えたいと願う。これって、自然な欲求です。「通信欲」と呼んでいる人たちもいます。このブログでは、「交信欲＝口唇欲」と呼びたいです。何かエロい響きがあって気恥ずかしいのですが、気に入っているんで、そう呼ぶことにします。

また、記事が長くなりそうなので、ピッチを上げてもいいですか？じゃあ、いきますよ。

ラスコーやアルタミラの絵、文字の発生、象形文字、楔形文字、紙の発明、印刷術の発明、

さらに、スピードを上げて、

グーテンベルグ、聖書の翻訳、新聞、本＝書籍、御伽草子、かわら版、お触書（※これらが登場した順序は、忘れました、年号とか、時代区分とかを覚えるが大の苦手なのです）

そして、いきなり、

有線電話、無線電話、電報、郵便制度、無声映画、有声映画、ラジオ放送（※このへんの順序も、忘れました、したがって、ごちゃごちゃです、ごめんなさい）

いっきに飛んで、

テレックス、テレビ放送、長距離通信、ファクス、インターネット、電子メール、ポケベル、自動車電話、PHS、携帯電話（※面倒なので、ここも「順不同」としておきます、ごめんなさい、調べる余裕のある方、どうか整理をお願いします）

で、ようやくケータイにたどり着きました。ふーっ！ ああ、疲れた！

「誰も、あんたに、疲れてくれなんて、言ってねーよ」。ああ、また、幻聴！ へこみそうになるけど、マラルメ先生への宣誓をした以上、やめられない。

*

で、話は、まだ、あるんです。上で挙げたものたちの敵どもを挙げなければ、手落ちになります。きょうの話で肝心なのは、次に並べる敵どもなのです。では、いきますよ。これも、思いつくままの順不同で、スピードを挙げます。なお、一部は、冒頭近くに列挙した悪夢と重なります。

禁書、焚書、言論弾圧、宗教弾圧、魔女狩り、赤狩り、島流し、検閲、監視、国外追放、軟禁、監禁、幽閉、接見禁止、面会謝絶（?）、エシュロン、密告、拷問、盗聴、密告、拉致、身柄拘束、投獄、死刑

死刑。来るところまで、来ちゃいました。やっぱり、怖いでしょ？

こういう重大な歴史的事実、そして現在も世界のいたるところで起きている事実は、お上品にアカデミックに、あるいは格好よくジャーナリスティックにやるよりも、素人なりに、順不同で、やけくそに、ガバーッとまくしたてたほうが、迫力があって、リアルなのです——ああ、なんという自己正当化！ 単なる怠け者のくせして。自己嫌悪。

反省します。

何か新しい「もの」や「仕組み」や「風潮」が出現すると、国家や社会は、どのような行動をとるでしょうか？

まず、ビビるんです！ マジビビ。ちびりそうになるくらい、ビビるんです。次に、うろたえる。怖い、不安だと感じる余裕が出てくる。つまり、態勢を整える心の準備ができる。

その次は、考える。国家もお上も社会も、馬鹿じゃないですから、当然です。では、いったい、何を考えるのか？ 現在では、以下のように、考えるのではないかと推測します。たぶん、ですけど。

コピー機、ファクス、電信、その他、情報技術の急速な進展が、旧ソ連の崩壊を加速化させた。体制維持のためには、ITにより高度化し洗練された「知のツール」を飼い慣らしておかないと、大変なことになる。こっちの身が危ない。しかし、そうは口に出せない。大義名分としては、「国家安全保障のため」、「風紀紊乱（ふうきびらん）を防止するため」、「青少年の健全な育成のため」、「子どもたちの心と身を守るため」がいいだろう。誰も、反論できないはずだ。うん。

ごく一部の人たちの脳裏には、次のような名前が浮かぶかも、しれません。ただし、その可能性は非常に低いです。

スーチー、マンデラ、ダライ・ラマ、マハトマ・ガンディー、キング牧師、小林多喜二

(※カニコーの作者ですね)

たとえば、そうした名前が浮かんだとしても、頭の中から追い払い、こう言います。

「禁止する」「絶対に駄目だ」「許さん」。

知らない間に、きな臭い話になってしまいました。マラルメのサイコロは怖い、というか、すごい。言葉のサイコロを振って、この記事を書いているうちに、思いもしないことまで出てしまう。やはり、魔法ですよ。

ところで、あまり使われることのない、言い方かもしれませんが、悪事やたくらみや秘密を暴露することを、「尻を割る」と言います。ひょっとすると、さっき、おはらいの時に、「Silly」「Ass」とお尻が2つも出たのは、「権力(=ばかども)」の「尻を割れ」という、マラルメ先生の「だじゃれ=お託宣」だったかもしれません。

引き算でもなく、足し算でもなく、掛け算でもなく、「割り」算です。ひょっとすると、ですけど。いずれにせよ、めっちゃくちゃな、こじつけですよ。反省。

要するに、きょう、言いたかったのは、次の通りです。

過去も、現在も、未来も、変わらないことは、3つ。

(1) 新しいものは、お上の目のカタキにされ、弾圧される。

(2) お上は、下克上を、死ぬほど恐れている。

(3) オトナたちはコドモたちが怖い。

以上です。

だから、ケータイが禁止されるのです。知っておいて、いただきたいのは、これって大昔から続いている、こわーいこわーい実話の一端だということです。

ゲームばかりしている子どもたちが多いことにしろ、学校に行かない子どもたちが急増していることにしろ、オトナたちは、自分たちなりに、これまた、こわーい（※さっきと意味は相当違いますが）と思っているのです。つまり、オトナたちが怖がっているという意味です。でも、オトナたちは高をくくっています。

どうせ、あいつらも、じきにオトナになるんだ。

これほど、心強いことはないでしょう。

細かい字の長い文をここまで読んでいただいた方に、心より感謝いたします。

09.01.23 お口を空けて、あーん

◆お口を空けて、あーん

2009-01-23 11:31:54 | Weblog

頭の整理を兼ねて、きのう書いたことを振り返ってみます。簡単に言えば、次のような話になります。

ヒトには、他のヒトと言葉をかわしたいという「交信欲＝口唇欲」がある。だから、

舌や唇を使ってケータイで話もしたいし、手紙も書きたいし、メールのやりとりもしたい。これは、ヒトとしてのごく自然な欲求だ。ちなみに「手紙」の英語バージョンである「letter」には、「文字」「活字」「文学」など、言葉と関係のあるたくさんの意味がある。だから、みんなが言葉や文字を通して、仲よくなりすぎる事態も予想される。

ヒトは仲よくなると、力を合わせることができる。しかし、そうなってほしくないヒトたちがいる。誰だろう、そんなヒトたちは？ 現在たまたま世の中を支配する側にいるヒトたち（＝権力＝お上）だ。そこで出てきたのが、「手紙禁止令」（※ここでの「手紙」は広い意味のもの）である。「あんまり、仲よくしちゃ駄目」そう命令する。命令だから、怖い。さからうと、場合によっては牢屋に入れられたり殺されてしまう。

コドモ（※ドコモではなくて）がケータイを使うのをオトナが制限したり禁止するのも、「あんまり、仲よくしちゃ駄目」という命令であり、一種の「手紙禁止令」である。

以上です。

とても大切なことなので、おふぎけやダジャレなしに（※1回やっていました、ごめんなさい）、きのうの記事の要約をしました。

*

さて、クイズを出します。これからするお話の中で、6人の作家が出てきます。そのうちの4人（※数え方では5人）に共通する点は何でしょう？ ヒントは、きのうの日記に出てきた、「知のツール」（＝読み書きの技能）と「手紙禁止令」の2つに関係があります。大したクイズではありません。ちょっと考えれば、答えが出てくるだろうと思います。

で、きょうは、まず夏目漱石の話からしたいと思います。嫌ですか？ 学校で、さんざん読書感想文を書かされた時のことを、思い出してしまいますか？ 確かに、今、あの人の作品たちを読むと、退屈ですね。特に若い人には、楽しめないかもしれません。何しろ明治時代に生まれて大正時代に亡くなった人、ですもんね。50歳で亡くなったんですよ。ちょっと意外に思えませんか？ もっと「おじいさん」って、イメージありませんか？

いずれにせよ、あの人はすごい、と自分は思います。内容は別にして、今読んでも、あまり違和感のない文章をたくさん残しています。それが、すごい。あの人とほぼ同じ時期に活躍した、森鷗外という作家がいますね。森鷗外の場合には、残っているほとんどの文章が、内容は別にして、読みにくいです。少なくとも、自分はかなりの違和感を覚えます。

芥川賞と直木賞って、ありますよね？ あの賞を事実上作った人が、誰だかお聞きになったことがありますか？ 芥川龍之介でも、直木三十五（なおきさんじゅうご）という人でもなくて、菊池寛（きくちひろし）（※寛（かん）とも読みます）という人です。明治生まれで、第二次世界大戦が終わって3年目に亡くなりました。この人の小説は、漱石よりも、今に近い人なのですが、文章が古めかしいという印象を自分はいだきます。だから、漱石はすごいと、またもや思うのです。

ノーベル賞にも文学賞がありますね。日本人では、比較的最近、大江健三郎という人が受賞しました。昭和10年（1935年）生まれで、今も現役の作家として活躍されています。昭和の人なのですが、この人の書く文章に、自分はすごく違和感を覚えます。嫌いという意味ではありません。好きなほうです。実は、その違和感が好きなのですけど。詳しいことは、いつか書きます。

*

漱石に話を戻しますが、一部の作品を除き、実に読みやすい。と言っても、内容を理解したという意味ではありませんけど。それだけでは、ありません。教科書や一部の文庫などでは、書き改めてありますが、漢字を書く時に当て字が非常に多い（※造語も多いらしいとのことです）。

で、その当て字が、すごいのです。半端じゃない。すばらしい、と言ってもいい。

「当て字」というと、「でたらめ」とか、「間違い」というイメージがありますよね。「漢字」を「感字」と、書くようなものです。でも、「感字」って、言えてませんか？ つまり、「漢字」という文字のある側面を、ピタリと言い当てている「感じ」がしませんか？ 昔のある時期の中国が「漢」という名前だったので、「漢字」と書くのでしょうか？ 国語が苦手だったし、専門家ではないので、詳しいことは知りません。

とはいえ、自分にとっては「感字」のほうが、ずっとしっくりきます。びんと来ます。フィーリングで書くと、「感じ=感字」。その時の自分の気分に合わせて、好きな文字を使って、自由に書くと「感じ=感字」です。

けっこう、メールなんかでは、「感字」している人が、おおぜいいませんか？ 自分は「感字」が好きだし、実際、このブログでも、よくやっています。現に、きょうの記事のタイトルで、もうやっています。お気づきになりましたか？ 口を「開ける」が標準的な書き方で、口を「空ける」とは、「確信犯」の感字か、うっかり間違えたかのどちらかでしょう。どちらでも構わないと、個人的には思います。うっかり間違えた漢字に、言えてるなあ、と思うものがよくありますもの。

いつか、時間がありましたら、家の本棚とか、本屋さんとか、図書館で、漱石の「当て字」バージョンを拾い読みしてみてください。もし、よければの話です。自分は、強制とかお説教とか、するもの、されるのも嫌いです。「よく言うよ。さっきから、お説教しているくせに」ですか？ そんな感字、いや、感じがしたら、ごめんなさい。

*

突然ですが、幻聴って聞いたことがありますか？ たった今、「よく言うよ。さっきから、お説教しているくせに」って書きましたが、これ、どうやら幻聴らしいのです。難聴って聞いたことは、ありませんか？ 自分は20代の頃から、だんだん聴力が低下してきて、今は補聴器なしでは生活できません。生まれつきではないので、中途難聴とも言います。ただでさえ、難聴という障害をかかえているのに、幻聴まで背負ってしまい、このところ困っています。あるお医者さんが言うには、

「あなたは一人でいることが多いから、ひとり言がちょっとエスカレートしているんですよ。ゲンチョーなんて言葉で決めつけちゃ、本当にゲンチョーになってしまいますよ。本当のゲンチョーはそんなもんじゃ、ありません。心配しないで、気楽にやってください」

とのことでした。それで、ちょっと気が楽になりましたけど、全く気にならないかと言えば、嘘になります。まあ、ぼちぼち、のんびり、やります。

そうそう、難聴のことなんですけど、このブログのバックナンバーである「聞こえるけど聞けない言葉」2009-01-10 という文章で書いたことを、繰り返します。

健聴者の方に、申し上げたいことがあります。ヘッドホンの類を利用する時には、なるべく音を小さくしてください。大きな音は、耳に悪いですよ。お医者さんが言うには、聴力が低下すると回復はかなり難しいそうです。どうか、耳を大切にしてください。

これって、お説教に聞こえましたか？ だったら、ごめんなさい。「そんなことない。分かったよ」。よかった。幻聴も、こっちの話聞いてくれることが、あるらしい。よかった。本当に嬉しい。これって、自己満足ですか？ やっぱり。

「当て字」で思い出しましたが、ある文学者が、だいぶ前に、漱石について、双籍、送籍、僧籍という言葉を使って、批評したことがありました。漱石が養子に出されたことや、幼少期の戸籍上のトラブルや（※この辺りが「双籍」でしょうか）、兵役を逃れるために北海道に籍を移した事実にかけて（※ここは明らかに「送籍」ですね）、言葉遊びに似た方法で、批評してあった記憶があります。なぜ「僧籍」なのかは、忘れました。

こういう遊び心のある批評も、自分は好きです。漱石は、飽きましたか？ では、さっきのクイズに戻ります。ここまでのところで、漱石、鷗外、芥川、直木、菊地、大江という6人の作家が出てきました。この6人のうち、4人、数え方によっては5人に共通する点は何でしょう？

*

答えを言います。

漱石、鷗外、芥川、大江の4人は、帝国大学（＝東京帝国大学）、またはその後身の東京大学出身者。菊地は紆余曲折を経て、最終的には京都帝国大学を卒業。直木は、早稲田大学中退。という話です。

どうか、と申しますと、帝国大学というのは、きのうお話しした明治維新に伴う「手紙禁止令」の部分的解除によって実施された、全国規模での寺子屋公営化の頂点だったのです。つまり、この国の各地から、超エリートたちを選びすぐって養成するトップの学校が、帝国大学だったのです。最初は1校でしたが、やがて各地に数校設置されました。で、そこで何をやったかという、

「知のツール」(＝読み書きの技能)の熟達のレベルにとどまらず、この国の「知の分野」(＝学問)を築き上げ、ひいてはさらに高度で洗練されたものにする。そして、何よりも大切なこととして、「支配体制」(＝政治・経済)の整備と維持を目的とした、国家的大事業を成し遂げる。そうした使命があったわけです。もちろん、欧米に追いつき追い越すためです。

ここまでお話ししたところで、これから、ある別のお話をします。思いきり、差別的なことを書きますので、まず、その点をお断りしておきます。差別が目的ではありません。差別を意識していただきたい。それが、願いです。そのためには、毒を制するには毒を、魔を制するには魔を、の心構えが必要です。ご理解いただければ、幸いです。です、お気を悪くなさる方が、きっといらっしゃると思いますので、前もって、ここで謝罪しておきます。ごめんなさい。

で、その話というのは、作家の業界(※文壇とも言います)と、政治家の業界(※政界とも言います)における、これまでの

学歴と偏差値について

です。

ね、

差別的

でしょ？

さきほどのクイズの答えを読んで、だいたいの傾向はつかめたと思いますが、天下りや渡りでお馴染みのキャリア組、いわゆる上級の国家公務員の業界は言うまでもなく、作家や政治家の業界も、帝国大学やその後身の大学出身者が、圧倒的に多い時代が続いていました。

もちろん、例外も多々ありますが、ここでは触れません。大切なことは、「知のツール」とその応用を一部の少数者が握るという、国家レベルでの暗黙の了解みたいなものが、うまくいっていたという歴史的経緯です。

そのサクセスフルな状態は、明治以来、第二次世界大戦後まで、継続していました。しかし、世は変わりました。下克上が当たり前の米国に負けた以上、この国が米国の影響をもろに受けないわけにもまいりません。一時期はこの国が米国を中心とする連合国に占領されていたのですよ。進駐軍が日本を治めていたのです。ということは、進駐軍なんて言葉は誤魔化しであり、ぶっちゃけた話、占領軍だったのです。

で、話を飛ばします。占領が終わり、いろいろな事情があって（※その事情に数々についてお知りになりたい方は、年表をご覧ください）、運よく高度成長時代を迎え、これまで教育にまでお金をかけることができなかった家庭にも、子どもを塾や偏差値の高い学校に通わせる余裕が出てきました。そうしたさまざまな条件が重なって、作家や政治家の出身大学に変化が表れてきました。

旧帝国大学系の作家だけでなく、その対抗勢力であった民間の大学の中でもトップレベルにあった関東のW大やK大などや、関西のK大やR大やD大などの出身者たちによる、めざましい進出がみられるようになりました。そして、今挙げた大学よりも、偏差値という尺度ではかれば下位にある大学の卒業生たちにも、門戸が開かれるようになりました。言い換えると、さまざまな分野において、機会均等が浸透していったのです。

偏差値は、どんどん下がります。

で、話は飛びます（※たびたび飛んで、申し訳ありません）。象徴的な偶然の一致の時期が、最近、ありました。比較的短命な政権を担ったA内閣総理大臣（※現在のT. A. さんではありません、S. A. さんです。念のため）と、当時そして現在の超売れっ子の某男性作家I. I. 氏と某女性作家N. K. 氏、以上3人の出身大学（※S大です）が奇

(く) しくも一致したのです。明治、大正、戦前の昭和では、考えられないことです。

政治家二世の是非といった、きな臭い話は、やめましょう。ただ、上述の「一致した」という現実だけに目を向けましょう。喜ばしいことでは、ありませんか。さまざまな分野で活躍している人たちの出身大学の、

偏差値がどんどん下がりにつつあります = 機会均等が浸透しつつあります。

大学を卒業していない人たちにも、機会が与えられるようになってきています。ただし、例外があります。ある分野だけが、未だに偏差値が高い大学の出身者でないと、活躍どころか、門の中に入れてもらうことさえできないもようです。

それはキャリア組、いわゆる上級の国家公務員の業界です。砦（とりで）は、そうとう堅固です。この国を牛耳っているのは、政治家はありません。官僚です。残念な話です。いい方向に、向かうことを願わずにはられません。きな臭いだけでなく、生臭い話になり、ひどく疲れしました。

*

別の話をします。

さっきは漱石がらみで漢字について書きましたが、この国には、漢字のほかに、ひらがな、カタカナ、アルファベット、数字、そして、今、メールなどでは、顔文字までがあります。日本語ってすごいですね。

天は言語の上に言語を造らず、言語の下に言語を造らず、

ですので、誇りに思うなどとは言いませんが、大したものだと思います。そうした複雑な表記の取扱いに成功した、ワープロ専用機を祖先にもつ、パソコン用のワープロソフトって、やっぱり、すごいとしか言いようがない。文字の変換だけをとってみても、感心するばかりです。

自分は文字とか活字が大好きです。普段は誰もあまり、気にしませんが、新聞や雑誌や本によって、活字が違うことは当然のことですね。その違いが、自分にはとてもおもしろい。印刷された文字を虫眼鏡で拡大して比べてみるのが、一種の趣味なのです。安上がりな趣味です。諸般の事情があっってお金がないので、この趣味があることで、大変助かっています。お金のかかる趣味を持っていたら、とっくに破産しています。

漢字って、たくさんありますよね。気が遠くなるほど、たくさんあります。鬱（うつ）という字などは、文字通り、鬱陶（うつとう）しいですね。自分なんか、鬱は他人事じゃないので、なおさらです。乙とか一なんて1画ですが、拡大してみると、うっとり見とれてしまいます。A新聞の活字とY新聞の活字では、微妙どころか、かなり違ってきます。同じ字を比べてみると、その違いを目の当たりにして、あ然とすることがあります。

ひらがな、カタカナも、虫眼鏡で見ていると、なかなか味わいがあって、つい時が過ぎるのを忘れます。「あいうえお表」っていうんですか。小さいころ、親の手製の表が、机の上の壁に貼ってあったのを覚えています。そのとき、不思議だったのが、「や行」と「わ行」です。親が作ってくれたものでは、確か、

(前略)

ま み む め も

や ー ゆ ー よ

ら り る れ ろ

わ ー ー ー を

ん

となっていて、表を見るたびに不思議に思っていました。

「なんで、あそこが、ぬけてんだらう？」

今でも、不思議です。国語のお勉強をしっかりしなかったからでしょう。あそこが抜けているのは、たぶん「傷跡」なのだと思います。かわいそうに……。作家でいえば、丸谷オ一氏が、現在も実践している歴史的仮名遣いあたりと関係があるのではないかな？ そんな気がします、よく分かりません。

これも、グーグルなんかで調べれば謎が解けるのですが、自分は、これだけは謎のままにしておきたいんです。

傷跡はそのまま、そっとしておいて、触れたくない

気分です。いつか、傷跡の意味が解けることもあるでしょうが、今のところは、このままでいいです。怠け者だから調べないと言えないこともないんですけど、これだけは、不思議なままでいい。そう思います。一句浮かびました。

傷跡を舐める小猫に われ重ね

ここまで書いて、思い出したことがあります。親の書いてくれたものではなく、学校にあったものです。

(前略)

まみむめも

やいゆえよ

らりるれろ

わいうえを

ん

すっかり、忘れていました。こういうのも、見ました。懐かしい。で、今、こうやって、上の表と下表とを見比べてみると、頭の中が混乱してきました。めまいに似ています。

いったい、どうなっているんだ！

と叫びたいくらい、今、うろたえています。これもまた、専門の本なり、グーグルでしっかり検索しないと、解決しそうな予感がします。ただ、きょうは、実は「消えてしまいたい指数」が高いんです。80くらいでしょう。自分でも、きょうの文章は元気がないなあ、トーンダウンしているなあ、と感じます。だから、調べる気力はありません。やっぱり、

謎は謎のまま

にしておきましょう。

それにしても、下の表の「ん」って、なにか寂しそうじゃないですか？ これまでの記事で、何回か書きましたが、自分には、とても気になる文字でもあり、音でもあるんです。「ん = n」。今、パソコンのモニター上の「ん」を、愛用の虫眼鏡で拡大して見ているんですが、いい形をしています。好きです。涙が出そうになるくらい、いい姿をしています。

「あ」で始まって、「ん」で終わる表。

ローマ字で書けば母音だけの5文字が最初に並び、それに子音がくっついた文字がたくさん並び、最後は子音だけの文字が上のほうに、ぽつんと一つだけくっ付いている。「ん」がぽつんと孤独にしているのは、ローマ字では子音だからだと、中学の国語の先生が教えてくれたことを思い出します。その説明を聞いて、なるほどと思いましたが、同時に「不思議 = 謎」が一つ減って、ちょっと寂しくなった記憶があります。

とはいえ、「あ」で始まって「ん」で終わる表——そんなものがあることが、不思議です。「あいうえおかきく……」と声に出してみたいけど、何だか、きょうは、かったるいです。省略して、「あーん」と中略でいきます。

お口を空けて、あーん。

足元にいるネコ（※うちの猫の名前です）が、ただならぬぬ気配を察したのか、こっちの顔を見えています。ちょっと、からかってやりましょう。

お口を空けて、あーん。

ネコに向かって、そう口にしてみたら、そっぽを向かれました。ネコは敏感だ。からかっている、こっちの気持ちが通じたらしい。

そう言えば、

あうんの呼吸

って、よく言いますよね。今、広辞苑を引いて読んでみたのですが、

阿吽の呼吸

って書くんですね。うーん。「阿吽の呼吸」の意味を読んで、10秒間くらい絶句していました。それで、「あうん【阿吽・阿伝】」自体の意味の説明を読んでいたら、すごく感動してしまいました。

きょうは、ちょっとつらいので、書くのはここまでにして、気晴らしに、これから広辞苑の「あうん【阿吽・阿伝】」のところを、読んだり、虫眼鏡で覗いてみたりしようかと思っています。

漱石の話から始めたのに、何だかうろうろして、結局尻切れトンボで終わってしまって、ごめんなさい。このところ長めのブログを書きながら、ちょっと頑張りすぎちゃったのかもしれない。

この行まで読んでくださった方、どうもありがとうございました。感謝しています。

09.01.24 冬のすずめ

◆冬のすずめ

2009-01-24 10:58:39 | Weblog

テープレコーダーが作動していました。

そのことは、はっきりと覚えています。小学6年生の時の記憶です。場所は教室。6年4組。自分を含めた児童たちが緊張していたのは、室内のほぼ中央の机の上に置かれた、テープレコーダーの存在のせいだけではありません。教室の後ろに、見知らぬ大人の男女たちが詰めかけているのです。

ぶーンという、テープレコーダーの作動する音が聞こえていたような気がするの、今思えば、錯覚でしょう。それくらい、テープレコーダーの存在は不気味で、教室全体に緊張感を漂わせていました。道徳の授業でした。

まず、教科書に載っているある話を、担任の女性教師に当てられた数人の児童が、分担して朗読しました。内容は、オリンピックで金メダルを取った、ある球技のチームをたたえるものでした。そのチームは、某会社の社員が大半を占め、監督もその会社のチームの監督が務めていました。

監督とチームのメンバーたちが、どんなに一生懸命に努力して、金メダル受賞という栄光を勝ち取ったか。その並々ならぬ努力を児童たちに感動させる。そして、自分たちも頑張らなければならない、という気持ちにさせる。

教科書を作った会社も、そしてその教科書を検定し、「合格」とお墨付きを与えた旧文部省も、そうした筋書きを想定していたことは、容易に想像できます。比喩的に言えば、出来レースです。

「はい、ありがとう、〇〇君。さて、みなさんは、このお話を読んで、どう思いましたか？感想を聞かせてください」

その直後です。先生は教壇から降り、机の間を縫うようにして、教室の空席に歩み寄り、机の上に据えられたテープレコーダーのスイッチを、カチッと押したのです。

手を挙げる児童はいません。やはり、テープレコーダーと、自分たちの背後に立ち並ぶ大人たちの存在が、教室内がいつもの打ち解けた気分になるのを妨げています。でも、ためらいがちに、ぽつぽつと手が挙がり、意見の発表が行われました。めでたし、めでたし。これで、先生の顔も立った。そんな感じで時間が過ぎていきました。

そのとき、ある児童が手を挙げました。普段は割と無口な生徒です。いたずらも、よくします。通知表の「落ち着きがない」という項目には、1年生の時から、決まって印がついていた子でした。

「△△さんたちは、ずるいと思います。同じ会社の人たちが一生懸命に働いている間に、監督さんと練習ばかりして、お給料をもらっているのはおかしいと思います。オリンピックは、アマチュアの祭典だって、教科書にも書いてあります。練習は、他の人たちと一緒に仕事をやった後からしたほうが良いと思います。プロ野球の選手たちとは違います。だから、この話は変だと思いました」

もちろん、その子の話したことを、忠実に再現したわけではありません。ただ、その発言の趣旨からは、ずれていないと思います。発言に出てきた「△△さん」というのは、チームのキャプテンの苗字です。監督の名前とともに、国民的英雄として、その頃は全国的に知られていた人でした。昔の話です。今のように、オリンピックにプロが登場す

るなんて、考えられなかった時代の話です。

教室が、ざわめき始めました。話し声が聞こえてきます。話しているのは、児童たちではなく、教室の後ろに立っている20人以上の大人たちでした。その日の授業は、他校の教師たちが授業参観をする――何と呼ぶのでしょうか――研修会の一部だったのかもしれません。

後ろから、こそこそ小さな声で話し声がするけど、何だろう？ 後ろに近い席にいた、さきほどの発言をし終えたばかりの子は、思いました。顔を窓のほうに向ける振りをして、大人たちの様子をうかがいました。その子は、驚きました。大人たちが、しきりにうなずいているのです。笑みを浮かべている人もいます。険悪な雰囲気でないことは、直感的に分かりました。

でも、その子は、少し心配でした。放課後に、担任の先生から叱られるのを、ある程度覚悟しました。小学6年生だと、それくらいの見当はつきます。やっぱり、ちょっとまずいことを言ったのかな？

幸いなことに、先生は、その子を叱りませんでした。当時は、そういう発言を許す教師たちが、多かったのかもしれません。現在の風潮を思うと、ちょっと考えられないような話だという気がします。そういう、時代だったのでしょうか。それとも、教職員の組合が強い時期だったのでしょうか。

*

そういえば、こんなこともありました。

確か、自分が小学3、4年生の時です。学校で、学年別に映画鑑賞に出掛けた日のことです。ディズニー製作のアニメーション映画でした。午前中に映画を見終えて、児童たちは学校に戻りました。給食の時間が過ぎ、午後からの授業は、映画の感想をクラス内で話し合う時間になりました。

いい映画だった。いろいろな動物たちが出てきて楽しかった。自分は出てきたうちではウサギがいちばん好きだ。絵がきれいだった。動きが自然で感心した。意地悪な人間

が出てきたのが嫌だった。中には悪い動物もいたけど、やさしい動物がたくさんいて感動した。あんな世界で暮らしてみたい。

クラスの児童たちからは、だいたい、以上のような感想が出ました。ある子が、挙手もせず着席したまま、こんなことを話し始めました。

「動物なんか、一匹も出なかった。全部、人間みたいだった。だって――」

教師は、その子の発言をさえぎりました。幸い、その日は、ありませんでしたが、その子は担任のその男性教師から、頬や腕をつねられたり、閉じた教科書の背で頭を叩かれたことが、数えきれないほどありました。

担任からは、嫌われていましたが、その子は他の子たちからいじめを受けることはありませんでした。普段はあまりしゃべらないけど、いたずらはよくする。時々突拍子もないことをポツリとつぶやき、みんなを笑わせる。そんな子でした。

教師から発言をさえぎられた子と、さきほどテープレコーダーの作動する部屋で発言をした子は、同じ子です。発言をさえぎった教師は男性、話し終えるまで発言をさせた教師は女性で、別人です。

現在では、もういい年になったその子は、5年生になって出会い、2年間担任だったその女の先生に、今も年賀状を出しています。先生からは、返事という形で1月5日前後に年賀状が来ます。でも、今年は来ませんでした。そのことが、気にかかってなりません。

*

話はがらりと変わって、きのうの夕方のことです。

ネコ（※うちの猫の名前です）に顔をひっかかれて、目を覚ましました。きのうは、調子が悪くて、処方されたお薬を午後3時頃に飲んで、居眠りをしていたのです。ネコが

部屋に来てくれたことが嬉しかったのですが、ぎょっとさせられました。

枕がわりに使っているクッションの脇に、すずめの死骸があったのです。これに似た経験は、何度もしたことがあります。昆虫だったり、爬虫類だったり、小鳥だったりします。でも、冬のすずめは、初めてです。

こういう猫の習性は、一種の「お土産」や「贈り物」だと言う人がいます。「お土産」や「贈り物」だという説を、自分は「戦利品」の類、あるいは、ヒトへの好意で持って来るもの、という意味で解釈しています。

本当のところは、分かりません。猫の気持ちなど、ヒトに分かるわけがないと思っています。ヒトは猫の行動に、ヒトの行動や感情を当てはめる。あるいは、ヒト以外の動物に、その動物特有の「習性」という「物語＝神話」をでっちあげて、こじつけるだけだ。そう、考えています。

で、きのうの夕方話ですが、ネコは、すずめの死骸には、もう一向に興味を示さない。つまり、ほったらかしで処理をしてくれません。

しかたなく、薄暗い中を、狭い庭に出て、冷たい土をシャベルで掘り起こし、少し深めの穴の底に、すずめの亡がらを置き、土をかぶせました。ネコが、あるいは他の猫が、掘り起こすといけないので、自分の拳の3倍くらいの大きさの石を見つけきて、それを埋めた穴の上に据えておきました。

夕餉（ゆうげ）待ち すずめ葬る 冬の庭

夏目漱石の作品に「猫の墓」という小品（＝掌編）があります。記憶に間違いがなければ、漱石の娘が、死んだ老猫の墓を作り、それを供養して、確か供えたお椀か何かの水を飲むという、ストーリーだったと思います。すずめを埋めた土の上に石を置いた拍子に、その小品のことが頭に浮かびました。

無意識のうちに、手を合わせていました。漱石の小品の中でも、漱石の娘が手を合わせるシーンがあったはずです。合掌しながら、なぜか『吾輩は猫である』のラストシー

ンを思い出しました。依然として名のない猫が、酔っ払って水がめに落ちる場面です。前にもこのブログ日記で書きましたが、うちのネコは水をあまり怖がりません。だから、ネコが出掛けるたびに心配しています。

さきほども書きましたが、ヒトは他の生物の行動や姿に、ヒトの行動や表情を読みとる習性があります。日曜の朝に、NHKテレビで、自然とそこに住む生き物たちの映像を集めた番組が放映されることがあります。音楽や音だけで、ナレーションがほとんどないものもあれば、少し解説が少し入るものもあります。

自分は難聴者なので、あの種の番組を、たいていミュートにして見ます。どっちみち、音や声がよく聞こえないので、同じことなのです。水中で生息する生き物などは、あまり鳴かないというか、テレビでもその音声を流さないようですが、陸上に生きる鳥や動物などは、割と高めの声で鳴くことが多いようです。残念なことに、自分の場合には、特に高い音域が聞こえにくいのです。

*

エンヤという歌手に、興味があります。すごくきれいな高音で歌うと聞き、ぜひ、その歌声を聞いてみたいと思っていました。

少し前のことですが、新聞のテレビ欄でエンヤが出演するという番組を見つけ、楽しみにしていました。それで、その番組を見ていて彼女が歌い始めた時に、思い切り、テレビの音声のボリュームを上げたのですが、駄目でした。バック音ばかりが、ボンボンと低くリズムカルに響くだけで、歌声はほとんど聞こえませんでした。でも、映像がきれいだったのが印象に残り、それだけで満足しています。

難聴は、なかなか健聴者の方にはわかってもらえないことが多いです。以前、このブログで難聴について書いた「聞こえるけど聞けない言葉」2009-01-10 という記事をお読みいただければ嬉しいです。

で、生き物たちの生態を映した番組に、話を戻しますが、ミュートにして見ていると、いろいろな発見があります。音が聞こえない分だけ、映像に集中できます。いつも思うことなのですが、どの生き物もビクビクしながら生きていますね。このブログ日記で、最

近テーマにしていた「知覚する」という行為です。

あたりの様子を、すごく気にしながら、生きています。当然ですよ。弱肉強食の世界に生きているんですから。のんびりなんか、してられません。とにかく、常にビクビクしている。それに、動きが速い。小動物、たとえば、うさぎ、ねずみ、りすなどの仲間たちは、ものすごく機敏な動作をします。

10年以上も前のことですが、ジャンガリアンハムスターを飼っていました。当時は、今いる実家ではなく、賃貸マンションに住んでいました。ハムスターを、よくケージから出し、床に放して遊ばせましたが、その走るさまを見ていて感心しました。体の大きさ（＝小ささ）と、走る距離を比べてみると、F1並みのスピードで走るんです。参りました。思わず、尊敬してしまいました。

小動物は短命なので、悲しい思い出があるのですが、今、は一のすけちゃん（※飼っていたジャンガリアンハムスターの名前です）の走る姿を思い浮かべたら、何だか元気が出てきました。何しろ素早く、走る様子が格好いいのです。

BBCという英国のテレビ局が制作した生き物の番組は、よく出来ていて、感動します。BSで、放映されていますね。ただ、解説があまりにも出来すぎている感じがしませんか？ ちょっと、ヒトの思い入れが強すぎるように思えます。勉強になることは多いのですが、そこだけが気になります。

あの番組も、ミュートで見ると印象が、がらりと変わります。言葉による解説から得られる情報とは、違った発見があるのではないかと、思います。

生き物の番組に限らず、どんな番組でもかまいません。音を消して、ご覧になると、思いがけない発見がありますよ。バラエティー番組などをミュートで見ていると、登場する人たちの間の目配せや、ちょっとした表情なんか、クローズアップされて見えます。

スタジオ内の人の位置、雰囲気、隠れた空気（※「その場の空気が読めない」の「空気」です）を始め、音を聞いているは、おそらく音に気をとられて、見えない物や出来事が、きっと見えます、または「読めます」。目と耳の関係って、意外と奥が深いような

感じがします。

バラエティー番組は、特にうるさいですね。画面の下に字幕もよく出ます。自分は、カレンダーの裏の白い面を折って作った、紙切れを持っています。それで字幕を隠し、音を消して番組を見ることがあります。もちろん、健聴者である親がテレビを見ていない時ですけど。

いつもとは、視点や、やり方を変えてみる。それで、世界が変わって見えたり、感じられる。おもしろいですよ。虫眼鏡を使って、写真、新聞、雑誌、パソコンのモニターなどを拡大してみるのも、けっこういい気晴らしになります（※この点については、「目は差別する」2009-01-11に書きました）。だまされたと思って、ちょっと試してみませんか？

09.01.25 架空書評：彼らのいる風景

◆架空書評：彼らのいる風景

2009-01-25 11:57:52 | Weblog

(※以下は、架空ブックレビューです。評者名を除き、書名、著者名、出版社名、定価は、すべて架空のものです。間違っても、アマゾンなどで検索なさらないよう、ご注意願います。)

書名：『彼らのいる風景 —— where they are ——』緑野 京二著、山の手書房新社刊、1,238 円＋税

本日、ご紹介するのは、純文学系の文芸雑誌に連載された短編を集めた、緑野京二氏の2冊目の本。最近では、純文学とエンターテインメント小説との境が、曖昧になってきているのは、ご承知の通りである。この作品は、すんなり読めた。ただし、読後感は

複雑だ。タイトルにある「彼ら」とは誰なのか？ 複雑な思いは、それと関係あるらしいと、後で気づいた。

全部で7編が収められているが、次の、3種類に分けることができると思う。(1) 三人称で一視点のもの、(2) 三人称で一視点のストーリーに、ラスト近く、あるいは途中で話者である「私」が登場するもの、(3) 「私」の語るストーリー。

以上の中で、私が特に気に入った3編を、以下に取り上げてみたい。

*

★「反・少女」

ある地方都市に住む女子高校生が、ビデオショップから出てくる場面から始まる。店を出て、帰ろうとしたところを、男に呼び止められる。2人は短い会話をする。季節は冬で、女子高校生は、ダッフルコートを着ている。髪も短い。ヘアスタイルは、男子の間で流行っているものを、自分で真似たらしい。「やっぱり、女の子か？」と、男は苦笑いをする。

女子高校生の名は、真琴（まこと）という。真琴は、どうして自分が女だと分かったのかと、男に尋ねる。声で分かったという。真琴が男装しているつもりだということが、この辺りで分かる。ダッフルコートを着ているのも、体型と胸を隠す意図があったらしい。ショルダーバッグは、兄のもの。普段なら、外出時には履かないスニーカーも、男の子に似せるためなのだと、心理描写される。

そそくさと男が去ろうとするのを、真琴は追いかける。もっと話がしたいのだ。「大きな声、出すわよ」と脅すと、男は「しょうがねえなあ」と言い、真琴をビデオショップの斜向かいにある、雑居ビルの一室に連れて行く。そこは、オフィスらしい。応接セットのソファに座るように言われた真琴は、男の行動を見守る。男は、ソファから離れたデスクに置かれたノート型パソコンのモニターを眺めている。2人間の会話がかみ合わず、おかしい。真琴は、男性間の性愛に興味を持っている。男は、そのことには興味がないらしい。真琴は、その男が男性に性的な関心を抱いているのだと思い込んでいる。しかし、男の関心は、そこにはないようだ。

男は、真琴にモニターを見せたがらない。真琴は、またもや「大きな声、出すわよ」で男を脅し、モニターの映像を見るのに成功する。真琴のショルダーバッグ内には、DVDが3枚入っている。さきほどのショップで買ったものだ。その店内の様子が、モニターに映し出されている。インターネットに接続するものだと真琴が思い込んでいた、パソコン脇の小さな器械。それには、アンテナがついていて、どうやら、あの店に設置された防犯カメラとパソコンを無線でつないでいるらしい。

モニターを見ていて、真琴は気づく。その店は、成人向けのビデオやDVDばかりを売っているが、画面には奥の一角だけが映し出されている。男性や男性同士が被写体になっている商品専用のコーナーだ。防犯カメラの位置は、店内に入って、チェックしておいた。あのコーナーだけを写しているカメラなどなかったはずだ。隠しカメラに違いない。

真琴は、男からいろいろ聞きだそうとする。男は半分居直った口調で、真琴の質問をのりくったりとはぐらす。その会話をここで全部再現できないのが、残念だ。滑稽でもあり、悲しくもあり、怖い。尿意を催した真琴は、「わたし、帰る」と告げる。オフィスのトイレを借りれば、中に監禁されるような気がして、怖くなったのだ。男は、しばらく考えるような表情を見せ、「おまえ、高校生だろ。学生証はないか」と低い声で言う。真琴は、歯科医院の診察券を見せる。男は、医院の名と真琴の氏名をメモする。

外に出た真琴は、急ぎ足でトイレのあるデパートの方角へと足を向ける。そのとき、背後から男の声がする。「失礼ですが、お話を聞かせてください」。男が2人立っている。背の高いほうの男が、上着の内ポケットから黒い手帳を差し出す。もう一方の男はしきりに、真琴の胸のあたりを見つめている。

ここからが、おもしろい。改行の後、場面がいきなり変わる。「それで、わたし、駐車場に連れて行かれて、その刑事さんたちが停めていた車の中で、あのビルにいた男のことをいろいろ聞かれたわけ」と、真琴が「私」に向かって話している。場所は、バーに変わっている。さきほどまでのストーリーは、真琴が数年前の体験を、語っていたもので、「私」がそれに耳を傾けていたという設定になる。

この種の語りの方は、珍しいものではないが、うまく処理しないと、読者が興ざめする。その点、作者の手腕は確かだ。抵抗なく読めた。

そうして場面は、バーで飲んでいる男女、つまり真琴と、語り手である「私」とのやりとりへと転換する。既に成人した真琴は、男装とまではいかないが、中性的な格好をしている。「恐喝していたのよ、あいつ。店の経営者と組んで」。真琴はそう言って、バーテンダーに声を掛け、ジントニックをお代わりにする。

*

★「セレブリティ」

この短編集全体の話者である「私」が、のっけから登場する。ちなみに、「私」の名前は、どの短編にも出てこない。ただ「私」と記されるだけだ。いろいろな人物と会話をするが、名前と呼ばれる場面もないため、正体がかみにくい。これは、作者の意図だと思われる。断片をパズルのように組み立てると、次のような人物らしい。

年は45歳くらい。何らかの病にかかっている、日に何度か複数の薬を飲んでいる。その病気が何なのかは意味深である。読んでいるうちに、勤のいい読者であればぴんと来るはずだ。ここでは私見は書かないでおこう。かつては、心理カウンセラーとして大学病院の精神科に勤務していたが、現在は、臨床心理家の資格を目指す人々を養成する塾で教えている。「今は体と心がもたない」と言って、カウンセリングは行っていない。

その「私」が名古屋に行く用事ができて、東京駅の新幹線のホームを歩いていると、始発の列車の中から窓越しに大きく手を振る者がいる。知り合いの男だった。「私」は、自分の予約した指定席があるのとは違う、その車両に乗り込み、男に挨拶をする。おしゃべりなその男は、次々と共通の知人の話や世間話をする。「私」は、車内に入った以上、あとは席を移動するだけなので、安心してその男の話の聞き役になる。

2人掛けの窓側の席が、男の指定席だった。通路側の席に着こうとした若い男に千円札を握らせて、「私」から指定券を奪い、若い男のものと交換する。状況判断が素早く、気が利き、頭の回転が速そうな男だ。その男が早口で話まくる。この短編の約3分の1まで来たところで、ようやく列車が動き始める。ぎりぎりで車内に乗り込んだ客たちが、通路を行き来する。突然、「あっ」と、男が叫ぶ。ある女性の芸能人と、そのマネージャーか付き人らしき男女が、通り過ぎる。

男は、女性用のブランド物のハンドバッグから、手帳を取り出し、何やら書き付けている。「私」が遠慮して、前方に目を向けていると、「ねえ、見て」と男は、皮で装丁してある大きめの手帳を「私」に見せる。よく見ると、手帳の前半のページにはたくさんの紙が貼れている。古い紙だ。その手帳の2分の1ほどの大きさの古い手帳を解体し、新しい大きな手帳に糊で貼り付け合体せて1冊にまとめてある。そのため、手帳全体が、異様に膨らんで見える。

「これねえ、あたしの宝物なの」。男は、18年前の15歳の時に上京したという。生まれも育ちも、三重県の北部。高校に進学したが、ゴールデンウィークを利用して、上京したのをきっかけに家出状態になり、それ以降東京で暮らしてきた。寝る場所や食べることには、全然困らなかつた。「あたしって、かわいいでしょ。お金の心配はしたことなかつたの。ある時まではね」

若くてかわいかった少年時代のその男は、驚くべき数の男性遍歴を経てきた。男は、「私」を相手に回想を語る。さまざまな男性との出会いや付き合い、そして別れ。その間に挿入されるのが、東京で見かけた有名人の話だ。手帳にはそうした有名人たちの名前と、見た場所、日付、時間帯、その人物がどんな格好で何をしていたかが、メモされている。

タレント、歌手、俳優、政治家、スポーツ選手、キャスター、アナウンサー、コメンテーター、評論家、モデルといった人物を見かけた時の様子が、男の話を通して簡潔に描写される。「ねえ、原宿駅に専用の駅があるって、知ってた？」という具合に、皇室の人たちまで出てくる。途中から、男は、急にしんみりとした声になり、今、新幹線に乗っているわけを話し始める。1年前に、ある親しい友人が亡くなったこと。最近、体調がよくないこと。そしてカードローンの返済が、かなり切迫した問題になっていること。

2人は、名古屋駅で下車する。「私」は、ある学校に行く予定がある。男は、私鉄に乗り換えて、三重県にある実家へと向かう。別れ際になって、「あっ」と、男が声を出す。ある女性歌手とすれ違ったのだ。十代でアイドルとして一世を風靡したのち、結婚を機に芸能界を引退。10年ほどの空白を経て、最近歌手としてデビューした女性だと、「私」は思い出す。さっそく、手帳を取り出してメモし終わった男が、顔を上げる。真剣な表情をしている。「あの人、あたしが最初に東京で会った有名人なの」。男は、「私」に手帳の1ページ目を見せる。黄色くなりかけた紙に、稚拙な字が躍っている。「あたし、やっぱり、東京にもどる。引越しセンターに電話しなくちゃ」。立ち尽くす「私」を残して、

男は精算所の窓口へと急ぐ。

*

★「再訪」

46歳の埼玉県警の刑事が主人公である。だが、ミステリーではない。全体が三人称一視点で書かれている。「私」は登場しない。その刑事が容疑者を追って、都内の警察署を訪れるシーンから始まる。どこの警察署かは、明記されていない。刑事は、容疑者が訪れる可能性が濃厚な場所として、ある地域を予想し、そこで聞き込みと捜査を行うつもりでいる。よその警察の縄張りに足を踏み入れるわけだから、当然挨拶が行われる。連れの30代の刑事を伴い、所轄署の所長に挨拶をしたのち、交通課にいる1人の警察官を訪ねる。

その53歳の警察官は、以前は少年課の刑事だったが、家庭内の不和と離婚により、現在は交通課に回された形になっている。少年課では、自らの所帯をきちんと維持できない人材は要らないのだという。そんなもので、あろうか。刑事は連れに指示を与えて、ある場所へ先に行かせ、その警察官と2人で外に出る。東西に走る大通りを歩きながら、2人は過去の話をする。

刑事の息子が高校2年生のとき、夏休みに上京し、この警察署の管轄である地域で数週間生活していたことが分かる。学校が休みとはいえ、家出には違いない。刑事は、家を出た息子の部屋に入り、「がさ入れ」をし、息子の秘密を知る。休暇願いを受理された刑事は、息子を探すために、この地域に来る。もちろん、職場には別の理由を伝えてあった。その時に知り合ったのが、今一緒に駅の方角に向かって歩いている、当時は少年課にいた警察官だった。

刑事が追っている容疑者の立ち寄りそうな個所を、2人は一通り見回る。何回か、警察官の携帯電話に連絡が入る。警察官は生返事をするだけで、署に戻ろうとはしない。気を使う刑事に対し、「形だけの業務連絡さ。おれのする仕事なんか、あそこにはない」と警察官は言う。刑事は連れと携帯電話で連絡を取り、合流する。埼玉県警の2人の刑事が並んで、署に戻る警察官を見送る。

その日は金曜日。2人は南北に走る仲通りにいる。男、男、男――。女の姿は、ほとんど見られない。夜のとぼりが下りるにつれて、男たちの数が増える。ところで、さきほどこの短編には「私」は登場しないと書いたが、正確ではない。路上に立ったり、行き来したり、歩道でしゃがみ込む男たちや少年たちを描写した部分で、一度「私たち」という語が出てくる。作者の誤記であろうか。それとも意図しての記述であろうか。ところどころに書き手の「たくらみ」めいたものが目につく短編集なので、後者かもしれない。ストーリーに戻ろう。

年下の刑事は、仲通りの南半分とその路地を受け持ち、年上の刑事は北側を見張る。年上の刑事の心理が、ジェイムズ・ジョイス張りの「意識の流れ」の手法で描かれる。この辺が、いかにも純文学っぽい。読みにくいとも言える。3年前の息子の家出と、その後の息子とのぎこちない関係。息子が東京の大学に進学が決まった際に抱いた複雑な心境。26年前に1度だけ、この界隈を訪れた時の記憶。1度きりの苦い経験。

張り込みにあたる刑事は、対象を監視したり捜したりするだけでなく、いろいろなもやもやしたことを頭に浮かべながら、数時間、時には十数時間も過ごすのだろう。数ページにわたる、刑事の心理と回想を読みながら、そんな感想を持った。いささか退屈な「意識の流れ」が中断し、読む者ははっとさせられる。仲通りのほぼ中間に位置するビデオショップ兼本屋のような店の近くの歩道に立ち、ビールを配っている若者が登場する。よく見ていると、右足が少し不自由なのが分かる。

刑事は、その20歳前後の若者に見入る。近づくことはできない。若者からビールを受け取る男たちは少ない。若者は、何やら声を掛けながら、ひたすらビールを配り続ける。1人の中年の男が立ち止まり、ビールを受け取ったあと、若者に話し掛ける。2分ほどして、男は若者の腕を引っ張る。刑事の両手が拳を作り、今にも走り出しそうになる。しつこい男は大笑いをして、ようやく若者から離れる。

私なんかは、こういうくだりを読むと、父子の再会などという、展開を予想してしまうのだが、そうはならない。これも、純文学だからか。揶揄（やゆ）したくなる。刑事の携帯電話が鳴る。県警本部から、容疑者が県内で見つかったという知らせだった。駆け寄る連れの刑事と共に、刑事は仲通りを南に急ぐ。数時間前に別れた所轄署の警察官に、携帯電話で事情を話し、礼を言う。大通りを右に折れ、西にある駅へと向かう。

*

以上の3編以外に、印象に残った作品は、次の通り。女装バーで働く息子から、テレビに出るといふ電話をもらい、番組が放映される日に酒を飲みながら、番組開始を待つ母親を描いた「リハーサル」。とある「拠点病院」を囲むようにして、点々と住んでいる人たちの交流や争いを淡々とした筆致で描いた「コロニー」。この2作がよかった。

全体を通しての感想として、純文学の書き手特有の、技巧に走る面が目についたことを指摘したい。中には、「あざとい」と評価されかねない箇所も、いくつかあったが、作者の意欲的な創作態度として、私は歓迎する。

さて、冒頭でも書いたが、「彼ら」とは誰であろうか？ 以上のあらましをお読みになれば、いくつかの語が返ってくるのは確実である。英語から入った語もあれば、日本語もあれば、蔑称もあろう。本書を読み終え、書評を書こうとして、はっと気づいたことがある。おそらく、この短編集の読者が「彼ら」という語の意味として挙げるであろう、いくつかの語が1つも、いや、1度たりとも、使われていないのである。まさか、と思って、全ページをざっとめくってみたが、私の見た限りでは、全く見当たらない。

「彼」という語は、本来は男女両方を指す代名詞であった。古文を読む場合には、納得済みだから、違和感はない。だが、ある時、少々戸惑いを覚えたことがあった。高校時代であろうか、国語の教科書に載っていた、森鷗外の『舞姫』の一部を読んでいて、ぎくりとした。この作品は、鷗外のドイツ留学時代の思い出が色濃く出ているフィクションである。その中に登場する、貧しい踊り子エリスという少女を、「彼」と書く場合があり、その度に違和感を抱いたことを、今思い出した。

それはさて置き、本書のタイトルにある「彼ら」である。この「彼ら」を、指す例の語たちが1つも見当たらない。それらは、場合によっては差別語にもなる言葉である。それが書かれていない。これは緑野氏の「たくらみ」であろうと、私は推測する。もし、そうなら、この本には、あるメッセージ、ないし決意が込められていると言えるのではないか。

この本に出てくる「ある種の語で呼ばれる人たち」は、名付けられることを拒否している。既成のレッテルを貼られて、先入観で自分を判断されることを拒否している。読みすぎであろうか？ 私は、作者の「たくらみ」を勝手に推測し、その意図に敬意を示す意味で、この書評の中でも、その類の語を一切使用しなかった。いずれにせよ、職人の手で丹念に細工された工芸作品に似た趣（おもむき）のある短編集である。

< 評者：孟宗竹真（もうそうだけまこと）・詩人 >

当ブログで「不定期」に書評を掲載するというお約束をしている、孟宗竹真氏ですが、毎週原稿をお送りいただき、その律儀さと人情の厚さに、深く感謝しております。

書評のバックナンバーは、第1回目「架空書評：狂った砂時計」2009-01-13、第2回「架空書評：何もかもが輝いて見える日」2009-01-18です。今回の記事と、あわせてお読みいただければ幸いです。

なお、当ブログのバックナンバーに、短い解説とキーワードをつけた、「こんなことを書きました（その1）」2009-01-19」にも、お目を通していただければ、嬉しいです。

孟宗竹さん、今回は長い書評をいただき、どうもありがとうございました。今後も、よろしく願いいたします。（パ）

【注：最後の行末に（パ）とあるのは、このブログ記事を書いていた時期の、私のハンドルネームが「パリス・テキサス」だったからです。】

09.01.26 交信欲＝口唇欲

◆交信欲＝口唇欲

2009-01-26 10:37:38 | Weblog

突然ですが、「交信欲（こうしんよく）＝口唇欲（こうしんよく）」について、書きたい
と思います。哲学したいと思います。先週の記事で、紹介した言葉です。いえ、別に、難
しいことはありません。簡単に言えば、

「他の人と、つながりたーい」「他の人と、言葉をかわしたーい」「他の人と、文字をかわ
したーい」「他の人と、映像をかわしたーい」「他の人と、心をかわしたーい」……

という、ヒトのごく自然な欲求です。つまり、「おしっこがしたーい」「うんちがしたー
い」「ご飯が食べたーい」「あの人をぶんなぐってみたーい」「眠りたーい」と、同じくら
い「自然な」欲求です。ふざけてなんか、いませーん。念のため。現に、以上のどれが欠
けても、ヒトは生きていくことができない、重要な欲求だからです。そのような大切な
ことについて、冗談なんか言えません（※少しだけ、「書く」かもしれません）。

分解して説明すると、

(1) 「他の人と、○○をかわし、その行為をきっかけに、つながり」＝交信＝口唇＝つ
ながる＝かわす＝～しあう＝相互＝まじわる＝くちびる（※唇は必ず「何か」と接する
部分です。接する行為以外に目的はない、とも言えます）

(2) 「たーい」＝欲＝欲求＝欲望＝願い＝煩惱＝本能＝祈り＝～やりてー＝～したいわ＝
したい

ということになります。

既に、お気づきの方もいらっしゃると思いますが、きょうは、ちょっと気分を変えて
「フロイト」しています。あるいは、「ジャック・ラカン」しています。フロイト、ラカン
については、グーグルなり、または、いきなりウィキペディアで、お調べになってくだ
さい。

ただし、お調べにならなくても大丈夫なように、書いていくつもりです。ご安心くだ

さい。なお、「ジャック・ラカン」を検索すると、頭がぼーっとなったり痛くなる恐れがありますので、そんな心配がしたら、こりゃアカンということで、即、ご愛用のポータルサイトにでも、逃げ込むことをお勧めします。

蛇足ですが、「ユング」は、当ブログでは、出てこない予定です。これから先、ぜんぜん、出てこないとは、言いきれませんが――。ユングファンの方、すみません。「あなたに、ユングを出してほしいなんて、誰も頼んじゃいねーよ」。ああ、またもや、幻聴！ ジャック・デリダ氏とマラルメ師を、きょうお招きしなかった、罰（ばち）が当たったのでしょうか？

フロイトとラカンは、エロくないと理解できません。エロくなる（＝偉くなる）必要はありませんが、エロくならないと絶対に理解できません。一方、ユングは、エロくないと（＝偉くないと）理解できません（※このあたりのオヤジギャグは、デリダ氏にちょっと助けていただきました）。

「ユング」するためには、宗教、神話、哲学などといった古今東西のいろんな知識も必要です。何しろ、集団的無意識＝普遍的無意識＝集合的無意識と呼ばれる、壮大な大風呂敷、いや、失礼、壮大な理論を繰り広げますから、自分のような怠け者にはついていきません。

また、占い、霊、スピリチュアルなどとも親和性がある、つまり、仲がお良ろしいので、お金がかかってしかたありません。自分の場合、いろいろ訳ありの身なので、先立つものがございません。ですので、お布施も、お月謝も、鑑定料も払うことができないのです。要するに、「偉く」なければユングに近づくな、という意味だと勝手に理解しております。

以上、別に喧嘩を売っているわけではありませんので、誤解なきよう、お願い申し上げます。

*

さて、さきほどの「交信欲＝口唇欲」に関する分解説明の、（１）と（２）ですが、これも、おふざけだとは、思わないでください。少し、エロいというか、エッチな感じが

すると思われた方、正解です。ピンポンです。もう、「死語」ですか、ピンポンなんて？
じゃあ、「死後」、復活させましょうよ。好きなんです。個人的には、あのピンポンとい
う、間の抜けた響きが――。

こうして、いつものように、時折ひとりダジャレを飛ばしながら、ジャック・デリダ
氏とマラルメ師の顔を立て、お話を進めたほうがよさそうです。

なお、デリダ氏とマラルメ師のダジャレについて、ご不明の方は、当ブログのバックナ
ンバーである「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17、「それは違うよ」2009-01-20、「ま
～は、魔法の、ま～」2009-01-21、「なぜ、ケータイが」2009-01-22のうちの、どれか1
つをお読みいただければ、幸いです。おススメは、このブログがダジャレとオヤジギャ
グに走る言い訳をしている、「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21です。

で、さきほどの(1)と(2)の○=○=○.....」ですが、キーワード、言い換え
ると、いちばん大切な言葉は、

口唇(=こうしん・くちびる)

です。小さいころを思い出してください。やたらと、その辺にあるものを口に入れませ
んでしたか？ 赤ちゃんのころを思い出すと、一番いいのですが、そこまで、記憶のいい
人は、まずいません。身近にいる赤ちゃんを思い浮かべてみましょう。

お口に入れて、舌でなめなめ、唾だらけにする。これ、なんです。

「他者との触れ合い」とも、言います。生まれたての赤ちゃんにとって、最初の「他者」、
つまり、自分でないものは、お母さん、あるいは、お母さんの代理になる人の「お乳=乳
首=乳房(=哺乳瓶)」なのです。哺乳瓶を使う場合には、男性でもオーケーですね。

でも、「他者」なんて難しい言葉や概念が、赤ちゃんにわかるわけがないですから、直
感的、または本能的に、「自分とは違うみたいだけど、何だか、気持ちいい、離したくな
い」という気持ちを抱きます。「違うみたい」という部分が、重要です。要するに、「よく

分かんない」んです。言い換えると、「不明」＝「!？」。まだ、言葉なんて、しゃべれないのだから当然です。

*

ヒトは「未熟児」として生まれるって（※お気を悪くされた関係者の方、ごめんなさい）、聞いたことがありませんか？ どんなに元気な子でも、「未熟児」として生まれてくるそうです。体だけじゃなく、頭も、そうなんですって。

ええっ？ 人間様が？

という驚きを覚えませんか？

でも、他の生物の赤ちゃんを見れば、納得できると思います。犬も、猫も、ゴマフアザラシのゴマちゃんも、生まれたての時から、ヒトの赤ちゃんより、ずっとしっかりしていますよ。そりゃあ、お乳は飲みますよ。目も開いていませんよ。母乳なしでは、ほんの数時間も生きられませんよ。それなのに、生まれた直後に、お母さんに全身を舌でなめなめしてもらって（※「舌でなめなめ」は、かなり重要な点です）、お乳をもらい、少し経てば、目を開けて、その辺を動きまわります。やがて歩き回ります。

その点、馬や牛なんて、立派じゃないですか？ テレビで見たことはありませんか？ 生まれて間もないのに、もう、オトナづらしてあたりを歩き、ちょっと目を離した間に、走り出す赤ちゃんまでいるんですから。大したものですよ。

それに引きかえ、人間様の赤ちゃんですけど、ちょっと、いや、相当頼りないですね。歩くまでに、どれだけかかると思います？ 子どもを持ったことがないので、よくは知りませんが、かなり遅いですよね。他の生き物と比べて、ですよ。

でも、ご心配は要りません。未熟児で生まれたと言っても、早産しただけであり（※お気を悪くされた関係者の方、ごめんなさい）、遅れながらもすくすくと育ち、いちおう他の動物たちにたちまち「追いつき追い抜く」ということになっています。めでたし、めでたし、人間様、万歳。

で、口唇(=こうしん・くちびる)ですが、この「唇」という、上下1対の赤いチュールリップ(※ tulips = two lips)が「他の人と、つながりたーい」「欲求の素(もと)」、「味の素」の素(もと)なんです。唇が上と下で計2ヶあることは、非常に重要です。これと舌(※なめなめの舌です)が、あって声帯や肺や鼻の力を借りながら、ヒトは言語を獲得したのです。ヒヒーン、モーモー、キャッキョット、たとえば「あいうえお、かきくけこ、さしす……」との、「分かれ」目です。お「分かり」いただけましたでしょうか？このことについては、後ほど。

*

ちなみに、

唇がさみしい、

って、言う人が時々いますよね。自分自身は言わなくても、その気持ちって分かる気がしませんか？手元のいくつかの辞書に、「唇がさみしい」が慣用句として載っていなかったもので、ちょっと意外でした。俗語表現っていう、失礼な言い方がありますけど、それですかね？自分は、「唇がさみしい」という気持ちが分かりすぎるほど、よく分かります。煙草は吸いませんし、吐き出しもしませんが、よく分かります。愛煙家だけの特権じゃないと、思います、あの気持ち。

人肌が恋しい、

って、いうのにも、ちょっとだけ、似てませんか？こちらのほうが、ちょっと、オトナっぽいニュアンスがありますが。とにかく、「さみしい」「こいしい」という気持ちは、体感的に分かるような気がしませんか？

自分は、この「体感的に分かる」ということが、非常に大切なことだと思っています。頭ではなく、体で分かる。これこそが、現在のヒトが忘れかかっている、ヒトとしての大切な「たしなみ」ではないかとさえ思うのです。

簡単に言うと、このところ、ヒトは「頭でっかち」になっていないだろうか？「からだ」と「こころ」のつぶやきや叫びに、耳を傾けていないのではないか？だから、「病む」＝「止む」(→「ヤムヤム」＝「yum-yum」)という、「気持ちよくない」＝「癒やされない」状態に陥っているヒトたちが多いのです。自分の場合、他人事ではないので、切実にそう思います。

ところで、「分かる」って、字をよく見てください。「分」という漢字(＝感字)が使われています。なお、「感字」については、漱石先生の「当て字」と関係がありますので、不明の方は、タイトルからして当て字を用いている「お口を空けて、あーん」2009-01-23を一読いただければ嬉しいです。もちろん、このまま読み進めていただいて、かまいません。

「分かる(＝わかる)」＝「別る」＝「解る」＝「判る」

昔、松鶴家千とせ(※「しょかくやちとせ」と読みます。一時期、ビートたけし＝北野武の先生だった人らしいです)という、お笑いの人が、

「わかるかなー、わかんねーだろうな、イエーイ」

という、シュールなギャグを流行(はや)らせたことがありました。「松鶴家千とせ」で、ウィキペディアなどで検索していただくと、どんな人なのかが「解ります」。で、自分はけっこう気に入って、昔よく真似をしていました。

あれは、なかなか「ベケットしていた」なあ、あるいは「吉田戦車していた」なあ、「ぼのぼのしていた」(※いがらしみきおさん、今、あなたはどこに?)、「マザーグースしていた」なあ、と、今になってようやく「判りました」。お「分かり」になりましたでしょうか？ここで「お別れ」なんて、嫌ですよ。もっと、交信しましょうよ、このさいですから(※何だか、乱れてきて申し訳ありません)。

たった今、言葉の「身ぶり＝運動」として、真面目かつ本気で「実践＝実演＝プレゼン」しましたように、「分かる(＝わかる)」＝「別る」＝「解る」＝「判る」という言葉は、「多層的＝多重的」な「意味構造＝コアイメージ」を持っています。

こうした現象は、もとを正せば、上で述べた「交信欲=口唇欲」の結果なのです。言い換えるなら、「ヒト=狂ったサル」特有の習性であり、これなくして、「人類によるこの惑星の征服、および破壊」(=文明)は、あり得なかったのです。今の世界的大不況も、です。トホホな話ですけど、本当なんです。ガセやヨタじゃありません。

自分は、本気です。正気とは言いませんが、本気です。

またもや、ブログが長くなりました。この調子ですと、もっと長くなりそうです。「わかる」について、さらに書きたいのですが、「どうにも止まらない」状態になりそうな恐れがありますので、できれば、あすにでも、この続きを文字にしたいと思っております。

ここまで辛抱して、お付き合いくださった方に、心からお礼を申し上げます。

また、間違っ、ケータイで、このブログに入ってしまった方、深くお詫び申し上げます。なにぶんにも長い記事なので(※きょうは、いつもよりも、かなり短いのですが)、ぜひ、パソコンで入り直していただければ嬉しいです。

09.01.27 ケータイ依存症と唇

◆ケータイ依存症と唇

2009-01-27 10:20:49 | Weblog

きのうの「交信欲=口唇欲」(=こうしんよく)の続きです。きょうも、真面目に哲学しますので、そこところを、どうぞよろしく(※「なんて挨拶だ、これは!」)。ああ、幻聴! さて、

「他の人と、つながりたーい」「他の人と、言葉をかわしたーい」「他の人と、文字をかわしたーい」「他の人と、映像をかわしたーい」「他の人と、心をかわしたーい」……

でしたね、きのうは。で、

「他の人と、〇〇をかわしたーい」

の〇〇には、何が入るのでしょうか？ 上で、挙げたのは「言葉」「文字」「映像」「心」でしたが、よく見ると、メールで交わすことができるものばかりですね。スパムメールみたいに「躲す＝かわす（※攻撃から身をかわす、のかわす、です）」ことが、やっかいなものもありますが。

〇〇に入るものとして、その他、思いつくのは、

「愛」「抱擁」「声」「お金」「挨拶」「覚書」「契約（※契約書）」「キス」「唇」「目配せ」「視線」「信号」「視線」「杯・盃（さかずき）」「ポイント」「マイレージ」「約束」「密約」「贈り物」「意見」「笑み」「議論」「冗談」「握手」……

って、ところですけど、まだまだありそうです。読み直してみると、ダブるものも、ありますね。気にしないで進みましょう。

要するに、「交信欲＝口唇欲」（＝こうしんよく）って、「交換」ですね。「交換」っていうのは、経済学や文化人類学では、けっこう重要な概念らしいのです。ほら、「物々交換」って、学校の社会かなんかの授業で出てきたこと、あるじゃないですか。大きさに言えば、「トレード＝取引＝交易＝貿易」ですよ。あれです。そこで、よく思い出しましょう。原点に戻りましょう。「物々交換」とは、確か、貿易よりも大昔の話でしたよね。どうして「物々交換」をしたのか？ そう、

お金がなかったからです。

じゃーん。

お金がない。

なかなか切実な、問題です。現在の大不況でも、お金がないのが大問題。ただ、ここで問題なのは、そういう意味とは違うんです、ちょっと、いや、かなり違う。

「お金＝貨幣＝通貨」という便利な「仕組み」がなかった

ので、物と物とを交換するしか手段がなかった。と、いう意味ですから、だいぶ違いますよね。そうすると、大昔には、

お金がなかったからです。

というよりも、

お金というものが、なかったからです。

と書くべきでした。ごめんなさい。

*

さて、

貨幣の誕生。

じゃーん！

という、鳴り物入りの、大発明があったのです。ヒトにとっては、言葉の誕生以来の、画期的な出来事です。さすが、人間様ですよ。あつたま、いいー。でも、よく考えると、ややこしいことになってきました。

Aという物の代わりに、Bという物を相手に差し出す。つまり、「物々交換」

だけでも、「ブツブツ」もめたのに、今度は、

AやBという「現物」の代わりに、石ころ、貝がら、布きれ、お米、お豆、羽、歯、刀……といった「代わりの物」を使い始めた

んです。こういうものを、「表象＝シンボル＝代用品＝代理＝お代わり」とも言います。A、Bという現物の代わりに、A、Bという代用品を用いる。変換が起きる。ちょっと、ややこしいですか？ 気にせずに、先に進みましょう。

また、ひと悶着（もんちゃく）起こりますよ、絶対に。「ブツブツ」くらいじゃ、済まない、ですよ、きっと。「お金」なんて発明したために、「おっかねー」ことに、なってしまったに違いありません。

「おい、それじゃ、不公平だ。A 5ケの代わりに、B 2ケだって～。「シェー！」笑わせるんじゃねーよ。おいおい、自分で勝手に決めて、持って行くなよ。泥棒野郎！ 変な「まねー」するんじゃねー。おまえ、その袋の中に、もっと「あるじゃん」。そいつを出せ」

【※蛇足ながらの解説：マネー＝ money は、説明は要らないですよ？ アルジャン＝ argent は、赤塚先生の「おそ松くん」に出てきた、イヤミさんによると、フランス語で「お金」ざんす。シェー＝ cher (ére) は、やっぱりフランス語で「(値段が) 高い」という意味ざんす。「ここで、くだらないと思った人、人気プログラミングに1票ください、応援クリックをポチッと1押し」、なんて、「はした」ないことは、自分は言いませんけど。「はしたがね」ですら、欲しい身ではあります。確かに、くだらない。うん。】

とにかく、以上の「おそ松くん」を出汁（だし）にした「お粗末」なオヤジギャグから、お金＝貨幣の誕生が、大騒ぎになることは想像がつきますよね。

それが、今でも、続いているんですよ。ほら、なんとか、飢えたハアローとか、惚れックスとか、ごちゃになった会社で、ラフな格好のおねえさんや、おばさんや、おにいさんや、おじさんが、テーブルを囲んで怒鳴りあっているのを、テレビニュースで見たことがありますか？ 何をやってるのか知ったのは、恥ずかしながら、比較的最近の話なんです。経済や金融の話は、なにしろ苦手なんです。特に、数字に弱くて。

*

で、少し分かったことを言いますと、問題は、「価値」という「尺度」にあるってことらしいんです。外国為替市場、外国為替取引、FX（＝外国為替証拠金取引）とか、そういう言葉と関係あるらしい。簡単に言うと、いろんな国の金銭の「価値や尺度が刻々変動する」ってことらしい。なぜかは、知らないんですけど。

「価値」「尺度」ですか？ それ「刻々変動」するんですか？ で、「相場」っていうのが、あるんですか？ ただでさえ苦手な数字が、あっちこっちにあって、規則的なのか、不規則なのか、分からないんですけど、とにかく動きまくる。超高速の、もぐら叩きみたいに、どこを叩いていいのかわからない状態。パニック、まくる。

うーん。難しすぎて、ダジャレが出ない。マラルメ師のご降臨を待つ身としては、ここでダジャレを飛ばさなければ、格好がつかない。「価値」「尺度」「変動相場」……。

「価値」にかけて、「かちかち山」じゃあ、ウサギに負けっぱなしのタヌキを相手にしても「勝ち」目がなさそうだし、カニコー（＝「蟹工船」by 小林多喜二）に出てきそうな労働者なんかの「赤銅色（＝しゃく「どう」いろ）の肌」では、「どう」にもならないし。「変動相場（＝へんどうそうば）」に至っては、「きょうのお『弁当（＝べんとう）』はカップ焼き『そば』だ」ぐらいでは、やっぱし、「変」で「どう」しようもない。苦しいなあ――。それにしても、

お金がない（※これは独り言です）。

お金とは「縁＝円」がないので、「交換」といった、経済学のお話はやめたほうがよさそうです。でもですね、

オギャー！！

ウギャー！！

突然、失礼しました。驚かせるつもりは——実は、あったんですよ。ちょっと、ですけど。難しく考える必要はない、と気づきました。素人(=しろうと)は素人なりに、「知ろうと」努力する。これが大切だ。そう、言いたかったんです。どうということかと申しますと、「オギャー！！」「ウギャー！！」という、赤ちゃんの泣き声や、ゴマフアザラシのゴマちゃんの「キューツ」(※ハウ・キュート！ =何と可愛いのであろうか!)という鳴き声は、

「(お乳なんかを) もらいたーい」とか、「(おしっこや、うんちなんかを) 出したーい、または、出ちゃった、どうにかしてよー」

という、欲求の叫びである。と、気づいたのです。

「もらう」対「出す」

これって、「交換」じゃないですか！？ そうだったのかあ。もらった後は、返さなくてはならない。これって、人間にとって最低限の礼儀であり、たしなみ、ではないか？ そうか、納得。で、赤ちゃんは、何を返してくれるのか？ 何を出すの？

おしっこや、うんちだけじゃ、ありません。その笑みで、愛と、元気と、生きる勇気を、返してくれるんです。だから、親は頑張るんです。一生懸命、生きるんです。

柄にもないことを、言ってしまいました。でも、そのおかげで、ややこしそうな「交換」に「好感」を持つことができました。それにしても、

お金がない（※これは独り言です、くどいですね）。

お金とは「縁＝円」がないので（※またかよ）、やっぱり「交換」といった身の程知らずな経済のお話はやめて、「交信欲＝口唇欲」（＝こうしんよく）に、戻ります。こっちのほうがエロくて、自分の肌に合っている、たぶん。

で、誰もが、言葉を交わしたがつている。唇がさみしい。人肌が恋しい。他の人とながりたいと思っている。

だから、対面で会話する、電話やケータイで会話する、手紙を書く（※すると、返事が来る）、メールを送信する（※または、受信する）、ネットを通じて画像を送り合う。これは、素晴らしいことです。コミュニケーション、人間関係、ラポール、愛、引き寄せ、ひきつけ、かんの虫……いろいろな言葉で表現できますが、とにかく、ヒトにとって欠くことのできない、いとなみです。

*

あっつ！ 気配がします。

ここで、ある方にご登場願います。

じゃあーん。

マラルメ師です。サイコロを振る名人です。サイコロといっても、1から6しか目が出ないものではなく、魔法のサイコロ。言葉のサイコロ。サイコーです。ちなみに、サイコロはちゃんとした日本語であり、「さい（※采・賽子・骰子）」とも言います。

「さい＝サイ＝サイコ（ロジー）＝差異＝間＝魔＝ま」

という、ダジャレの連鎖は、マラルメ師のサイコロをつかって、先週、さんざん哲学させてもらった「さい」の総まとめです。ご興味のある方は、きのう紹介したいくつかの記事を、お読みくださいませ（※そういう方は、いらっしゃらないだろうなあ）。

で、当ブログ恒例の、儀式をとりおこないます。先週と同様、アツノさん（※ご不明の方は、ウィキペディアで「泉アツノ」を検索願います）に、ご協力をお願いします。アツノさん、よろしいでしょうか？『『さい』ですか、ほな、ぼちぼちいきまひよか？』。では、まいります。きょうの、お題は「交信欲=口唇欲」（=こうしんよく）です、マラルメ先生。

えいっや！（※これ、サイコロを振っているんです）

bath。「こんなん出ましたけど〜」「ありがとう、ございまする、アツノさん」

はあ？先週に引き続き、またもや英語ですか？フランスの詩人兼中学の英語教師であられた、マラルメ先生、ど、どういう、こ、ことなんでしょう？なぜか、舌がもつれる。thの発音苦手なんです。その点、A六輔さんは日本語でも、うまくthを発音なさっている（※Aさん、ごめんなさい）。うらやましい限りです。ホエア・イズ・ザ・バスルーム・プリーズ？はばかりは、どこじゃ？

それどころじゃない、bathが出たので、考えなければ、この日記が進まない。

うーん、bathですか。「お風呂」ですよ。ね。「入浴」ですよ。ね。まさか、「ニューヨーク」なんて、手垢の付いたダジャレを、マラルメ先生がお作りになるわけではないし……。アツノさん、すみませんが、もう一度いきます。

えいっや！

bath。「こんなん出ましたけど〜」「きょうは2度も、おねだりしちゃいました。かたじけない」

おお、またもや、bath ですか。「入浴」のほかに、「沐浴 (=もくよく)」という意味が、あったけど。もしかして、「モクヨク」？ それを並べかえて「ヨクモク」→「ヨックモック」なんちゃって。まさか。いくら、マラルメ先生が薄給だったとしても、このブログで「お菓子」のアフィリエイトを始めるなんて、「おかし」なことがあるはずがない。それにしても、あのお菓子、食べていないな、シェーだもんなあ。そんなアルジャンないじゃん。

bath——、何だろう？ うーむ。うーん。絶句。マラルメ師は、沈黙して、こっちを見ているだけ。

あっつ、読めた！ 読めましたよ、アツノさん。

交信「浴」=口唇「浴」 (=こうしんよく)

きっと、そうです。間違いはない。きのうの日記の(1)ですよ。さっそく、コピペして引用します。

> (1)「他の人と、○○をかわし、その行為をきっかけに、つながり」=交信=口唇=つながる=かわす=～しあう=相互=まじわる=くちびる (※唇は必ず「何か」と接する部分です。接する行為以外に目的はない、とも言えます)

そう、これこれ。「交信=口唇」。「こうしん」を浴びる。シャワーのように浴びる。惜しみもなく、浴びる。浴びりまくる。やっばし、

交信浴=口唇浴、

だ。

そういえば、そういう人、最近、多いと聞きました。分かっちゃいるけど、やめられない。どうにも止まらない。そんな状態になって、苦しんでいる人が多いらしい。大変

なんじゃないですか、ひょっとして、そういう人って、

つらいんじゃないですか？

自分なんか、うつですから、そうしたメンタルヘルス関連のことは、他人事とは思えません。

ケータイ依存症

と、いうらしいですね。依存症一。煙草依存症、パチンコ依存症、お酒依存症、薬物依存症、共依存なんていうのもありましたね、自分なんかブログ依存症でしょうか？こんなに長い記事を毎日書いているなんて一。だから、偉そうなことを言える立場には、ぜんぜんないのですが、ケータイ依存症については、ちょっと気になるというか、心配です。

唇がさみしい。人と話したい。常に誰かと、つながっていたい。

自分は、ケータイは持っていますが、事情があってほとんど利用しないのですが、唇がさみしい、という気持ちは分かるような気がします。

昔、1人暮らしをしていたころ、夜なんかに、無性に人肌恋しいというか、唇がさみしい、そんな気持ちをよく経験しました。当時は、ケータイは今ほど普及していませんでした。部屋に電話はありましたが、受話器を通してではなく、誰かと一言でいいから、直接に言葉を交わしたい、と思うことが、しょっちゅうありました。

それで、深夜のコンビニに出掛けて行って、エビセンとか、ジュースを買って、レジの人が「どうも、ありがとうございました」と自分に向かって言ってくれるのを聞いて、こっちは、「どうも」とか、ぼそっとつぶやく。でも、それだけで嬉しくなり、心が安定して、部屋に帰り、あとは爆睡、なんてことが何度もありました。

専門家ではないので、ここで、アドバイスはできませんが、ケータイ依存症でお悩みの方、グーグルで検索するなりして、正確で適切な情報を入手し、依存症からの脱出へ

の一步を踏み出しませんか？

最初の一步、を。

当ブログでは、心の病、言語、哲学の3本を柱に、ああでもない、こうでもない、言葉を書きつづっています。長い文章で、しかも細かい文字の日記ばかり書いていますから、まさか、ケータイでこの日記を読んでいる方は、いらっしゃらないと思います。でも、パソコンのモニターでご覧になっている方の中に、ケータイのやりすぎで悩んでいる方がいることは、十分考えられます。あるいは、あなたのお友達の中に。

先週、「なぜ、ケータイが」2009-01-22 という文章で、ケータイについて触れました。そのときには、ケータイの是非は問わない、と書いたのですが、ケータイのやりすぎは、まずいと思います。ケータイという器械を通してではなく、直接、他の人と顔を合わせて話す、実際に会ってつながりを持つ（※「出会い系」の話ではありませんよ、念のため）、そんな付き合い方を見直しませんか？

*

あっつ！

忘れていました。きょうは、「わかる」について書くって、きのう書いたことを、すっかり忘れていました。「わかる」——これって、大切な問題なのです、少なくとも自分にとっては。あすこそ、「わかる」について書いてみたいです。

この行まで読んでいただいた方、どうもありがとうございました。

09.01.28 オバマさんとノッチさん

◆オバマさんとノッチさん

2009-01-28 10:44:28 | Weblog

> 「分かる (わかる)」 = 「別る」 = 「解る」 = 「判る」

きのうは、「わかる」について考えてみる予定だったのに、話が飛んでしまいました。ですので、きょうは、まず、一昨日の記事に書いた重要個所を、上記のようにしっかりと冒頭にコピペして、忘れないようにしておきます。

で、この「わかる」ですが、先週、哲学してみた「知覚」と深い関係がありそうです。上の○=○=○=○をじっと、見ていたら、ある言葉を思いつきました。

分別

です。「ふんべつ」とも「ぶんべつ」とも読めるところが、実に、あやしい。何か、ありそう。何だろう？ 哲学、できるだろうか？

でっきるかな、でっきるかな、○○○○○○～（※○部分は忘れました。とすっとぼける。みなさん、歌詞や曲には著作権がありますので、十分気をつけましょう）。

でしたっけ？ ここんとこ、死語と化したと思われる、ギャグを

死後復活＝死語復活

させるべく、私語をまじえず真剣に、このブログで紹介しております。「泉アツノ」さんの「こんなん出ましたけど〜」、「松鶴家千（しょかくやち）とせ」師匠の「わかるかなー、わかんねだろうな、イエーイ」、「少年アシベ」に登場するゴマフアザラシの「ゴマちゃん」の「キューツ」、「おそ松くん」に出てきたイヤミさんの「シェー」という具合ざんす。リユースしましょう、リサイクルしましょう、エコしましょう、リフォームしましょう。

で、

きょうは、「ノッポさん」こと高見映（たかみえい）さんの「できるかな」を、ご紹介しております。懐かしいですね。もっとも、かつてのノッポさんは終始無言でしたけど。「ノッポさん」って誰？ ご不明の方は、ウィキペディアで検索いただければ、高見さんも、さぞかしお喜びになると思います。さて、分別（＝ぶんべつ・ぶんべつ）を哲学することが、

できるかなあ？

何とか、できそうです。「分別（＝ぶんべつ）」とは英語で「sense」じゃありませんか。マラルメ先生に鍛えられて、最近英語に凝っております。きのうみたいに、アツノさんの力を借りて、マラルメ師のサイコロを振らなくても、きょうのテーマの取っ掛かりが出てきました。できました。よかったー。

「sense」は、何と「知覚」という意味でもあるのです！ 嬉しいです。「知覚」は、先週のテーマじゃありませんか。ワラコインシデンス（＝What a coincidence!）。何たる偶然！ こうなると、「あれ」をするっきゃない。「あれ」とは、このブログのバックナンバーである「うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について」2009-01-03 でやったことなのですが、別に参照いただかなくても大丈夫です。これから、いたしますので。ちょっと、面倒なんですけど、やってみます。

★ 「sense」：名詞、動詞。

(1) 感じる、つまり、「あん、あ〜ん、うっ、おっ、うっふん、びくっ、ぴくり、ピクピク」って感じ。感覚、五感、知覚。本当は遠くにあるのに、「近(ちか)く」にあるって錯覚が知覚(ちかく)。第六感を含む説あり。

↓ ↑

(2) 本気かよ、正気かよ、つまり、「あんた、ここ、大丈夫?」「気は確か?」「あやうくない?」「マジか?」「マジすか?」「おい、おれの声、聞こえるか?」「自分の名前を言っごらん」という感じ。また、「意識・無意識」の意識の異も含む。

↓ ↑

(3) 感じ、感触、つまり、「とにかく、〇〇って感じなのよー、わかる?」「こう、何て言ったらいいか、〇〇って気がするんだけど、わかるか?」「この肌触りなのよ、これじゃなきゃ、いや」「これだなー!」という感じ。

↓ ↑

(4) サトリ、勘、つまり「ピンときたのよ」「わからんか? まだまだ修行が足りんのう」「なるほどね」「ユーレイカ(※幽霊か? じゃないです、念のため、ただし、ちょっと似てます、言う人によっては)」「あんた〇〇してきたわね、ピンと来た」という感じ。

↓ ↑

(5) 理解、つまり「勉強になりました」「〇〇ちゃん、きょうは、がっこうで何をおそわってきたのかな〜? ママに教えて」「ばっちりです、あす、数学で100点取る自信あります」「キミ、この論文、なかなかよく書けているじゃないか。これでケインズは卒業だね。はっはっはー」という感じ。

↓ ↑

(6) 分別、思慮、良識、判断力、つまり「やっとで、オトナらしいあいさつができるようになったわね、ママ、嬉しい」「市長、今年の成人式は、無事に済みましたね。おめでとうございます」「いいセンスしてるね、キミ（※これは、そのものズバリですね）」「さすが、日本経済に関する予測が的中したじゃないですか、今は大不況ですよ、先生、講演料で稼げるうちに儲けましょうよ」という感じ。要するに、無鉄砲、無軌道、乱痴気騒ぎ、でたらめ、無責任、「わかっちゃいるけど、やめられない」の反対って感じ。ただし、運にも左右されることあり。ちなみに common sense というのは「社会共通の分別」→「常識」で、この辺りに含まれます。

↓ ↑

(7) 意味、意図、つまり「(CE? 知りません。そんなことは、〇〇ちゃんには、まだ早い。さあさあ、おやつ食べて)」「何だって? そんなことは、辞書で調べなさい、パパは忙しいんだから」「紙の辞書持参って言ったでしょう? 電子辞書は、この授業では使用禁止です。で、〇〇さん、このセンテンスに出て来る sense の意味は、何ですか?」という、状況で必死に調べるものという感じ。また、「それ、どういう意味なんだ、ええ?」という意味での意味という感じ。

↓ ↑

(8) 価値、意義、つまり「ナンセンス = nonsense = ノンセンス = 無意味 = 無価値 = 無方向 = 無軌道 = わけわかんない = くだらない」などから、ネガティブな要素を除いたものという感じ。言い換えると、真面目、まとも、おもしろくないもの。要するに、赤塚不二夫、ベケット、不条理、アホ、吉田戦車、マザーグース、オヤジギャグ、ダジャレ、ギャグ、ルイス・キャロル、シュールなどと無縁なものやこと。

↓ ↑

(9) 世論、大方の意見、つまり、「た、大変です。△対▽で、ひ、否決されました、ソーリ。まことに、アイムソーリでございます」「〇〇するのに賛成が★%という調査結果が、(CE)新聞の朝刊に出るという連絡が、バン記者の□□君から内密にケータイで入りました」というシーンが好例。

↓ ↑

(10) 方向、志向、指向性、方角、(数学におけるベクトルの) 向き。自分、数学、苦手です。ここは、だいたい、こんなものでしょう。

お疲れさまでした。

で、何をやっていたのかと申しますと、「わかる」という日本語の言葉と、英語の sense という単語のコアイメージを、sense の語義を大きめの英和辞典を見ながら、日本語に訳すという作業を通じて、比較してみたのです。

けっこう、疲れますよね、こういうのを読むってことは。こんなん、書くほうも書くほうですけど。で、

わかるかなあー？

って、松鶴家千とせ師匠なら言うところですよ。こっちとしては、

わかるかなあ？

という感じで、ちょっと自信ないです。上でくださと書いたようなことは、難しいですよ。「わかんねーよ」って言いたくも、なりますよね。で (※「で」が多すぎますよね、このブログを書いているアホの口癖なんです、ごめんなさい、これを使わないと先に進めないんです、困ったことに)、「分かった」ことは、

sense と「分かる (=わかる)」=「別る」=「解る」=「判る」は、かなり、かぶる、だぶる、重複する、

ということです。要するに、上に挙げた sense という語のコアイメージ、つまり中心的なイメージの中では、「分」「別」「解」「判」という漢字 (= 感字) が、やっぱり出てきたということです。ワラコインシデンス (= What a coincidence!)。何たる偶然! うれしい。

これって、チョムスキーあたりと関係あるんでしょうか? それとも、自分が苦手で敬遠しているユングあたりとも? つまり、全世界のヒトたちは心の奥でつながっているっていう、イヤなイメージ。なぜ、こういうのが「イヤな」なのかは、いつか書きます。きょうは、やめときます。

で、チョムスキーとの関係ですが、専門家ではないので、「勘」で言っているだけです。関係ありそうな気がします。これは、「でまかせ」です (※「出るに任せる」ってやつです、だらしありませんね)。チョムスキーと関係がありそうだという説には、たぶん大した「意味」はないでしょう。ああ、「ナンセンス = nonsense = ノンセンス」。

「わかる」について、英語の sense という単語のコアイメージを用いて見てきましたが、それだけでは心配です。いちおう、念のために、日本語でも、「わかる」のイメージを確認しておきましょう。では、いきます。

★「分かる (= わかる)」 = 「別る」 = 「解る」 = 「判る」

「分」⇒ わける、バラバラにする、わきまえる、おのれを知る、わけて配る、デリバリー、というイメージですね。「分別 (ぶんべつ)」「分解」「分離」「分裂」「野分」「分水嶺」「分析」「微分」「通分」「分類」「分家」「部分」「五分五分」「春分」「秋分」「身分」「分際」「区分」「分割」「分配」「分譲」「分担」……

「別」⇒ わかれる、バイバイ、さよなら、ちょぴりさみしい、離れる、他とは違う、ゴースト・マイウェイ、ああ何と薄情な、わかる、というイメージですね。「別離」「死別」「別居」「送別」「餞別」「特別」「格別」「別格」「区別」「分別 (ぶんべつ)」「判別」「大別」「差別」「千差万別」「識別」「鑑別」「別荘」「別個」「別記」「個別」……

「解」⇒とく、バラバラ、わかる、帯なんかをほどく、よかったね、ゆるゆる、どろどろ、自由にしてやる、バイバイ、余計なものを取り除く、脱がしちゃう、説明する、謎をとく、なっとく、わかる、なるほど、やっぱり、そうだったのか、というイメージですね。「解体」「分解」「解剖」「和解」「溶解」「融解」「解放」「解禁」「解散」「解雇」「解毒」「解熱」「解消」「解除」「解決」「理解」「誤解」「難解」「不可解」「氷解」「解明」「読解」「明解」「詳解」「凶解」「解釈」「見解」「解説」「解析」「解答」……

「判」⇒わかる、ガッテン、なるほど、われる、明らかになる、白黒をつける、暴露される、さばく、けちをつける、ポンと押す、印をつける、というイメージですね。「判断」「判別」「判定」「判明」「判読」「判決」「裁判」「判事」「公判」「審判」「判例」「批判」「談判」「評判」「判子」「血判」……

漢字ばかり見ていると、目が、しょぼしょぼ、してきました。ちょっと、気分を変えましょう。

>オギャー！！

>ウギャー！！

「またかよ、きのうもやったじゃないか」(※これ、幻聴の声です)。はい、またです。

>「(お乳なんかを) もらいたーい」AND「(おしっこやうんちなんかを) 出したーい」

「やっぱり、きのうと同じじゃないの」。はい、同じです。

>「もらう」「出す」

「ネタぎれか？」いえ、別に、そういうわけでは――。

ただ、きょうは、ちょっとジャック・ラカンしてみたいのです。

赤ちゃんは、お乳や離乳食を「もらう」。そして、その代わりに、おしっこやうんちや笑み、を「返す」。で、親子ともに、ハッピーになる。これも、一種の「交換」である。

でしたよね。

きのうの話です。それに、少し付け足したいことがあるんです。ジャック・ラカンっていう人は、そうした赤ちゃんと母親（および、その代理人）との間に、「視線を交わす」という点があることに、注目したそうです。それを、「鏡」とか「鏡像」という言葉を使って説明しています。いわゆる比喻ですね。この点に関しては、自分もよく分からないところがあるので、専門家の方々のさまざまな意見を、お読みください。グーグルで「ラカン」「鏡像」をダブルでキーワードにして検索なされば、目的とする複数のサイトにたどり着けるはずですよ。

そこで、ラカンの説について、素人なりに感じることを書きます。

「未熟児」として「早産される」運命にあるヒトという種は（※お気を悪くされた関係者の方、ごめんなさい）、「分かる＝知覚する」という機能＝能力を身に付けるのに、いくつかの段階を経るらしい（※ヒトが未熟児として早産されることについて、興味を持たれた方は、このブログのバックナンバー「交信欲＝口唇欲」2009-01-26をお読み願います）。そして、その段階は、1つ超えたから「はい、卒業、おめでとう」というものではなく、階段をのぼりながらも、一段一段をのちのちまで引きずり続ける（※つまり、卒業なし）という、妙な仕組みになっているらしい。いつまでも「食べたい」が続く、後引きスナックみたいなものか？

のぼっても、のぼりきれない階段

あるいは、

人生に卒業なし

または、

ヒトは成熟や成長なんてしない。

そんな感じです。言えてる、と思います。自分のことを考えると、よく納得できます。ここで思い出した言葉があるので、ちょっと視点を変えます。

「身分け」「言＝事分け」という言葉を思い出しました。

チャーミングな用語で、自分は大好きでした。故・丸山圭三郎氏の造語です。丸山圭三郎氏がどんな人だったのか、をご紹介します。実体とか真理とかいう、狂ったサルがでっちあげたデタラメに、生真面目に義理を立てることなく、言の葉の表層で戯れた人でした。あの人は、ソシユールするだけでなく、デリダしていたなあ、ラカンしていたなあ、フロイトしていたなあ、マラルメしていたなあと、今になって思います。興味のある方は、「丸山圭三郎」「身分け」（※「見分け」ではありません）をダブルでキーワードにして、グーグルなりで検索されれば、適切なサイトにたどり着けるはずです。お勧めします。別に、面倒なら、検索しなくても、オーケーです。念のため。

で、「身分け」「言＝事分け」という便利な言葉の「イメージ」を拝借しますと、次のように、言えるのではないのでしょうか？

(1) ヒトは、言葉を使って考えることができる（※「言葉で考える」ではありません、「言葉の助けを借りて考える」という意味です、思考と言語との関係には、まだコンセンサスはないもようです）。これが「言＝事分け」です。

(2) ヒトは、体（※当然のことですが、頭も、お腹も、膀胱も、胃も、五感も、手足も、皮膚も体内にある何もかもを含みます）を使って考えることもできる。これが「身分け」です。

で、今のヒトに欠けているのは、(2)ではないかと、自分は強く感じています。ラカンの理論とこじつけて、そう思っています。言い換えると、「わかっていいはずのこと」を、誰もが「わかろう」と努力していないのではないかと、ということです。だから、体や心を病む。もちろん、自分を含めての話です。

で、さっきの「sense」と「わかる」の比較に戻ります。まとめてみましょう。

★「sense」：中心となるイメージは、「気づく＝感じる＝あ～ん」。静的。控えめ。受動的。要するに「知覚する」こと。

★「わかる」：中心となるイメージは、「とく＝ほどく＝どれどれ見せてごらん」。動的。強引。能動的。要するに「解く」。

以上を、言い換えると、「sense」はじっと堪えて、感じるのを待つ。感じたら、これまた堪えて、その「感じ」を維持しながら味わう。エロいですねー。一方、「わかる」は、帯（おび）なんかを解いて脱がす。挙句には、素っ裸にする。これも、エロいか。ベートーヴェン作「エロイカ」(＝英雄)。英雄、色＝エロを好む。だからエロイカ。ひとり納得。きょうは、勉強しちゃいました。哲学しちゃいました。

それにしても、sense＝「分別」くらいで、ワラコインシデンス(＝What a coincidence!)、何たる偶然！などと、はしゃいでいた自分が恥ずかしいです。やっぱり、「わかる」を、複数の漢字に直して確認しておいてよかった。

「sense」と「わかる」とは、似ているところもあれば、似てないところもある。

つまり、ダブるところもあれば、ダブらないところもある。ということが、わかりましたもんね。いつか、「知る」、「悟る」、「know」「understand」なんかの、コアイメージの分析を、元気がいい時に＝「消えてしまいたい指数」が低い時に、やってみたいです。

ところで、「sense」と「わかる」とは、どれくらい似ていて、どれくらい似ていないのでしょうか？ 似たものを挙げてみます。

カレイとヒラメ、区別できますか？ タヌキとムジナは、どうですか（※自分は、区別できません）？ カレーライスとライスカレー（※後者は、死語ですか、古い言い方ですか）はどうですか？ アン・ルイスとアン・ライス（※この人たち、ご存知ですか？）は？ ブロッコリーとカリフラワー（※ちょっと、離れてきましたようで）は？ オバマさんとノッチさん。うーん。これだ、決まりました！

オバマさんとノッチさん

くらい、「sense」と「わかる」は似ているし、似ていない。かぶるし、かぶらない。

わかっていただけましたか？ やっぱし、ナンセンスですか？

で、あすは、「わかるということ」について、以前から不思議だと思っている、或る「わからないこと」について書いてみるつもりです。個人的な疑問なので、何とか自分なりに、けりをつけてみたいのです。おそらく、けりはつかない予感がしますけど。何とか、やってみます。

ここまで、お付き合いくださった方に、心より感謝いたします。

09.01.29 もしかして、出来レース？

◆もしかして、出来レース？

2009-01-29 10:39:37 | Weblog

「わかる」って不思議だと思いませんか？ 自分には不思議で不思議でたまりません。「わからない」も、不思議です。きょうは、「わかる」ってことは、いったい、どんな「仕組み＝からくり」なのかを、考えてみたいです。哲学してみたいです。たまにはオヤジギャグなど、バンバン飛ばしながら、うつを紛らわしたいです。

ところで当ブログ日記では、やたら、くだらないギャグを飛ばしています。くだらないことは、十分承知しております。と、念のため言い添えておきます。で、自分なりに、ギャグが決まった時には、自己満足ですけど、とてもとても嬉しいです。「マンモスうれP = I'm very very happy. 」です。きのうも書きましたが、このところ、

死語復活キャンペーン

を、ひとりで「展開＝転回＝空回り」しております。いつ終わるやら、この回転扉は（※独り言です）。きょうは、「いただきマンモス」なんかでおなじみだった、のりピー、こと、酒井法子さんを思い出しましょう。ご不明の「ヤング（※これも死語ですか?）」がいらっしゃいましたら、「酒井法子」をウィキペディアなどで検索してください。面倒くさい方は、今書いたことは、お忘れください。

さて、「わかる」と「わからない」ということの「仕組み＝からくり」ですが、自分にとっては、昔から気になってしかたがない問題の1つです。こういうややこしいことは、科学者や、哲学者や哲学学者などに任せておけばいい、という考え方もあるでしょう。そうした意見のあることを重々承知したうえで、素人として素人らしく、あえて取り組んでみようと思えます。

で、ついでに説明しておきますが、哲学者と哲学学者とは違います。いわゆる哲学者は、「主に」自分の頭と体で考えたことを、書くなり、他の人に話したりします（※ここでは、後述のように「オリジナリティの有無」を問題にしません、文字通りに取ってください）。一方、哲学学者は、「主に」他の人の考えたことを、書くなり、他の人に話したりします。ここで、大切なのは「主に」です。「主に」は、「ほとんどの場合に」と同じくらいだと理解してください。

なぜかと申しますと、

ヒトに「独創性＝オリジナリティ」などは、備わっていない

からです。

ヒトにとって、

知識や情報は、すべて既に誰かが言ったり書いたりした言葉だ、

という意味です。

あらゆる知識や情報は、誰かの言葉の引用か、寄せ集め＝コラージュ＝パッチワーク＝ごった煮なのです。

せいぜいできることと言えば、これまで集積された言葉と想念を、ああでもない、こうでもない「組みかえる」手仕事＝ブリコラージュです。最近、発想法とか、創造的思考とかいう類の本が売られていますよね。イメージ的には、ブレインストーミングのパーソナル版という感じです。要するに、めちゃくちゃ、こじつけでもいいから、いろいろな言葉や想念を組み合わせる。言葉は下品ですが、頭の中を乱交＝オーギー状態にしてしまうことです。

節操とか、正しい正しくないとか、真面目不真面目なんて、気にしてはいけません。とにかく、一か八かで「賭ける」のです。そのうちに「こんなんでましたけど～」と妙案が浮かぶという、ギャンブル＝ゲームを实践すること。それが思考すること、思想すること、あるいは哲学することだと思います。

その意味では、マラルメのやろうとしたことと、ちょっとダブります。マラルメにとって、詩作＝思索＝試作だったのです。話が、それでした。ヒトには「独創性＝オリジナリティ」などは備わっていない、という話でしたね。

いや、そんなことはない。オリジナリティは存在する。特許権や著作権があるじゃな

いか。

と言う人たちもけっこういます、未だに。でも、その人たちは大変です。「オリジナリティは『存在しない』」ということを否定しちゃうと、その人たちは、

「オギャー！ ウギャー！」

と産声をあげて以来、自分自身がたったひとりで生きてきたことを、証明しなければならなくなります。とりわけ、母語を真似る＝学ぶことなく、ひとりだけで習得したことを証明しなければならなくなります。また、たとえば、太陽が地球の周りを回っているのではなく、地球のほうが太陽の周りを回っていることを、自力で知ったということを証明しなければならなくなります。

頭のいい人なら、口がうまいですから、証明しちやいそうな気がします。言葉を用いれば、何とでも言える。何でもあり。言い換えるなら、黒を白と言いくるめることができる。というのが、言葉の特徴ですから、上記のことを言葉を用いて証明しても、ぜんぜん不思議はありません。だからこそ、人間様は、ここまでできたのですもの。なお、特許権と著作権に関しては、究極的にはお金とハンコの問題だ、とだけ言っておきます。この点については、いつか詳しく書きたいです。気になる方は、当ブログのバックナンバー「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16 と、「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17 をご一読願います。

で、さっきの哲学者と哲学学者の話に戻ります。「死語復活キャンペーン」のついでに、このブログでは記事を書き始めた初回から、一種の、

「哲学を庶民の手に」キャンペーン

みたいなことを、独りでやっています。「自分の頭と体で考える」とか、「哲学がしたい」が標語なのですが、「自分の頭と体で考える」というのは、比喩でして、きのうの記事の最後のほうで書いた、

> (1) ヒトは、言葉を使って考えることができる（※「言葉で考える」のではありません

ん、「言葉の助けを借りて考える」という意味です、思考と言語との関係には、まだコンセンサスはないようです)。これが「言＝事分け」です。

＞(2)ヒトは、体(※当然のことですが、頭も、お腹も、膀胱も、胃も、五感も、手足も、皮膚も体内にある何もかもを含みます)を使って考えることもできる。これが「身分け」です。

のうちの、(2) くらいの意味です。オリジナリティというものが存在する、という意味では、ぜんぜんありません。念のために申し添えておきます。現に、これまで、このブログで書いてきたことは、すべてが誰かの言葉の引用か、その言葉の断片の「寄せ集め＝コラージュ＝パッチワーク＝ごった煮」でした。そうした作業を「手仕事＝ブリコラージュ」として、やっていたのです。「乱交＝オージー」していたんです。ヒトの書くもの、話すことで、そうでないものやことはありません。

で、さきほど書きました「哲学を庶民の手に」キャンペーンですけど、視点を変えてみましょう。現在の、政治家と呼ばれる人たちを思い浮かべてください。ついでに、現在活躍している作家と呼ばれる人たちを思い浮かべてください。できれば、その人たちの、経歴まで知っていると、いいんですけど、ふつうは知りませんよね、気にしませんよね、そんなこと。で、先週書いた「お口を空けて、あーん」2009-01-23 という文章で、やや詳しく触れたことを、ここでかいつまんで説明します。

政治をやってお金を稼ぐことも、小説を書いて生計を立てることも、今では、いわゆる「偏差値」(※イヤな言葉です)の非常に高い、一部の大学出身者だけの特権ではなくなっている。つまり、エリートだけが独占する職業ではなくなっている。と、いうことを強調したいのです。昔は違いました。政治家や作家は、たいてい、いわゆる「いい大学」や「いい学校」を出た人たちがなる職業でした。もちろん、例外的な人物はいましたけど、少数でした。

国語の教科書を思い出してください。教科書に載っている文章を、読まされますよね。各文章の後ろのほうで、写真入りの作者の経歴って見かけませんでしたか？ 自分は、国語が苦手、授業も退屈だったので、よくそういう写真の顔にヒゲをつけたり、マユを鉛筆で濃くして、

ギャハハー！

なんて、ひとりで受けて喜んでいました。そういう写真の下とか横に、その文章を書いた小説家や詩人や評論家という肩書の人たちの略歴が載っていませんでしたか？ やたら、東大とか、京大とか、早稲田大とか、慶応大とか、書いてありませんでしたか？ あれです。そのことを、言いたかったのです。お分かりいただけただけでしょうか？ ちなみに、今挙げた大学名が、関東に集中しているのは、日本が中央集権国家を目指したからです。なお、私立の早稲田や慶応義塾は、国立の帝国大学への抵抗勢力でしたが、昔、そうした私立大学に通えたのは、裕福な家の子弟であったり、またはエリートだったと考えられます。

今は、違いますよね。試しに、現在の国会議員の一覧表なんかを検索して、学歴の部分だけでも見てみると、よく分かると思います。へーえ、と思う発見があるはずです。

もちろん、上で挙げた大学出身者は、現在も中枢を占めています。ただ、全体的に偏差値がかなり低くなっていることは、確かでしょう。ここで、偏差値などという、差別的な尺度を使って、話を進めなければならないのは、とても残念で悲しいことです。でも、こうした残念な事態を論じ、ひいては現状を打破するためには、現実を直視しないわけにはまいりません。ご理解いただければ幸いです。もっとも、政治家の場合には、二世や三世問題や、お金や、コネなどが絡みますので、事は以上述べたほど単純ではありませんが。

一方、文学の業界については、本屋さんに出向いて、ずらりと並んでいる文庫コーナーで、作者の略歴を片っ端から見ると、へーえと思うことがあるに違いありません。この業界では、かつての意味での「エリート」は、マイノリティになりつつあります。

で、哲学ですけど、哲学者とか哲学学者は、まだまだ、一部のエリートの特権という感じですか。キャリアと呼ばれ、天下りや渡りで有名な上級の公務員といい勝負です。今、思い出しましたが、

日本人は思想したか？

というフレーズを読んで、反発を覚えませんか？ これって高飛車で、挑発的な響きを持つ文句ではありませんか？「あんた、すべての日本人に会って確認してから、そんな質

問しているの？」とか、「そんな偉そうなこと、他人に尋ねる度胸がよくあるね」とか、言い返してやりたくありません？ ならないですか？ そうですよ。ふつう、こんなこと言われても、無視しますよね？ それが、今という時代でしょう。

「日本人は思想したか？」って、実は本のタイトルなんです。自分は読んでないので、何が書いてあるのか、誰が書いたのかも知りません。ただ、昔、新聞の下のほうにある本の広告で、その文字を見かけて、今、思い出しただけです。ところで、みなさん、思想していますよね？ 思考していますよね？ 哲学もしていますよね？

「思想」も「思考」も「哲学」も、別に難しいことではありません。それをしないで、ご飯が食べられないことは確かです。子どもを育てられないことも、確かです。誰もが、毎日やっていることなんです。「思想」も「思考」も「哲学」も、とどのつまりは、「よく考えること」。それも、頭だけではなく体を使って考えることだ、と個人的には解釈しています。

読んでもない本のタイトルに、いちゃもんをつけるなんて、サイテーです。反省しています。でも、あと、ちょっとだけ言わせてください。「日本人は思想したか？」の答えが、その本の中で YES か NO か、または YES AND NO かは知りませんが、日本人を総称すると取られかねないセンテンスをタイトルにした以上、「思想したか？」と、過去形ではありますが、その「日本人」の中に、このブログを書いているアホや、あなたや、自分たちの身近な人たち、あるいは自分たちの先祖が含まれていることを願っています。というか、「日本人」を総称するなら、それくらいの他者への配慮と謙虚さをもって発言するべきではないでしょうか。お高くとまるのではなく。

なんて、難癖をつけているのは、今朝の散歩で犬の糞を踏みつけたから八つ当たりしているわけではなく、「自分・自分たち＝思想界（そんなものがあるとしての話ですけど）＝思想会」的なエリートの発想のにおいがしたからです。というか、自分の頭の中にまで土足で踏みこまれて、ジュッパヒトカラゲにされるのは、ごめんだ——。そう言いたかっただけです。

さて、「思想」や「思考」や「哲学」は、人それぞれにとって違う意味を持っています。これも確かなことです。というわけで、自分はこのブログで、自分なりに「哲学」しています。かなり、気まぐれで無精で省エネで、「頑張らない」をモットーにしてネガティブにぼちぼちとやっています。ただし、本気です。正気だとは言う自信はありませんが、本気です。

何だか、遠回りしちゃいました。きょうは、

＞「わかる」ってことは、いったい、どんな「仕組み=からくり」なのかを、考えてみたい
です。

って、冒頭に書いたのでしたね。じゃあ、ぼちぼちいきます。で、結論というか、いちば
ん大切だと思っていることを、先に書きます。

すべては、「わかる」ように出来ている、

のではないのでしょうか？「はあ？」と感じられる方が、たくさんいらっしゃると思いま
すので、説明します。ヒトは、生まれて以来、いろいろなことを学びながら、育ちます
よね。「学ぶ」＝「真似る」だという話を聞いたことがありますか？ 発音からして似
ています、もんね。「まなぶ＝まねる＝まねぶ」。ダジャレっぽいですが、何となく、分
かるような気がしませんか？ 大昔から比較的最近まで、いろんな国々に生きていた哲学
者（※哲学学者も含めて）たちだけでなく、数学者たちや物理学者たちにいたる人たち
までが、

ヒトは、忘れていることを思い出すだけだ、

分かっているのに、うっかりして、分かっていることに気づかないだけだ、

思い出したことを、悟りだとか、発見だとか、名づけて大騒ぎしているだけだ、

とか、

「自分は分かんない」ってことを知るのが、大切なことだ、

分かんないことは、分かんないんだから、言葉にできない、

ヒトには「わかる」ことの限界があるし、「わからないこと」にも限界がある、

という意味のことを、書いたり、言ったりしてきた。そして、それを他の誰かが読んだり、聞いたりして、書いたり、言ったりしてきた、らしいのです。

自分は怠け者なうえに、忘れっぽいので、詳しいことは知りません。ですので、ただ「そうらしいのです」とだけ書いておきます。もっとも、上のような意見を述べた人は、少数派だという気はします。自分自身を、無知だとか忘れっぽいなどと認める、哲学者や哲学学者は、あまりいない、と考えられるからです。何しろ、お鼻が高い方々が圧倒的に多いみたいです。

でも、もし上に書きつらねたような、哲学者や哲学学者や数学者や物理学者たちが言ったり書いたことが、「言えている＝本当らしい」としたら、笑えませんか？ 少なくとも、自分は笑っちゃいます。場合によっては、爆笑するかもしれません。だって、「やらせ」みたいなもんじゃないですか？ 本当は「わかっている」のに、または「忘れた」だけなのに、「わからない」とか「難問・難解だ」とか言って、額にしわを寄せ深刻そうに、のたまうなんて。これって、

もしかして、出来レース？

うっかり者たちの出来レース？（※「うっかり者たち」を「健忘症の人たち」と書こうとしたのですが、記憶障害は病態や症候のようなので、使用を差し控えました）

「やらせ」「出来レース」「八百長」までは言わなくても、ほんの少し忘れっぽいからだ、と言えれば笑えませんが、さもなきや笑っちゃいますよ、やっぱり。

要するに、「わかるということ」について、以前から不思議だと思っていたことは、

「わからない」って本当？

っていう、疑問なんです。ちょっと、ここでお断りしておきますが、今問題にしているのは「わからない」であり、「知らない」ではありません。両者はかなり似ていますが、違います。「知らない」については、いつか書きます。で、「わからない」ということですが、これは、「!？」ということですから、当然のことながら、この文章を書いている自分にも、わからない。つまり、疑問。要するに、忘れちゃっている！「えっと、えっと、何だっけ」状態なわけです。なお、笑っちゃいますよね。

ただし、この疑問については、頭と体の中を整理する必要があるので、後日、できれば、あすにでも詳しく書きたいです。マラルメさんとアツノさんに、ご登場願わなければなりません。きょうは、お二人とも、お忙しいそうです。ですので、いちおう、

ここまで書いたことのポイントを、箇条書きにしてまとめます。

- (0) ヒトは、わからないことを、わかると信じているらしい（※これが、原点です）

- (1) ヒトは、わかることしか、わからないらしい（※これじゃ、身も蓋もないですね、ちょっと細工をしましょう）

- (2) ヒトは、わかっていることしか、わからないらしい（※少し、元気が出ませんか？）

- (3) ヒトは、わかっているのに、とぼけているらしい（※何だか、悪者にされた気分になりますね、じゃあ、こんなのは、どうですか？）

- (4) ヒトは、わかっていたことを、忘れていているらしい（※いくらか責任が軽くなった気がしませんか？）

- (5) ヒトは、わかっていたことを、忘れそうになっているらしい（※いくぶん救われた気持ちになっていただければ幸いです）

以上です。

念のために、再度書きますが、本気です。正気とは言いませんが、本気です。

またもや、だらだらとした長い文章になりました。きょうは、特に後半が読みにくかったことを、お詫び申し上げます。今のところ、自分には、あのようにはか書けません。できれば、あす、あの続きを書きたいです。

この行まで、辛抱してついてきてくださった方に、深く感謝いたします。

また、来てくだされば、マンモスうれPです（※失礼）。

09.01.30 カジノ人間主義

◆カジノ人間主義

2009-01-30 11:18:05 | Weblog

ヒトは、分かっていることを、すっとぼけて分かっていないと言い張っているらしい。あるいは、分かっていることを、うっかりして分かっていないと勘違いしているらしい。

ということは、「うん、分かる、分かる」「そうか、分かった!」「なるほど」「おお、すっきりした」というのは、結果として一種の「やらせ」、または「出来レース」なのではないか。

以上が、きのう書いたことの要約です。

*

で、きょうは、きのうみたいに、やyasiい文章にしたくないので、結論からズバツと書きます。

やっぱり、「分かる・分かっている」とは、「出来レース」、または「八百長」らしい。

です。

「なるほど、おお、すっきりした」と、言っただけですしょうか？

駄目ですよ。

やらせで、いいから、せめて、「分からないわけでもないけど……」くらいは、どなたかに言っほしかったんですけど、やっぱり駄目ですね。

「畏（おそ）れ多くも、人間様の「分かる」という、いとなみを、「やらせ」だの「出来レース」だの、「八百長」だのなんて言うやつなど、無礼極まりない不届き者だ。打ち首にいたす」

あるいは、

「それを言っちゃ、おしめえだよ、このばかたれめが。ひっこめ」

といった幻聴が、難聴の耳に聞こえるんですけど。よく考えれば、確かに「出来レース」なんて言ったら、

「夢もチボーもないよ」

という状況に陥ります。ちなみに、チボーは、「キボー＝希望」が訛ったものらしいです。ロジェ・マルタン・デュ・ガール作の『チボー家の人々』という、たくさんの人たちが出てくる、とてつもなく長い小説とは関係ございません。で、これって、きょうの、

死語復活キャンペーン

なんですけど、古いですよー。自分も、うろ覚えです。気になる方だけ、「東京ぼん太」をウィキペディアで検索してください。もう、お亡くなりになった方です。うっすらとお顔とお姿を覚えております。何だが、涙が出そうです。「夢もチボーもない」って、今の経済状況そのものじゃありませんか。歴史は繰り返す。でも、東京ぼん太さんは、どのような状態を指して、「夢もチボーもないね」と、おっしゃっていたのでしょうか？ 確か、高度成長時代真っ只中に活躍されていたのに。不思議だなあ。いつか「夢もチボーも」ある時に、調べてみようと思います。

*

きょうは、それどころじゃないのです。いずれにせよ、夢も希望もないような、どっちらけ（＝極度に興ざめである＝非常にしらけたさま）、のお話をしているんですよ。さっき聞こえた幻聴のように、それを言ったらおしまいだ、みたいなお話をしているのです。で、きょうもマラルメ師ならびに泉アツノさんがご多忙だということなので、マラルメ師の噂話を、ここでこっそりしてみたいと思います。で（※相変わらず「で」が多くですみません、この癖、なかなか直らない＝治らないようです、「で」ないと先に進めないんです）、

マラルメは（※いらっしやらないと、いきなり呼び捨てです）、フランスの詩人でした。当然のことながら、詩を残しています。そのマラルメの、とある詩について、とある発見があったということ、今思い出しました。記憶は定かではありません。ほぼ、次のような話だったと思います。

マラルメを扱った卒論か修士論文かで、ある学生がマラルメの詩を分析した。で、その詩のなかに、ステファヌ・マラルメの姓だか名だか忘れましたが、とにかく名が織り込まれていたというお話です。

ソウ・ホワット？（英）エ・アロール？（仏）ナ・ウント？（独）で、それがどうした？（日）

という、感じですよ。普通の反応は――。でも、いちおう、これって大発見だったわけですよ。遠く離れた東洋の端っこ（※ファー・イースト＝極東＝何という、侮蔑的な表現！）に位置する島に住む一学生が、「難解＝わけ分かんない＝これ『なんかい』のう？」で、本国フランスの人たちでさえ読みもしない、マラルメの詩を「解読」した？ アンクルワヤーブル＝アンビリバボ＝信じられない！ と、おフランスでも、一部の方々がお騒ぎになったとか、ならなかったとか、いうお話ざんす。

要するに、マラルメさんも、自作の詩に署名を忍ばせるなんて、おちゃめで粋なことをやっていたのね。というだけの、お話ざんす。

*

ちょっと話をずらします。定型詩って、お聞きになったこと、ありませんか？ 難しいことじゃありません。ほら、「5・7・5 プラス季語」の俳句という、定型詩。「5・7・5・7・7の三十一文字（＝みそひともじ＝アラサー）」の短歌という、定型詩。この国にも、昔からありますよね。苦勞して音節の数を合わせて、「できたー！」なんて言って喜ぶ。あれ、です。

ただ、フランスや、他のヨーロッパの国々の定型詩の場合には、「韻を踏む」とか、「音節の数を合わせる」とか、ちょっとややこしいんです。自分も大学時代に、英語やフランス語の詩を、授業で読まされたり、暗唱させられたりしました。慣れると、母語でないにもかかわらず、それなりに「口に出して読んでみると、心地よいなあ」という気分の一端に触れることができます。「韻を踏む」は、漢詩にもあるんですけど、覚えていらっしゃいませんか？ 個人的には、ちんぷんかんぷんでした。このダジャレって、漢語＝中国語と関係あるらしいのですが、漢文で苦勞した自分には、そのダジャレの「わけ分かんない」イメージが分かるような気がします。

ここまで話したのですから、思い切って「韻を踏む」と「音節の数を合わせる」っていう、ヨーロッパの定型詩の「一端＝ちょっとだけよー」（※あっ、加藤茶のギャグだ！）——。突然ですが、

死語復活キャンペーン

に入らせていただきます。

「ちょっとだけよ～。アンタも好きねえ」

を覚えている方、いらっしゃいませんか？ お若い方だと、ご存じないかもしれません。

*

さて、さきほどの続きです。

>ヨーロッパの定型詩の一端

に、触れてみませんか？ えっ？「触れるなんて、あんたも好きね」ですか？ この幻聴は聞かなかったことにします。で、「韻を踏む」と「音節の数を合わせる」ですが、自分は専門家ではないので、自分なりにリフォームして説明いたします。ただイメージだけ（※ちょっとだけ）、感じ取っていただければ、それでけっこうです。例を挙げて、やってみますね。では、いきます。

(例1)

セブン(3)

イレブン(4)

イイキブン (5)

(例2)

スカット (3 or 4)

サワヤカ (ka) (4)

コカ (ka) (2)

コオラ (ra) (2 or 3)

上の2つの例を見て、なんとなく、分かるような気がしませんか？ どれも、

語呂がいい。覚えやすい。

ですね。

この記憶しやすいということが、ポイントです。そもそも、

暗唱しやすいように、「韻を踏む」と「音節の数を合わせる」という定型が作られた

という話です。詩はもとは口承文学（※口づてに語り継がれ歌い継がれてきた神話や昔話や詩歌）だったようですから、その名残でしょうか？ で、(例1)の「ブン」「ブン」「ブン」っていうのは、完璧に「韻を踏んで」います。(3)(4)(5)は、音節の数です。(例2)の場合には、(ka)(ka)(ra)と、(a)が共通していますね。こういうのも、あります。「韻を踏んで」います。

ちゃんとした定型詩の場合には、たとえば、「ブン」「ブン」「パラ」「パラ」「ブン」「ブン」とか、「ブン」「パラ」「ブン」「パラ」「ブン」「パラ」みたいに、きれいに並びます。すごいですね。ダジャレと同じくらい、作るのが大変そうですね。ダジャレと「韻を踏む」は、基本的に同じ作業だと勝手に理解しております。

ただし、(例1)(例2)ともに、音節の数は不ぞろいです。ちゃんとした定型詩では、音節の数をそろえなければ、ならないんですよー。上の例のような短い詩がヨーロッパにはあるわけないみたいですから、音節の数は、10とか20くらいはざらにあったと記憶しておりますが、正確なことは、すっかり忘れまして。いずれにしても、

オヤジギャグと同じく、それなりの苦勞がありそう

です。ご苦勞さまって感じです。

*

以上、すごく大ざっぱに「韻」と「音節の数」をそろえるということ、説明しました。専門家からは、「この、でたらめやろうが!」と罵倒されそうです。ここでは、イメージだけさえ、何となくつかめばいいのですから、悪態をつかれても知らん顔しておきます。

でも、不思議に思いませんか? どうして、上で書いたみたいに、「韻」と「音節の数」をそろえるのに、血道をあげたり、中には命をかける人もいるんでしょう? 理由は2つくらい、ありそうです。

1つは、さきほど述べたように、口調をよくして記憶しやすくする、ためです。起源が、口承文学ってやつだからです。確かに、「セブン、イレブン、イイキブン」なんて、語呂がよくて「いい気分」になり、しかも覚えやすいですね。それは、納得できるような気がします。

2つめの理由は、そういうダジャレ、いや、「芸=技=テクニック」が上手だと、尊敬されるそうなんです。「わざ」とらしさが、「芸」や「術」になる。ふーん、そんなもんですかね。

マラルメの話に戻ります。以上見てきたように、ヨーロッパの定型詩には、面倒くさい約束事があります。俳句や和歌(わか)を考えても、「わか」るように、偶然性=accident=アクシデントに左右されます。運にも左右されます。難しく言うと、偶然と必然の間

を彷徨（ほうこう）（＝うろうろさまよう）するわけです。

偶然と必然

哲学っぽいですね。「存在と無」みたいに。で、マラルメって人は、偶然性と必然性
とに、非常に意識的だった詩人なんです。あれほど、偶然と必然にこだわって詩作＝思
索＝試作した人はいなかったんじゃないか、なんて思ったりもします。ウィキペディア
で「マラルメ」を検索して、ざあっと目を通せば、だいたいの感じがつかめます。それ
だけで十分です。考えて読んじゃ、駄目です。絶対に深入りしてはなりません。深入り
すると、あそこが危うくなりますよ。内緒の話ですけど。

偶然と必然っていうと難しそうに聞こえますが、簡単に言えば、

ダジャレやオヤジギャグも、偶然と必然の間で、おろおろ、うろうろしながら、作る

と言えそうです。

賭け事＝ギャンブルも、同じ

です。

ギャンブルの達人には、偶然の中に必然を読む特殊な才能がありますね。うらやまし
いなあ、格好いいなあ、なんて自分は思います。イ・ビョンホン主演の、ギャンブラー
の生きざまをテーマにした韓国ドラマを見ての感想ですけど、この気持ち分かっていた
だけかもしれませんか？

ものすごく単純化して説明します。サイコロを振ったとします。2の目が続けて2回
出て、その次に3の目が3回出たと仮定しましょう。2 2 3 3ですね。あるいは、最初
に2の目が出て、次に3の目が出て、その次に2が出て、さらに3が出たとします。2
3 2 3ですね。すると、「に一に一さんさん」「に一さんに一さん」という2つの「おに
いさん」というタイトルの短い詩ができたことになります。

馬鹿みたいな説明ですが、そんな感じです。

*

で、サイコロだと、そうした目が出る確率はかなり低いでしょう。でも、サイコロの目が語の数くらいたくさんあったと考えてください。韻を踏んだり、音節の数を合わせることでできる確率は、相当高いのではないのでしょうか。そう考えると、ヨーロッパでおびただしい数の定型詩が作られてきたのは、当然だという気がします。何しろ、サイコロを振った場合には、6つの目のいずれかしかでないのに比べ、

言葉＝語という「サイコロ」(※言うまでもなく比喻です)を振る

ならば、韻を踏み音節を合わせた語の連なりなど、本物のサイコロに比べれば、比較的簡単に定型詩を作ることができるはずです。

定型詩を作る行為とサイコロを振る行為の共通項＝偶然と必然とのからみ合い＝マラルメがこだわったこと――

とは、そんな感じです。以上は、ど素人の与太話でした。

*

で、言葉が「書ける」という不思議ないとなみが(※よく考えると不思議じゃありませんか？ えっつ、ぜんぜん不思議じゃない？ 失礼しました)、「賭ける」(＝ギャンブルをする)に限りなく近いということに関しても、マラルメほど意識的な詩人はいなかった。何しろ、「エイヤッ」とサイコロを振る名人ですから。いきなりですが、

カジノ資本主義

って、言葉をお聞きになったこと、ありませんか？ このブログでは、「投資って何だろう？ お金って何だろう？」2009-01-12 という文章で、ちょっとだけ触れました。自分は、経済や経済学には、めちゃくちゃ弱いのですが、

カジノ資本主義というのは、資本主義がいくところまでいっちゃって、ギャンブルみたいにゲーム化しちゃった。

そんなイメージで勝手に理解しています。また、

ケインズの経済学の研究と、ケインズの株式狂いとの関係は、投資と投機（＝ばくち）との関係によく似ている。

つまり、両ペアは酷似＝激似＝ほぼ同じ、と勝手に理解しています。ですので、そうした素人の出まかせとして、この続きを読んでもらいたいのですが、よろしいでしょうか？

*

で、思うんですけど、やっぱり資本主義って、やりすぎではないでしょうか？ 金融工学か証券化か投資か市場か相場か、何だか知りませんが、ギャンブルしてませんか？ どさくさにまぎれて小細工していませんか？ 素人を馬鹿にした玄人が、人の禪（ふんどし）で相撲をとっていませんか？ 一部の人が甘い汁を吸っていませんか？ 国同士のレベルでも国民間のレベルでも、貧富の格差が大幅に拡大してきていませんか？ でも、いったん始めちゃったし、世界中に広まってしまったし、中国までやってるし、イスラム圏もやっているし——もう、降りられない状態になっちゃっているのでは、ないでしょうか？ ヒトは、本質的に、

ギャンブル依存症

では、ないのでしょうか？

*

都合により、ここで、変調します。これから先、多少、ノイズが入りますが、気にしないで読み進んでください。

*やっぱり、出来レース、やらせ、八百長らしい。気づいているくせに、あるいは、気がついていないふりをして、または、すっかり忘れて、やらせを本当だと思いこんでいる、もしくは、思いこもうと自分をだましている。

*ある種のスポーツ（※あえて、名指ししません）や、ある種のテレビ番組（※あえて、名指ししません）と同じです。嘘、作りもの、フィクション、編集済み、情報操作されたもの、筋書きなしに見せかけて本当は筋書きがあるもの——そういうものを見て、ヒトは何とも思わなくなっている。心の底では、嘘だと分かっている、嘘だと思おうと楽しめないから、「ただ見ている」。実質的傍観者状態。重度の思考停止状態。

*悪いと分かっている、間違っていると分かっている、正しくない分かっている、正直じゃない分かっている。とどのつまりは泥棒や搾取だと分かっている。でも、都合が悪いから、そういうことは忘れる、あるいは、忘れたふりをする、または、すっかり忘れてしまっている。

*思い出そうと努力すれば、思い出すことができる、学び直すこともできる、再発見することもできる、「分かった！」と叫ぶこともできる。そうなのに、忘れている。思い出そうとしていない。そうした気迫も努力もみられない。都合が悪いから、必要がないから、という言い訳が心の奥底にある。

*へたなことを口にした、実行に移すと、他のヒトたちから、寄ってたかっていじめられたり、場合によっては、消されるから、思い出さないし、分かれようもしないし、実際に忘れてしまっているし、分からなくなっている。

*「分かる」は「分ける」ことだから、見えたり手にしているものは断片だけ。細切れ状態。要するに、現実も事実も真実も、まだらにしか分からない。「分かる」「分からない」ということは、ふるいにかけて、選（よ）り分けること。そのふるいに、かからないものは、分からない。そういう仕組みになっている。

*ヒトは、まだら模様の世界を見ている。おそらく、そのまだら模様はヒトに共通している。だから、ある程度、話が通じる。ただし、通じ合えないこともかなり多い。ひょっとすると、相手に通じているという認識は、個人レベルの錯覚かもしれない。

*ヒトは、知覚され記号化され信号化されデジタル化された情報を、シナプスとかいう導線と回路を通して、まだらに脳で処理している。その導線も回路も、無限ではなく有限の質と量のものしか通さない。ノイズは、抑制されている。そうやって、脳の過熱による機能不全を防ぐ仕組みが存在する。それでも、ノイズは駆逐できない。除去できない。

*カジノ資本主義というものは、上に書きつづったヒトの行動とすごく似ている。激似。酷似。かなりの部分がダブっている、かぶっている、そっくりと言ってもいい。

*答えが最初から出ている、出来レース。筋書きが最初からある、やらせ。何か黒い目的があって仕組まれている、八百長。

*すべてがぴったり当てはまり、すべてが正しいとされ、すべてが分かるような仕組みができています。「分かる」は言葉、ヒトが勝手に自分を基準にして決めたもの。だから、「分かる」と「分からない」とは反意語ではなく、表裏一体。観測者の位置によって見え方が変わる、玉虫色。

*真理や実体なんて、哲学や科学の出来レース。それを支えているものが、表象という名の代理人。何でも代行屋さん。まいどありー。おおきに。儲けさせてもらっております。

*Aだと思っているものは、括弧にくくられたA、つまり「A」。それを、(括弧なしの)Aだと思いこんでいる。さもなきゃ、人間=ヒトなんて、やってられないよー。確かにね。その通りだ。それこそが真理だ。トゥルースだ。ヴェリテだ。誰も否定できない真実だ。

*だから、大丈夫。このままで、大丈夫。「仕組み」とか「からくり」なんて、ちゃちゃを入れる、ふざけたやつは、くたばってしまえ。二葉亭四迷。浮雲。そんなやつは、人間

様じゃない。ひとでなしだ。

*

とにかくヒトには出来レースが多すぎやしませんか？ その原因は、Aの代わりに「Aではないもの」を代用するという、「表象の働き」にほかならない。代用品を使っているから、ぶれるし、ずれる。これ、当たり前のこと。カツラと同じ。

だから、「表象という仕組み」をかかえて生きるしかない、偶然と必然の間で「うろろうおろおろ」するしかない、こうしたヒトのギャンブラーぶりを、このブログでは、

カジノ人間主義

と呼ぶことにします。Casino-Homo-sapiensism。カジノ・ホモ・サピエンシズム。そんなことを言っている自分もヒトの子ですから、さっきから、あちこち、ぶれています。ぶれまくっております。標的は狙っているつもりなのですが、ぶれて、ずれて仕方ない。このへんで、ブレを修正し、「分かる」「分からない」に的を絞ります。

*

では、軌道修正します。

★ 知覚：とりあえず、必要のあるものしか知覚しない。都合の悪いものは知覚しない。たとえば、「見る」「聞く」という行動が、いかに選別と排除に満ちたものであるかは、誰もが日々体験している。テレビを例にとれば、すぐに分かる。画像と音声伝える全情報を、視覚と聴覚が残らず知覚していたら、そのヒト、頭＝脳が爆発してしまうでしょう。

★ 知る：ゲーデルさんの何とか定理や、ヴィトゲンシュタインさんのつづやき集を持ち出すまでもなく、ヒトの知にはリミットがある、枠がある、囲いがある。つまり、知る

ことが可能なことしか、知ることはできない。ひっくり返して言うなら、知ることができただけ通す、便利な「回路=ふるい」が存在する。それ以外のものは、通しません。でも、どういうわけか、ノイズというものが入り込む。どうやら、ヒトの「分かる」は欠陥品らしい。とはいうものの、リコールや回収してくれる存在が見当たらないため、「ま、いっか」でやるしかない。

★学ぶ：これは、手垢の付いたダジャレ=語源に習えば、「まねる」ことである。赤ん坊のころから、ヒトは真似が実にうまい。真似られないことは真似ない習性が、しみこんでいる。三つ子の魂百まで。人類は、みな、きょうだい。だから、水中でエラなどつかって、「生きる=息る」真似など、できっこないのは、先刻承知。仙石イエス。やっぱり、都合のいいこと、必要なことしか、ヒトは学びません。何しろ、ヒトは、賢くて抜け目がないのです。

以上、3ヶの★が、きょうのまとめです。ただ、こういうことを書いていると、罰（ばち）が当たります。どういうことかというと、「不毛」な状況に到達します。不毛は文字通り、毛が生えない、けなし、なさけない。実が実らない状態。みなし（※ご、とは差別語になるから、付け加えません）。かわいそうな、ハッチ。

ここまで、お読みくださり、どうもありがとうございました。感謝しています。よかったら、また、来てください。待ってます。

09.01.31 コラブログとモノブログ

◆コラブログとモノブログ

2009-01-31 10:25:51 | Weblog

このブログを始めて、1カ月以上がたちました。初めての経験なので、自分なりのやり方で書いてきました。この記事の最後に載せてありますが、「人気ブログランキング」

と「にほんブログ村」のランキングに、参加させてもらってもいます。このごろになって、ようやく、同じジャンルに参加していらっしゃる他の方々のブログを訪問する心の余裕ができました。

で、気づいたことは、多種多様だということです。当たり前と言えば、それまでなのですが、驚きました。みなさん、それぞれの工夫があって、読んでいて、あるいは、見ていて、とてもおもしろいです。きれいな写真が載っているブログなど、特に感心して見えています。中には、書かれている文章が、プロのエッセイストやコラムニストの文章よりも、ずっとうまいブログがあって感動したりしています。

自分には、新聞や雑誌や写真を虫眼鏡で拡大してみるという、趣味があります。興味をそられる写真（※変な意味で、とらないでくださいね）をブログで見つけた場合には、思わず、愛用の虫眼鏡を取り出します。これが、またきれいで、時がたつのを忘れます。

レイアウトの点で、かなり、凝ったブログもありますね。めまいがするような、奇抜なものも見受けられます。自分は、どのようにして、そういうレイアウトをするのか、ぜんぜん分からないので、今お読みになっているような、ごく地味な画面ですと通しています。

それから、他の方々のブログと自分のものを比べていて、気づいたことは、自分の記事が比較的長く、また文字が細かいことです。小説なら、長いものはありそうですが、エッセイでは、あまり長いものは見かけません。この点については、現在お読みくださっている方にも、お詫びを申し上げます。読みにくくて、ごめんなさい。

で、文章が長く字が細かいということは、携帯電話でこのブログを読むということは、不可能に近いということなのではないでしょうか？ でも、ケータイ小説というものがあることからすると、ケータイで読んでいる方もいらっしゃるらしい。みなさん、どうやって工夫しているのでしょうか？ ちなみに、自分の持っているケータイは、非常事態の緊急連絡用のものです。980円で買ったもので、登録してある番号は、自宅と110番と119番くらいなものです。誰からもかかってきません。かける特定の相手もいません。電話帳、空欄だけです。たまに、電池が切れていて、慌てて充電します。電気が切れると、「お腹が空いたー」といって、鳴くそうなのですが、聞いたことはありません。難聴なので聞こえないのか、旧式のものだからなのか不明です。

メールは、契約している会社か、その下請けらしきところから、料金のお知らせらしきものが届くだけで、自分から出したことはありません。今、「らしきもの」と書いたのは、メールの開封の仕方がわからないからです。また、友達がいない、質問できる人もいないので、どうやって、メールを送るのか、そして、どうやってケータイでネットに入り、ブログを読むことができるのか、分かりません。値段が値段ですし、型が古いので、たぶん、インターネットのサイトやブログは映らないのではないかと思います。

自分は中途難聴者なので、本当は、メールができるといいらしいのですが、今のところは、交信する相手がいないので、メールの使用について知るために、説明書を読む必要はありません。いずれにせよ、マニュアル類を読むのは、大の苦手です。洗濯機のマニュアルでさえ、自分には難解です。そんなわけなので、パソコンの用法や、ネットとの接続などは、近所の電気屋さんに全面的に頼っています。

話をブログに戻します。いろいろなブログを覗いてみて、思ったのですが、ブログには2種類あるのではないのでしょうか？ で、名づけてみました。

コラボログとモノブログ、です。

こういうふうに、自分で言葉をつくったつもりの場合には、心配なので、グーグルで検索してみます。すると、やっぱり、ありました。でも、自分の考えているものとは、ちょっと違うみたいだし、©もついていないようなので、このブログで、使うことにしました。意味は、次の通りです。

(1) コラボログ (collablog) : collaboration + blog。他のブログやウェブサイトと、「つながりたーい」という強い欲求を持っているブログ。自己ブログ内記事の URL は言うまでもなく、自己ブログ外の多数の URL と相互または一方的にリンクを貼っている。ぼんやり、この種のサイトに入り、マウスを動かしていると、うっかり「地雷」をクリックしてしまい、他のサイトに飛んでしまう恐れが、多々あり。友達が多い。

(2) モノブログ (monoblog) : monologue + blog。他のブログやウェブサイトとは、「つながりたーい」という欲求を、特に持たないブログ。スポンサーサイトが貼った URL が、自己ブログ内記事としか、リンクされていない特徴がある。友達がいない。

と、なりますが、圧倒的に（１）が多いという気がします。それとも（２）は数多くあるが、目立たないだけかも。ご覧の通り、当ブログは、（２）です。何だか、トホホですね。モノブログ、別名トホホブログ、または、ハミッコブログ、あるいは、コドクブログでしょうか？ 名は体をあらわす、と言いますが、ほんとですね。自分と、そっくり。

このブログでは、今週の前半に、「交信欲＝口唇欲」、つまり、

＞「他の人と、つながりたーい」「他の人と、言葉をかわしたーい」「他の人と、文字をかわしたーい」「他の人と、映像をかわしたーい」「他の人と、心をかわしたーい」……

ということについて、ああでもないこうでもない、と考えるつ、うろうろおろおろしながら、思ったり感じたりしていることを、主に書きました。そこから、出発して、「分かる」「分からない」についても、いろいろ考えました。ご興味のある方は、この日記のバックナンバーを覗いてみてください。ただ、タイトルと内容が、かけ離れています。申し訳ありませんが、「名は体をあらわす」という感じには、なっていません。タイトルの体をあらわす状態とは、ほど遠く、内容（ないよう）は無（な）いよう、みたいな状態になっています。

で、当然のことですが、自分もヒトですから、いっちょ前に「分かってほしーい」という欲求を持っています。だから、今、この文章を書いているわけです。きょうも、また長くなるかな？ って、予感もしますが、とにかく、今書いています。足元で眠っているネコ（※うちの猫の名前です）をびっくりさせないように、気遣いながら書いています。

どうして、自分のブログは長くなってしまいがちなのか？ いくつか、理由が考えられます。1つには、一種の日記だからです。ふつう、日記には、その日や前日の出来事を中心に書きますよね。自分の場合、友達はいません。外にも、必要以外めったに出ません。きのうも、早朝に朝刊を取りに、玄関から2、3歩離れた、壁に取り付けられている、郵便受けまで足を運んだだけです。外出するとすれば、スーパーへの買い出しか、親と自分のために病院や医院へ出向くくらいです。

また、事情（わけ）があって、自分は現在無職です。うつ、でもあります。趣味は、虫

眼鏡で、写真や雑誌や新聞を拡大してみると、眠ることくらいです。万が一、虫眼鏡を使った趣味＝気晴らしに、興味のある方は、当ブログのバックナンバー、「目は差別する」2009-01-11 を、ご覧になってください。こんな感じで、自己ブログ内記事には盛んにリンクを貼っているのですが、まるで自家中毒症（※不快な思いをされた関係者の方、ごめんなさい）みたいですね。

ですので、自分は、結局、かなり暇ということになります。さらに言うと、いい年をしているのに、年金をもらっている親のすねを、かじっている身でもあります。親には頭が上がらませんから、家族内でのドラマや葛藤も、まずありません。ネガティブですよ。

でも、哲学するのが大好きなので、毎日いろんなことを考えて、紙切れにメモし、うつを紛らわせています。メモはどんどん溜まりますので、それを見ながら、自分なりにテーマを決めて、その日のブログを書いています。だから、自分の場合には、考えたことを書き溜めたメモと、パソコンに向かっている時に頭に浮かんだことのコラボレーションが、その日の記事という形になるわけです。これと言って波乱のない日々を送っているので、記事と言っても、似非（えせ）エッセイか、コラムもどきになります。

読むことは苦手ですが、書くことは大好きなので、ついつい、文章が長くなってしまふ。また、成り行きにまかせて、書いているので、話があちこちに飛ぶ。で、結局、その分、長くなる、という感じです。ただ、他の方々のブログと比較すると、万人受けする内容の記事ではありませんので、読んでくださる人は、限られているという気がします。ですから、ブログランキングのサイトを覗いたとき、クリックをしてくださった方々がいると知るだけで、すごく嬉しくなります。励みになります。大げさな表現になりますが、うつのどん底を経験したころを思い出し、あの時、消えてしまわなくてよかったなあ、と思います。

で、話は変わりますが、今週の後半は、「分かる」と「分からない」ということについて書きました。なぜ、なんでしょう？ どういう展開でつながっていったのか、よく覚えていません。記事を読めば、分かるのですが、自分の書いたものを読むのが、恥ずかしいのです。まわりに誰もいないのに、読み返しながら、ひとりで赤面しています。

親はもちろんのこと、たとえ、友達がいたとしても、このブログを見せるのは、「それだけは、勘弁してー」、という感じです。何も後ろめたいことなどは書いていませんから、恥ずかしがる理由がないはずなのですが、恥ずかしい。ダジャレやオヤジギャグが、恥

ずかしいではありません。そのことは、それほど恥ずかしくはない。

ただ、本気で書いていますから、その「本気」で書いている自分という存在を、身近な人に知られるのが、恥ずかしい。たぶん、これです。真面目な顔、本気でいる時の自分の顔を、他の人に見られるのが、恥ずかしい。この気持ち、お分かりいただけるでしょうか？

変な比喻を使うと、自分では本気だし、ある程度ハードボイルドな気持ちで（※「どんな気持ちなんだ？」これ、幻聴です。）、ブログを書いています。ダジャレを用いながら、シリアスでハードボイルドに（※「ん？ 何だってー？」同上）、哲学する。どうやら、幻聴さんが「ハードボイルド」に疑問をお持ちになっているらしいので、説明いたします。

ここでの「ハードボイルド」とは、ミステリー的なニュアンスだけではなく、純文学的な意味でも取ってください（※「純文学？ ぜんぜん、説明になっていない」）。いずれにせよ、「ハードボイルド」は死語ですか？ イメージ、ぜんぜん、伝わりませんか？ やっぱり、ハードボイルドって何？ という感じですか？「ハードボイルドだど」。あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞 = 感動詞であろう！）、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

ではないか？

「おら、ハードボイルドだど」 = I'm serious and a bit sarcastic.

内藤陳（ないとうちん）さんです。このブログは、モノブログなので、リンクは貼りません。もし、ご興味のある方は、グーグルなり、ウィキペディアで、「内藤陳」を検索願います。

また、話がそれてしまいました。ごめんなさい。

今週の後半は、「分かる」と「分からない」について書いた、という話をしていたのでした。で、テーマがややこしいだけに、ややこしい文章になってしまいました。お読みいただいた方には、お礼とともに、お詫びをしたいと思います。

で、恥ずかしいという、さきほど書いた、自分の気持ちですが、「分かる」と「分からない」について書いている時に、最高潮に達しました。クライマックス。暗いMAX。きのうの記事なんか、行くところまで行っちゃって、サイコーに暗い感じになりましたよね。夢も「チボー＝希望」もないところまで、すっ飛んでしまいましたよね。哲学も、あそこまで行くと、けっこうしんどくなります。でも、ちゃんと抜け道はあるんですよ。だから、あれでおしまい、ということにはなりません。

実は、きのうの記事を書いている、goo ブログにある「記事の文字数制限」に引っかかっちゃたんです。トラックだと、過積載です。ボクシングなら、減量失敗。オーバーロード。要するに、書きすぎてしまったんです。もっと書きたかったのに。という、気持ちが残りました。でもですね、その書きたかったことが、どっちらけ(＝しらけの最高潮)の上塗りというか、おまけというか、とどめというか、そんな感じのことを書いて、最後を終わらせたかったのです。どうして止めを刺したかったのかと申しますと、心の安定のために、なんです。お祓(はら)い、みたいなものです。

ですので、ここで、けりをつけたいと思っています。きのうの記事のおしまいのほうで、

こんなことを書いていると、罰(ばち)が当たるとか、不毛に行き着くとか、

わめいていませんでしたか？ あれなんですよ。不毛というのは、何も実らないということです。「二毛作」の「毛」をイメージしていただければ、分かるような気がしますけど、どうですか？ 不毛とは、作物が年に二回も収穫できるの正反対のイメージです。ニヒリズムに陥る、とも言えます。ニヒリズムやニヒルなんていうのも、死語でしょうね。

きのうのしらけのけりを、きょうになって、また、つけようとするなんて、「不毛の二毛作」みたいな、不条理極まりないものですけど、思い切って、書きます。では、

唐突ですが、モーリス・ブランショという人が、フランスにいました。マラルメやカ

フカを、かなり意識していた人でした。小説も書いた人でしたが、自分には、その人の小説よりも批評のほうが、だんぜん、おもしろかったという記憶があります。

「行くところまで、行っちゃった」＝「ふつう、そこまでは行かないよ」

という感じのことを、書いていた人です。「不毛」という言葉を書いたときに、ふと、その人のことを思い出しました。で、ここで、ちょっと変調します。変調しないと、「お祓い」ができないのです。「行くところまで、行っちゃった」ために、罰（ばち）が当たっちゃったんで、お祓いをする必要があるのです。

悪魔か小悪魔か妖精か鬼かダニか、分からないんですけど。出て行ってもらわないと、困るんです。これから、ちょっと取り乱しますが、気にせずに読み続けていただければ、嬉しいです。

少し、シリアスに申しますと、以下に、書かれる★と★の間に連なる、言葉たちだけでなく、文章表現で用いられる記号たちの身ぶり＝運動＝表情を、よく見つめてほしいのです。これから書くのは、モーリス・ブランショを、自分なりに真似たダジャレです。パロディになりそこなった、ギャグです。そんなおふざけをしないと、お祓いがないのです。はい。

沈黙へといたる言葉の身ぶりですなどと、野暮な解説はしたくありませんが、不本意ながら、書き添えておきます。それが、このブログを読んでいた方に対する最低限の礼儀だと、思うからです。では、いきます。

★

実体や現実や真実という亡霊を「」でくくる勇気を持つこと、

つまり、

「分からない」ということを、無知や愚鈍というネガティブなスタンスとみなすのではな

く、

むしろ、

「分かる」ということを「」でくくり保留する勇気と、謙虚さと、聡明さを身をもって示すこと、

これは、誇示ではなく、他の人たちへの目配せにも似た、合図であると言えるだろう、

「何の合図なのか？」

「その目配せの意味を言葉にするのは、止そうではないか」

「なぜ？」

「ほら、分かるだろう？」

「……………」

「それだよ」

「？」

「そうそう、それだよ、それ以上、何が言える？」

「……………」

「……………」

「———」

「———」

★

どうでしたか？ 不毛でしょ？ 自分なりにブランショし、ベケツトしてみたんですけど。きっと、お笑いになったでしょう。首を傾げてくださったとすれば、まだ、嬉しいですけど。「(笑)」あるいは「!？」が、ごくふつうの反応であり、そうした反応こそが、このブログの開設者にとって、身分相応の報いであると思います。でも、

もし、よろしければ、以上の、★と★の間の言葉たちと記号たちを、再度、読み=見てほしいです。できれば、★と★の間に並んでいるものたちが、言葉であることを忘れてほしいです。変なことを言って、ごめんなさい。でも、本気です。おふざけのようで、実はおふざけでは、ありません。そのほうが、重篤だったりして——。

以上、恥じの上塗りに、付き合っていたいただいた方に、心からお礼を申し上げます。

09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー

◆架空書評：ビッグ・ブラザー

2009-02-01 11:12:20 | Weblog

(※以下は、架空ブックレビューです。評者名を除き、書名、著者名、出版社名、定価は、

すべて架空のものです。間違っても、アマゾンなどで検索なさらないよう、ご注意願います。)

書名：『ビッグ・ブラザーすべての個人情報収集されている』嵯峨専太郎著、第二ヴィレッジ社刊、1,680円（税込）

トンデモ本と呼ばれても、仕方ない本である。ただし、ノンフィクションだと思わずに、フィクションとして読むとすれば、話は別だ。私は本書に書かれていたことが、真実ではないと言い切る自信はない。実録ではなく、フィクションの形を借りた警告の書として読むのなら、「そうしたことも、無きにしも非ず」な作り話として、私は評価したい。そんな本なのである。

詳細を述べる前に、ある思い出からお話ししたい。一昔前のことだ。私は、東池袋にある行き付けの飲み屋にいた。10人以上の客は入れないと思われるほどの狭い店で、おかみさん1人だけが切り盛りしている。おでんが、特においしい。店では通常テレビが付けっぱなしになっていて、その夜も私はぼんやりと画面の映像をながめていた。ある死刑囚に刑が執行され、その死刑囚の弁護人を務めていた弁護士が、死刑囚の遺品を手にしながらかつて亡き男を回想する。そうした内容の番組だった。その弁護士は、通常の弁護士としての活動の他に、特に公安事件の被告人の弁護を無償で引き受けることで知られていた。

遺品は多くなかった。拘留所で生活するのに最低限必要なものばかりで、ベッド、机、椅子といったものは、国家の所有物であるために、余計数が少なく見えた。ビジネスホテルの客の持ち物だといっても、おかしくない印象だった。その遺品の中に、電気工事従事者向けの雑誌が数冊あった。画面には映らない、テレビ局の者らしき男の声がした。

「意外な雑誌がありますね？」とか、言っていた記憶がある。すると弁護士が、次のように語った。きっと、いつか減刑されて、社会に出られると思っていたんでしょうね。電気工事関係の資格でも取ろうと考えて勉強していたのでは――。

そのとき、「とぼけていやがる」と、店内で誰かがつぶやくように言った。狭い店だから、小さな声でも、ちょっとした間（ま）があくとよく響く。声の主は、私のいたカウンター席から1つ離れたスツールに腰掛けていた男だった。その男とは、何回か口を利いたことがあった。どこに住み、何を生業（なりわい）にしているのか、年はいくつなの

か。こうした個人的な話題がめったに出ないところが、その飲み屋の特徴であり魅力でもあった。

客は多くてせいぜい2人連れ、あとは1人でふらりと来て、ふらりと帰る。かといって、お通夜のように暗い感じがしないのは、絶品のおでんと、おかみさんの不思議な存在感が大きく影響しているからだろう。おそらく、私の名前、住所、職業を、おかみさんはもちろん、他の常連も知らないと思う。何しろ、変わった雰囲気のお店なのである。

「とぼけていやがる」と言った男に、「どういう意味なんですか?」と、尋ねるような客はいない。私はテレビの画面に映った雑誌の名前を記憶し、翌日に書店で調べてみた。それで、納得した。雑誌の名前とは関係がないわけではない。しかし、それ以外のさまざまな情報が盛り込まれている。ハッキング、警察官の装備および警察組織、Nシステム、盗撮、盗聴、ネット社会の裏情報、アダルト向けのサイト紹介、そして各種違法行為の実例についての記事が掲載されている。とにかく、不穏な空気を漂わせているのである。

嫌な感じだった。ああいう雑誌が存在することも、ああいう雑誌が対象とする国家の機関や社会の闇が存在することも許せない。そんな憤りに似た不快感を覚えた。

本書を読みながら、嫌な雰囲気を感じた。上述の憤りと同種の不快感を覚えた。本書で中心となるのは、簡単に言えば、国民の個人情報膨大なデータベースが作成されつつある、という話だ。だが、その話を裏付けるデータがほとんど、いや、まったく提示されていない。あとがきによると、本書を執筆するにあたって、著者の嵯峨専太郎氏が、直接あるいは間接的に取材した人物は、100人以上になるという。情報源を明かしたり、取材が行われた場所・日時、接触した人たちの職業や経歴などを詳細に記すと、著者だけでなく、そうした協力者たちにまでに危害がおよぶ恐れがある、と言うのだ。

うさんくさいではないか。トンデモ本と呼ばれても仕方ないと冒頭で述べたのは、そのようないかがわしさが漂うからだ。おそらく、嵯峨専太郎も仮名であろう。奥付の著者紹介には、生年と生まれた県に加えて、「ジャーナリスト」としか書いてない。怪しいではないか。著者による、あとがきも、素っ気ない。ただ、本文の不気味な雰囲気だけが、この本を支えている。

内容を要約すると、次のようになる。

「或る公安関係者」、または「或る元公安関係者」という言葉が各ページに最低1回は出てくるのであるが、「或る元公安関係者（元キャリア官僚）」が、或るダミー会社を運営している。表向きは広告代理店の看板を掲げ、「都内某所」にある7階建てのビル全体を所有し、その中で巨大なデータベース作りが進行している。

1階と2階には、比較的容易に入ることができる。確かにそのフロアでは、新聞に折り込まれるチラシなどの広告が制作されている。印刷は他の会社に委託し、その「広告代理店」は企画を行い、版下と呼ばれる広告の元になる原板を作成しているだけだ。もちろん、いくつかの部署に分かれ、20名前後の社員がいる。

問題は、3階から7階で何をやっているかである。著者によれば、エレベーターも階段も、3階を含めた上階には通じていないとのことである。2階の或る部屋が、上階に通じる「ゲート」になっている。その「或る部屋」には、IDカードがないと入れない。

3階から7階に自由に出入りできる、数名の「或る元公安関係者」たちから得た断片的な情報を組み合わせると、そこにはスーパーコンピューターが設置されており、この国に複数存在する縦割りの公安組織が収集してきた情報を、横断的に集め、比較対照しながら、一種の「名寄せ」作業が行われている。

具体的には、次のような作業が行われているという。複数の公安組織から枝分かれした全国のおびただしい末端が、さまざまな個人情報やデータを毎日地道に集めている。そうしたありとあらゆる種類の個人情報が、そのビルの上階にデジタル化されたデータとして送られてくる。それだけではない。破棄されたはずの情報までも、丹念に集められていると著者は主張する。もちろん、ネット上の情報も収集されている。著者の指摘によると、デジタル化されたネット上のデータが、一番集めやすいという。それはそうだろう。これには、思わず納得してしまった。

司法・立法・行政・地方自治体はもちろん、民間企業、教育機関、医療機関、NPOおよびNGOの保持している情報までが、送られてくる。特に、教育機関からの情報が重要だという。全国の全児童・生徒・学生たちの、成績・素行・健康状態は、これから作成されるデータベースの、土台となるものだからだと本書は説く。

データベース作成にあたっては、真偽は問わないことが鉄則らしい。とにかく数多く

集めること、同時に「名寄せ」作業により、分類と蓄積が行われる。日々更新されているデータはバックアップされ、3日おきに「近隣の某所にある倉庫」に送られている。この作業を行うコンピューター用ソフトは某国が開発したもので、そのソフトの使用とメンテナンスは、この国の秘密予算から計上された巨額の資金でまかなわれているという。

大まかな要約であるが、100人以上の人物の口から出た断片を総合した結果、以上のようだが、起こりつつあると本書は主張する。その人物たちは4グループに分類できる。

(1) 事実上、ばらばらに活動している複数の公安組織によって、「飼い慣らされている協力者たち」

(2) ある事案ごとに、知らない間に情報を提供する立場に置かれた「一過性の協力者たち」

(3) 窃盗・すり・恐喝・コンピューター情報への不正アクセスなどの違法行為を、日常的に行っているが、自分が公安組織の監視対象になっていることを自覚していない「泳がされている犯罪者たち」

(4) 以上の(1)(2)(3)を利用する側の者たち。

著者は、その(4)に該当する人物が30名前後はいると言う。もっとも、そのうちで、事の核心を把握しているのは、10人もいないのではないかと書いている。嵯峨専太郎氏の妄想(被害妄想、誇大妄想、強迫観念)、何の根拠も無い作り話、陰謀マニアの戯言、都市伝説の類などとして、一笑に付すこともできるだろう。さらに言えば、私自身も、この本をわざわざ取り上げて紹介することに、ためらいを覚えたのも確かだ。ただ、3つのことに恐怖を感じたので、最後に述べておきたい。

1つは、この国の縦割りの官僚機構によって収集されている情報が、横断的に再収集され「名寄せ」が行われていること。2つ目は、そうした膨大な情報を処理するコン

コンピューター・ソフトが存在すること。3つ目は、発芽したばかりの苗の成長を見守るように、次の世代を担う子供たちが標的にされていること。

もし、本書がトンデモ本ではなく、文字通りノンフィクションであるなら、私は今挙げた3つの点が気掛かりである。大げさな言い方をすると、戦慄すら覚える。

本書のタイトルにある「ビッグ・ブラザー」は、言うまでもなく、ジョージ・オーウェルの小説『1984年』に出てくる、全体主義国家の頂点に立つ独裁者の名から取られている。BIG BROTHER IS WATCHING YOU. というわけだ。『1984年』は、徹底した国民監視と管理社会という悪夢を描いた、実に恐ろしく、かつリアルな作品である。

さて、本書である。上述のような作業が、どうして秘密の国家予算を投じて行われる必要があるのか？ これについて、著者はこう語っている。

経費節減が目的だと、あっさりと述べている。この国が治安維持のために費やす予算は、膨大である。個人情報保護を法制化して以来、個人情報を入力するためのコストは肥大化しつつある。また、作業自体も急速に困難になってきている。その上に、人手が足りなくて、地道な情報収集活動がますますやりにくくなっている。

事件や危機が起こった場合には、無駄の多い捜査に忙殺され、複雑極まる対応に追われて頭を抱え、手を焼いている各司法・行政組織に、「そっと耳打ちをする存在」（※本書からの引用）が必要である。最もコストがかかる現場での問題を、まず速やかに解決する。それが最優先されるべきである。あとの手続きは、そのつど臨機応変に辻褄を合わせればいい。そのために、法律のエキスパートである役人や官僚がいる。このように本書は説く。

もし、そうした合理的思考の下に、「或る壮大なたくらみ（グランドデザイン）」が現実化しつつあるとすれば、悪夢のような超管理社会がいつか実現することになる。さきほど述べたように、この「グランドデザイン」を把握しているのは、著者によれば10人足らずの、元および現高級官僚なのである。

法治国家の皮をかぶった全体主義国家ではないか。そう考えているうちに、冒頭近くで述べた雑誌に目を通したさいに感じた、やりきれない不快な気持ちを思い出した。そ

んな国家および社会は、絶対に実現させてはならない。決して、そのグランドデザインの存在を許してはならない。ノンフィクションであれ、フィクションであれ、そうした忌まわしい国家や社会に対する警鐘を鳴らす書であるなら、たとえそれが妄想であったとしても、私は積極的に評価したいと思った。

本書の帯にある「渾身のノンフィクション！」というキャッチコピーの「ノン」という部分を、私はフェルトペンで黒く塗りつぶしてやった。あの嫌な感じを、頭の中から追い出すために。

<評者：孟宗竹真（もうそうだけまこと）・詩人>

*

孟宗竹真氏からは、「不定期に」というお約束で、書評をお送りいただいております。いつしか「不定期に」が「定期的」になり、恐縮しております。

書評のバックナンバーは、第1回「架空書評：狂った砂時計」2009-01-13、第2回「架空書評：何もかもが輝いて見える日」2009-01-18、第3回「架空書評：彼らのいる風景」2009-01-25 です。今回の記事と、あわせてお読みいただければ幸いです。

なお、当ブログのバックナンバーに、短い解説とキーワードをつけたダイジェスト版、「こんなことを書きました（その1）」2009-01-19にも、お目を通していただければ嬉しいです。このところ、記事が長くなってきたので、あすは自分のあたまの整理を兼ねて、過去2週間分の「こんなことを書きました（その2）」を書きたいと思っています。

孟宗竹さん、今週も原稿をお送りくださり、どうもありがとうございました。次週も寄稿を期待して、よろしいでしょうか？（パ）

09.02.02 こんなことを書きました（その2）

◆こんなことを書きました（その2）

2009-02-02 09:09:56 | Weblog

ブログを始めて、1カ月半が経ちました。ここまで続けることができ嬉しいです。ただ、「皆勤賞状態」なのが気になります。あまり頑張りすぎて、うつが悪化しないよう、肩の力を抜いてぼちぼちやっついこうと思っています。

このところ、記事がどんどん長くなってきました。また、自分の書く文章は、話があちこち飛ぶので、何を書いたのか分からなくなってきました。そこで、きょうは、「こんなことを書きました（その1）」2009-01-19の続編を書きます。

2009-01-20 から 2009-02-02 までに、当ブログに掲載した14本の各記事についての短い解説とキーワードが記してあります。

*「それは違うよ」2009-01-20：「知覚」をキーワードに、ヒトの「知」と「表象作用」の誕生を紙芝居的に描いています。また、知の独占者であるリーダーの誕生と、リーダーが超越者の「代理人」である仕組みについても触れています。続いて、「違う」と「間違う」の「差」を、言葉遊びによって確認し、大和言葉系の「間（＝ま）」という語にこだわりながら、漢語系の「差異（＝さい）」という言葉について考えています。記事が非常に長くなったことを、詫びています。キーワードは、「宗教」「哲学」「科学」「ダジャレ」「オヤジギャグ」「アウフヘーベン」「ジャック・デリダ」「ステファヌ・マラルメ」「さいころ」「詩作＝思索＝試作」「賭け」です。直接書かなかったキーワードは、「差延」です。

*「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21：「間（※ま）」＝「あいだ」＝「隔たり」＝「距離」＝「空間」＝「空白」＝「無」＝「差異」と、言葉遊びを展開し、「魔」のように不思議なものである、という結論に達します。過激なまでにダジャレとオヤジギャグに走る理由について、言い訳と自己弁護をしています。また、「差異」を「知覚」することが、

「差別」につながるメカニズムを指摘しています。「遠く」にあるものを「近く」にあると錯覚させる装置である「知覚」の仕組みを暴き、告発しています。人間批判とニヒリズムに陥りそうな自分を救うために、「影絵遊び」を例にとって、知覚のポジティブな面にも光を当てようとしています。キーワードは、「魔法」「小津安二郎」「マラルメ」「ジャック・デリダ」「差延」「表象作用」「偶然」「必然」「イメージ」です。直接書かなかったキーワードは、「ビル・ゲイツ」「学魔」「高山宏」です。

* 「なぜ、ケータイが」2009-01-22：文部科学省が、小・中学校での携帯電話の校内への持ち込みを禁止する方針を固めたことを、批判しています。歴史的事実を挙げて、国家による「禁止」という行為の恐ろしさを訴え、警鐘を鳴らしています。「マラルメ師」と「泉アツノ」さんをゲストに迎え、さいころを振るパフォーマンスを通じた、おふざけをしつつ、シリアスな問題を分かりやすく説明しようとしています。それが効果を上げたかは不明です。日本を例に取り、「手紙禁止令」の歴史的経緯を考察しています。また、「交信欲＝口唇欲」という造語が、ここで初めて登場しています。話がどんどん大きくなりすぎたため、慌てて総括をして記事を終えています。細かい字の長い文章を書いたことを、詫びています。キーワードは、「言論弾圧」「国家権力による検閲」「識字率」「明治維新」「文明開化」「知のスキルとしての読み書き」「下克上」「オトナとコドモ」です。

* 「お口を空けて、あーん」2009-01-23：前日に造語した「交信欲＝口唇欲」を用いて、「手紙禁止令」のメカニズムを解説しています。6人の作家を挙げて、明治以降の文学史のおさらばをしつつ、「文壇」が「エリート」によって独占されてきた事実を指摘しています。漱石の「当て字」を高く評価しています。漱石を見習って、タイトルを「お口を開けて」ではなく「お口を空けて」と感字しています。「偏差値」という差別的な尺度を用いて、逆に「差別」を告発しようと試みています。話は、日本語で用いられている文字の多様さに移り、「あいうえお表」の不思議に触れます。キーワードは、「帝国大学」「東京大学」「漢字＝感字」「難聴」「幻聴」「政界」「内閣総理大臣」「流行作家」「ワープロソフト」「阿吽（あうん）」です。

* 「冬のすずめ」2009-01-24：週末なので、軽いタッチのエッセイを書こうとしています。小学校時代の、ちょっと変わった子のエピソードが2話出てきます。ネコが「お土産」として、部屋に持ち込んだ、すずめの死骸を庭に葬る様子が語られます。その実話に漱石の小品がダブリます。話は、生き物の生態を映したテレビ番組、そしてアイルランドの歌手エンヤへと飛びます。難聴者の立場から、ちょっと変わったテレビの楽しみ方を提案しています。キーワードは、「道徳の授業」「テープレコーダー」「オリンピック」「ディズニーのアニメーション映画」「教師」「テレビ」「番組」「音声」です。

*「架空書評：彼らのいる風景」2009-01-25：詩人の孟宗竹真（もうそうだけまこと）氏によるブックレビューの第3回目。純文学系雑誌に連載された作品を集めた、短編集。全7編のうち、孟宗竹氏が特に気に入った3編の紹介。男装して成人向けビデオショップに入り、DVDを買い求めたあと、妙な男と出会った少女を描いた「反・少女」、元心理カウンセラーの「私」が、新幹線で知り合いの男性と乗り合わせ、男性の半生に耳を傾ける「セレブリティ」、容疑者を追って上京した、埼玉県警の刑事の一日を回想をまじえて描いた「再訪」。評者の孟宗竹氏による、本書のタイトルにある「彼ら」とは誰なのか、についての考察が興味深い。

*「交信欲=口唇欲」2009-01-26：当ブログで造語された「交信欲=口唇欲」について、詳細な検討を行っている。ジャック・デリダだけでなく、ジャック・ラカンとフロイトの影響が濃く表れている論考。やんわりとユングの考え方を退けている。ヒトの赤ちゃんが未熟児として早産されるという生物学上の説を紹介しながら、ヒトの抱く「唇がさみしい」「人肌が恋しい」という心理に迫る。話が「分かる=わかる」というトピックに飛んだところで、時間切れとなっている。キーワードは、「欲望」「欲求」「本能」「唇」「乳房」「ゴマフアザラシのゴマちゃん」「松鶴家千とせ」「シュール」「吉田戦車」「いがらしみきお」「ベケット」「マザーグース」「コアイメージ」です。

*「ケータイ依存症と唇」2009-01-27：「他の人と、○○をかわしたーい」という欲求の、○○に入るものを列挙することから出発。経済学や文化人類学で重要視されている「交換」を考察しながら、「貨幣=お金=通貨」という仕組みの誕生に触れる。話が堅くならないように、ダジャレとオヤジギャグを多用している。経済学に弱いため、話が「価値」に及ぶと、及び腰になっている。ヒトの交換欲を説明しつつ、マラルメ師と泉アツノ氏の助けを借りて、「交信浴=口唇浴」という更なる造語に至る。ここで、ケータイ依存症に警鐘を鳴らしている。キーワードは、「外国為替取引」「赤塚不二夫」「イヤミ」「シェー」「フランス語」「お乳」「おしっこ」「うんち」「笑み」「コミュニケーション」「ラポール」「愛」「bath」「ケータイ」「依存症」です。出しそこなったキーワードは、「分かる=わかる」です。

*「オバマさんとノッチさん」2009-01-28：ようやく、「分かる=わかる」について考察する機会を得て、喜んでいる。「分かる(=わかる)」=「別る」=「解る」=「判る」の連鎖を土台にし、「分別(=ぶんべつ・ぶんべつ)」に注目。その英語バージョンであるsenseの「コアイメージ=中心的イメージ」を図式化している。確認の意味で、「分」「別」「解」「判」のコアイメージも検討してみたところ、「sense」と「わかる」が似ているようで似ていないことを発見。両者の差異をイメージ化するのに悪戦苦闘した挙句、「オバマさんとノッチさん」くらい似ていて似ていないという結論に達する。なお、この週から、無意識に始めていた「死語復活」の動きに気づき、慌てて「死語復活キャンペーン

開始」を宣言する。キーワードは、「高見映」「できるかな」「チョムスキー」「ナンセンス」「ジャック・ラカン」「フェルディナン・ド・ソシュール」「ジャック・デリダ」「丸山圭三郎」「身分け」「言=事分け」です。

*「もしかして、出来レース？」2009-01-29：「わかる」「わからない」の「仕組み=からくり」を考察する――。こうした難解な問題を、素人が考える意義を、訴えています。話のついでに、ヒトには「独創性=オリジナリティ」がないとを主張し、半ば喧嘩腰になっています。当ブログが、一貫して「哲学を庶民の手に」キャンペーンを実践していることを自覚し始めています。ヒトが「わかる」「わからない」ということは、仕組まれた「出来レース」ではないか、という指摘をしたうえで、そのテーマを翌日に持ち越すことになってしまいました。なお、この日の「死語復活キャンペーン」は、「酒井法子」の「マンモスうれP」でした。キーワードは、「哲学者」「哲学学者」「上級公務員」「引用」「コラージュ」「パッチワーク」「ブリコラージュ」「ブレインストーミング」「発想法」「創造的思考」「ギャンブル」「ステファヌ・マラルメ」「特許権」「著作権」「エリート」「思想」「哲学」「八百長」「やらせ」「忘れる」です。直接書かなかったキーワードは、「宮川淳」『引用の織物』「レヴィ=ストロース（レビ・ストロース）」です。

*「カジノ人間主義」2009-01-30：マラルメが詩の中で自分の名前を織り込んでいたことを、ある日本人の学生が発見したエピソードから出発し、ヨーロッパの言語における定型詩の説明をしています。詩作での約束事が、偶然性と必然性に深くかかわっていて、それがダジャレや言葉遊びとつながるだけでなく、ギャンブルとも共通項があることを指摘しています。次に、カジノ資本主義という考え方を持ち出し、資本主義が、「ギャンブル化=ゲーム化」しているのではないかと問題を提起しています。そこから、断章形式で、「分かる」「分からない」「知る」「学ぶ」「知覚する」についての考察を列挙しています。それらの断章は、ブログ開設以来、文章を書くという行為を通じて考えてきたことの「集大成」となっています。＜「表象という仕組み」をかかえて生きるしかない、必然と偶然の間で「うろうろおろおろ」するしかない、ヒトのギャンブラーぶりを、このブログでは、「カジノ人間主義」と呼ぶことにします。＞という断章が、全体をまとめる役割を果たしています。ヒトという種に対して、かなり悲観的な見解を述べています。そうした考え方が、「不毛」にいたることを指摘し、記事を終えています。この日の「死語復活キャンペーン」が、「加藤茶」の「ちょっとだけよ～。アンタもすきねえ」に加えて、「東京ぼん太」の「夢もちボーもないよ」を取り上げているのが象徴的です。キーワードは、「マラルメ」「経済学」「金融工学」「証券化」「市場」「相場」「フィクション」「筋書き」「わかる=わかる」「脳」「記号化された情報」「表象作用」「真理」「実体」「ゲーデル」「ヴィトゲンシュタイン」です。直接書かなかったキーワードは、「弓彰」「豊崎光一」です。

*「コラブログとモノブログ」2009-01-31：最初はエッセイタッチで、他の人たちのプロ

グを読んだ感想を述べています。そこから、友達の多い外向的なコラブログと、友達のいない内向的なモノブログという分類をし、当ブログが後者であると書いています。自分にとって、ブログがどんなものであるかに触れたあと、その日の核心に入ります。「死語復活キャンペーン」で、「内藤陳」の「おら、ハードボイルドだど」を紹介し、前日の「不毛」を「ニヒリズム」という別の語で置き換え、「行くところまで、行っちゃった」＝「ふつう、そこまでは行かないよ」の例として、モーリス・ブランショに触れています。ブランショおよびサミュエル・ベケットをイメージした、つぶやきの断片を書き連ねて、「不毛」を言葉の身ぶりとして演じようと努力しています。★と★の間の文章は、たぶんに、ひとりよがりなことを書き、ひとり相撲をとっていますので、深読みすることなく、読み飛ばしてください。

*「架空書評：ビッグ・ブラザー」2009-02-01：詩人の孟宗竹真（もうそうだけまこと）氏によるブックレビューの第4回目。今回組上（そじょう）に載せられるのは、ノンフィクション。孟宗竹氏は、この著作をトンデモ本とみなされても仕方ないと断じる。取材源のデータが全く明記されていないからである。内容は、全国民のありとあらゆる個人情報がある秘密の組織によって収集されているというもの。組織のトップに立って運営しているのは、少数の元および現公安関係の高級官僚。膨大なデータの収集のために、某国が開発したデータベース作成用ソフトが使用されていると著者は主張する。データ収集の目的は、国家の治安維持に費やされる経費節減だという、極めてあっけないもの。あっけないだけに、リアルでもある。事件や危機が起こり、その解決や対処が難航している場合に、現場に「そっと耳打ちをする」。あとの書類上の辻褃合わせは、法律の専門家である役人と官僚が行う。そうした悪夢のような、「国家の壮大なたくらみ（＝グランドデザイン）」が描かれている。

*「こんなことを書きました（その2）」2009-02-02：本記事です。2009-01-20 から 2009-02-02 の文章 14 本のダイジェストです。

以上です。

第 2 部 09.02.03～09.02.16

09.02.03 1 カ月早い、ひな祭り

◆1 カ月早い、ひな祭り

2009-02-03 10:58:04 | Weblog

よく「人面○○」と、言いますね。あれって、おもしろいですね。犬や野菜などの、動物や生物一般。岩や石などの、無生物。ちょっと変わったところでは、「人面瘡（じんめんそう）」とか、「人面疽（じんめんそ）」なんていう言葉もありますね。瘡も疽も、できものや腫れ物を指しますから穏やかではありません。どうやら、ヒトという種は、

いろいろなものに仲間の顔を見ちやう、

という習性があるようです。困ったもんですね。いや、困ることはないですよ？ その想像力＝創造力に、驚嘆するべきかもしれません。すごいなあ、と。実際、すごいですよ。心霊写真なんてものも、「人面○○」とダブるものがありそうです。テレビによく出てくるオオツキ先生とかいう人なら、明快にその類の錯覚を説明してくださるにちがいません。

自分も、頻繁にいろいろなものに「顔」を見ます。見慣れたものに、多いような気がします。たとえば、トイレの壁の模様の一部が、そうです。見るたびに、ドキッとします。

あそこが目、あそこが鼻、あそこが顎、あそこが口

という具合に。似たような経験がありませんか？ そうですか、やっぱり、ありますか？ よかった。トイレの壁だけじゃなく、見慣れた天井のシミでも、同じような思いをする

ことがありますか？ ありますよねー？「ある、ある」って言っていただくと、精神的に落ち着きます。「ああ、よかった。自分だけじゃなかった」なんてふうに。うつ以外に、これ以上、あまり背負い込みたくないんです。はい。

「人面○○」はヒトが見るものだとすれば、お面や仮面は、そのものズバリ、ヒトが意図して作るものですね。能面ぐらいになると、かなり高価だし、国宝級のものもあるでしょう。世界中のヒトたちが、お面を作っています。もとは、ラスコーやアルタミラの洞くつの絵みために、描いていたのでしょうか。それとも、ヒトの顔に似ている石ころや岩や木切れを見ているうちに、少し細工してみたり、土や砂や粘土をこねて顔を作って、「ほほーっ」とか「ぎゃははーっ」とか「ひえーっ」とか、騒いでいたのでしょうか？ お絵かきか工作のどちらが先、という問題ではなく、同時発生的に起こったと考えていいような気がします。

で、そういうのが高じると、人形に行き着くって感じがしませんか？ 一カ月後は、ひな祭りですね。3月3日。耳の日と重なります。自分は難聴者なので、3月3日が近づくと、新聞やテレビで、やたら補聴器の広告やCMが入るのを敏感に察知します。敬老の日が近づくと、やはり同じような気配を覚えます。きょうは2月3日なので、

1 カ月早い、ひな祭り

をしてみましょう。うちには女の子がいないので、ひな祭りはしませんが、あの雰囲気はいいですね。小さいころ、女の子の家に呼ばれていってお菓子や甘酒をごちそうになったことを思い出します。おひな様も、男女の内裏びなだけを飾るごく質素なものから、ひな壇とセットになっている、車一台が買えるくらいの豪華なものまで、ありますね。

懐かしいです。あれは、きれいでした。今、気づいたのですが、過去20年間は現物のおひな様を見たという記憶がありません。自分の場合、縁がないのです。最後に見たのも、デパートでしたもの。それも、補聴器メーカーの相談会がデパートで催されていて、たまたまおひな様のディスプレイを見かけただけの話です。「あれは、きれいでした」と書いたのは、デパートで見たおひな様のことです。

がらりと話は変わりますが、「タモちゃんのお代理様」とかいうコーナーが、「笑っていいとも！」でありましたね。何とか小雪とかいう人とタモリが、視聴者の相談に答えるという企画だったような覚えがありますが、あれってかなり昔の話でははずです。そ

う思うと、あの番組も、長寿番組ですね。Time flies. =光陰矢のごとし。うーん。思わず、うなってしまう。でも、なんで、お「代理」様なんでしょう？ 視聴者の代理として、疑問に答えるからでしょうか？ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞=感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

ではないか？

「タモちゃんのお代理様」

です。

覚えていらっしゃるでしょうか？「お代理様=お内裏様」だったのでしょうか？ 意味深ですね。「表象の働き」、つまり、Aの代わりに「Aではないもの」を用いること。これは、当ブログの一大テーマなのです。あっ！（※またもや、何とわざとらしい感嘆詞=感動詞であろう！）、ここでお断りをしておきます。上の記述は、宗教とはいっさい関係はございません。誤解なきよう、お願い申し上げます。なお、「なぜ、断っているのだろう！？ 誰に気を使っているのだろう！？」と疑問に思われた方、不要な詮索をして、グーグルとかで「お代理様」とか、検索なさらないようお願い申し上げます（※「そう言いながら、読者を誘導してるじゃないか」。今のは幻聴です。このところ幻聴さんがよく出てくるのです、はい）。で、ちょっと微妙な問題があるのですが、ここはあっさり忘れましょう。Forget it.

今、思い出しましたが、英語でネイティブスピーカーと話をしていると、相手が、よく Forget it. と言いませんか？「そのことは忘れろ」ですよね。何だか馬鹿にされたような気持ちがして、あのフレーズは好きではないのですが、話がややこしくなって説明に困ると、Forget it. と吐き出すように言いますよね。でも、あまり悪気はないみたいですよ。「まあ、それはさておいて」「いいじゃん、そんなこと」「大したことじゃないよ、話を変えよう」「それよりねー」ほどのニュアンスみたいですよ。好意的に解釈すればですけど。

そうそう、人形の話をしていたのです。その前は、お面の話。「面」という言葉に、

自分はとても興味があります。さきほど触れた「表象の働き」と、大いに関係があるからです。「そのものズバリだ」と言ってもいいほど、深い関係があるからです。もちろん、冒頭の人面〇〇とも、つながります。

「面（※めん・おも・おもて・つら）」の「中心的イメージ＝コアイメージ」を見てみましょう。専門家ではないので、大雑把にいきます。面倒な方は、読まずに飛ばしてください。

(1) 顔、つら、こんにちは、あら久しぶり、顔をあわせる、あう：「人面」「顔面」「赤面」「強面（※こわもて）」「渋面」「臆面」「細面（※ほそおもて）」「馬面（※ばめん・うまづら）」「満面」「泣面（※なきつら）」「仏頂面」「素面（※すめん・しらふ）」「鬼面（2）ともダブる」「洗面」「面会」「面接」「八面六臂」「面前」「面持（※おももち）」「面相」「面罵」「面談」「面識」「面通し」「面割り」

(2) お面、マスク、顔にかぶる、いないいないバー、恥ずかしーい：「仮面」「能面」
< 剣道の「面！」 > 「鬼面（1）ともダブる」「覆面」「防毒面」

(3) 人形は顔が命、大切なもの、人様に顔向けのできないの顔：「面子」「体面」「面目」「面皮」「面魂（※つらだましい）ここに入るのかなあ？」

(4) の（a）：うわべ、皮、丸出し、見たわね、外に出ているところ、おもて、見た目、外見：「側面」「表面」「裏面（※りめん・うらめん）（4）の（b）ともダブる」「文面」「水面」「外面」⇔「内面」「額面」「矢面（※やおもて）」「面影（※おもかげ）」「面積」「四面」「反面」「半面」「多面」「全面」「局面（4）の（b）ともダブる」「背面（7）ともダブる」< そういう面での「面」 >

(4) の（b）：状態、状況、ありさま、「そういう面で」の面：「場面」「側面（7）ともダブる」「局面（4）の（a）ともダブる」「断面」「暗黒面」「裏面（※りめん・うらめん）（4）の（a）ともダブる」

(5) たいら、平面、のっぺらぼう：「平面」「月面」「地面」「路面」「海面」「斜面」「球面」「画面」「鏡面」

(6) ぺらぺら：「紙面」「誌面」「図面」「帳面」

(7) あっち向いてホイ、どれどれ、向く、向かう、いやん、嫌だよ、そむく、そむける、そっちの方を向いたところ、分野：「面責」「方面」「各方面」「経済面」「正面」「側面(4)の(b)ともダブる」「直面」「背面(4)ともダブる」

上の漢字の羅列を読んでもいただいた方、「お疲れ様でした」。読んでくださらなかった方、「お帰りなさい」(※「帰れ」という意味じゃないですよ、「ただいま」の反対です、念のため)。

漢字ばかり見ていると、目がしょぼしょぼしますね。とにかく、分かったことは、「面」のコアイメージはとは「かお」「つら」だということです。ちょっと「こわいイメージ」の言葉もありましたよね。そして、「人形は顔が命」というくらいですから、大切なものだということも分かりました。

さて、もしも、あなたの目の前に、いきなり、人の顔が「にゅーっ」と突然出てきたら、不気味ですよ。顔って、自分自身の首の上にもあるのに、なぜか気味が悪いんですよ。

どうしてでしょうか？

個人的な意見を申しますと、顔＝面＝皮膚＝皮で、「厚みがない」「薄っぺら」だからだと思えます。言い換えると、実体がないみたいに見える。まるで幽霊ですよ。のっぺらぼうのお化けですよ。ぺらぺらだから、被ることができる。身にまとうことができる。被り物です。つまり、自分でないものに「化ける」ことができる。逆に言うと、目の前に見えるものが、本当は「何か別のもの」が「化けている」ものではないか、とも考えられるわけです。

これって、やっぱり、

「表象の働き」

つまり、

Aの代わりに「Aではないもの」を用いること

と関係がありそうです。めっちゃくちゃ、こじつけてますよねー。でも、言えてませんか？
そんな感じしません？

というわけで、「仮面」とか「能面」は気味が悪い。最高に不気味なのは、デスマスク。デスマスクもマスクデス。1度ですけど、お能を観に行ったことがあるのですが、退屈で、途中で眠ってしまいました。また、能面を、これまたデパートの催しで、間近に見たことがあります。もちろん、展示してあるものでしたけど。確かに能面は、どこか秘密めいている。ミステリアス。神秘的。見る位置によって「表情」が変わって見える。実際、そんな気がしました。

ほら、真央ちゃんが、氷の「表面」をすべるときに、よくバックに流れるのが「仮面舞踏会＝ mascarade」（※もちろん、マスクと関係ありますね）という曲なのは、「シンボリック（＝象徴的＝表象的）」ですね。美しくて豪華だけど、それだけじゃない。何かがありそう、という感じ。

「表情」という言葉がありますね。これも個人的な意見なのですが、「表情」も一種の「仮面」だと思えます。文学的な言い方で、「表情をまとう」なんて表現もありますね。普通に言えば、「表情を浮かべる」でしょうか。真央ちゃんが、「氷上（ひょうじょう）」で切なげな「表情（ひょうじょう）」を「浮かべる」、なんていいですねー。メダルはもちろん、表彰状（ひょうしょうじょう）ものです。目に「浮かび」ません？

ここでのポイントは、表情は「浮かんでいる」ということです。要するに、内心は分からない。ベールに包まれている。真央ちゃんは、内心では、「あー、お腹がすいた。これ終わったら、チョコレートパフェをいっぱい食べたいなあ」なんて思いながら、切ない表情を氷上で浮かべているのかもしれない。

やっぱり、「表情」は「仮面」じゃないでしょうか。真央ちゃんで思い出しましたが——個人的な「意見」はまだしも、真央ちゃん、真央ちゃんと、個人的な「趣味」に走るのは問題ですね、反省します——ああいうリンクという一種の「ステージ=舞台」では、観客との間が離れていますから、濃いめの「メイク=お化粧」をしますね。「化粧」は文字通り、「化ける」ことです。すると、「顔」=「面」=「表情」=「化粧」=「表象」という、つながりが見えてきました。同時に、これらの言葉とそれが指し示す物事が、どこか「あやしい=怪しい=妖しい=面妖(めんよう)」というイメージを漂わせているのも、何となく分かる気がしませんか？

「顔」=「面」=「表情」=「化粧」=「表象」に、もう1つ付け加えたいものがあります。それは、

かつら

です。広辞苑によると、「かつら」は「かずら」「かづら」でもあるとのこと。分かったずら？「かつら」も、一種の「表象」ではないか？ そう、にらんでおります。人形は顔が命。オヤジはヅラが命。政治家と公務員はおもてヅラが命。言えてる、のではないのでしょうか？

さて、「顔」の動きが「変化」して「表情」となって「浮かぶ」と、「表情」は「変わる」し「崩れる」こともある。「仮面」は「顔」に「かぶる」ものだけど、「仮面」自体もまた「表情」を「浮かべる」し、「まとう」こともある。「顔」に、おしろいとか口紅とかをいろんなものを塗って「化粧」をして「化ける」けど、「化粧」はいつか「落ちる」し「はげる」。(中略)ヒトは「はげる」と、「あたま」に「かつら」を「かぶる」あるいは「つける」けど、その「かずら」は「ずれる」し、または「落ちる」こともある。

どうして、こんなややこしいことになるのでしょうか？「おまえが、ややこしくしているだけだ」、と言われれば、返す言葉がありません。じゃあ、気のせいかな、と思いましたが、「いや、そうじゃないぞー」という、心のつぶやきも聞こえます。このややこしさを解くカギがあるとすれば、やっぱり、

「表象の働き」、つまり、Aの代わりに「Aではないもの」を用いること

あたりにあるのではないか？ どうして、「ヒトという種＝狂ったおサルさん」は、Aの代わりに「Aではないもの」を用いる、などという器用で奇特で奇妙なことに熱中するのでしょうか？

1つ考えられるのは、ヒトが地球で威張っていることと関係があるのではないかという、勘というか、「でまかせ」が頭に浮かびます。まだ、今述べたことは確証が得られないから「でまかせ」です。で、威張るというのは、文字通り、「権威」を体に「張る」こと。つまり、「虎の威＝衣を借りる」ということ。「虎の威＝衣」とは、雷さまが穿いている虎の「皮」のパンツと同じ。ありゃ、またもや「皮」が出てきました。めちゃくちゃ、こじつけると、パンツは「メンツ＝面子」に似ている。これくらいのダジャレなら、ジャック・デリダさんも、マラルメ師も、許してくれそうです。

そうか、ヒトは「面子＝体面＝面目」のために、表象をまとうのではないか。上で挙げた漢字ごちゃごちゃで言えば、(3)に当たります。(3)に、もう1つ加えて、「鉄面皮」。そう言えば、この記事の初めのほうで取り上げた、おひな様も偉そうにしているのではないか。実際、偉いお方らしい。内裏雛（だいらびな）は、高貴なお方のお人形。だから、ひな壇の上のほうで控えていらっしやる。

「ひな壇」とピラミッドは、司法・立法・行政には付きもの。代理、代行、代議士、代表、総代が、うようよ。ハンコペたぺたのペーパーワーク。このへんが不明の方は、当ブログのバックナンバー、「あなたなら、どうしますか？」2009-01-16、「やっぱり、ハンコは偉い」2009-01-17をご参照願います。面倒な方は、このまま引き続き、どうぞ。「ひな壇」は「虎の威＝衣＝位」とセットで、クラス分け、棲（す）み分けして、暮らすわけ。これが代々続けば、2世、3世、そして、世襲。仲間うちで譲ったり、譲り合えば、天下りや渡り、渡る天下に鬼はなし。

蛇足ながら、「虎の威＝衣」は「虎の位」でもあり、ピンからキリまで、枚挙にいとまなし。フェイクファーのパンツから、スマトラ産の超高級品の上下一式の被り物のまで、多岐にわたる虎の皮。引退後は、民間人をさておいて、真っ先に褒章、勲章までもらえる。ワッペン張って、大威張り。首から下げて、涙腺を緩めるのが、最後のご奉公。なんで、これがご奉公？ 公僕、最後のご奉公？ ここまで来ると、もうめちゃくちゃではないか？ それなのに、庶民が一揆を起こしたり、騒がないのも、究極には「表象の働き」の奥深さがあるからではなからうか？ もっと考えてみたいけど、きょうは、それ以上考える暇なし。貧乏暇なし。なるほど、

「タモちゃんのお代理様」

は、やっぱり言えていると思う。言えてるどころか、きっとそうに違いない。「でまかせ」ではなく、「言えている」とか「きっとそうだ」にしてもいいでしょうか、偶然と必然のオーソリティー（＝権威）だったマラルメさん？ ここで権威にすぎた自分が情けない。それはともかく、ヒトよりも、もっともっと偉い存在がいて、ヒトはその代理を務めたいという、願望、欲求、祈り、野望、を持っているのではないのでしょうか、マラルメさん？ Aにはなれないから、Aの代わりを演じます。Aみたいな顔をしてみます。Aの仮面をかぶり、表情を真似て、時にはお化粧もし、かつらを着けたりもしてみます。

どうです、似合うでしょうか？ 様になるでしょうか？ だって、これだけ化ければ、〇〇様なんて、呼ばれるんですもの。偉く見えるんですもの。いいじゃないの。

という具合に、偉く見えるから、崇め奉られる。ちやほやされる。甘やかされる。

「どうか、雨が降って豊作になりますように」、「作物が駄目にならないように、大雨が止みますように」、「ニワトリとブタが増えますように」、「隣村の馬鹿どもが攻めてきませんように」、「今度の戦（いくさ）に勝てますように」、「あいつとの賭けに勝てますように」、「おとうさんの怪我が早く治りますように」、「娘がいいところにお嫁にいけますように」、「亡くなった後に天国に行けますように」、「元気が出ますように」、「長生きができますように」、「死ぬ時には痛くありませんように」……

じゃーん！

「お任せあれ。任せとき。だいじょうぶ。ところで、あれは、ちゃんと用意しているかな？ この間は、ちょっと少なかったぞよ」

万が一、でまかせが当たらなかつたり、何かとんでもないことが起きて、都合の悪くなったときには、仮面を外し、お化粧を落とし、表情をしおらしくして、かつらもとって、わたしは代理ですと言って責任を転嫁すればいい。または、「あんたの信心が足りんからじゃ」と、これまた、責任を転嫁すればいい。「代理人＝代行者」は、気楽で、いい商売だわい。

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

きょうは、節句で豆まき。うちは、というか、自分の場合には、先週、魔物に魅入られたため（※「もしかして、出来レース？」2009-01-29、「カジノ人間主義」2009-01-30）、お祓いをして、鬼は追い出しました（※「コラボログとモノブログ」2009-01-31）。ですので、きょうは

1 カ月早いひな祭り

みなさん、甘酒や菱餅や雛あられを召し上がれ。五人ばやしの笛太鼓。きょうは楽しくやりましょう。

なぜか、ここで、はっと我にかえりました。取り乱しまして、申し訳ありません。

あやうい。自分の正気に自信がなくなってきました。でも、本気です。大丈夫です。だからこそ、なお、心配とも言える。

もしかすると、先週のお祓いの効き目がなかったのかもしれませんが。それほど、魔物は手強いということでしょうか？ そうですよ。考えが、甘いですよ。孤立無援の自分としては、ひとりで次の対策を練るしかなさそうです。

ま、いっか。ぼちぼち、やります。とりあえずは、素直に、豆まきのための豆を買いに、これからスーパーに行くつもりです。

09.02.04 神様になる方法

◆神様になる方法

2009-02-04 10:10:18 | Weblog

きのうは、滑りまくりました。ずれまくりました。ブレまくりました。徹底して表面を滑るだけにして、表面下へは決して潜らないように気をつけながら、滑走しました。なにしろ、相手が「面（※めん・おも・おもて・つら）」でしたから、つるつるです。てかてかです。ひどく取り乱してしまい、今、思うと恥ずかしいです。1カ月早いひな祭りをやろうとして、ありもしない甘酒に、酔ってしまったのかもしれませんが。自分は、お酒はまったく駄目なんですけど、酔っ払っちゃいました。失礼しました。で、簡単にまとめると、きのうは、

「顔」＝「面」＝「表情」＝「化粧」＝「かつら」＝「表象」

という、お話をしました。ピンと来ない方は、別にきのうの記事を読んでいただかなくても大丈夫です。読んでいただければ嬉しいですけど、恥ずかしくもありますので、読まないでください。きょうはきょうで、お分かりいただけるように努力して書きます。

きょうは、

ヒトは嘘つきだ

というお話をしたいのです。「嘘をつくこと」は、ヒトだけが占有しているものじゃありません。テレビで放映されている生き物関連の番組を見ていると、各生き物が、独自のやり方で「だましたり」「化けたり」「おどしたり」「隠れたり」「隠したり」「逃げたり」しています。言い換えると「詐欺」「偽造」「偽装」「恐喝」「潜伏」「隠匿」「遁走」みたいなことをやりまくりながら、弱肉強食の世界を生き延びていますね。おもしろいです。

けなげです。したかかです。

でも、今、生き物について、上で述べたようなことって、嘘なんです。なぜかという
と、ヒトである自分が、生き物について勝手に、

言葉を使って、たとえば

だけ、だからです。「たとえば」から嘘なのです。「ん？ それってどういう意味？」と思
われた方もいらっしゃると思います。きょうは、そういうことについて書いてみます。

というわけで、きょうは嘘について書くのですが、ヒトと他の生き物たちとの嘘の
違いは、言葉も使うかどうかの違いです。「言葉も」の「も」に注目してください。ヒト
は、欲張りですから、他の生き物たちと同様に、体を張って嘘をつくのに加えて、言葉
「も」使って嘘をつくのです。なかなかのワルですね。ワレながら、そう思います。で、
嘘って何でしょう？ このブログでは、ほんどの話は、

Aの代わりに「Aでないもの」を代用するという仕組み=からくり

に落ち着きます。金太郎飴みたいに、ワンパターンなのです。はい。それなりにバリエー
ションがたくさんあるので、話の種（たね）の心配は要らないのですが、パターンは同
じです。この「ワンパターン」というものは、「文体」と言っても間違いじゃないような
気がしますし、ユーミンの曲が、どれもユーミンしているみたいに、コムロさんの曲が、
どれもコムロさんしているみたいだと言えば、分かっていただけでしょうか？

そんな感じなんで、これからも、未永くよろしく。なんて、変な挨拶をここでしてし
まいました。で、話を比喩に戻しますと、比喩が「たとえ・たとえること」だというのな
ら、やっぱり、比喩とは一種の嘘をつくことだと思います。

きみは（or あなたは）、ぼくの（or わたしの）太陽だ。

などと言えば、

ばーか

と、言われるのが落ちですよ。 「A=B」という具合に、「ずばり」と、たとえるのを「隠喩=暗喩=メタファー」と言います。聞いたことありませんか？ いずれにせよ、「ばーか」なんて言われると、心がメタメタに傷つきますね。その一方で、

きみは (or あなたは)、ぼくの (or わたしの) 太陽みたいだ。

などと言えば、やっぱり、

ばーか

と、言われるのが落ちですよ。 「A=Bみたい (or Bのようだ)」という具合に、「ワンクッション置いて」、たとえるのを「直喩 (=シミリ)」と言います。聞いたことありませんか？ とにかく、「ばーか」なんて言われると、情けなさが心にシミイりますね。トホホホという感じです。

比喩と言うと (※今気づいたのですが「ひゆという」とって、なんだか発音しにくくありませんか?)、いくつかあります。今、上に挙げた直喩 (=シミリ) と、さきほど挙げた隠喩=暗喩=メタファーくらいが、メジャーです。でも、もっとあるんです。いちおう名前だけでも、ご紹介しておきます。

以下に挙げるのは、比喩というより、「レトリック (=修辞法) =口八丁手八丁=言葉を使えば何とでも言える」と言ったほうがいいかもしれません。換喩=転喩 (=メトニミー)、寓意=諷喩 (=アレゴリー)、提喩 (=シネクドキ)、皮肉=反語 (=アイロニー=イロニー)、誇張法 (=ハイパーボリ)、異義反復法=同語異義復語法=別義同語反復=駄洒落 (=アンタナクラシス)、緩叙法 (=ライトティーズ)、撞着語法 (=オクシモーション)、対照法=対句 (=アンチテーゼ)、迂言法 (=ペリフラシス) などなど。

ヒューって、感じですよ。ヒトが言葉というおもしろい玩具 (おもちゃ) を手にし

てから、いろんな嘘をついたり、いろんな言葉遊びをして、口達者になってきたという経緯を示す「生きた証拠＝生きた化石」みたいなもの。それが、広い意味での比喻です。ヒトは英語でヒューマンとも言いますが、まさにヒューマニズムですね。

今となっては、比喻なしに、ヒトは存在できない。これは過言ではありません。実は、自分は、上に挙げた比喻とかレトリックが好きなんです。大好きです。このブログ日記は、上に挙げたような嘘やお遊びに満ち満ちています。話を広げすぎると收拾がつかなくなりそうなので、やっぱり、メジャーな直喩と隠喩くらいの意味での

比喻＝たとえ・たとえる

に絞って、単純明快に話を進めませんか？ 比喻、ひゅ、ヒユ、ヒュー、ヒューヒュー。あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

ではないか？

「ヒューヒュー」

これで、誰を思い出します？ 朋ちゃんですよ、たいていは。桃の天然〇とかいう果汁飲料のCMで、華原朋美ちゃんが唇をとがらせていた、あれです。でも、「森口博子のクイズでヒューヒュー」という、テレビのクイズ番組もありましたね。「ヒューヒュー」をグーグルなんかで検索すると、まだまだいっぱい使用例が出てきます。桃の節句も近いことだし、博子ちゃんよりも朋ちゃんのほうが、最近、元気ないみたいだし、きょうは朋ちゃんに花＝華を持たせてやりましょうよ。ヒューヒュー。

で、

比喻

です。

これは、本来なら、使用するさいに、かなり注意しなければならないものです。だって、上の2つの「ばーか」の例で見たように、Aの代わりにBを使うんですよ。とんでもないですね、よく考えると。これって嘘ですよ、やっぱし。だから、相手がAの話をしているのに、いつの間にかBの話に移っている時には、気をつけましょう。

相手が意識的に、Bの話でズルをしたり、だまそうとする場合が非常に多いからです。政治家や評論家の話なんて、ほとんどが、これです。だから、油断できない。オトナがコドモに話すときも、こういうズルをよくします。ある人が別のある人を、馬鹿にしていたり、自分のほうが、頭がいいなどと思っている場合にも、こういうズルをします。

もっとも、相手がAの話をしている、Bの話にたとえた時に、話している本人が無意識のうちに混乱してしまい、話がBだかAだか、AだかBだか、その両方だか、わけが分からなくなることも非常に多いです。聞いているほうも、一緒になって混乱している場合も非常に多く見受けられますね。話がこんがらがるとつれます。難しいですよ。だって、もとの「言葉というものの自体」が、

Aの代わりに「Aでないもの」を代用するという仕組み=からくり

なんですから、こんがらがるとも当然と言えば、当然なのです。寝癖でくしゃくしゃになった髪を、抜け毛だらけの手入れをしていないヘアブラシで、整えようとするようなものです。ちなみに、今のも比喻ですね。「直喩 (=シミリ)」です。こういう、面倒な事態に陥るとき、ヒトが悪いと言い切ることはできないと思います。かといって、同情する気には、なれませんけど。自業自得、自己責任を果たそう、です。

ところで、最高で最強で最悪の「比喻=たとえ=嘘」って、何だかご存知ですか？

神 or 神々

にたとえることです。たとえるのですから、たとえられるものが、神様や神々でないことは言うまでもありません。この部分、あっさりと書きましたが、とても大切なことなのです。忘れないでくださいね。再度申し上げます。

たとえられる対象は、神様じゃない

んです。

「〇〇の神様」という言い方がありますね。例を挙げましょうか。小僧の神様（※不明の方は無視してください）、小説の神様、エンタの神様、パチンコの神様、将棋の神様、レゲエの神様、株の神様、学問の神様、演歌の神様、サッカーの神様――

ここでお断りしておきますが、今、挙げているのは、すべてが「比喩＝たとえ」です。「〇〇教の神様」という意味では、全然ありません。したがって、特定の宗教の話はしておりません。誤解なきよう、くれぐれもお願い申し上げます。では、続きを。

――縁結びの神様、FXの神様、コーチングの神様、恋の神様、釣りの神様、テニスの神様、音楽の神様、お笑いの神様、翻訳の神様、顔芸の神様、ロックの神様……

ヒューって、感じですよ、やっぱし。

おっと、忘れるところでした。「若者たちの神々」なんて、故・筑紫哲也氏が、ある雑誌に連載していましたね。昔のことです。懐かしいですね。いろんな分野の神様が続々と登場しましたね。あの人たちは、今どこで何をなさっているのでしょうかね。

今、気がついたのですが、「〇〇の神様」は、(1)「〇〇の達人」と、(2)「〇〇という部門を担当する超越的存在」の2つの意味がありますね。自分は素人ですから、気にせずに進みます。

で、こうやって「神様たち」を見ていて、つくづく思うんですけど、自薦他薦を問わず、「〇〇の神様」って呼ばれる、または呼ばれた人って、大変なんじゃないでしょう

か？ フォークの神様、なんていましたが（※いますが）、傍から見ていると、すごくしんどそうでした。実際、苦勞したみたいですね。苦勞するのは、たいてい他薦の場合のようです。

そうそう、同時通訳の神様なんていたことを、思い出しました。今では同時通訳なんて珍しくもないですが、この国では、ヒトが月に初めて仲間を送り込んだ時に、同時通訳が脚光を浴びました。

アメリカのフロリダ州にあったNASAの本部と、司令船コロンビア、そしてイーグルという名の月着陸船との間で、ノイズの多い音声を交信し合うのです。そのやりとりをライブで（※そうではなかったという噂もあります）、英語から日本語に同時通訳する。きっと、苦勞しただろうと思います。聞き取りにくかったでしょうね。

「こちらヒューストン」というNASAからの言葉が、流行語にもなりました。あの飛行で、確か月の石（＝ストーン）を持ち帰ったのでしたね。ヒュー、ストーン、なんちゃって。今のダジャレは、比喩の神様が、いたずらしたのではないのでしょうか？ こうやって、責任転嫁できるのが、表象の特徴です。

で、その時に同時通訳をした方の一人の本を、この出来事の数年後に買いました。英語の勉強のために買ったのです。その本の著者略歴を読んで、笑っちゃいました。著者略歴って、だいたい自分で書くんです。その人は、自分のことを「同時通訳の神様」って書いていたんです。

すごいですね。その人の別の本には、「その同時通訳は神技とも言われて」みたいなことが書いてあって、また笑っちゃいました。すごい自薦ぶりですね。自分を神様にしてしまうんですから。でも、両方ともいい本でしたよ。とても勉強になりました。ところで、あの人は今？

ただ今挙げたフォークと同時通訳の2つの「神様」の例からわかるように、「○○の神様」というのは、自薦あり、他薦あり、苦勞あり、自己満足あり、みたいです。とにもかくにも、

神様になる方法

というのは、それほど難しいことではないと言えないでしょうか？ ちょっとした運や拍子で、うまく時流に乗ると、まわりから崇め奉られてしまう。逆に言えば、タイミングを外さず、うまくやれば、簡単に神様になれる、のではないのでしょうか？

あとは、強力なバックアップ、こまめなサービス、パフォーマンスのうまさ、マーケティング力、そしてそこそこの実力さえあれば、あなたも、「何かの神様」になれるかもよ。あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

の第2弾ではないか？

「あなたも EEE すると、社長になれる——かもよ！」

とかいう決めセリフを吐いていたのは、「宮尾すすむ」さん、でした。民放のモーニングショーで、「宮尾すすむのああ日本の社長」とかいうコーナーがあって、宮尾さんが全国の、ちょっと変わったキャラクターの会社社長や創業者を訪ねるという企画でした。会社の様子・規模・歴史と、社長の日常生活・苦労話などを絡めて、おもしろおかしくレポートする。そして最後に、社長になる秘訣をその社長さんに聞いて、上のセリフで終わる。そんなパターンでした。気になる方や懐かしく思われた方は、グーグルとかウィキペディアで検索してください。

では、きょうの話をまとめます。

神様になる方法は、案外簡単かもよ。

ということと、神様になるためには、前提として、

神様であってはならない

ということです。あくまでも、

代理人、代行者

でなければなりません。当たり前ですが、すごく大切なことですよ。忘れないでくださいね。くれぐれも、だまされないでくださいね。ヒトはヒトですよ。ヒトは、忘れっぽい生き物なのですよ。分かっている、分かっていく生き物なのですよ。このことについては、当ブログ日記のこれまでの集大成である「カジノ人間主義」2009-01-30 をお読みいただきたいのですが、面倒な方はお読みにならなくても、いっこうに事態は変わりませんので、無視してください。

もう1つ、きょうはおまけを付けます。かみさまになる方法を、もう1ヶ紹介いたします。どうすれば、なれるのでしょうか？ 今、かみさま、とひらがなで書いたことが、ヒントです。簡単なんです。まず、お店に行きます。何かを買います。その時に、

領収証（＝領収書）をもらいましょう！

そして、「お宛名は、どうお書きしますか？」と尋ねられたさいには、『うえ』で、けっこうです」と言うだけでけっこうです。じゃあーん！「上様」の出来上がり。「うえさま」、あるいは「じょうさま」というのは、敬（うやま）った言い方です。

辞書によると「由緒ある」日本語みたいです。「上」は「お上＝おかみ」という意味ですね。相手の名前の「代わり」に「上」と書くのだそうです。ただし、こういうあいまいな宛名の領収証は、税務署が認めてくれないのが普通です、たぶんですけど。とにかく、気をつけましょう。いかがなものでしょうか、「上様」は？

「そんなんじゃ、満足できねーよ。飲み屋や料亭や旅館の、おかみさん、みたいじゃねーか」

ですか？ まあ、何と欲深い、いや、アンビシャスなお方でしょう！ おかみさんだって、立派な職業じゃないですか。並大抵な苦勞じゃ務まりませんよ。ボーイズ、ビー・アンビシャス。ガールズ、ビー・アンビシャス。エヴリワン、ビー・アンビシャス。

ヒトは、アンビシャスだから、神様になりたがる。その結果、〇〇の神様が、やたらたくさんいる。きのうの日記でも書いたように、ヒトって、「面子」にやたらこだわり、「虎の威=衣=位」、「権威」、「代理」、「ひな壇」が、大好きなんです。

で、駄目押しに念を押しますが、きょうのお話は、特定の宗教とは一切関係がありません。「比喩としての神様」のお話でした。たとえば言うなら、「たとえ話=寓話」でした。たとえだから、一種の嘘なんです。フィクションなんです。紙芝居みたいなものです。作り話です。ですので、くれぐれも誤解しないでくださいね。自分には、人様の信仰について、とやかく言う気持ちは、まったくありません。

で、寓話には、教訓というものが、たいてい付いています。きょうのお話が、少しでもみなさんのお役に立てていただければ幸いです。えっ？ ぜんぜん役に立たなかったし、参考にもならなかった？ やっぱしね。でも、それを聞いて、安心もしました。ブログ日記を書く時には、なるべく役に立たないように（=与太話や馬鹿話になるように）、いつも気配りをしながら書いております。いずれにせよ、失礼いたしました。また、来てください。お待ちしております。

09.02.05 かつらはずれる

◆かつらはずれる

2009-02-05 10:44:33 | Weblog

きのうは、星ヒューマじゃなくて、ヒューマ = humor = ユーモアじゃなくて、ヒューマ = ひゅま = 比喩魔について、書きました。あれ、いつの間（ま）にか、比喩に魔（ま）が付いているとお思いになった方もいらっしゃると思います。

実は、きのうの記事を書いたあと、調子がよくなかったので、処方されたお薬を飲んでうとうとしていたところ、うなされちゃったんです。お察しの通り、魔が憑（つ）いたんです。神様だとか、嘘だとか、比喩だとか、書いていたせいでしょうか？

ちなみに、自分は神仏を信じておりませんが、言霊（ことだま）というものだけは、信じるまではいきませんが、そうとう気になっています。というか、怖いんですよ。冗談ではなく。言葉は「言の葉」ぐらいだと、ぺらぺらしてかわいいのですが、「言霊」となると、穏やかではありません。

で、きのうテーマにした比喩というものは魔物ではないかと思い、「比喩魔」と上で書きました次第です。こういう場合には、いちおう、グーグルで検索してみる習慣をつけております。で、「比喩魔」で検索すると、99のヒットがあり、またまたびっくりしました。言霊にたたられると怖いので、ヒットしたサイトを見ることさえ控えておきました。

で、今、頭に浮かんだのが、「学魔」です。「学魔」と呼ばれているのは、博覧強記の高山宏氏ですが、この人については、当ブログ日記のバックナンバー「翻訳の可能性＝不可能性」2009-01-05で触れました。昔、短期間ながら、大変お世話になった方です。今思えば、自分に大きな影響を与えた人の1人です。あの方の「言葉遊び＝レトリック」もすごいです。半端じゃない。自分みたいな不勉強な者には、さっぱり分からないダジャレやギャグに満ちた文章をお書きになります。ジャック・デリダ、ジャック・ラカンに匹敵する、と言っても過言ではありません。ご興味のある方は、ぜひ、ググったり、ヤフったりしてみてください。キーワードは「学魔」と「高山宏」です。

で（※「で」が多くて、ごめんなさい、癖なのです、これがないと言葉が「で」「ない」のです）、学魔さんですが、現在どうしていらっしゃるかが気になりまして、いろいろ検索してみましたが、今一つ確かな消息がつかめません。学魔さんのブログを見つけて歓喜したところ、もう閉鎖になっていたり、職場もお変わりになられたようです。この文章をお読みの方で、学魔さんの正確な現在の消息をご存知の方がいらっしゃいましたら、ご一報いただければ幸いです。

突然ですが、比喩魔のお祓いのために、ここで学魔さんのお力を借りて、儀式をとりおこないたいと思います。ちょっと前まで、このブログ日記で盛んにやっていた、計算をします。これが、案外、悪魔祓いに効くんですよ。これまでの経験から申しまして。で

は、いきます。学魔>悪魔。つまり、学魔さんのほうが悪魔よりも偉いので、引き算になります（※どういう、こっちゃ？ めちゃくちゃで、ございますが）。

学魔 - 悪魔 = がくま - あくま = ! ?

どうしよう？ 解けない！ 式は、正しいはずなんですけど。悪魔に魅入られた心の動揺をしずめて、検算してみます。

学魔 - 悪魔 = がくま - あくま = gakuma - akuma = g = G

g = G と出ました！ ジー？ ジイ？ これって、ひょっとして、Gee! かいな？ ほんまかいな？ 英語の間投詞=感嘆詞=感動詞ではないかいな？ 人によりますが、英語のネイティブスピーカーの口から出てくるのを、よく聞いたことがあります。Jesus Christ (= ジーザス・クライスト) の Jesus (= ジーザス) の先っちょです。おそれ多いので、先っちょしか、言わないのです。いろいろな場面で使われます。お下品、あるいは、不用意で不謹慎な言葉と考える方々も、大勢いらっしゃいます。でも、しょっちゅう使われている罵倒の言葉です。

g = G は God や gods の g = G とも、とれますね。Oh, my God! も、口にする人と、口にしない人がいます。理由は、上述の Gee! と同じです。英語ではありますが、言葉の核心に触れてきましたね。やはり、計算式に誤りはなかったみたいです。ほっとしましたよ。

そうですか？ そうなんですよ、カワサキさん。学魔さんには、悪魔にはないものが、やっぱりあったのですよ、カワサキさん。学魔さん、どうもありがとうございました。おかげさまで、力がわいてきました。

納得しました。これでお祓いは済みました——。「ん！？ そんなんで、終わったの？」無事に終わりました、カワサキさん。深い意味があったのです。これは、言葉にできません。言葉にしちゃうと、せっかく祓ったものが、またとり憑きます。憑依（ひょうい）します。言葉にしてはいけないものって、やっぱり、あるんですね。「どういう、こっちゃ？ めちゃくちゃで、ございますが」。

これでいいのです。

触らぬ神に祟りなし。

これがせいぜい、今の自分に言える精一杯の説明です。ヴァイトゲンシュタインさんやゲーデルさんのお力を借りるまでもありません。またもや取り乱し、失礼いたしました。

*

で、きのうは、おとといの、

「顔」＝「面」＝「表情」＝「化粧」＝「かつら」＝「表象」

から出発して、

神様 → 上様

と話が展開しました。

きょうは、面（＝めん、お面の面です）なら「ずれる・おちる」、表情なら「くずす・くずれる」、化粧なら「はげる・おちる」、「かつら」なら「ずれる・おちる・むれる」という一連の現象について考えてみたいです。その中で、特に「かつら」を例にとって、お話を進めたいと思っています。理由は、のちほどお分かりになるはずです。で、

「かつらはずれる」

です。たった今書いたひらがなの羅列を、音読してみてください。どう、お読みになり

ましたか？ 広辞苑によりますと、「かつら＝かづら＝かずら」という歴史的経緯による「ずれ」があったようです。ですので、次のように読まれる可能性があります。

「かつらは、ずれる」、「かつら、はずれる」、「かづらは、ずれる」、「かづら、はずれる」、「かずらは、ずれる」、「かずら、はずれる」——1つ言えることは、とにかく、「ずれる」ことには間違いがないようです。

少なからぬ方々にとっては、DNAが命令しているらしい「はげる」が宿命ならば、それを誤魔化するために「はげむ」限り、ズラからズラかることはできないようズラ。

「もう、よしてくれよー」という叫びが聞こえそうです。ご気分を害された関係者の方々に、深くお詫び申し上げます。で、かつては「かづら」があったのだから、ひょっとして、「づれる」も、あったりして……。気になるので、調べてみます。

「調べなくたっていいよ。お願いだから、もう勘弁してよー！ もう（＝毛）、止めてくれー、もう（＝毛）、この問題は、はずして（＝「はずれる」のきょうだいである「はずす」の活用形）くれー！」

少々、お待ちください――

今、調べてみたところでは、少なくとも、広辞苑には「づれる」はありませんでした。ご安心くださいませ。

もう（＝毛）、終わりだね。これで、本望（＝本毛）だ。

と、書いている自分も他人事ではありません。鏡を見るたびに、「はあーっ」と、ため息をついたり、「時間よ～、止まれ～！」（永ちゃんの歌のさびです）と、心の中で叫び声を上げております。はい。そうなんですよ、カワサキさん。あっ！ むむっ！（※きょうは、ちょっと変化をつけましたが、いずれにせよ、何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

ではないか？

「そうなんですよ、川崎さん」

ご記憶の方、いらっしゃいますよね？漫才コンビの「ザ・ぼんち」の「おさむちゃん」のギャグです。もっとも、これは、昔、正午過ぎに民放でやっていたアフタヌーンショーとかいう番組での、山本耕一さんのパクリなんですけど。川崎さんというのは、その番組を司会していた川崎敬三さんです。

何か事件があったとき、それを山本さんが、凶面なんかを使ってレポートする。で、ちょっと間が空いた時などに、「そうなんですよ、川崎さん」と言って、間を持たせるといふ、なかなか味わいのあるやりとりだったと記憶しています。

いずれにせよ、かつらは、自分にとっても、とっても気になることなのです。他人事ではないのです。でも、残念ながら、自分には、

お金がない

という絶望的な状況があります。こればかりは、どうにもならない。背に腹は代えられぬ。親の年金にたかっている身としては、ちゃんとしたかつらを買うお金があれば、数カ月間、いや、1年以上は生活できそうです。お腹がすいているのに、かつらを買って面子を保つわけにはまいりません。背に腹は代えられぬ。だが、銭で、づらは買える。やっぱし、

お金がほしい。

駄目だ。そんな弱音を吐いている場合じゃない。で、きょう、お話したいことは、そうした金銭的な問題ではなく、「かつらが、ずれる」というさいの、

「ずれ・ずれる」

について、考えてみたい。哲学してみたい。ということなのです。哲学するには、抽象論から始めるのではなく、まず現状を見つめることが、このブログ日記のスタンスです。自分よりかなり深刻な髪の問題をおかかえになっていらっしゃる、特別ゲストをお迎えします。もう (=毛)、カミ (=髪) ング・アウトされている方です。

*

では、さっそくインタビューをいたします。

やっぱり、「ずれる・おちる・むれる」という現象は、やっかいな問題でしょうか？ セレブであられる使用者の総代 (=そうだい) として、お答え願います、キミマロさん。

「そうだい」

簡潔で要領を得たご返事に、脱毛、失礼、脱帽いたします。

ところで、きのうの新聞で、キミマロさんのお出しになった、ご本の広告を拝見しました。それには、いざとなったら、へ〇・ヌードになる、つまり、おはずしになるとか書いてありましたが、本当ですか？

「そのつもりは、毛頭ない」

さすが、現在、超売れっ子のキミマロさん。あっさりとダジャレで、お答えくださいました。そういう気持ちは、実は毛ほどもないということでした。ジャスト・ジョーク、らしいです。みなさん、キミマロさんには、もう、その気 (=け)、失礼、気 (=き) は無いようです。その気はない、となると、かなり、もう (=毛)、おもう (=毛) けになられたのでは？

「もうけなんて、ないよう。ほとんど、税金でもっていかれたよ」

そうですか、そんなもんですか？ それでですね、キマロさん――

「あんた、くどいよ。もう、そろそろ行かなきゃ、きょうは鬼怒川で、午後と晩の、2本のショーがあるんだ。時間がない」

そ、そうですね。もう（毛）、ないんですよね。＜だから、毛し分けができないのか（※独白）。＞失礼、申し訳ありませんでした。本日は、お忙しいところを、どうもありがとうございました。

*

さて、

最初にずれがあった。

で始まる本については、当ブログの「ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない」2009-01-06 に書いたことがあります。ご参照なさらなくても、けっこうですので、このまま読み続けてください。その日記でも触れましたが、「最初にずれがあった」で始まる本の現物が手元にないので、誤解を恐れず、素人として勝手に話を進めます。

で、何が何からどういう具合にずれたのかと申しますと、「と或る尻尾のないおサルさん（※ monkey ではなく ape です）」の脳の中で、何かわけの分からないことが起きて、「狂えるおサルさん」になったというお話なんです。誰も見たわけではないので、そういう紙芝居か、おとぎ話だと、お考えください。ここだけの話ですが、こういうことを書く時に、自分はこの国にいてよかったと、つくづく思います。おサルさん関係のお話は、某「スーパーパワー＝超大国」では、不用意には口にできないのです。現在ではスーパーパワーは、事実上、一国しかありませんので、どの国を指すのかは、バレバレですけど。

なぜ、おサルさん関係のお話が、その超大国でタブーなのかと申しますと、バイブルに書かれていることはすべて真実だと、本気で考えているらしい人たちがたくさんいて、

しかも、その人たちが政治的にも社会的にも、きわめて大きな影響力を持っているからなのです。銃を持つ自由が憲法に定められている国でもありますから、ヒトの先祖がおサルさんだなどという進化論的な言葉を口にする、かなり怖いことになるのです。この種の議論にさいしては、命がけで臨まなければならないのです。さらに、人工妊娠中絶、ES細胞＝胚性幹細胞、同性婚を話題にするのも、TPOや話す相手の考え方に気遣う必要があるとのこと。

で、今、申し上げましたように、あの国には、宗教的意味での「ファンダメンタリズム＝原理主義＝根本主義」が根強く存在してしまっていて、前政権では、そうとう幅を利かせていました。それが遠因となって、あるいは直接的な引き金となって、グローバルな影響力を持ついろいろな事件や出来事が起き、たくさんの命が失われる事態も招き、あの国を住みにくい国にしてしまったのです。なにしろ、ファンダメンタリストたちの中には、アルマゲドンも本気で信じている者も多数いるのです。おっと、こういうきな臭くて生臭い話は、このブログではしないのです。うつが悪化するからです。話を、おサルさんに戻します。

で、ここだけの話で内緒なのですが、「狂えるおサルさん（＝元・尻尾のないおサルさん）」は、実は「クルエルおサルさん＝cruel ape＝残虐なおサルさん」でもあったのです。その残虐性の結果、この惑星の「大将（※「お山の大将」の「大将」です）」になってしまったのです。「大将」と言えば、これまた某国にいる「將軍様」の「将」と一致しますね。同じヒトですから、一致して当然ですけど――。

――あっ、お狂えるサルさんが実はヒトだって、ばれてしまった！ ばらす、ばらさないも、もう、バレバレでしたよね。失礼しました。で、

要するに、ヒトは、ヒトとなった瞬間に「ずれてしまった」という話なんです。ねっ、かつらみたいでしょ？

「あれーっ、ずれちゃったー、どうしよー！」

その時には、そうは思わなかったようです、その狂えるおサルさんは。でも、だんだん、

「もしかして、わしら、ずれてるかもしれんぞよ」、「そうずら、そうずら」というふう
に考えるヒトたちも出てくるようになりました。そういうヒトたちの中には、哲学者、思
想家、宗教家、学者、悪魔、魔女、頭のおかしいヒト、過激派、アホ……などと呼ばれ
る方もいたらしいのです。怖いのは、そういうヒトたちが、宗教裁判にかけられたり、普
通の裁判にかけられたり、迫害されたことも、数えきれないほどあったようだ、という
ことなのです。

今、挙げたヒトたちの中に、政治家、王族、軍人、実業家、企業家、官僚、富豪といっ
た名がないのは、象徴的です。もちろん、ずれたおサルさんですから、両グループの
間でダブる、ブレる、ズレることもあります。とにかく、ヒトという種がややこしい生
き物であることは、確かですね。

で、思うんですけど、あらゆるヒトが根っからずれているとするならば、ずれを気に
することも、ずれを正そうとすることも、ずれを自慢することも、ずれを恥ずかしく思
うことも、ないのではないのでしょうか？

ずれ・ずれる = ≤ 0 = なんでもない

そんな感じ、じゃないのでしょうか？ ややこしいですか？ 簡単に申しますと、いっ
たん、ずれた以上、どうしようもない、ということです。みんな、ずれば、怖くな
い、恥ずかしくもない、ということです。ここまで来ちゃったのだから戻れないし、「ず
れた状態」を「ずれないでいた状態」に直すことなど、できっこない。そういう、意味な
んです。

で、途中ではございますが、ここで、ちょっとシリアスになります。襟を正します。話
を進めつつも、さきほどから、気になって仕方ないことがあるのです。

再度、謝罪させてください。きょうのタイトルと、上でいろいろ書いたことです。加齢
や、遺伝子によるものや、精神的・身体的疾患の結果、あるいはお薬や治療の副作用のた
めに、やむを得ず、かつらを使用されている方は多いと承知しております。上の記述で、
不快なお気持ちになられた方に対し、改めてお詫び申し上げます。ごめんなさい。

で、唐突ですが、話を、うんと飛躍させます。

反意語とか、対義語とか、反対語ってありますね。長い vs. 短い、真 vs. 偽、大きい vs. 小さい、正しい vs. 間違っている、暑い vs. 寒い……というやつです。これって、言葉なんですよ、よく考えると。表象です。表象作用です。つまり、

Aの代わりに「Aでないもの」を代用するという仕組み=からくり

という、このブログの金太郎飴、ワンパターンの登場です。ですから、このブログでは、今挙げたペアは、すべて、嘘=フィクション=作り話ということになります。だって、言葉は、ものでも、ことでも、概念でも、実体でも、ないんですもの。

というわけで、ポジティブの反対もネガティブなんかでは、ぜんぜんないわけです。だから、「ネガティブに生きる」なんて、平気でブログのタイトルにしているわけです。だから、この日記を読んでもくれる人が少ないのです。だから、読んでくれている人たちがいるらしいと、ランキングなんかで知ると、自分はとてもうれしくて涙が出るのです。だから、また長々と書きちゃうんです。

この気持ち、分かっていたら、うれしいです。(※またもや取り乱しまして、失礼しました。最近、少々、情緒不安定なのです。はい。)

さて、上述のように話を飛躍させたのには、実は理由があります。やはり、ずれ、つながらんですが、

『善悪の彼岸』

という本の名前を、お聞きになったことはありませんか？ 書いたのは、ニーチェという人です。「善 vs. 悪」という反対語の図式を「ひよいと」か「びよんと」か「ひゅっと」か「ばきゅーんと」か、知りませんが、とにかく、「越えて=超えて」してみたいたいのです。

自分は、その本の日本語訳を、かなり長い間持っていました。そして、辞書みたいに、

ところどころを拾い読みしていた時期がありました。でも、何が書いてあるのか、よく分かりませんでした。過去形なのは、どこかで無くしたからです。残念ながら、その内容については何も覚えていません。

ただ、その本のただならぬ気配と言うか、醸し出す雰囲気と言うか、それだけは、頭ではなく体が覚えています。

反意語とか、対義語とか、反対語なんて、嘘だ

と、体が覚えているのです。言霊恐怖症の自分としては、怖いのですが、いつか、この大問題について書いてみたいです。ヒトをヒトにならしめている、ずれの本尊である、言語＝論理を相手に、おふざけをしてみたいです。で、『善悪の彼岸』という本を書いた人が、次のように言ったそうです。

神は死んだ。

勇気ありますね。ちょっとやそつとでは、真似ができることじゃありません。大文字の God です。一神教の神様ですよ。小文字で複数の gods、つまり、寛大なお心をお持ちの、八百万（やおよろず）の神々のうちの、一部ではないですよ。ファンダメンタリズムの元祖みたいな人たちが、圧倒的多数だった時代に、よくもまあ、そんな大それたことを言うなんて、尊敬しちゃいます。ダジャレの神様の 1 人であった、ジャック・デリダ氏によると、God と「言葉＝ロゴス＝論理」には、ふかーい関係があるそうなんです。

紙、神、髪、加味、かみ、咬み、守、上、噛み、加美、香美、可美、カミ。

今、並べたのは、ウィンドウズについているワードというワープロソフトを使って、「かみ」と入力した結果です。言霊のおどろおどろしい気配を、ひしひしと感じますね。

言葉遊びが、いっぱいできそうです。うずうずします。でも、きょうは止めておきます。特に「髪」は止めておきます。なにしろ、「神は死んだ」なんて、大それたフレーズを引用してしまったのだし、「かつら」の話をしてしまったのだし、「ずれ・ずれ」なん

て話もしてしまったのですから。ここで、また取り乱したら、さきほど関係者の方々に謝罪した意味がなくなってしまいます。きょうは自重します。

で、最後に、おまけのサービスとして、さっき2回ほど、思わずつぶやいてしまった。ふるーい、ふるーい、死語をご紹介します。えっ？ お呼びでない？ そんなふうに、言われると、おまけが、もう1ケ、増えてしまうじゃないですかー。

もう、滅茶苦茶で、ごさいまするが――

自分が物心つくまえに、流行っていたものらしいのです。昔は、流行語やギャグも、今みたいに数カ月、早い場合には1カ月くらいの賞味期限だ、みたいなことはなかったようです。ですから、割と長く続いていた当時のギャグだったそうです。では、いきますよー！

あっ！ むむっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

の第2弾ではないか？

「めちゃくちゃで、ごさいまするが」

これは、「花菱（はなびし）アチャコ」という方のギャグだったらしいことを、ウィキペディアで突き止めました。ちなみに、男性です。うれしかったですよ。なんとなく、ぼんやりと覚えているけど、正確には分からない。なにしろ、幼いころの記憶です。「めちゃくちゃ？ まする？」とか何とか――何だっけ？ 何回か、グーグルで検索して、ようやく記憶の正体があったのです。突き止めたときには、すごく感動しました。こういう経験って、ありませんか？ グーグル、さまさまで、ごさいまするが。「お呼びでない？」は、また、いつか、やりまする。

きのうは魔に魅入られ、さきほどお祓いはしたものの、リハビリが完全には終わっていないために、きょうは特に読みにくい記事を書いてしまいました。

細かい字の長い文章に、この行までお付き合いくださった方、どうもありがとうございます。また、来てくださいね。

09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ

◆究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ

2009-02-06 11:00:15 | Weblog

きのうは、かつらの話をしました。で、あの記事を書いたあと、恥ずかしいんですけど、かつらがどれくらいの値段で手に入るのか、ググったりして一時間くらいを過ごしてしまったのです。結果は、トホホでした。高い！高すぎるー！

たかすぎ～、たかすぎ～

とかいうCMソングを思い出しました。建設会社あたりのCMだったような覚えがありますけど、最近聞きませんね。それはともかく、

もしも、お金があったら、買えるのにー！幸せと面子が、お金で買えるのにー！

と思いました。やっぱり、自分も、いっちょまえに「ヒトの子＝欲のかたまり」だわいな、ということを痛感しました。

で、けさ、思いました。もしかして、「もし」という言葉は、ヒトにとって、非常に重

要な意味をもつ言葉なのではないか？ 今週、ずっと、ああでもないこうでもないと考えてきたことと、深いつながりがあるのではないか？

「もし」をひっくり返すと、「しも」となります。今週は、「顔」＝「面」＝「表情」＝「化粧」＝「かつら」＝「表象」の副産物として、かみ＝神→上→髪という具合に、平行移動しました。で、「かみ」の「反対語」は「しも」ではないかいな。ゆえに、「かみ」と「もし」は「非論理的」に、ちゃんとながらぬではないかいな。と、めちゃくちゃこじつけました。

で、「神 → 上 → 髪」の3語の共通点は、とにかく「うえのほうにある」ということですね、「下にもあるじゃないか」と思われた方、ひょっとして hair のことではありませんか？ 英語では確かにそうですね。でも、日本語だと、あそこの場合には「毛」ですよ。髪」とは言いません。不思議ですね。いやー、言葉って、本当におもしろいもんですね。あっ！ むむっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

ではないか？

「いやー、映画って本当に面白いもんですねー」&「いやー、映画って本当にいいもんですねー」&「いやー、映画って本当に素晴らしいもんですねー」

「水野晴郎（みずのはるお）」さんの、お言葉でした。「金曜ロードショー」とか「水曜ロードショー」で、映画の解説をなさっていた方です。お亡くなりになったのは、昨年です。あの決めぜりふを聞くたびに、「ああ、本当におもしろい（※いい・すばらしい）なあ」と、暗示にかかりやすい自分は単純に思い込んでしまったものです。

で、「もし」に話を戻します

もしもし

がなかったら、ヒトは生きていけないんじゃないか？ そんな感じが、するんです。正確に言うと、

もし、「もし」がなかったら、ヒトは生きていけないのではなかろうか？

です。「もしもし、カメよ、カメさんよ～」の「もしもし」は、「もうし＝申し」を重ねたものだそうです。「申し上げます、申し上げます」って、ニュアンスなのでしょうか？ はっきりしたことは知りません。

それよりも、今、問題にしているのは「もし・もしも」のほうです。ここで、昔、ある英語教師から聞いたことのある、すごくだらないギャグを思い出しました。有名なギャグですから、もう、この時点で、「たぶん、あれじゃないか」と、お察しの方もいらっしゃると思います。電話する時に、英語では「もしもし」を何と言うか？ そうですね。答えは「イフイフ」です。

困ったことに、それが冗談だと分からなかった、純真な少年少女たちもいたのです。なにしろ、昔の話です。ですから、万が一、それこそ、もしもの場合のために、言い添えておきます。電話で、「If if.」なんて、言っちゃ駄目ですよ。英語なら「Hello.」くらいでいいですよ、確か。何だか、自信がなくなってきましたけど。和英辞典で、確認しておいてください。自分は難聴者（※中途難聴のほうです）ですから、電話は大の苦手なのです。相手の口の動きや顔や表情が読めないですから、ものすごくハンディになります。

で、「もし」です。ifの「もし」です。

>もし、「もし」がなかったら、ヒトは生きていけないのではなかろうか？

でした。さて、ここで質問をさせてください。神様の話とちょっと関係のある質問です。

神は、カティから生じる

という文をお読みになったとき、「カテイ」にどんな漢字（＝感字）を、当てますか？

家庭：「神は、家庭から生じる」。社会学的な響きがありますねー。心なしか、新興宗教のキャッチコピーの匂いもしますね。

過程：「神は、過程から生じる」。うーん。哲学的な響きがありますねー。何だか煙に巻かれたような気もします。しっかり、しましょうよ。よく考えてみると、すごく当たり前のことを言っていない？ ペテンくさい。

課程：「神は、課程から生じる」。何ですか、これは？「ここに、中学校の課程を修了したことを証す」。卒業証書の文句じゃありませんかー。神様にも、学歴が必要みたいな話になっちゃいそうです。

下底（※台形の下の辺）でもないし、河底（※かわぞこ）でもないし、家丁（※下男）でもないし、なんて、さんざん、じらしておいて……。では、「これは」と思われるものを出します。じゃんけんで後だしするなんて、サイテーですよ。でも、やっちゃいます。ごめんなさい。言い訳をさせていただくと、あまり自信がないからです。では、いきます。

神は、仮定から生じる

言い換えると、

神は「もし・もしも」から生じる

です。実は、「生じる」というところも、いささか疑問を覚えるところなんです。ですので、いちおう、あくまでも、いちおうの決定版を出します。

神は「もし・もしも」から作られる

です。

英語の授業で、仮定法って習いませんでしたか？

(例文)

「もし、(※現在) わたしに十分なお金があれば、かつらが買えるのに」(※仮定法過去)
←→「(※現在) わたしには十分なお金がないので、かつらが買えない」(※直説法)

とか、

「(※今) わたしに十分な毛髪があったらなあ」(※仮定法過去) ←→「(※今) わたしに十分な毛髪がないので残念だ」(※直説法)

現在のことを言うのに、英語では過去形を使うとか、いうやつ。どうして？ 何だか、よく分からなかったことを思い出します。理屈から入るから、分かんなくなるんですよ、語学は。ですので、英文法は忘れて、日本語での「もし・もしも」という言葉の使い方を具体的に見てみましょう。

「もし、女の子が生まれたら、真央って名前にしましょうよ」(※「おい、またか。私情をまじえるな！」ああ、幻聴だ)、「もし、合格したら、約束したケータイだけじゃなく、友達との旅行も、親にオーケーさせよう」、「もし、生まれ変わったら、オラ、〇〇みて一なイケメンになりてー」、「もしも、今年も不作だったら、あの時にせっかく雨乞いに成功したワシの面子が立たないじゃないか」、「もし、スピリチュアルとかポジティブとかヒーリングとか言っても、誰もこっちを向いてくれなくなったら、どうしよう」、「もしも、この戦(いくさ)に負けたら、オレ、きっと吊るし上げを食うぞ」、「もし、今、漏らしたら、どうしよう」、「もしも、あの子の病気が治らなかったら、『何でも癒やします

屋』の看板を、はずさなくちゃならないわ」

「郵便受けに誰か 100 万円、放り込んでくれたらいいのになあ」、「きょう、彼女が部屋に来てくれたらなあ」、「もう少し背が高ければ (or 低ければ)、いいのになあ」、「自分に超能力が、あったらなあ」、「おかあさんの病気が、早く治ってくれればいいなあ」、「この会社の株が上がってくれたらなあ」、「おとうさんが、〇〇を止めてくれないかなあ」、「占いが、もっと当たってくれたらなあ」、「この不況が、長引かないでくれないかなあ」、「ゲームで、あいつよりも強くなれたらなあ」、「タケコプターが、あったらなあ」、「自分が、男 (or 女 or 両方) だったらいいのに」

祈り、願い、想像、空想、予測、策略、野心、下心、賭け、たくらみ、夢、希望、欲……

こうしたものをヒトが何かに託すとき、ヒトは「もし・もしも」とか「～ならいいのに (or でなければいいのに)」という、魔法の言葉にすぎります。別の言い方をすると、仮定形という言葉の形式を使って、願ったり、推測したりして、実現をはかろうと努めます。夢は実現するとか、思いはかなうとか、言いますね。あれです。

本音は、「実現してほしい」とか「かなってほしい」なのに、それを「実現する」や「かなう」と言い換えて、言い切るところが、ヒトの厚かましいところでもあり、たくましいところでもあります。そうしなきゃ、出版界では自己啓発書やスピリチュアル本は売れません。宗教だと信者を集めて儲けることはできません。占い師は看板を降ろすしかありません。

そういう厚かましくて、ハッターがきいて、頼りになりそうな人が、よくカリスマ性があるとか言われます。そして、そういう人に、ひよこひよここと、ついていく人たちが、うようよいる。困ったもんです。

きのうの記事に書いた、ニーチェという人が、『権力への意志』というタイトルの本を書きました。厳密には、ニーチェの草稿を妹さんが編さんしたらしいのです。一度翻訳を読みかけて、難しいので止めました。で、勝手に想像しているのですが、『権力への意志』には「ハッターのきく偉そうな人に、ひよこひよこことついてく人が多い」みたいなことが書いてあるのかな、という感じがするのです。そこは、素人の厚かましきで、きっとそうだと妄想しておきます。

ニーチェという人の書いたものは、断片的な文章が多く、あちこちで矛盾したことを平気で書いています。それが、また、いいんですよ。自分に言わせると、そうじゃなきゃ、哲学じゃないとさえ思います。論理的、体系的、矛盾なしなんて、ずれたおサルさんには無理ですよ。狂えるおサルさんは、身の程をわきまえて、

狂え、狂え、さあ、みなさん、一緒に、狂おう、狂おう

と、叫び、歌うのが、ふさわしい。そう思います。変ですか？ こういう考えって、危いんですか？

ヒトは狂わないために必死に狂っている

なんて、本当のこと言っちゃ駄目ですか？ 顰蹙を買って、袋叩きにあいますか？ でも、ここだけの話ですけど、たった今、上で書いた「叫び」と「歌」ですけど、実際、ヒトはそういうことをしていませんか？ していないって、言い切れます？ テレビや新聞で見聞きしたことでかまいませんが、世界中のヒトたちがやっていることを、冷静に見つめてください。

狂え、狂え、さあ、みなさん、一緒に、狂おう、狂おう

していませんか？ あんまり、深く考えないでくださいね。笑っていただいて、けっこうです。「さっきから、せせら笑っているよ、あんたのゴタクを読んで」。ああ、ゲンチョーさん。あなた、なかなかいいこと言いますね。すごく、人類＝ヒトしていて、かっこいいですよ。とても人間＝ホモサピエンスしていて、感動します。

こうやって、最近、ゲンチョーさんに話しかけるようにしております。ひょっとして、こういうのって、あやういですか？ 話を戻します（※「何度、戻すんだ。フラフラしやがって」。ああ、またもやゲンチョー！ はい、はい、聞こえていますよ。）

で、もしかしたら、「もし・もしも」という、魔法が生きる力になっていませんか？ さ

もなきや、単なる体毛の薄いおサルさんですよ。どうも、お気に召さないようですね。おサルさんでは、嫌ですか？ やっぱり、人間様と呼ばれたいですか？ なるほど。ふつうは、そうですね。自分も、本心では、人間様と呼ばれたいと思っているような気もするのですが.....。うーん。やっぱり、これだけは譲れません。自分はおサルさんで、けっこうです。だって、それが本当ですもの。格好つけたって、しようがないじゃないですか。ヒトだけど、おサルさんと呼ばれたい。そんなヒトがいても、いいじゃないですか。

失礼いたしました。自分は、ひとりでいることが圧倒的に多いので、つい、独り言や、ゲンチョーさんとの会話なんかをしちゃうんです。あやういとは、薄々感じておりますが、やっちゃうんですよ。煙草が止められない。パチンコが止められない。ケータイが止められない。そういうのと、一緒のものと考えても、よろしいでしょうか、ドクター？

で、さきほど挙げた、「もし・もしも」と、「～ならいいのに (or でなければいいのに)」を用いた例文集ですけど、簡単に言えば、ヒトの頭の中での、シミュレーションみたいなものですね。「想像」を頭の中で、「創造」するわけです。頭の中の、映画、テレビ、紙芝居のようなものだと、「たとえる」こともできそうです。そうですね。おととい、この記事でテーマにした「比喩=たとえ」そのものですね。で、当ブログの金太郎飴、ワンパターンの登場です。表象です。表象作用です。つまり、

Aの代わりに「Aでないもの」を代用するという仕組み=からくり

です。このブログでは、いつも、話はこれに行き着くのです。ちょっとバリエーションをつけましょうか。

「衣食住」という言葉がありますね。ヒトにとって基本的なものです。順番に、考えてみましょう。

★「衣」: あなたに「衣」がない状態を想像してください。素っ裸です。無防備ですね。危ないってことですよ。裸足ですよ。1メートル歩かないうちに、足の裏にとげや、とんがった小石がささるかもしれません。今、冬ですね。1時間、外に我慢していられますか？ 夜だったら、どうします？ 素っ裸ですよ？ 次に、猫、ネズミ、すずめ、ニホンザルくらいを想像してください。ただし、犬は除きます。特にペットの犬は、除外して

ください。で、猫、ネズミ、すずめ、ニホンザルですけど、まさか、パンツや、シャツや、コートなんて着ていませんね。もちろん、自前のファーはまとっていますよ。でも、買ってきて、身に着けているわけではありません。

★「食」：あなたが、最後に食べた物を、思い出してください。どこから買ってきたもの、調理したもの、誰かが作ってくれたもの、ではありませんでしたか？ ケチャップやマヨネーズやコショウも含めての話ですよ。では、これから食べる物を想像してください。似たようなものじゃ、ありませんか？ 近くにある公園でも、川でも、土手でも、いいですから、そこで自分が食べられそうなものがあるか、考えてください。ありますか？ 次に、猫、ネズミ、すずめ、ニホンザルくらいを想像してください。最後に何を食べて、これから何を食べるのでしょうか？ 心配する必要は、ぜんぜんなさそうですね。

★「住」：現在、パソコンでこの記事を読んでいるあなたが、またはケータイでこの長い文章を読んでいるあなたが、どこに住んでいるか、思い出すまでもないでしょう。暖房はありますか？ 眠る時には、お布団を使いますか？ 電気と水道は完備していますか？ 次に、猫、ネズミ、すずめ、ニホンザルくらいを想像してください。「衣」「食」について、考えてみた以上、もう、頭で考えることはありませんよね。体感的に、分かりますよね。

以上、「衣食住」について、考えたり想像してみたことから、何が言えそうですか？ ひょっとして、トホホじゃないですか？ もしかして、トホホ (E 1,000 くらいじゃないですか？ でも、その「トホホ」が「エヘン」に変わっちゃったんです。「エヘン」といっても、風邪をひいて咳をしているわけではありません。威張っているんです。なぜかというと、ヒトは

ずれちゃった

からです。

はあ？ ん？ なに？ あほか？ ばっかじゃないの、こいつ？

そんなゲンチョーが聞こえます。いや、実際、そうつぶやいて、いらっしゃる方々が、

いらっしゃっても、ぜんぜん不自然ではありません。そう思いになるのが、ふつうです。

ずれている

と言っても、きのうの、かつらのお話とは違うんです。あれは、頭皮の上でずれる話です。きょうのずれるは、頭部の中の話、つまり、脳内の話なのです。

最初にずれがあった。

で始まる本について、きのう少し触れましたが、そのさいの「ずれ」とは、「かつらのずれ」ではなく、今お話ししている

脳内での「ずれ」

のことなのです。ヒトが、考えたり、想像したり、疑問に思ったりする時に、「もし」という語が、魔法の言葉になってしまったのです。もっと大雑把に言うと、

もし＝考える＝想像する＝疑問に思う＝頭の中がずれた結果の超ラッキー

ということになります。素人の「考え」ですから、すごく雑ですよ。でも、的は、はずしていないはず。さきほど、「衣食住」について、みなさんに、考え、想像し、疑問に思っただきました。それができたのは、大昔に、ある「おサルさん」の種族の頭の中で、「ずれ」が起きて、その「おサルさん」が、

「おサルさん + α 」、つまり、ヒト

になっちゃったから、らしいのです。「らしい」というのは、今、この惑星にいるヒトの誰も、そのことを見たことがないからです。残念ながら、タイムマシンは発明されていません。

でも、その「ずれ」と同時に「もし」という魔法の言葉を持ってしまったらしいヒトは、その「もし」を使って「ずれ」を考え、想像し、疑問に思うことができるようになったのです。ズレでズレを思考するという、魔法＝奇跡＝横着＝錯覚。ややこしいですか？ 難しいですか？ 実際、ややこしくて、難しいことを、今、みなさんと一緒に考えているのです。たまには、こんなことがあっても、いいじゃないですか。もう少し、付き合ってくださいませんか？

きょうも、記事が長くなってきましたので、まとめに入ります。ヒトにとって、

究極の武器はヒューヒューとももししなのだ、

と思うんです。「ヒューヒュー」は、おとといの「神様になる方法」2009-02-04（※別に参照なさらなくてけっこうです）で、書きました「比喩＝たとえ」です。「もしもし」は、きょう見てきた「仮定・仮定する」です。この2つがそろると、ヒトは最強の武器を手にしたのも同然です。尻尾のないおサルさんの仲間の一種として、うだつの上がらなかった身から、突如、脳に「ずれ」が起きた。そして、晴れて「おサルさん＋ α ＝狂えるおサルさん＝人間様＝ヒト」になった。

運のいいやつです。ジャンボ宝くじの1等に当たったなんてもんじゃ、ありまへん。それ以上です。例を挙げましょう。

*もしも（※仮定です）鳥のように（※比喩です）空を飛ぶことができたらなあ。→ 飛行機

*もし、お魚のように、すいすい水上を進んだり、水中を潜れたらなあ。→ 舟、船、潜水艦

*もし、お馬さんのように速く走れたらなあ。→ 三輪車、自転車、自動車

以上は、ごく原始的な例ばかりです。次に、ヒトは、ヒューヒューと、もしもに改良を加えて大革命を起こし、

さらに究極的な（※どういう意味じゃ？）武器＝魔法

を手に入れました。比喻を魔法に転換させたのです。言い換えると、「○○のように」の「○○」を

「魔法＝ブラックボックス＝ブラックホール＝何でもあり＝めちゃくちゃ＝無節操＝無尽蔵＝ドラえもののポケット」

に変えてしまったのです。つまり、

*もし、「魔法のように」（※あっさり書きましたが、これ、大革命です）、遠くの物が見えたらいいのになあ。→望遠鏡、双眼鏡、テレビ、天体望遠鏡、電子望遠鏡

*もし、魔法のように、遠くの音が聞けたり、遠くの人と話せたらなあ。→電信、有線電話、無線電話、（中略）インターネット

*もし、魔法のように、病気が治せたらなあ。→医学の進歩について、想像してください。ありすぎて書けません。

*もし、魔法のように、お金儲けができたらなあ。→経済・金融について、想像してください。ありすぎて書けません。ただし、現在は、その根底があやしくなっています。

*もし、魔法のように、敵を負かすことができからなあ。→軍事について、想像してください。ありすぎて書けません。というか、書きたくもありません。

*もし、魔法のように、魔法ができるようになればなあ。→宗教、占い、スピリチュアル、ギャンブル.....について、想像してください。ただし、かなり、節操のない、貪欲で強欲な想像力が必要です。

ヒトは、行き着くところまで行き着きながら、まだまだ自分たちが先に行き着けるところがあると信じきっています。たくましいですね。欲にも限界があるということ、この世界的規模の大不況を機会に、ちょっとでもいいですから、立ち止まって考えてほしいなどと、妄想しております。

ここまで読んでくださった方に、心よりお礼申し上げます。また、来てくださいね。お待ちしております。

09.02.07 ひとかたならぬお世話になっております

◆ひとかたならぬお世話になっております

2009-02-07 10:25:39 | Weblog

週末になりましたので、今週の原点に戻りたいと思います。と、ぜんぜん論理的でないセンテンスを書いてしまいました。こういうのを、論理的な破綻（はたん）と申します。

で、今、思い出しましたが、恥ずかしながら、自分は長い間「破綻」を「はじょう」と誤読していました。居直って、ついでに白状しますと、「ぜんぜん」は「全然」ではなく、「全々」と書くのだと、30歳過ぎまで信じておりました。

それに、かこつけて、「わたくし、夏目漱石の『当て字＝感字』に親近感をいだくんですよー」などという、とんでもない自己弁護＝責任逃れ＝ペテンを、今も時々口にした

り、書いたりしています。あきれたもんです。漢字が書けないのを、ワープロソフトのせいにするようなものです。したがって、自分は、総理の「新・KY (=漢字読めない)」を笑えません。蔵相の誤読も笑えません。そんな自分が一時は小説家をめざしたり、一種の売文業をしていたなんて、何と鉄面皮な「狂えるおサル」でしょう。

以上のような文章を、とりとめもない文章、または駄文といいます。こればかりは、直らないというか、治らないというか、どうしようもないわけです。ですので、やはり自分は自分ということで、居直って駄文を書き続けます。

ありや。今週の原点に戻ろうとして、こんなに語数を費やしてしまいました。ごめんなさい。で、月曜日に「1カ月早い、ひな祭り」2009-02-03 というタイトルの記事を書き、その中で、人面〇〇の話から始めて、トイレの壁や、見慣れた天井のしみなどに、ヒトの顔を見てしまうという、ヒトの習性について触れました。今週は、そこから、妙な具合に話がそれまくり、かつらの話にまで、ズレてしまいました。おかげさまで、自分の頭部について、深く考える機会を得ることができました。はあーっ。このため息は、その時のことが脳裏をよぎったからにほかなりません。高すぎ〜。高すぎる〜。では、再度、今週の原点にもどる努力をいたします。

ヒトは森羅万象、つまり何でもかんでもに、自分とその仲間たちの顔や姿を見てしまう。もう少し正確に言うと、知覚してしまう。

このことに、きょうはこだわってみたいと思います。というのも、すごく不思議だからです。ある有名な話を、引用させていただきます。どこで聞いたのか読んだのか、ぜんぜん覚えていないのですが、ある知り合いの人も知っていたので、このブログをお読みになっている方も、たぶんご存知ではないかと思います。小・中・高・大のいずれかの授業で、教師が質問したような記憶がありますので、クイズ形式にします。

ある場所で、半ば化石化したヒトの遺体が発見されました。太古のものと、判断されました。骨とごくわずかな人体の一部が残っているだけの遺体です。土の中から発掘されました。で、こういう場合には、考古学者たちなどが寄ってたかって、いろいろ調べます。それで分かった事実の1つとして、その遺体には、目に見えない細かな花粉が多量に付着していたことがありました。おそらく、学者たちが、遺体の周辺の土や砂を顕微鏡か何かで、じっとながめた結果、判明した事実なのでしょう。大変ですね、ああいふ職業も。

さて、その事実から、何が分かるでしょう？

そろそろ、スギ花粉が飛ぶ時期になりますね。自分は、スギ花粉のほか、いくつかの草の花粉や、ハウスダストや、ダニの類にアレルギー症状を示す体質なので、はああああ、くしょん、と思わず、クシャミをしてみました。猫アレルギーでないことだけを感じています。ねー、ネコちゃん。ネコというのは、今、この部屋の窓から外をじっと見つめている、うちの猫の名前です。名前を呼んだのに、知らん顔しています。そういうところが、猫さんらしくて好きです。犬だと、尻尾を振りながら、そばに寄ってくるんでしょうね、こんな時には。

さあ、クイズの答えを言います。その半化石化した太古のヒトが、花粉症だったかどうかは、不明です。答えとは、関係ないんですけど。で、学者の説によると、花粉の存在が、宗教の誕生ないし発生を物語っている、というのです。えええっつ！？ ですよ？ なんでそうなるの？ じゃあーん。あっ！ むむっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

ではないか？

「なんでそうなるの？」

欽ちゃんこと「萩本欣一」さんと、「坂本二郎」さんが組んでいたお笑いコンビ「コント55号」が出ていた、バラエティ番組のタイトルです。番組の冒頭で、欽ちゃんの声で「なんでそうなるの？」なんて言っていた記憶があります。

「なんで・そお・なるの」と区切って発音します。「声を高めにゆっくり・一息おいてから少し速く・急に早口で元気よく」というスピードというか強弱がポイントです。ちょっと、試してみませんか。「なんで・そお・なるの」。力の入れ方は、「ホップ・ステップ・ジャンプ」に似ています。もう、一度。「なんで・そお・なるの」。どうですか？ ご記憶の方、そんな感じじゃなかったですか？ 初めてお聞きの方、ご感想はどうですか？ こういうものって、伝えるのが難しいんですよ。中には、しらけている方もいらっしゃる

るに違いありません。失礼しました。

.....。一瞬、何を書いていたのか、忘れちゃいました。そうですね、花粉の存在が宗教の誕生=発生を物語る、という話でした。なんでそうなるのかと申しますと、おそらく、その遺体は仲間たちによって埋葬されたに違いないからだ。つまり、亡くなったヒトを葬るさいに、花を集めてきて全身を覆ってやり供養し、あの世へ送り出してやったのだ。たぶん。おそらく——という学者の説なのです。

その証拠に、もちろん花々は腐敗し風化して影も形もありませんが、花粉だけがその遺体の全身に付着していて、遺体周辺の土や砂には全然その花粉は見つからなかったというのです。そのヒトが、たまたま、お花畑で行き倒れになったとは、考えられないらしいのです。

うーん。なるほど。そういうものか。神仏は信じていない自分ですが、このことに関しては、素直に納得します。そうであっても不思議はない。たぶん、いや、きっと、そうだったのでしょ。ヒトは、仲間あるいは自分の親族が亡くなったとき、ほったらかしにはしないでしょう。冷たくなり、動かなくなったとはいえ、一緒に暮らしていたヒトです。お別れのさいには、美しいもので、その体を飾ってやり、あの世か、どこか知りませんが、送り出してやりたいと思うのは理解できます。感動すら、覚えます。

このブログを何度かお読みくださった方は、薄々感じられていると思いますが、自分は宗教に対して懐疑的です。とはいえ、特定の宗教を批判したり、ひとさまの信仰に関してとやかく言うことは、当ブログではやってはならない、と肝に銘じております。ただし、宗教に名を借りた集団の非宗教的な行動や、形式だけにこだわる宗教組織の行いには、ときおり批判的な意見を述べています。

>ヒトは森羅万象、つまり何でもかんでもに、自分とその仲間たちの顔や姿を見てしまう。もう少し正確に言うと、知覚してしまう。

に話を戻します。この記事をお読みになっている方に、お尋ねします。自分のまわりを見回してください。お人形、キャラクターグッズ、または、そうしたものの絵やアイコンがありませんか？ ヒトのそばには、ヒトや他の生き物の形をしたもの、または、架空のキャラクターなどが、必ずと言っていいほど、ありませんか？ そして、その形は、たとえばヒトではなくても、ほぼヒトと同様の形をしていたり、ヒトに似せてありませんか？

現に自分のいる、この部屋にも人形やキャラクターの類が、たくさんあるんですよ。あらためて考えると、ちょっと恥ずかしいんですけど。「かわいいもの」って、割と好きなんです。はい。気が安まりますよね。癒やされますよね。

これって、やっぱり「狂ったおサルさん＝おサルさん + α = ヒト = 人間様」の習性みたいですね。うだつが上がらなかった、尻尾のない、ある種のおサルさんの頭の中で、ズレという大事件が起こって、超ラッキーなおサルさんが誕生してしまったという「おどぎ話＝フィクション＝紙芝居」について、きのう書きましたが、晴れてヒトとなったヒトは、まわりの木の皮や石ころや空に浮かぶ雲の形に仲間の顔や姿を見て、

「うひょー」、「おっおっ」、「けっけっ」、「おーおー」、「うーうー」、「およよ」、「とほほ」……

なんてふうには、びっくりしたり、喜んだり、感動したり、敬虔な気持ちをいだいたりするだけでは、済まなかったみたいですね。それだけじゃ済まなくて、自分の手で、粘土をこねたり、木切れや石ころなどを何かを利用して彫ったり削ったりして、わざわざ仲間や他の生き物の形に似せたものを、せっせと細工するようになった。住んでいる洞くつの壁に、尖った木か石で絵を描いたり、色の付いた土や草木で色を付けたりするようになった。素人ながら、そんな気がします。みなさんは、どうお思いになりますでしょうか？

自分の場合には、ヒトである自分の顔を鏡で見たりすると、いかにもそんなことをしそうな異様な気配を覚えます。鏡の中の自分に「相貌的知覚」（※何かに人の表情や動作を見るときという意味ですね）を覚えるということです。これは、少なくとも自分に関して言えばの話です。顔に顔の気配を感じる。なんだか、不気味ですけど。鏡に映った自分の顔や姿は、自分の顔や姿そのものではないということを思い出しましょう。

あれは光の反射を映し出す「鏡というもの」なのです。それに「映った像」なのです。自分の顔や姿でないものに自分の顔や姿を見てしまう。当たり前のように、不思議な話だとはお思いになりませんか。写真、ビデオ、テレビの映像、パソコンのモニター、映画、絵画——これらは、それにヒトが見いだす物自体ではないのです。

「これはパイプではない。」

という名の付いた、パイプが描かれたルネ・マグリットの絵を題材にして、ミシェル・フーコーが何やら書いていた記憶があります。その原文を大学の授業で読まされたような気がします。それとも、似た話ではないでしょうか。鏡の中の自分に「相貌的知覚」を覚える。ちょっと、ジャック・ラカンの曲解をしてみました。このことは、いつか詳しく書きたいです。

そう考えると、ヒトっておちゃめですね。自分に似たものを、わざわざこしらえるなんて。そうとう、ワルいことも、ズルいことも、ザンギャクなことも、ジコチュウなことも、さんざんやっていますけど、おちゃめな面も確かにありますよね。うん。そう思います。

学校でのお勉強のおさらいになりますが、土偶なんて面白いものが、この国にも大昔にありましたね。それに古墳から出てくる埴輪なんて、習いましたね。学校で教わったものではありませんが、中国にある、ものすごく大きなお墓から、精巧に作られた、たくさん土製の人形（＝ひとがた・にんぎょう）や、家畜の像が発見されたことを思い出しました。そういえば、確かエジプトのピラミッドからも、そんなようなものが出てきたんじゃないでしょうか？ 詳しいことは、もうすっかり忘れちゃったけど。

で、話はちょっと違うみたいですが、イースター島のモアイ像なんてのも、ありますね。それに、南米のナスカの地上絵。あれって、何なんですか？ 不思議ですね。ああいうおちゃめって、ヒトがやったのでしょうか。それとも、ヒト以外で、もう絶滅して、いなくなっちゃた生き物とか、別の星からこの星に来た生き物みたいな存在とかの仕業なのでしょうか。

ところで、みなさんの家に、ひょっとして肖像画ってありませんか？ おじいさんか、そのまた、おじいさんのものとかが。そうそう、肖像画で思い出しました。大切なものを、忘れていましたよ。写真です。それに、ビデオで撮られた家族なんかの映像です。そうしたのも、一種の人形（＝ひとがた・にんぎょう）と呼んでもいいのではないのでしょうか？

さっきも触れましたが、今週は月曜日に、おひな様の人形について書きました。その

とき、「タモちゃんのお代理様」を思い出して、「お内裏様＝お代理様」という話になりました。今、広辞苑で「ひとがた(＝人形)」で引いてみたんですが、「古くは清音」とあるので、「ひとかた」とも、昔は発音していたようです。で、「にんぎょう」という意味のほかに、「身代わりの人。代理」とも書いてあります。どっきっとしませんか？身代わり、ですよ。「人身御供(ひとみごくう)」、つまり人間の代わりに神様に差し出す生贄(いけにえ)を連想しませんか。

ヒトは土木工事や建設をするさいに、工事中に自分たちの身を守るために、神様なんかには生贄をささげますね。他の動物だったり、植物だったりをお供えます。たいていは殺します。花だって、切ってそなえます。あれって、身代わりなんですね。ほら、お葬式や宗教的儀式で、献花とか供物って行きますよね。あれです。ここで、さきほどの太古の遺体に付着していた花粉の意味が、また別の面から分かってきましたね。要するに、花は広い意味での生贄だったということです。故人と一緒に、あの世かどこかへと送り出すのですね。

スケープゴートって言葉をお聞きになったこと、ありますよね。弱い存在が、みんなの犠牲になって罪をかぶるんです。そう思うと、かわいそうですね。スケープゴートも生贄です。ヒトがそういう仕組みを作ったのも、「狂ったおサルさん」だからです。

上で挙げた、この国の古墳、そして中国のお墓はもちろん、ピラミッドもお墓ですね。そういう所で、ヒトは自分自身が血を流す代わりに、他の動物や植物を傷つけたり切ったりそなえたり、ヒトや動物の形をしたものを作って、亡きヒトと一緒に葬るという「習性＝仕組み＝儀式」を、なぜか作りあげたのです。世界中のヒトに共通するのが、興味深いですね。

こういう、供物とか、生贄とか、「送る＝贈る」なんかに、めちゃめちゃ詳しくあったのが、フランスにいたジョルジュ・バタイユという、ちょっと、いや、かなりエッチな人でした。今だから白状しますが、高校生のころ、あの人の本をよく隠れて読みました。哲学的・文学的で、エッチ。そんな感じの本を書いた人です。

お人形さんの起源は、子どものおもちゃだけでは説明できないことが分かりますね。もっと深いというか、恐ろしいというか、言葉にしにくい感情がこめられている。そんな気がします。ですから、ヒトは人形(＝にんぎょう・ひとがた・ひとかた)に対して、

ひとかたならぬお世話になっております

と、一言お礼を述べてもいいのではないのでしょうか？ 人形供養などという、他人任せの儀式だけで済ませてはなりません。敬虔（けいけん）な気持ちで、「ひとかたならぬお世話になっております」と口にして、お人形さんたちに頭を下げてもいいのではないのでしょうか。

人形に限らず、動物アニメ、ゲームのキャラクター、アイコン、アバター、絵文字……。こうしたものを目にしても、

＞ヒトは森羅万象、つまり、何でもかんでもに、自分とその仲間たちの顔や姿を見てしまう。もう少し正確に言うと、知覚してしまう。

というヒトの習性と、その応用編である「ひとかた」を作るという習性は、えんえんと続くような気がします。

やっぱり、ここにたどり着きましたね。「ここ」というのは、当ブログの金太郎飴、ワンパターンです。表象です。表象作用です。つまり、

Aの代わりに「Aでないもの」を代用するという仕組み=からくり

です。

何だか、日テレの「笑点」みたいにワンパターン化しちゃって、ひとりでやっているブログなのに、一種の「仲間受けギャグ」→「内輪受けギャグ」→「ひとり受けギャグ」ばかりになっちゃって、お恥ずかしい限りです。

ここで、気分を変えて、ちょっとエッチなお話をしてもいいですか？ 実は、さっきの花粉の話を書いている時に思い出して、書こうかな、話がシリアスだから書かないでおこうかなと、迷っていたのです。でも、バタイユなんてエッチなヒトの名前も出しちゃったことだし、話しちゃいます。ちなみに、バタイユさん作の、おめめをタイトルにした小

説が最近、フランス語から新訳されました。もろ出しの画像が簡単に手に入る現在では、ああいう趣のある哲学的ポルノグラフィなんて、ピンとこないかもしれませんけど。

で、そのエッチな話なんですけど、

花は、なぜ美しいか？

と関係があるのです。何だか、理解に苦しみますよね。で、花って、どうしてきれいなのか、お分かりになりますか？ 生殖器だからです。性器だからです。花粉というものは、雄しべにある細胞だって、学校で習いましたよね。ところで、生殖器と性器の違いって何でしょう？ このブログ恒例の計算をしましょう。きょうも、引き算です。

生殖器 - 性器 = せいしょくき - せいき = しょく = 殖

解けました。「殖=ふえる・ふやす=増」。つまり、子や種族が増えること。要するに、繁殖することです。繁殖=生殖を目的とする場合に、生殖器。エッチすることだけを目的にする場合に、性器。と割り切れればいいのですが、できちゃった婚みたいに、「一石二鳥」みたいなケースもあって、事はそれほど単純じゃないみたいですね。とは言うものの、生殖器と性器との違いなんて、まさに言葉の綾であって、同じものを言い分けているだけですよ。

自分には縁のない話で、まことに残念なんですけど。まあ、それは仕方ないとして、花は生殖器なんですね。雌しべと雄しべがある場合も、片方だけの場合もあるんですけど？ なにしる、他人事なので詳しくないんです。

いずれにせよ、甘い蜜を用意したり目立つ色をしていたり美しくしていないと、蜂さんや蝶さん（※愛のキューピッド、です）などが、わざわざ立ち寄ってかきまわして（※「自家受粉」「他家受粉」とか「交配」とも言いますね）くれないんですよ。他の生き物にかきまわしてもらわないと、植物は繁殖のための「合体」ができないんです。生き物同士って、協力し合っているんですね。大したものだと思います。真面目な話。どうですか、ちょっとエッチでしょ？ こんなんじゃ、エッチとは言えないですか？ じゃあ、もう少しエスカレートしていいですか？ 実は、花が生殖器だと気づかせてくれた人がいたんです。それも、即物的な形で――。

大学生のころの話です。すごく変わった人を、変人と言いますね。自分も近所では、そう思われているらしいのですが、本当のところは未確認です。確認のために一軒一軒を訪ね歩けば、それこそ「ほんまもん」だと、ふれて回るようなものです。そうなれば、〇〇小学校の校下（＝通学区域）を、夕方などに散策することができなくなります。きっと、後ろ指をさされます。週2回のスーパーへの買出しにも、不自由することになります。病院へ行くために、バス停で、ぼけーっと突っ立っているわけにもまわりません。

自治会に入っていないだけでも、不審の目で見られているのです。こちらとしては、町内会費を払う余裕がないだけなのです。それほど、金銭的に逼迫（ひっぱく）しているのです。出版関係者の方、お読みになっていらっしゃれば、お仕事ください。書くことでしたら、一生懸命やります。思わず、本音が出てしまい、マジで力（りき）んでしまいました。失礼いたしました。

で、大学生のころに、同じ学科にかなりな変人がいました。男性です。自分は、昔から飲み会の類が嫌いで（※お酒の臭いと煙草の臭いに、アレルギーなのです）、ほとんど参加したことがないのですが、その事件の場には、たまたま居合わせました。

その事件というのは、ある男子学生が女子学生たちのいる席で、性器を露出したというものです。今だったら、セクハラです。場合によっては、警察に、即、身柄を拘束されますよ。あのころだから、穏便に済んだ事件なのです。

前後関係は、よく覚えていないのですが、あるフランス語の詩と関係があったはずで、その詩の中で、花が美しいとか、肉体は悲しいとか、そんな一節があって、ある女子学生が花の美しさについて、酔いも手伝って気持ちよさそうに、とうとうと語っていたのです。そのとき、その変人の男子学生が、「きみ、花ってそんなに美しいかい？ じゃあ、これも美しいはずだ」とか言って、宴席の椅子の上に立ち、いきなり下半身を露出したのです。

「きゃー」、「おえー」、「ばかやろー」、「なにおー」、「こらー」、「わーん」、「しくしく」

とにかく、大変な騒ぎになりました。ご想像はつくと思います。で、そのけしからん変人 Hentai 学生が、叫んだのです。

「花は生殖器だ。文句あっか？」

この話は、現場に居合わせた人たちの間で、今も語り継がれているはずです。実話です。その珍事件の目撃者が、ひょっとして、この記事を読んでいらっしやるかもしれません。懐かしーい、とか叫んでいるかもしれません。もし、お心当たりのある方は、ご一報願います。旧交を温めませんか？

きょうも、この冗漫な文章に、ここまでお付き合いいただいた方に感謝いたします。これに懲りずに、また来ていただければ嬉しいです。

09.02.08 架空書評：P D S ジェネレーションズ

◆架空書評：P D S ジェネレーションズ

2009-02-08 10:57:59 | Weblog

(※以下は、架空ブックレビューです。評者名を除き、書名、著者名、出版社名、定価は、すべて架空のものです。間違っても、アマゾンなどで検索なさらないよう、ご注意願います。)

書名：『P D S ジェネレーションズ』 畠中広司著、桑園房刊、1,800 円 (+税)

私は本を読む時には、大抵酒を飲む。新聞や雑誌に書評を書くプロであれば、勤務中の飲酒ということで、批判は免れないだろう。しかし、私はパリス・テキサス氏のブログに、素人としての読書感想文を載せてもらっているだけである。言わば、趣味である。従って、好きな焼酎をいただきながら本書を読んだ。分厚い本だったが酒の勢いを借りて、2時間も経たないうちに読み終えることができた。

著者の畠中広司氏の一連の作品は、純文学というジャンルに分類されている。かねてから思うことなのだが、純文学はエンターテインメントの創意を後追いつているのではないだろうか。たとえば、本書の作品の設定や小道具は、SFから取られたものと断定してよい。他にも、SFもどきの作品が純文学系の雑誌に堂々と掲載されているのを散見する。エンターテインメントでいえば、戯作的なタッチの文章を模倣した文体とテーマで書きつづられた作品が、「純文学書き下ろし」などというキャッチコピーの入った帯をまとって書店で売られている。どういうことであろうか。

いくらなんでも、芸がなさすぎる。単に、ジャンルというラベルに支えられているだけではないか。この『PDS ジェネレーションズ』についても、上述の感想を抱きながら読んだ。出来の悪いSF小説と評したら、酷であろうか。畠中氏ほどの中堅作家ともなれば、アマチュアによるこれくらいの酷評など何とも思わないであろう。しょせん、酒飲みの一読者の書いた感想文である。一方、当然のことながら、私とは逆に、この作品を読んで感動する向きもあろう。実は、私も感動したのである。

今回は、最初になして置いて後で褒めるという、いささか変則的な形でレビューを書き始めた。というのも、まさにそんな具合に、感動がじわりと後になって身にしみてくる味わいの作品だったのである。酒を飲みながら本書を読んだのは、1カ月くらい前のことだ。それ以来、新聞を読んだり、テレビのニュースやドキュメンタリー番組を見るさいだけでなく、本や雑誌を読む時にも、本書で繰り広げられている世界に照らし合わせながら、事件や出来事やテーマをながめる癖がついているのに気がついた。

この作品では、未来が舞台となっている。その未来像に、無意識のうちに影響されたのかもしれない。言い換えると、現在の状況が進めば世界はどうなるかという視点が、知らない間に身につけてしまったと考えられる。それが本書から受けた、じわりとした感動の正体ではないかと思う。後味のいい作品ではない。1カ月前に読んだ時点では、書評を書く気は全くなかった。それなのに、今こうして書いている。

「出来の悪いSF小説」と先に書いたように、エンターテインメント小説の一大ジャンルである本格的なSF作品の書き手から見れば、科学的な根拠もない欠点だらけの駄作であろう。しかし、読者を楽しませようとする意図が皆無である点に、この作品の強みを感じたと言え、褒めすぎだろうか。純文学にはいくつかの約束事があるようだ。特に新人賞の選考にあたっては、新人作家や売れない作家による下読みや、編集者による選り分けの段階で、いくつかのチェック事項が存在すると聞いたことがある。

視点がぶれていないか。神の視点は新人には許してはならない。説明ではなく描写。決まり文句や紋切り型のイメージは駄目。という具合らしい。中堅や大御所には許されることが、新人には禁じられる。理不尽な業界である。ただし、私は純文学の唯一の存在価値として、次のことを高く評価している。

少なくとも純文学は、読者に媚びてはならない。

と、いうことだ。世相や流行や風潮を意識し、それに迎合し、「売れ」と「受け」を狙ったら、純文学はその存在価値を失う。だから文壇内で、ある一定の地位を築いたなら、純文学の書き手は、唯我独尊でめっちゃめっちゃをやればいいのである。何を書いてもいい。

以上は、あくまでも持論である。なにしろ大きな賞を取れば、怖いものはない。生活のためには講演料を稼げばいい。ある著名な作家の講演料を聞いて、私はぶったまげたことがある。タレントと同じく、テレビに出るだけでも相当な収入になるという。あとは読者に媚びず、書きたいことを自由な形式と文体で書けばいい。それが純文学ではないか。改めて、そう思わせてくれた小説である。では、あらすじを紹介する。

時は、208X年。世界大戦が何度も繰り返され、地球の風景はかなり荒廃している。世界の人口は20億人に激減し、放射能に汚染された地域が数多く存在するために、ある特定の場所に人口が密集するという状況となっている。スポットと呼ばれる、放射能を除去した地帯が、世界各地に散らばっている。そのスポット間を放射能を遮断する金属で防備された小型ジェット機で移動することだけが、幾たびかの戦争を生き延びた人たちにとっての人的交流である。あとは人工衛星を介してのネットが、スポット同士をつないでいる。

ストーリーは、そのスポットの1つである、ニュー・カワサキという小都市を中心に展開する。数の多さから順に挙げると、日本人、中国人、ブラジル人、韓国人、ロシア人……という具合に、人口が構成されている。まず驚かされるのは、住民たちが、薬づけ器械づけになっていることだ。スポットでは、放射能が除去されているとはいえ、それは程度の問題であり、誰もがたとえば西暦2000年に比べれば、はるかに高い量の放射能に日常的に被爆している。日に数十種類の薬剤を投与され、被爆による被害を抑制するための機器を携帯し、家庭、職場、学校、店舗、公共施設などで、午前と午後それぞれ何回か、微細な薬剤と光線のシャワーを浴びる。これが、全住民の生活の一部になっている。もっとも、ナノテクノロジーの進歩により、薬は1回に1カプセルを飲むだけ

でいい。また器材については後述するが、かなりスリムでコンパクトなのである。

ニュー・カワサキに住むナカニシという家族が、主要な登場人物である。その生活ぶりが、実に気味が悪い。気色が悪い。一家を紹介しよう。父親のショウは、スポットで最も大きな病院に勤務する医師で、34歳。母親のアカツキは、ジュニアと呼ばれる、現在でいう小学校と中学校を合わせた学校の教師で、41歳。長女、ナナセは8歳でジュニアの2年生。長男シータは、7歳でジュニアの1年生。ほかにアカツキの実父である、リョウ66歳がいるが、同じスポット内で別に暮らしている。

一家の日常生活が淡々とつづられるが、その細部は現在のわれわれの生活と比較すると、大きく異なっている。というよりも、不気味なのである。たとえば、ナナセもシータも、実に邪悪な性格をしていて、しばしば小動物を虐待し、たがいに傷つけ合うほどの喧嘩をしょっちゅうし、その都度、腰に取り付けられたポーチから警告音が発せられる。すると、2人は指定された無糖のガムや飴玉を口に入れる。すると、残虐性や怒りが収まるのである。2人のおやつである菓子に、何らかの薬が含まれていることは言うまでもない。

警告音は音声の場合もあれば、何種類かのメロディーが流れることもある。本書を読み進めるうちに明らかになるが、ナナセとシータの体内には電子チップが埋め込まれ、2人が携帯しているポーチとつながっている。ポーチに収められた口紅ほどのサイズの機器が、電子チップが発する微量の電波を受信しているのである。電子チップは、それが埋め込まれている人間の喜怒哀楽に伴う生理的な状態や異状を逐次察知し、ポーチ内の機器に信号としてデータを送り込む。

その機器にはスピーカーがついていて、先に述べたような警告音を発する。したがって、2人が喧嘩をしたり小動物を虐待するたびに、電子チップからのデータを受信した機器のスピーカーが作動することとなる。驚くべきことに、子どもだけでなく、あらゆる年齢の住民の体内に同様のチップが埋め込まれていて、誰もが腕時計、メガネフレーム、ペンダント、腕輪、足輪など自分の好みの形をした機器を携帯している。

さて、ナカニシ家の祖父、リョウが治安組織ポリースによって、逮捕されるという事件が起きる。もちろん、リョウも腕時計型の機器を常に身につけている。そのリョウが逮捕されるまでの経緯が、実に気味が悪い。自分の孫と同じくらいの子どもにいたずらをしたために、身柄を拘束されるのである。「つい、意志に負けて、薬を飲まなかったのです」とは、ポリースの取調室でのリョウの供述である。捜査官とリョウとのやりとり

から、驚くべき事実が浮かび上がってくる。どうやら、人類に精神的な異変が起こっているらしい。それは、ほぼ20年単位で分類することができる。

0歳から20歳(=Xジェネレーションと呼ばれる)は、凶暴性・残酷性、20歳から40歳(=Yジェネレーションと呼ばれる)が気分障害(=躁・うつ・躁うつ)、40歳以上(=Zジェネレーションと呼ばれる)ではペドフィリア(=小児性愛)が顕著な症候としてみられるという現象が起きている。こうした不気味な状況が、ストーリーや会話によって次第に明らかになってくる。世界の平均寿命は、現在と比べれば低い。男性が62.94年(or歳)、女性が65.52年(or歳)という数値が挙げられることから、リョウはかなりの高齢者ということになる。高齢者に対する配慮と、リョウの義理の息子であるショウの父親の働きかけによって、リョウの起こした事件は内密に処理される運びとなり、リョウは禁固刑を免れる。なお、ショウの実父はニュー・カワサキで行政官を務めている高級官僚である。

世界各地に点在するスポットは、それぞれが独立した都市国家のような自治組織を構成している。上述の世代別症候群は、人類に共通していて、どのスポットも同様のシステムで住民の医療を管理している。とりわけ、ニュー・カワサキは、意図的な薬剤の中断に対して重罪を課すことで世界中に知られているスポットである。

監視態勢の厳しい老人向け施設にリョウを預け入れた帰りの、アカツキとショウとの会話の中で、本書のタイトル『PDSジェネレーションズ』の意味が、明らかになる。「パーソナリティ・ディスオーダー・シンドローム・ジェネレーションズ」、直訳すれば「人格障害症候群世代たち」ということになるであろう。「ジェネレーションズ」と複数形になっているところがポイントである。

先に触れたように、純文学である本書は、読者に媚びてはいない。根拠や因果関係に関する記述が全くないままに、ストーリーはご都合主義的にどんどん展開していく。リョウ・ナカニシ老人が施設に入れられた直後、ニュー・カワサキからわずか数百キロ離れたスポットであるシンゲンで、新型インフルエンザが発生する。エンデミック(=一定の地域内での急激な伝染)がパンデミック(=世界的規模の伝染)に移行する兆しが見られてきたところから、ニュー・カワサキの行政府は、世界中のスポットを緩やかにつないでいるソリダリティと呼ばれる連帯組織の反対を押し切って、シンゲンに対し空からの軍事行動に打って出る。

そこで番狂わせが起きる。ニュー・カワサキに修学旅行で滞在していた、シンゲンの少

年少女たち 17 人が、ニュー・カワサキの医療管理センターを標的にゲリラ的テロ攻撃を開始するのである。全住民が薬づけ器械づけになっている社会では、医療管理センターは、現在で言えば警察、軍隊、医療施設、および行政施設を合体したような機能を持つ存在である。つまり、極めて重要な役割を担う中枢となっている。

ニュー・カワサキ全体の住民管理システムは、パニックと機能停止に陥る。ある意味では、こうした事態は、インフルエンザの流行よりも大きな打撃をスポット全域に与えることになる。薬や機器の供給が途絶え、住民の管理が遂行できなくなるのである。薬と機器が「切れた」ために、戦意をなくした Y ジェネレーション、老いの身に鞭打って幼い子どもたちに襲いかかる Z ジェネレーション、そして衝動的に破壊行動に出る X ジェネレーション。

ソリダリティは、ネットを通じたテレビ電話で緊急理事会を招集し、ニュー・カワサキとシンゲンを「隔離」する決議を採択する。両スポットは事実上、海・陸・空を閉鎖され、シンゲンはインフルエンザのエピデミックによって、ニュー・カワサキはジェネレーション間の争いと殺戮によって、絶滅の道を突き進むしかなくなる。ソリダリティの決議の直後、場面は、ナカニシ家の居間に移動する。更なる不穏な 1 日の予兆をはらんだ朝。医師である父親のショウが、液化ガスの入った小型ボンベのコックをひねる。そこで、小説は終わる。

冒頭で白状したように、私は、約 1 カ月前に酒を飲みながら、この作品を走り読みした。駄作だと感じた。だが、それ以降、世の中を見る目が少し変わった。そして、思った。これは、一種の感動ではないか。

そこで、今回、レビューを書く決意をし、改めて素面（しらふ）の状態で本書を読んてみた。やはり、走り読みになってしまったが、この 1 カ月ほどの間に、折りあるごとに感じていたさまざまな不安と傾向——核兵器の拡散、テロの拡大、新型インフルエンザの発生とそれに対する各国の危機管理能力の脆弱（ぜいじゃく）さ、未成年や幼児が犠牲となる性犯罪の増加、うつ病を始めとする気分障害の広まり、社会における医療の重要性の増大——が、実にリアルなものであることを再確認した。

本書は、どう考えても、ご都合主義的で辻褄の合わない部分が目立つ、出来の悪い SF 小説である。ただし、それは SF という、エンターテインメント小説を基準にした見方ではないか。

純文学の存在価値は、「売れる」「売れない」とは異なった尺度でものを書くというスタンスにある、と私は考える。実際、欠陥だらけであったり、破綻（はたん）した小説にこそ、しばしば破天荒なパワーを感じる。エンターテインメントを旨とする小説には許されないアナーキーなストーリーテリング、そして「読者が選ぶ」のではなく「読者を選ぶ」という不遜（ふそん）な書き方が許されるのが純文学ではないか。

純文学よ、自由であれ。めちゃくちゃであれ。読者に媚びるな。本書を読み、そう励ましたい気持ちになった。

<評者：孟宗竹真（もうそうだけまこと）・詩人>

*

孟宗竹真氏には、「不定期に」というお約束で、書評をお送りいただいております。にもかかわらず、日曜には書評というスケジュールが定着しつつあり、大いに感謝しています。

書評のバックナンバーは、第1回「架空書評：狂った砂時計」2009-01-13、第2回「架空書評：何もかもが輝いて見える日」2009-01-18、第3回「架空書評：彼らのいる風景」2009-01-25、第4回「架空書評：ビッグ・ブラザー」2009-02-01です。今回の記事とあわせてお読みいただければ幸いです。

なお、当ブログの記事のバックナンバーに、短い解説とキーワードをつけたダイジェスト版、「こんなことを書きました（その1）」2009-01-19、「こんなことを書きました（その2）」2009-02-02にもお目を通していただければ嬉しいです。

孟宗竹さん、できれば来週も原稿をお送り願います。（パ）

09.02.09 1人に2台のテレビ

◆1人に2台のテレビ

2009-02-09 09:10:34 | Weblog

自分、行ったんですよ、量販店に、電気製品ですよ、近所の人と一緒にでしたが、きのうのことなんです。なぜか、語順が英語しています。というのも、ああいうところへは、久しぶりのお出かけだったために、今思い出しながら興奮しているんです。帰りに、ちょっとしたドライブにつれていってもらったのも、うれしかったです。ふだんはバスとか電車とか、公共輸送機関を利用している自分にとっては、やはり自家用車に乗せてもらうのは楽しいです。

きょう書きたいと思っているのは、その電気製品の量販店に並べられた、いろいろなメーカーのさまざまなサイズのテレビ画面を見比べていて感じたことなのです。結論から言いますと、ヒトの知覚というのはテレビに似ているという、ごく当たり前とも言えそうな感想なのです。「言えそうな」と書いたのは、尋ねる相手がいないからです。友達ゼロの身ですから、当然ですけど。ですので、きょうの記事に思いをつづりながら、必死で頭の整理をしようとしているわけです。果たして、ヒトの知覚はテレビに似ているか？

このブログのバックナンバー「カジノ人間主義」2009-01-30)で、

➤★知覚：とりあえず、必要のあるものしか知覚しない。都合の悪いものは知覚しない。たとえば、「見る」「聞く」という行動が、いかに選別と排除に満ちたものであるかは、誰もが日々体験している。テレビを例にとれば、すぐに分かる。画像と音声伝える全情報を、視覚と聴覚が残らず知覚していたら、そのヒトの頭＝脳が爆発してしまうでしょう。

と書きました。きょうは、そのことをもう少し詳しく考えてみたいです。

唐突に聞こえるかもしれませんが、テレビって、ヒトを「まねて」作られているのではないのでしょうか？ ヒトに「合わせて」作られるのは、よく考えれば当たり前のことですね。でも、きょう問題にしたいのは、

テレビは、ヒトを「まねて」作られているのではないか？

なのです。

ヒトは何かを作る時には、自分たちの都合に合わせてつくりますよね。今、「作る」と書きましたように、あくまでも「作る」であって、「創る」ではありません。「創る」は、「発明する」や「発見する」に近いです。ヒトが何かを発明したり発見する時には、いくらかの偶然がともないます。ずばり、偶然の産物や副産物だったりしますね。

代表的な例は、ペニシリンですよ。学校で習ったのを覚えています。フレミングとかいう科学者が、ある実験をしていて、その最中にできたアオカビかなんかをいじっていたことから、抗生物質の開発につながったとか何とか――。詳細は、きれいさっぱり忘れました。ただ、それが偶然の産物か副産物だったような記憶があります。

今、クリエイティビティ（＝創造性＝創造力）とか、クリエイティブ・シンキングとか、発想法とかが流行っていますね。本屋さんへ行くと、そうした類の本が、脳科学関連の書籍と一緒に、たくさん並べられていて目がくらみます。この間、ある本を手にして、めまいを追い払いながら、ざっと拾い読みしましたが、偶然を積極的に利用しようという意味のことが、やたら書いてありました。ヒトって狡猾だなあと、その時に思いました。お金や便利や名誉のためなら、何でも利用するのだなあ、とも思いました。

その本の中で、お金を儲けて偉くなるためにクリエイティビティを利用しようと、はっきり書いてあったのには驚きました。著者である、すごく元気そうな女性の顔写真が表紙に載っていました。いい年して、「こわーい、この人」なんて叫びそうになり、怖気づいちゃいましたよ。はい。最近、新聞でもよくその顔や名前を見かける人です。勝つとか何とかという人で、名前からしてギャンブラーみたいに元気がいいのです。自分には苦手なタイプです。

話がそれて、ごめんなさい。こんな調子なんです、このブログは。はい。で、テレビなんですけど、やっぱり、ヒトに合わせて作ってあります。テレビが発明されたころは、なかなかヒトに合わせられなかった。でも、だんだんと、ヒトの都合に合わせてように「進化」させられてきたんでしょうね。ご苦労さま。ヒトに言っているんじゃないですよ。テレビさんに、ご苦労さま、です。ほんとうに、ほんとうに、ご苦労さん。じゃあーん。むむっ！ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

では、ないかいのう？

「ほんとに〇〇〇〇ほんとに〇〇〇〇、ご苦労さん 〇〇」

これって、ドリフターズの歌の歌詞ですから、著作権に触れる可能性があります。で、〇でちょっと手を加えさせていただきました。あまりにも口調がいいので、一時期には自分でもあきれほど歌っていました。他の歌詞の部分はうろ覚えなんですけど、けっこうすごい内容だったなあ、と今になって感心しました。

いやあ、ほんとうにテレビさんには、お世話になってきました。みなさん、そうじゃないですか？ テレビなしの生活なんて、ちょっと想像できないくらい、生活に浸透していませんか？ ちなみに、うちのテレビはブラウン管で見るものなのですが、2011年の7月24日がXデーなんですよね。深刻な問題なので、日付をメモしてテレビに貼り付けてあります。確か、そうなるのでしたよね？ だったら、何とかしなくちゃ。でも、お金がない。

今日の前にあるパソコンの画面じゃ、テレビ放送は見られないのでしょうか？ 形が似ているのだから、テレビ番組くらい見られるような気がするんですけど。今度、勇気を出して、近所の電気屋さん聞いてみます。

それで思い出しましたが、パソコンのモニターとテレビとは似ているけど違う、という感じをずっといっていました。今でも、感じています。このことについても話し合

う相手がないので、口にすることはありますが、書いてみます。

テレビは見るもの、パソコンの画面は読むものではないだろうか？

たった今、書いたセンテンスを読み返してみると、すごく当たり前のことを疑問文にしているだけのような気もするし、「あんた、あほ、と違うの？」＝「そんな馬鹿なことが、あるわけないじゃん」なんて全面的に否定され、かつ罵倒されそうな気もするし判断が付きません。

みなさんは、どうお思いになりますか？ テレビのニュース番組の数時間前のお古なんかを、集めたサイトでテレビの放送を見ることは、自分もあります。YouTube で、テレビの番組の一部を見ることもあります。その意味では、パソコンのモニターでテレビを見ているのですが、このモニターでチャンネルを次々と切り換えながら、テレビで放送中の番組を見た経験はありません。

さきほど書いたように、そういうことができるのかどうかも、よく知りません。ただ、やっぱり、

>テレビは見るもの、パソコンの画面は読むものではないだろうか？

と思ってしまうのです。ほんとうはケータイまで考えに入れると、いいのですが、以前このブログで書きましたように、自分はケータイとはほとんど無縁の生活をしているので、テレビ画面とモニター画面だけに、話を絞ります。うーん。実際、どうなんでしょう？ このさい、思い切って、

テレビは見るもの、パソコンの画面は読むもの、なのだ

と、バカボンのパパの口調を借りて断定しちゃいます。

断定すると、すっきりしました。

で、テレビはそもそも、見るために使用されています。一方、パソコンのモニターは読むために使用されています。自分の勤では、両者が合体することはないだろうという気がします。技術的に可能であったとしても、ヒトの知覚に備わった「都合」に合わないというか、反するように思うのです。

言い方を変えると、両者は別々の機能を持ちながら、併用されていくのではないかと？ テレビが登場した時に、多くの人がラジオの使命はもう終わったと考えたにもかかわらず、未だにラジオが存在しているように、テレビとパソコン画面は共存し続けるのではないかと？ いや、共存し続ける、のだ。と思うんです。

新聞や雑誌の記事やテレビの番組で、テレビとインターネットの合体だか融合だかが、よく話題にされますね。テレビ放送のデジタル化のXデーがあるから、うらんでいるわけではありませんが、自分には、ピンときません。合体・融合が、うまくいっているようだとも、ぜんぜん思えません。自分は長年にわたるテレビの一視聴者、および比較的最近になってネットを利用し始めた一市民としての感覚で、意見を述べているのですけど……。

それとも、こっちの感覚が、古いのでしょうか？ 古い、で思い出しましたが、けっこう笑えるお話を思い出しました。話は、またもや、それますが、テレビとも大いに関係があります。ずいぶん前のことです。日曜日の朝に、時事放談という番組がありますね。あれって、長寿番組です。出演者や番組自体の構成もさまざまな変遷をたどってきたようです。

今、書こうとしているのは、細川隆元さんと藤原弘達さんというレギュラー2人が出演していた時期の話です。お二人とも、ご高齢になられていたころで、「じじい放談」などと影で言っている人たちもいました。すでにお亡くなりになられていて、細川さんと藤原さん、失礼なことを書いて、ごめんなさい。

で、ある放送で、ハイビジョン、つまり高精細度テレビがテーマになりました。確か、ハイビジョン放送が国家的な事業の1つであるみたいなことを、お二人が「放談」なさっていました。ねっ、昔の話でしょ？ 現在、当たり前なのが、遠い未来の話として語られていたのです。当時、ハイビジョンは、「高品位テレビ」と呼ばれていました。新語だったんです。自分も、お二人の話を聞きながら、よく分からないまま何となくブラウン管に目を向けていたのです。「コオヒンイ・テレビ」と言われても、漢字が頭に浮かぶ

までに、そうとう時間がかかったような記憶があります。「コオヒンイ・テレビ」。何だか、発音しにくくありませんか？

なにしろ、「時事放談」です。お二人とも、世の中の流れはよくご存知のはずの方でしたから、「コオヒンイ・テレビ」がどんなもので、それが開発されるとどういう社会的なメリットがあるのかを、放談なさっていたわけです。あれは、確か「生放送＝ライブ」でした。ですから、番組の最後のほうになると、画面に映らない時計か、ディレクターのカウントダウンを横目で見ながら、お二人が時間を気にして慌てふためくさまが、視聴者にもよく分かりました。それが楽しみの1つでもありました。政治家の悪口なんかで、盛り上がっているときなどには、

「あいつは、本当にとんでもない奴だ、馬鹿野郎！」

なんて、主に藤原さんが怒鳴って、番組終了などということもあり、けっこう気に入って見ていました。そのテンションの高さを、楽しんでいました。で、「コオヒンイ・テレビ」がテーマだった日の放送ですが、最後のほうで細川さんが、視聴者の立場からすると「びっくり発言」をなさったのです。

あれれれれっ！

という感じでした。

「ところで藤原さん、なんでそういうもののことを、『コーヒーテレビ』って言うんですか？」

とおっしゃったのです。この記憶には、絶対に間違いはありません。なにしろ、親と一緒に腹を抱えて大笑いしたのですから。自分は中途難聴者ですが、そのころはまだ聞こえはよかったです。確か、細川さんのほうが藤原さんよりかなりお年を召していて、補聴器を装着なさっていたような気がします。お耳が遠いのは、番組を見ていて、しばしば感じていました。それにしても、あの番組の最後のほうまで、「コーヒーテレビ」とお聞き間違いになっていたのには、たまげました。一瞬、ギャグかと思ったくらいです。でも、お二人の表情と最後のやりとりで、そうではないことが、視聴者にはっきりと伝わったと思います。

何だか、話がそれまくっていますね。

＞テレビは見るもの、パソコンの画面は読むもの、なのだ

という、自分にとっては興味深い問題について、書こうとしていたのです。きょうは、もう、居直っちゃっていいですか？「居直って横道ばかりにそれているのは、毎度のことじゃねーか」。ああ、また幻聴！ そうだ！ ねえ、ゲンチョーさん、細川さんをダシにして、失礼なこと書いちゃったお詫びに、あの話をしてもいいでしょうか？「この間の、おまえの聞き間違いの話だろ？ 罪滅ぼしに、言っちゃえ言っちゃえ」。やっぱし、そうお思いですか？ じゃあ、しちやいます。

というわけで、ちょっと恥ずかしいのですが、最近自分が経験した聞き間違いの話を、告白いたします。少々エッチな話なのですが、事実ですので、そこのところはご理解とご配慮をお願い申し上げます。ちなみに、きょうのテーマとも無関係ではありません。

スーパーに買出しにいった時のことです。自分はレジに並んでいました。親のお供です。自分たちの前にいたご婦人2人が、会話をしていました。ご高齢の方と、50代くらいの女性の2人です。ご高齢の方が、ある医院の話をしていらっしゃいました。補聴器をしている自分は、少しだけ、その話の内容が聞きとれました。なにしろ、そのご高齢の方は声が大きいのです。実は、その医院は、うちの親も通っているところなので、親も聞き耳を立てていたようです。

「あの先生、あそこ、ばっかりいじっていて、ちっとも聴診器を当ててくれないんだから。あんなんで、いいの？」

自分には、はっきり、そう聞こえました。驚きましたよ。ドクハラですもの。ただ、気になったのは、先生の年齢です。40歳を少し過ぎたくらいの方なのです。大病院から、独立して開業されてそれほど経っていないお医者さんで、とても優しく、患者さんの話をよく聞き、医院の設備も最新で、自分も親もすごく気に入り、頼りにしている方なのです。だから、自分はびっくり仰天しました。

不思議なのは、2人のご婦人も、うちの親も、いっこうに動揺していないことです。ですから、自分1人が、どぎまぎして赤面していたのでした。レジでの支払いを終え、店内のテーブルでマイバッグに買ったものを詰めながら、親にさきほどのご婦人の発言について、尋ねようとしたのですが、まわりに数人のお客さんたちがいて言い出せませんでした。帰り道でも、恥ずかしさが先に立って話せませんでした。でも、不思議でなりません。聞き間違えたことは、確かです。難聴者ですから、そんなことは日常茶飯事です。

いったん気になると、解決せずにはいないたちなので、家に帰ってから、思いきって親に尋ねました。「さっき、〇〇先生の話を話している女の人たち、いたよね？」とおもむろに切り出し、ついに核心部分について触れました。なのに、親はきょとんとしています。何の話か分からないというか、思い出せないみたいなのです。で、ようやく「ああ、あの話？」と言ったあと、一瞬口ごもり、親はいきなり笑い出しました。中途難聴者を子にもつ親ですから、「あれ、何て言ったの？」に答えるのは、これまた日常茶飯事です。でも、その時の親は、笑ってばかりいるのです。返答がない。

こっちは、納得できません。「『あの先生、あそこ、ばっかりいじっていて、ちっとも聴診器を当ててくれないんだから』って、聞こえたよ」。笑い声を上げている親に向かって、再度尋ねました。「あれはねえ、『あの先生、パソコンばっかりいじっていて、ちっとも聴診器を当ててくれない』って言ってたんだよ」。

がちょーん！なるほど・ザ・ワールド、という感じでした（※例のキャンペーンの、本日の第2弾をしたいのですが、ここは我慢してやめておきます、ちょっと急いでいるのです）。謎が解けました。あの医院は設備が最新で、カルテも電子カルテなのです。だから、先生は問診しながら、絶えずキーボードを叩いているのです。

自分は、親の前で笑うに笑えず、思わず、ふうーっとため息をついてしまいました。声を立てて笑ったのは、それから少しして自室に入ってからでした。細川さん、おあいこで、さきほどの失礼を許していただけますか？そして、ゲンチョーさん、これで気が済んだかい？「あいよ」。何と、素っ気ない返事！

で、

>テレビは見るもの、パソコンの画面は読むもの、なのだ

でしたね。そのことについては、さっき上で述べた通りなのですが、もう1つ、ぜひ、これを機会に考えてみたいことがあります。ひょっとして、ヒトは誰もが、

1人に2台のテレビ

を持っているのではないかと、という疑問なのです。もちろん、この惑星には、テレビを持っている人ばかりが、生きているわけではありません。もしかすると、持っていない人や家庭のほうが多いのかもしれない。そうしたことは、承知したうえでの話なのです。ですので、経済的理由、あるいは国家の情報管理政策が原因で、テレビを楽しめない人たちの存在は、残念ですが、脇に置かせていただきます。「一般化する」という横着で残酷な作業をさせてもらいます。

ところで、なぜ、「一般化」が残酷なのかと申しますと、選別と排除をするからです。テレビの場合ですと、「持っている or 持っていない」で選別をし、「持っていない人たち」を排除するからなのです。これって、残酷だとは思いませんか。これは自分が選別され排除されてみないと、なかなか体感しにくいものなのです。

みなさんの中に、あるいは、みなさんの身近な人の中に、何かを「持っていない」とか、何か「できない」というハンディを背負っている方が、いらっしゃるのでないでしょうか。「～を持っていない」「～ができない」を理由に、自分、または身近な人が、「あなたには関係ないの！ しっしっ」なんて追っ払われたなら、悲しくありませんか？残酷ですよ。それが選別と排除の残酷さなのです。

話を戻します。誰もがテレビを1台持っている、あるいは一家に少なくとも1台以上のテレビがあるという、一般化された前提で話を進めます。その前提から、

ヒトは、テレビ放送を受信するテレビ受像機と、「自分の知覚というテレビ受像機」の2台を持っているのではないかと

という問題提起をしたいのです。この記事の冒頭近くで、

>テレビは、ヒトを「まねて」作られているのではないか？

と書きましたが、それを言い換えると、今書いたような問題提起になります。

ところで、今朝はいつもより早めに起きて、この記事を書きました。うちは親が高齢なので、ふつうの家よりかなり早起きなのですが（※その分、寝るのも早くて、午後9時ちょっと過ぎには床についています）、それよりもずっと早く起きました。

実は、きょうは病院に診察の予約が入っている日なのです。ですので、この問題については、ぜひ、あすにでも改めて書いてみようと思います。

ここまで、読んでいただいた方に、お礼申し上げます。あす、また来てくだされば、うれしいです。

では、行ってまいります。

09.02.10 人面管から人面壁へ

◆人面管から人面壁へ

2009-02-10 10:58:46 | Weblog

きのうは、急いで記事を書きました。そのあと、いろいろ考えました。以前からばくぜんと感じていることを、ブログ記事という形で、複数の方に分かってもらえるようにするには、どう書けばいいのか？ 考えながら、時々ポケットに突っ込んである紙切れを取り出して、思いついたことを走り書きしたりして、きのう1日を過ごしました。

＞テレビは見るもの、パソコンの画面は読むもの、なのだ

＞テレビは、ヒトを「まねて」作られているのではないか？

＞ヒトは、テレビ放送を受信するテレビ受像機と、「自分の知覚というテレビ受像機」の2台を持っているのではないか？

以上が、きのうの記事の要点です。

おとといの日曜日に、近所の人に電気製品の量販店に連れていってもらいました。そこで、テレビのコーナーに行き、さまざまなメーカーの各種のサイズのテレビ画面を見比べていたのです。それがきっかけで、きのうの記事を書き始めたのですが、自分には荷の重過ぎる問題をかかえてしまったかな、と今になって思います。でも、そこは、素人の厚かましさという武器があります。とにかく、書いてみます。

まず、気づいたのは、同じ番組が流れているのに、各テレビの画質、左右のサイズのバランス、画面自体のサイズなどから受ける影響のせい、ずいぶん印象が違って見えるということです。これは、どなたも経験なさったことが、おありではないでしょうか？ だからこそ、ああいうお店では、複数のテレビを陳列し、お客さんに品定めしてもらうんですもんねえ。当たり前です。全部が同じに見えたら、お店は、お客さんに見比べてもらうために商品をわざわざ並べる必要などありません。

みなさんの家のテレビは、たいてい、1部屋に1台という感じで、置かれていませんか？ 中には、テレビ放送用、ゲーム用という具合に2台とか、一家全員用、おじいちゃんとおばあちゃん用、DVD用という具合に、3台が居間に据えられているご家庭も、あるかもしれません。3台も同じ部屋にあれば、常に見比べられますよね。

仮に居間に3台のテレビがあったとします。実際問題として、同時に3台で、ひとりが違った番組を見たりするのでしょうか？ なきにしもあらずですが、まあ、特殊なケースでしょう。SOHOで、何かの取引や、メディア関連のお仕事をされている方なら、自

宅の仕事部屋に、複数のテレビ画面をそれぞれ5、6台、バーっと並べて、デスクにはパソコンをこれまた5、6台並べて、バリバリと働いていらっしゃるなんてことも、十分考えられます。まるで、テレビ局の報道部門みたいですね。そんな人が、六本木ヒルズあたりにいても、おかしくないですね。それとも、そうしたお仕事は、この大不況で真っ先に荒波をかぶってしまった口でしょうか？ で、何を言いたいのかと申しますと、果たして、

ヒトは、複数の画面を同時に知覚することができるのだろうか？

ということなのです。ここでの知覚というのは、内容をちゃんと理解するという意味です。部分的、断片的に、情報を拾いあげるという意味ではありません。複数の画面を同時に知覚できる、聖徳太子みたいな人がいても、おかしくはないという気がする一方で、まず普通は、そうしたことはできないのではないかと、という感じのほうを強くいただきます。みなさんは、どうお感じになりますか？ 一度試してみるといいと思います。

実は、おととい、自分は試してみたんです、あの電気製品の量販店で。放送中の異なるチャンネルの番組だったのか、録画だったのか分かりませんが、3台のテレビが並んでいて、それぞれ別の画像が映し出されていたのです。以前からの疑問を解く絶好のチャンスでした。自分は難聴者なので、ああいう騒がしい場所では音声はもうめちゃくちゃに聞こえてきて、内容は聞きとれません。

ですから、自分は、ふだんは両耳に装着している補聴器の、右側のものを外して専用のケースに収めてポケットにしまい込みました。そして、聖徳太子になったつもりで、こころもち、距離を置いた位置から、3台のテレビの画面をながめていたのです。無理でした。インポッシブルでした。不可能な任務でした。「ミッション・インポッシブル＝Mission: Impossible = 不可能な任務 (= 使命) = スパイ大作戦」。ジャン、ジャ、ジャ、ジャン、ジャ、ジャー。おはよう、フェルプスくん | (中略) 成功を祈る。ほあほあーん。しゅーっ。

あっ！ むむっ！ (※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！)、まだまだ、話が進まない。「おめーが、自分で勝手に進めねーよーにしてん、じゃんかー」。ああ、またもや、幻聴。でも、ここまでやったのだから、とにかく手短かに終わらせます。では、いきますー。で、これって、もしかして、きょうの、

死語復活キャンペーン

では、ないかいのう？

ご存知でしょうか？ 米国製テレビドラマ、「スパイ大作戦」です。ちなみに、

>ジャン、ジャ、ジャ、ジャン、ジャ、ジャー—。

というのは、テーマソングの出だしの再現です。実際に、お聞きになった方でないと、お分かりにくいと思いますけど。

>おはよう、フェルプスくん

というのは、謎の組織から送られてきて、公園のゴミ箱の中とか、どこかのビルの駐車場の隅っこのバケツの中に隠されている、小型テープレコーダーに録音された声の、冒頭の決まり文句なのです。これが渋くていい声なんです。フェルプスくん役の声優さんも、また、これが低音でいい声なんです。で、この小型テープレコーダーから、確か組織のリーダーか誰かの声で、とてつもない困難な任務について、指令が与えられるのです。

>（中略）成功を祈る。

というのは、テープレコーダーの声が最後に必ず言うセリフです。

> ほあほあ—ん。しゅ—っ。

というのは、その小型テープレコーダーが、どういう仕組みか知らないんですけど、急に煙を出して、自滅するんです。その時の、映像のイメージを勝手に擬音化しました。

この番組、好きでした。とほうもないインポッシブルな計画を、超低予算的な舞台装置で遂行するのです。まるで、このブログみたいじゃないですか？ もっとも、このブログでは、ほとんどが計画倒れか、頓挫で終わっちゃうんですけど。反省。トホホ。「よく分かってる、じゃねーか」。ああ、また、幻聴だ！

並べられた3台のテレビの画面を、ながめていた話の続きです。とてもではありませんが、同時に、3台の映像に集中することはできませんでした。自分だけなのでしょう。そんな不安が脳裏をかすめるのですが、尋ねる相手がいません。で、何度か、集中するように努力しました。その場で20分くらいは、粘っていたと思います。でも、駄目でした。すごく疲れるのです。それに加えて、頭が混乱してくるのです。

そのうちに、疲れたのか思考停止状態に近い感じがしてきました。あやうい。このままでは、倒れる。自分は、「実験」をあきらめて、近くにあった顧客用の長椅子に腰をおろしました。今、思い出しただけで、冷や汗が出てきました。めちゃくちゃ、疲れるんです。みなさんも、ぜひ、お試しになってみてください。で、いちおう、ここで結論を出します。

ヒトは、1つのテレビ画面にしか、集中できない。

断定しちゃいましたが、自信はないです。あくまでも、個人的な「実験の結果」です。みなさん、どうお思いになりますか？ 何か災害や大きな事件があった時に、放送中の番組と並行して、テレビ画面の上や下にテロップが流れますね。ニュースやバラエティなんかの放送中に画面に出てくる、情報を補助するための字幕ではありませんよ。放送の内容とは、まったく関係なしに、流れる情報です。

ああいうテロップと、放送の内容とを、同時に認識することができますか？ 両者のどちらかのデータ=情報を遮断して、スポット的に短時間のうちに、一方の情報を認識するのなら、できそうな気がします。でも、継続して両方を集中的に認識するのは、かなり困難というか、自分の場合には不可能だという気がします。

たった今、思い出したのですが、一時期、多重人格がブームになったことがありました。覚えていらっしゃるでしょうか？ だいぶ前のことですね。真偽は別にして、あの現象について考えてみましょう。あれって、複数の人格が、一度にざわざわと出てくることがあったのでしょうか？ 確か、交代で出てくることは、聞いた覚えがあります。自分は、あ

まり興味がなかったもので、分かりませんが、どうでした？

そうそう、異なる人格同士が会話するという話も、聞いたような気がします。でも、同時に複数の人格が、変な言い方ですが、「舞台＝ステージ＝場」となるヒトにおいて、一斉に、勝手というか、ばらばらに、それぞれの存在を出現させるという、交信状態あるいは混線状態って、ありましたっけ？ あったとすれば、大混戦ですね。忙しいでしょうね。いずれにせよ、各人格がリラックスして自己認識なんてしてられないことは、確かではないでしょうか？ 混乱か、敵味方も定かではない大喧嘩になるでしょうね。

ですので、多重人格者といえども、舞台は1つというか、画面は1つしか、処理できないのではないのでしょうか？ まして、多重人格者でもなく（※たぶん）、聖徳太子でもない、自分なんかは、1つの「テレビ画面＝知覚する自分という存在」だけで、精一杯です。たった今、多重人格者のところで「たぶん」としたのは、自分に別の人格があったとして、それに気づかない場合を想定してのことです。深い意味はありません（※あったらどうしよう！？ うっただけで間に合っているんですけどー）。いずれにせよ、自分の脳の処理能力が、とりわけ低いのでしょうか？ みなさんは、どうお考えに、あるいは、どうお感じになりますか？ というわけで、

>テレビは、ヒトを「まねて」作られているのではないか？

>ヒトは、テレビ放送を受信するテレビ受像機と、「自分の知覚というテレビ受像機」の2台を持っているのではないか？

という以前からいただいている疑問に、もう1つ加える必要を感じます。それは、

ヒトは、1台のテレビ受像機しか、「知覚＝処理」できないのではないか？

です。今、書いたセンテンスでの「1台のテレビ受像機」というのは、2重の意味を持たせてあります。

(1) テレビ放送を受信する、テレビ受像機

と、

(2) 自分の知覚という、テレビ受像機 (※比喻ですね)

の2つです。

ややこしいですか？ どう説明したらいいのでしょうか？ そうですね……。次のように、考えてみてはいかがでしょう？ ごく大雑把に、話を簡略化しちゃいましょう。

(1) ヒトは、1度に1台のテレビ受像機だけなら、マジで観ることができる。＝ヒトは、1度に2台以上のテレビ受像機を、マジで観ることはできない。

(2) ヒトは、1度に1個の自分という存在として、世界を知覚している。

＝ヒトは、1度に2個以上の自分という存在として、世界を知覚しない。

＝1度に2個以上の自分という存在として、世界を知覚しているヒトはいない。

ただ今の(1)と(2)から言えることは、

(3) ヒトは、自分という存在の知覚処理能力に合わせて、テレビを作っている。

＝ヒトは、自分という存在をまねて、テレビを作っている。

＝ヒトとテレビは、「そっくり＝激似」である。

以上なんですけど、強引すぎますか？

こういう話って、疲れますよね。話題を変えましょう。大学生だったころの思い出を書いてみます。

同じ学科に、「広告研究会」のメンバーがいました。兄がテレビ局に勤めているという男子学生で、やたらそのギョーカイの話題や裏話に詳しいのです。教室で、みんなが前日見たテレビ番組の話なんかをしていると、決まってその場をしらけさせるようなことを口にするのです。

嘘みたいな本当、本当みたいな嘘という感じの、おもしろい話を聞かせてくれるのです。はっきり言って、まわりの学生からは、あまり好かれてはいませんでした。自分は、へそ曲がりなので、その学生の話聞いて、いつも密かに楽しんでいました。たぶん、ほかの学生たちも、多かれ少なかれ、そうだったと思います。そのヒトの話は、だいたい、次のような結論で終わります。

あらゆるテレビ番組には、台本がある――。

たとえば、クイズ番組にも台本があり、ある特定のレギュラー解答者が、リードするように作られている。解答者が一般人ではない、〇〇というクイズ番組で、解答者の△△がほとんどいつも全問正解なのは、そういう筋書きになっているからだ。そう言われてみると、解答者が一般人ではないクイズ番組では、確かにそういう「天才」みたいな解答者が、必ずいました。ドキュメンタリー、ニュースも、筋書きや見込みをもとにして、取材と撮影が行われる。取材の結果や撮影された映像や音声は、前もって準備された筋書きと見込みに合わせて、編集される。今でいう、「やらせ」ですね、これは。

「メディアリテラシー」なんて言葉がなかったころの話です。まして「やらせ」が批判されるなんてこともありませんでした。新聞や雑誌にしろ、メディアを批判的にながめるというスタンスは、ほとんど見かけませんでした。確かに、学生運動や反体制派の政治的活動も、現在では考えられないほど盛んでした。でも、左右を問わず、報道とか客観的事実というものの自体に対して、疑いの目を向ける人たちは、たとえ、いたとしても絶対的マイノリティだったと思われまます。たぶん。

要するに、誰もが、

テレビで放送されることは本当だ

と思い込んでいた時代です。ドキュメンタリーではなく、作りものであるドラマであっても、それなりに「現実の変形」、または「ちょっと加工された現実」くらいの感覚で、観て、楽しみ、共感し、感動し、時には、そのフィクションに感化されて、その気になったり、本気になったりしていた時代です。

自分も、そうでした。テレビを信じきっていました。「テレビ教徒」だったと言っても、過言ではありません。これって、今もまだ続いているような気が、ふと、しましたが、錯覚でしょうか？ さっきの話に戻りますが、いずれにせよ、みんながシラケながらも、その学生の割と静かな声に耳を傾けていました。熱狂的な「テレビ教徒」が圧倒的に多かった時代に、「異教徒」の説教、あるいは「教団の内部の事情に通じた人間」の裏話を聞くような趣がありました。

よく考えると、以上書いてきたことは、只事ではありません。すごく、重要な問題ではないでしょうか？

ところで、キアヌ・リーヴス主演の『マトリックス』という映画がありますね。難解な映画で、自分はよく分かりませんでした。その映画を観たのは、ボードリヤールというフランスの人が、その映画の監督とその作品に大きな影響を与えていると聞いたからです。ボードリヤールの本では、『湾岸戦争は起こらなかった』、『シミュラクルとシミュレーション』、『シミュレーションの時代』がおススメです。どれも、これまたややこしい内容なのですが、すごく刺激的です。面倒な方は、以上の本はパスしましょう。

で、ボードリヤールの本を斜め読みして、自分なりに曲解したことを書きますと、

すべてのものは、「記号」という幻（まぼろし）を発している

という文として要約できます。この「記号」という考え方は、このブログのワンパターンの1つである、

Aの代わりに「Aでないもの」を代用するという仕組み＝からくり

つまり、「表象＝シンボルの働き」に出てくる、「表象＝シンボル＝代理＝代行」によく似ています。難しいですね。こういう場合には、記号と表象をいったん切り離してしまおう。そして、その似ている点を忘れた振りをして、別々に考えていくのが、非常に楽です。ただ、無精で、ズルいやり方ですね。

今週は、テレビの話をしています。テレビは、「記号」と非常に相性がいいのです。おととい行った電気製品の量販店は、「記号」に満ち満ちていました。商品とか製品は、大量生産されて、そっくりなものがたくさん存在しますね。「記号」というもののイメージは、まさにそれなんです。

そっくりなものが、多量に並んでいる。そっくりなものが、世界各地に散らばって存在している――。

そういうイメージのものが、「記号」なんです。テレビの売り場なんて、そっくりな（※「同じ」や「同一」とは違います）映像がずらりと並んでいるのですから、それこそ「ほんまもん」の記号だらけなんですよ。はい。

>すべてのものは、「記号」という幻（まぼろし）を発している

今、コピペしたのは、さきほど上で書いた文です。

幻＝まぼろし＝間ぼろし＝間滅し＝魔ぼろし＝魔滅し

変なこと、やっているでしょう。これから先、ちょっとおふざけします。ちょっと、とちくるっちゃいます。「もう、十分、とちくるってるよー、あんた」。ああ、またもや、幻聴！でも、めげずに続けます。

まぼろしは、ものが発するものですから、もの自体ではありません。実体のない、お化けみたいなものです。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」って、言いますよね。幽霊だと思って、よく見てみたら、枯れたススキの穂だったということです。そんなふうに、幽霊だと思うヒトの頭の中に立ち現れるものが、「記号」だと言ってもいい。自分は、そう思っています。

今、お近くにテレビがあったら、スイッチを入れて、よく画像を見てください。次に、その画像を、何十万か何百万の人たちが、同時に見ていると想像してください。不思議ではありませんか？ 念のために申し添えますが、スピリチュアルとかスピリチュアリティとかいう、お金儲けで使う「不思議」という錯覚とは、ぜんぜん関係ありません。今、問題にしているのは。別の「不思議」という錯覚です。

おびただしい数の人たちが、同時に同じ画像を見ているって、不可思議な気持ちがありませんか？ テレビの画像っていうのは、確か電氣的に処理された点や線の集まりですよ。それだけでも、不思議ではありませんか？ それが、リアルなもの、つまり、現実として錯覚されることによって、ヒトは「ギャハハー」とか、「なるほどね」とか、「いいなあ」とか、「いやだあ」とか、言ったり思ったりします。これって、「人面〇〇」と、そっくりなことをしていませんか（※「人面〇〇」については、「1カ月前、ひな祭り」2009-02-03 の冒頭だけでも、目を通していただくとありがたいです）。

身近にあるテレビ受像機の画面に映る「まぼろし」は、遠くにあるということ、つまり、「距離=間」を滅ぼします。ほら、television = tele（※遠く）+ vision（※見ること）、ですよ。距離をなくして見えるようにする、ということです。だから、「間滅し」なんです。で、テレビは、「人面管=ブラウン管を使って、テレビ放送を受信する機械」から、「人面壁=壁のように薄型化された画面で、高精細度テレビ放送（=ハイビジョン）を受信する機械」に進化しました。簡単に言うと、

人面管から人面壁へ

と出世したのです。その時に、「魔=ゴースト=醜さ=見にくさ=画質の悪さ=ノイズ」を徹底的に取り除いて、すぐリアルできれいな画面を実現したのです。だから、「魔滅し」なんです、個人的な意見ですけど。そういうわけで、さきほどの

幻=まぼろし=間ぼろし=間滅し=魔ぼろし=魔滅し

となるのです。

そろそろ、このブログも文字数制限に引っかかりそうです。ですので、「人面管から人面壁へ」の続きは、あす、もう少し分かりやすく書きたいと思います。また、来てくださいね。待っています。

09.02.11 マトリックス

◆マトリックス

2009-02-11 09:35:47 | Weblog

きのうの記事では、間借りさせていただいている、goo のブログサイトの文字数制限が気になって、舌足らずというか文字足らずな説明のまま、終わってしまいました。申し訳ありませんでした。で、

テレビが、人面管から人面壁へと出世した

というところまで、お話ししました。「比喩=たとえ」を使っているために、分かりにくいですよね。ですので、この部分を、再度説明させてください。

(1) 人面管：たとえば人面魚や人面岩のように、ヒトが、テレビ放送を受信した機器に接続されたブラウン管の画面上の走査線を知覚し、自分の都合のいいように選別と排除をおこなって、画像を然るべきイメージとしてとらえるさいに用いられるテレビ受像機。音声付き。

(2) 人面壁：たとえば人面魚や人面岩のように、ヒトが、テレビ放送を受信した機器に接続された薄型の液晶パネルまたはプラズマディスプレイなどの画面上の素子を知覚し、自分の都合のいいように選別と排除をおこなって、画像を然るべきイメージとしてとらえるさいに用いられるテレビ受像機。音声付き。

まず、「管」と「壁」というハード面を説明すると、以上のような感じになります。自分は、超文系なので、不正確な記述になっている可能性が高いです。あくまでも「こんな感じ」として、ご理解いただければ幸いです。

次に、「人面」というソフト面を説明いたします。上の定義の出だしである「たとえば人面魚や人面岩のように」で、だいたいお分かりいただけるのではないのでしょうか？ そこにヒトの顔など存在するはずがないことを承知しつつ、そこにヒトの顔を知覚してしまうという、錯覚と基本的には同じ「仕組み=からくり=脳および身体の働き」のことです。

ここで、錯覚という言葉に、ネガティブなイメージやニュアンスをいただく必要は、まったくありません。錯覚なしに、ヒトは生きられない。錯覚があつてこそ、ヒトはヒトらしく、存在できるのです。ネガティブとポジティブとは、いわゆる「反意語=反対語=対義語」ではありません。

よく見聞きする、一瞬にして自分自身を変えるという錯覚がそれなりに成果を上げているのが、ネガとポジが反対ではないことを証明しています。瞬時に自分を変える（=ネガな自分をポジな自分に変える）というのは、比喩=たとえ=嘘=でたらめ=作り話=フィクション=言葉の綾=レトリック=お金儲けのキャッチコピー=景気づけ=ジャスト・ジョーク、です。

ネガとポジは反対ではなく、むしろ表裏一体の関係にあるというべきでしょう。写真のネガとポジで考えるのも、わかりやすいですね。言うまでもなく、「表裏一体」も「写真のネガとポジ」も、やはり、比喩=たとえ=話のすり替え、です。すると、要は、心の持ちようだという、ごく当たり前の結論に行き着きます。

みなさん、太鼓をたたいたことが、おありですか？ ポンと小さな音を立ててたたくのが、ネガです。元気ないですね。諸般の事情で、それくらいしか、たたけない人もいらっしゃるかもしれません。ボンと大きな音を立てて勢いよくたたくのが、ポジです。元気ありますよね。威勢よくたたくと、何かいいことや、おいしいことがあるみたいですね。でも、無理をしてまで、大きな音を出す必要はありません。今、挙げた太鼓の例も、例えです。

このように、ポジとネガは、反対のものではありません。心の持ちようの程度の問題だというほうが正確かもしれません。しょせん、狂ったおサルさんの頭の中で起きたズレと同時に発生した「言葉」にすぎません。言葉だから、何とでも言えるのです。言葉は便利ですが、欠陥品でもあります。使用には、十分注意しましょう。このようにポジとネガという言葉に反対の関係なんてありません。

蛇足ですが、ポジティブという口当たりのいい美辞麗句に誤魔化されないようにしましょうね。世の中には、頑張っちゃいけない人も、たくさんいます。そういう人は、「頑張らない」をモットーにいきましょう＝行きましょう＝生きましょう＝息しましょう。張り切りすぎると、悪化するとお医者さんも言っています。自分の経験からも、そう思います。

で、錯覚に話をもどしますが、

>そこにヒトの顔など存在するはずがないことを承知しつつ、そこにヒトの顔を知覚してしまう

というのが、テレビのもっとも重要な存在価値なのです。もっとも、これは、ヒトがそういうふうな、自分の都合に合わせて無意識のうちにやっちゃっている行為なのです。ちなみに、ただ今上で引用した文は、「ヒトの顔」という比喩を使っていますので、手を加えて、もう少し正確にしてみます。すると、次のようになります。

ヒトは、イメージの存在しないところに、存在しないイメージを知覚する

となります。このフレーズは、きのう最後のほうでお話した、

記号＝幻＝まぼろし＝間ぼろし＝間滅し＝魔ぼろし＝魔滅し

という、とても尋常とは思えない言葉のつらなりを、言い換えたものなのです。ややこしいですね。実際、ややこしいのですけど。別に、深く考えることはありません。テレビ番組を見て、

「ギャハハー」「なるほど」「げろげろ」「いいなあ」「いやだあ」「オエー」「まあ」「えへへ」「ふふっ」「ばっかじゃないのー」「よっしゃー」「げらげら」「しくしく」

などと、ヒトらしく（＝人間様らしく）知覚して、反応していれば、それでいいのです。ただ、それは「まぼろし」を相手にした結果だという意識を、心の隅っこ、ほんとうに、隅っこのちょっとしたスペースでけっこうですので、そこに置いてもいいのではないしょうか？ ご不満の方は、もちろん、そんなことをなさる必要はぜんぜんありません。失礼しました。

話を変えます。以前にも、書きましたが、大学を卒業し最初の就職に失敗して、ブラブラしていたころがありました。なにしろ、文学部の文学科卒の男です。いわゆる「つぶしがきかない」の代表でした。そのうえ性格はうじうじしているし、往生際が悪いときていました。何をやろうかな？ どうやって、ご飯を食べていこうかな？ 消えてしまおうかな？ もう少し楽しもうかな？ などと迷っていたころに、突然、

活字のデザイナーになりてー

なんて、どういうわけか思っちゃったんです。なぜ、活字なのかと言われると、いろいろ理屈が浮かぶのですが、ほんとうのところはよく分かりません。ただ、活字（※活字の形とたたずまいです、活字が指し示す内容ではありません）が好きだったというか、きれいだと思っていたのです。

写植（しゃしょく）って言葉を見たり、聞いたことがおありでしょうか？ 活版印刷では、金属の活字を使いますね。写植は、「写真植字」を省略した言葉で、文字通り、一種の写真技術を利用して文字のネガを印画紙などに印字し、印刷の原版を作る方法です。けっこうなお値段の機械を用います。今も、コンピューターと組み合わせて使われています。電算写植といいます。

もっとも現在では、パソコンのワープロソフトと印刷用のソフトとプリンターがあれば、市販されている書籍や雑誌と比べても、それほど見劣りのしない、きれいな印刷物ができちゃいますよね。でも、その道の専門家が言うには、活版印刷にはそれなりの味があり、写植には写植の美しさがあり、ワープロとプリンターをつかった印刷物にも、

それなりの魅力があるらしいのです。

実は、「活字のデザイナーになりてー」とか「写植を勉強してー」なんて思っていたころに、ある人をだましてお金をとってしまったことがあるんです。よく考えれば、詐欺です。詐欺の時効って何年でしたっけ？ たぶん、この詐欺の時効は成立しているのではないかと勝手に思っています。今思うと、すごく悪いことをしました。というのは、相手の方は、当時、そして現在の自分と同様、経済的に苦しい状況にあったからです。

さきほど触れましたように、活版印刷では金属の活字を使います。で、当然のことながら、その活字を作る元の型があるのです。それを

「母型（ぼけい）＝マトリックス＝matrix」

と言います。きのうの記事に出てきた、キアヌ・リーブス主演の『マトリックス』という映画のタイトルと同じです。マトリックスという言葉には、いろいろな意味があります。時間がおありの方は、ぜひ、少し大きめの英和辞典でmatrixを引いてみてください。「マトリックス」をキーワードに、グーグルなどで検索をするだけでも、驚くような意味や使い方がされていますよ。この言葉の中心的なイメージ（＝コア・イメージ）は、

母＝母体＝産み出す＝生み出す＝殖（※生殖、繁殖、養殖の殖です）＝複製の原型（＝原形）

という感じです。で、詐欺の話ですが、母型を作る会社に短期間、アルバイトをしていたころのことです。職場には、オフィスのほかに、母型を製作する機械が20台くらい置かれた一種の作業場みたいなフロアがありました。金属を削ったり切断したり磨いたりする音で、けっこうやかましかった記憶があります。そこに10人以上の20歳前後の人たちと、1人の50歳くらいの方が働いていました。全員が男性です。

自分は、アルバイトを始めたばかりで、機械には触らせてもらえませんでした。仕組みや操作を知らないと危険なのです。だから、オフィスと作業場、そして、その会社と他の会社や工場との間を、母型や部品のようなものが入った箱を持って行き来するという仕事を与えられていました。

作業場に働いていた人たちの中に、大学の通信教育を受けている20歳くらいの男子学生がいました。割と気が合ったので、休み時間や駅までの帰り道などによく会話をしました。自分が大学を出て、その会社でアルバイトをしていることに、その人は興味を抱いていたようでした。また、大学で何を勉強していたのかについても、いろいろ聞かれました。

「どうして、こんな会社でアルバイトをしているの？ 家庭教師の口とか、いくらでもあるのに」と、何度か言われました。活字に興味があるのだと、その都度、正直に答えたのですが、首をかしげてなかなか納得してくれないのです。同じ質問を何度もされるので、何だか自分が責められているような気がしたこともあります。その人が、こちらに対して複雑な感情を抱いているのを感じました。いい気なもんだ、と思われていたような気がします。どうやら、その人はいわゆる苦学生で、生活はかなり苦しいみたいでした。で、あるとき、その人と会社の近くにある書店に入りました。

ところで、みなさん、角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？ 誰かを相手にして、次のようなことを試してください。

まず、相手を回れ右させて、こちらを見えないようにします。それから、あるページを両手で開きます。ページの上には、タイトルなどが印刷されていますから、そこを左右の指でうまく隠し、相手のほうにはページの字面だけが見えるようにして、逆に持ちます。ここまでは、分かりましたか？ その状態で、開いた文庫を差し出せば、相手はその見開き2ページが読めることとなりますね。表紙を見せちゃいけませんよ。くれぐれも、注意してください。

で、相手をこっちに向かせて、5秒だけ、そのページを見せます。5秒以上は駄目です。そして、相手を再び回れ右させて、「今のは、何文庫だった？」と尋ねます。

立場を、逆にして、考えてみましょう。あなたは、5秒間見ただけで、角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？

今、自分がそれを誰かに試されたとしたら、区別はできないと思います。活字については、割と敏感なほうなのですが、今だったら自信はまったくありません。「今だったら」がポイントです。当時は、できたのです。

ここで、詐欺の告白をします。自分は、そのバイト先の仲間をだましたのです。自分は活字に興味があり、知識もある。だから、数秒間見ただけで、角川文庫と新潮文庫の活字を見ただけで、区別してみせる。と、その本屋さんで大見得を切ったのです。相手は、「信じられない。嘘だ」と素っ気なく言いました。自分は、「本当だよ」と言い返しました。

この時点で、自分は、相手を挑発しだますつもりがあったのですから、「犯意」があったということになります。その人は意地になりました。

「じゃあ賭けをしよう」

相手にそう言わせたのですから、今思うと、自分って、そうとうワルだったな、と反省しています。で、千円を賭けた勝負となったのです。3冊で試して、こちらが2冊以上見分けられたら、こっちの勝ち。1冊だけ、あるいはぜんぜん見分けられなかったら、こっちの負け。どきどきしました。というのは、負ける可能性もあったのです。数学には弱いので、その勝敗の確率は、まったく分かりませんが。

で、その人に上で説明した本の持ち方を教え、こちらは回れ右をして、相手が声を掛けたところで、その文庫の見開き2ページにちらりと目を通しました。それを3回しました。

結果は、3冊とも正解しました。その人は、青ざめていました。でも、ちゃんと財布から千円札を出して、手渡してくれました。その時です。

「もう、1勝負しよう」

と、その人が言ったのです。こちらは、千円札を自分の財布に入れながら、罪悪感を覚え始めていたので慌てました。これ以上、罪は重ねたくないという気持ちも働き、「やめようよ」と言い残して、店を出ようと思いました。ところが、その人は、いきなりこちらの手首をつかんだんです。怖かったです。それで、もう1勝負してしまったのです。今度は、2冊正解で、1冊は失敗しました。でも、こちらの勝ちには違いありません。ま

た、千円が手に入りました。

あこのころの2千円は、生活の苦しい自分にとっても、あの人にとっても大金でした。それを、だまし取ったのです。立派な詐欺ですよ。この手品めいた詐欺の「種（たね）」については、もうピンときた方もいらっしゃると思います。

>今、自分がそれを誰かに試されたとしたら、区別はできないと思います。

と、さきほど書きました。新潮文庫と角川文庫を開いてご覧になればわかりますが、見た目には、とてもよく似ています。素人には、区別はしにくいです。でも、昔は、ある違いがあったのです。図式化して説明します。

(a)

○○○○○○。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○」

(b)

○○○○○○。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○」

(c)

○○○○○○。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「○○○『○○○』○○○○○○○○○○」

(d)

○○○○○○。

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

「○○○「○○○」○○○○○○○○○○」

当時の新潮文庫は、(a)であり、角川文庫は(b)だったのです。活字なんか見なくても、瞬間的に区別できたのです。自分が、どきどきしていたのは、会話のまったくないページを開かれたらどうしようという不安があり、1回負けたのは、まさにそうしたページを見せられたからでした。ちなみに、別の例を挙げますと、(c)が圧倒的に多い一方で、確か、(d)という活字の組み方もあったように記憶しています。

もしも、古い角川文庫があったら、あるいは新しくても組版が変わっていない同文庫があれば、確かめてみてください。(b)のようになっています。なお、このことを知っていたのは、大学4年生の時に、文章を書く技術を教える学校に通っていて、そこでの授業で習ったからです。

現在では、このトリックは使えないと思いますが、まだそういう組版の本が残っていますから、絶対に悪用しないでくださいね。へたすると、犯罪になりますよ。なお、上の話を読んで、万が一心当たりのある方がいらっしゃれば、ご一報願います。弁償します。ごめんなさい。どうか、ゆるしてください。

今の話で、マトリックスが出てきましたが、この言葉は、きのうの記事の最後のほうで触れた、

>すべてのものは、「記号」という幻(まぼろし)を発している

>幻=まぼろし=間ぼろし=間滅し=魔ぼろし=魔滅し

とに、大いに関係があります。

「マトリックス」というのは、「記号=まぼろし発信装置」の「複製製造機=お母さん」なのです。

ややこしいですね。実際、ややこしいのですが、なるべく具体的に説明してみます。ただし、ボードリヤールさんの説とは違って、あくまでも自分の考えている「仮説的モデル=未完成の図式=大雑把な見取り図」です。そうですねー、スーパーを想像してみてください。

たくさんの商品が並べてありますね。1種類が1個だけなんて、品切れ以外にはほとんどなくて、たいていは同じ製品が複数並んでいます。あれは、お母さんがいて、そのお腹から生まれた子どもたちなんです。だから、そっくりなのがずらっと並べられているのです。

まず、

「記号=まぼろし発信装置」のイメージ

は、

(1) ほとんど同じように見えるものが、たくさん並んでいる。そして、ほかの場所にも、きっとたくさん並べられている。

という感じです。

次に、なぜ自分は商品を買うのかを、考えてみてください。スーパーでヨーグルトを1個買ってきたとします。それを買ったのは、どうしてでしょう？ 家に持ち帰って、ずっ

と大切に、ながめたり、時には、上のほうを撫でてやったり、たまには、日に当てて元気に育つようにするためなんかじゃ、ありませんよね、ふつうは。「商品＝製品」を買うのは、実はその「もの」を買うというよりも、その「もの」の「機能＝用途＝役目＝使い道」を買うのではないのでしょうか？

つまり、

「記号＝まぼろし発信装置」の第2のイメージ

は、

(2) その「もの自体」ではなくて、その「もの」の「機能＝用途＝役目＝使い道」を購入し、消費する。

という感じです。

なんとなくイメージや感じが体感できれば、それでいいのです。で、このブログでは、おふざけをしながら、我流で哲学をしています。「なにが我流だ。このデタラメ野郎で、詐欺師野郎めが！」ああ、また幻聴！で、哲学というと真面目な響きがありますが、実はすごくいかがわしい面もあるんです。哲学にも、テクニクというか、スキルというか、芸みたいなものがあるって、けっこうズルをするんです。これは、狂えるおサルさんが、ズレてヒトになったことと大いに関係があります。

「表象」を忘れた振りをして、いったん切り離し、「記号」について考えるというのも、一種の「芸＝テクニク」なのです。ですので、このブログでは、しばらく「表象」を忘れてみようと思っています。ね、いかがわしいでしょ？許してくださいね。「この詐欺師野郎——」。しーっ！タンマ、タイム。あっ、やばいです。きょうも、文字数制限を突破しそうです。ストップします。

だらだらした文章に、ここまで付き合ってくださいの方に、感謝します。これほど長いブログも、珍しいみたいですね。1編の掌編小説くらいの長さがありますもんね。やはり、自分って暇人だと思つづく思います。いずれにせよ、お疲れ様でした。また、来

ていただければ、とてもうれしいです。待っています。

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

◆こんなマヨじゃ、いやだ！

2009-02-12 09:20:29 | Weblog

今週のテーマは、テレビかなあ、と思っていましたが、ちょっとずれてきました。「記号」の話になってきましたね。で、「表象」については、しばらく忘れましょうよ、なんて書いたとたんに、ダジャレも激減してしまいました。「死語復活キャンペーン」も、きのうはお休みしちゃいました。現金なものですね。「表象」から「記号」へ——という感じで、頭の中が、「新規改装オープン」状態になってきたためでしょうか？

きのう、「人面管」と「人面壁」について、いちおうの定義をしたあたりで、テレビのお話は一段落つきました。で、「マトリックス」という「お母さん」に登場をお願いし、「記号」について書こうとしたところで、きのうはタイムアウトというか、間借りしている goo のブログサイトの 10,000 文字数制限に触れそうになっちゃったんでしたよね。

10,000 文字数制限には、このブログサイトの付録というかサービス品である、絵文字も入ります。よくは分からないのですが、この絵文字がかなり容量を食うみたいなんです。みなさんが読みやすいようにと、改行を多くすると、これまた容量を食うようです。ですので、最近の記事では、絵文字の代わりに、*を使ったりしていますので、以前の記事に比べると、見た目が地味になっています。絵文字、かわいくて好きなんですけどね。

> 「マトリックス」というのは、「記号＝まぼろし発信装置」の「複製製造機＝お母さん」なのです。

これが、きのうの記事から引用した「マトリックス」の説明です。

> (1) ほとんど同じように見えるものが、たくさん並んでいる。そして、ほかの場所にも、きっとたくさん並べられている。

> (2) その「もの自体」ではなくて、その「もの」の「機能=用途=役目=使い道」を購入し、消費する。

上の2つが、「マトリックス」というお母さんから生まれる「記号=まぼろし発信装置」のイメージです。

まだ、ややこしいですね。また、スーパーを例にとって説明します。きのうの話とダブるところもありますが、大切なところなので、気にせずに話を進めます。

スーパーで、マヨネーズを買ったとします。マヨネーズという商品=製品をレジに持って行って、レジでお金と交換します。さもなきや、万引きです。「お客さん、ちょっと奥の事務所のほうへ」なんて、言われちゃうわけです。で、マヨネーズを無事に買い終わると、家なりアパートなりマンションなりに帰ることができます。問題は、それからなんです。みなさんは、消費者ですね。自分もそうです。仲良くしましょう。「こら、また、おかしいことを言い始めたぞ、2千円詐欺師野郎！」ああ、幻聴！

そういえば、「表象」の話をしなくなり始めたあたりから、ゲンチョーさんが頻繁に出てくるようになりました。以前、泉アツノさんにお手伝いいただきながら、マラルメ師の見守るなかで、さいころ遊びという哲学のギャンブル芸をしていたころは、まだゲンチョーさんはおとなしかったのに、このところ、やたらに態度が大きいのです。今の幻聴は聞かなかったことにして、話を進めます。「おら！」無視、無視。見えないから、無聴、無聴。

さて、マヨネーズを消費するって、どういうことなのでしょう？ 食品の場合には、たいてい食べてしまえば、消費が終了します。マヨネーズ自体と一緒に買ったプラスチック容器や蓋は、捨ててしまいますよね。話は実に簡単で明快です。

ちなみにマヨネーズの容器や包装紙には、賞味期限が印刷してあります。生ものだと消費期限ですよ。もしも、あなたが買ったばかりのマヨネーズが期限切れだったら、どうしますか？ すぐに気づけば、きっとレシートを持って、スーパーに戻り、返品してもらうか、期限切れではない商品と交換してもらいますよね？ ということは、マヨネーズを買うということは、マヨネーズが「使える＝口にできる」という状態を買っていることになりませんか？ つまり、さきほど上で引用し、きのう書いた、

> (2) その「もの自体」ではなくて、その「もの」の「機能＝用途＝役目＝使い道」を購入し、消費する。

ということに、なりませんか？ ちなみに商品の使い道うんぬんよりも、どちらかという「もの自体」に愛着を覚える、という人もいますね。そういう現象は、「フェティシズム」とか「フェティッシュ」と呼ばれることがあります。何だか、風俗っぽい響きがありますよね。エロい予感がしませんか？ 実際、エロいんですけど、エロい人も、楽しんでます。

エロいというのは、いわゆる「お上＝政治家 or 官僚」みたいに威張っているのではなく、学問という業界でひな壇なんかを作って、威張っているほうの「エロい」なんです。つまり、哲学・文化人類学・社会学・宗教学だけでなく、経済学においてもテーマにされている「お話＝学問分野＝フィクション＝作り話＝紙芝居」なんです。おもしろい紙芝居なので、いつか書いてみたいと、かねがね思っています。

マヨネーズの話に戻ります。で、次のような場合も、考えられます。あなたがマヨラーだとします。しかも、マヨなら何でもいいわけではない。こだわりがある、とします。ある日の夕食時、家で、買って来たばかりのマヨネーズが、食卓にデンと置いてある。そのマヨが、自分の好みのものではないとすれば、激怒もんですよ。

こんなマヨ、食えるか！

とか、

こんなマヨじゃ、いやだ！

となるでしょう。違いにうるさいマヨラーのあなたには、絶対に妥協できない線がある。だから、そのマヨネーズは、あなたによっては消費されないでしょう。さて、これは、どういうことを意味しているのでしょうか？

> (2) その「もの自体」ではなくて、その「もの」の「機能=用途=役目=使い道」を購入し、消費する

ではない。マヨなら何でもいいわけじゃない。この場合には、ある特定のマヨを消費するという「哲学=ポリシー=生き方=価値観=世界観」が存在している。言い換えると、

「記号=まぼろし発信装置」の第3のイメージ

は、

(3) ある特定の「もの自体」の「機能=用途=役目=使い道」を欲するヒトもいる

という感じです。

「まったく、屁理屈ばっかし、ほざきやがって」ああ、またもや幻聴！ でも、何だか、たまんなくなってきました、このワンパターン——。ねえ、ゲンチョーさん、せっかく、こうやってお付き合いをしているんですから、こっちが真剣にやっている時には、たまには、やさしい言葉をかけてくれても、いいじゃないですか。「や・さ・し・い・こ・と・ば、これで気が済んだか」。だめだ、こりゃ！ 今の会話は、なかったことにします。

ゲンチョーさんのちゃちゃが入ったので、話題を変えましょう。

きのうは、若気の過ちで詐欺をした話を告白しちゃいました。あれを書いてから、ずいぶん罪悪感を覚えました。自分のさもしさとセコサに、嫌悪感を抱きました。で、職もなく（※今もそうですけど）ブラブラしていた（※今も、多分にそうですけど）ころを振り返っているうちに、当時流行った言葉を思い出しました。

モラトリアム人間

という言葉です。死語ですか？ピンとこない方が、増えてきているでしょうね。社会に出たものの、ちゃんとしたオトナとして扱われずに「猶予＝モラトリアム＝moratorium＝大目に見る＝一種のコドモ・赤ちゃん扱いされる＝ぐずぐず・うじうじの引き延ばし」状態にある人たちのことを、一時期そう呼んでいたことがあったのです。

いずれにせよ、そういう言葉がネガティブな「ラベル＝レッテル」として用いられた時期に、自分は、「モラトリアム人間」をしていたわけです。今も、それと大して変わらない状態にあるのは、どういう因果なんでしょうね？でも、よく考えてみてください。「モラトリアム人間」という蔑称（＝べっしょう）ではなく、現在、似たような人たちを指す別称（＝べっしょう）がありませんか？「ニート」とかいう、ラベルです。

厳密には、「モラトリアム人間」＝「ニート」と等号で結ぶことはできません。だいたい、時代背景が大きく異なりますし、その他の条件も一致しません。「ニート」＝「フリーター」という等式が成り立たないのと同じです。ただ、ネガティブなニュアンスが似ている。かぶる面も、いくらかある。個人的には、そんな感じがします。

で、今、ふと思いついたんですけど、新しい企画をやりたくなりました。やっちゃって、いいですか？「勝手にしろ！2千円詐欺野郎めが！」ああ、また、幻聴！無視、無視。見えないから、無聴、無聴。ちなみに新企画は、今のじゃないですよ。

> じゃあーん。むむっ！あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの、

> 死語復活キャンペーン

> では、ないかいのう？

の代わりです。もう、ちゃっかりと「>」を付けて、粗大ゴミ扱いしているところが、自

分でも、あさましく思います。ごめんなさいね、「死語復活キャンペーン」さん、また、ご登場願うこともあると思います。ゆっくり骨休めしてください。では、新企画をご紹介します。

あれ、まあ！ ひょっとして、おひさ、じゃありませんか？（※この疑問符は、いかにも、わざとらしいヤラセではないか？）、で、これって、もしかして、きょうの、

あのヒトは今

では、ないかいのう？

かつて「モラトリアム人間」と呼ばれた方々、今はどうしていらっしゃるんですか？

こんなんですけど、どうですか？ たった今、思いついた企画なんで、あまり深くは考えていないのですが、特にある時期にある種の人たちに貼られた「ラベル＝レッテル」を振り返ってみたいのです。そして、「ラベル＝レッテル」を貼るといふヒトの習性、および「ラベル＝レッテル」を貼るといふ、ヒトの行為の「メカニズム＝仕組み」について、考えてみたいのです。「まったくもう、あんたって本当に暇人だね。そんなくだらない企画なんか、やめちしまえ！」ああ、幻聴！ と、ゲンチョーさんのお墨付きを得ましたので、やってみることに決めました。「おい、オレ、そんなこと許しちゃいねーぞ。だんだん、増長してきやがったな、2千円詐欺野郎め！」無視、無視。見えないから、無聴、無聴。

では、話を「記号＝まぼろし発信装置」に戻します。記号という言葉は、ふつうに暮らしていると、そんなに頻繁につかうものではありませんね。記号と聞いて、あるいは目にして、何を連想なさいますか？ ぱっとしませんよね。でも、この言葉に血道をあげている人たちも、いるんです。

「記号論」とか、「記号学」という分野＝ジャンルが存在する業界があります。学者や、その予備軍の世界です。「表象」や「表象作用」もそうですが、こういう言葉を使う複数の業界では、なかなか意見が一致しません。百家争鳴＝百花繚乱ならまだしも、縄張り争い＝仁義なき戦いみたいになっている部分もあり、やっぱり、ヒトは元尻尾のないおサルさんだなあ、生き物だなあ、生存競争やってるんだなあ、とすごく当たり前のことを思い起こし、感慨にふけっちゃったりします。

＞哲学っていうものは、案外、熱いものなのかもしれない。

＞いずれにせよ、哲学や論理学だけでなく、数学や自然科学でもいいですが、そうした学問を学ぼうとか、研究しようとする人には、しばしば強い情熱（※感情的、情動的といったほうが正確かもしれません）を持った人がいる。

＞機械やコンピューターというと、冷たいイメージが連想されがちですが、実際に機械やコンピューターを扱っている人にとって、いちばんの悩みは熱をどう下げるかだと思います。機械は作動、つまり動きます。動くからには熱を発します。熱は機械そのものの素材を変形あるいは変化させます。すると誤作動が起きます。だから、熱を下げることが課題になる。

＞コンピューターは、1か0の二進法で情報を処理する。1か0という仕組みを実現するためには、どんなにあがいても、何らかの移動、変化、反応という形態をとらざるをえない。分子、原子、電子、というナノの世界であっても熱から逃れることはできない。

＞数学者も、汗をかく。禅僧も、汗をかく。囲碁の名人も、汗をかく。コンピューターも、あっちっち。ナノテクも、それなりに、あっちっち。

＞脳でも、事態は同じみたいです。ヒトは生きている限り、熱を発する。食物を摂取し排泄をする存在である以上、必然です。沈黙考、冷徹な思考などとは、嘘だったので。よく言って、紋切り型のイメージだったので。

＞「運動」（※つまり、移動、変化、反応）は、常に熱を発せざるを得ない。

以上は、当ブログのバックナンバーである「論理の鬼」2009-01-02からの引用です。

ここのところ、

> . . .

が、本当に増えてきましたね、このブログ。自分は、ほかの人からの「輸血」が苦手なんです。「輸血拒否」状態です。ただし、自分の「血液」だけは、オーケーです。今、書いた3つの言葉が、カッコでくくってあることに注目してください。あくまでも「比喩＝たとえ」です。宗教的な意味はいっさいありませんので、誤解なきようお願い申し上げます。

以前、このブログで、なぜ、ダジャレやオヤジギャグを多用するのかについて弁明と
言い訳をしたことがあります（※「ま～は、魔法の、ま～」2009-01-21）。きょうは、

どうして、最近、このブログではバックナンバーからの「コピペ＝コピーペースト＝引用」に走るのか？

の弁解をしたいと思います。「誰も、あんたに頼んじやいねーよ！」ああ、またもや、幻聴！無視、無視。見えないから、無聴、無聴。

(1) トホホな言い訳：ネタ切れです。こんなに長い記事を毎日書いていけば、自分のように薄っぺらな知識しか持ち合わせていな者は、ネタが切れて当然です。

(2) 格好つけた弁明：戦略です。わざとらしいですね。自分でも、そう思います。ごめんなさい。で、ぶっちゃけた話をしますと、引用という形をとれば、「ご興味のある方は、当ブログ記事のバックナンバーである「〇〇」をご参照ください」みたいなことを書いて、リンク先で、またもや、うんざりするほど長い記事を、みなさんにお読み願うなどという、時間の無駄を省くことができます。つまり、肝心なところだけを、「>△△△（※以上は、「〇〇」からの引用です）」のようにしておけば、関心のある方だけが、リンクを貼ってある「〇〇」に飛ぶことができます。

(3) マジな弁解：ここは、2分割させてください。

(a) さきほど、上で書いたことの繰り返しになりますが、他人様からの「輸血」が苦手なんです。他人様のご本などから引用するのは、ちょっと気が引けるのです。だって、他人様のふんどしで相撲をとるようなもので、気分が悪いし、ちょっと安易な方法じゃありませんか？

＞誰々が、こう言っていた。何々に、こう書いてある。どうだ！ そういうの、自分は、苦手です。自分の頭と体で、考えてみたいです（※以上は、「その点、ナンシー関は偉かった」2008-12-31からの引用です）。

(b) 自分の「血液」からの「輸血」、つまり「自己輸血」だけは、オーケーです（※「」でくくった言葉は、あくまでも比喻です）。

(4) おまけの言い訳、というか誤解のないように：自分の書いた文章を引用することについて、誤解をしないでください。自分は、「オリジナリティ」を否定していません。ですので、「これは自分だけのオリジナルな文章だ」なんて大嘘は言いません。もう、このさいですから、きょうは、またもや、以下で「自己輸血」＝コピペ＝引用しちゃいますので、どうか、許してください。

さて、(4)で書きましたように、オリジナリティなどないと、自分は考えているのですが、

＞なぜかという、トートロジーとなりますが、そもそもヒトに「独創性＝オリジナリティ」など、ないからです。ヒトにとって、すべての知識や情報は、既に誰かが言ったり書いたりした言葉だという意味です。あらゆる知識や情報は、誰かの言葉の引用か、「寄せ集め＝コラージュ＝パッチワーク＝ごった煮」なのです。

＞せいぜいできることと言えば、これまで集積された言葉と想念を、ああでもない、こうでもない組み合わせる手仕事＝ブリコラージュです。ほら、最近、発想法とか創造的思考とかいう類の本が売られていますよね。イメージ的には、その種の本に書いてあるブレインストーミングのパーソナル版という感じです。要するに、めちゃくちゃや、こじつけでもいいから、いろいろな言葉や想念を組み合わせる。言葉は下品ですが、頭の中を乱交＝オージー状態にしてしまうことです。

以上2つは、「もしかして、出来レース？」2009-01-29からの引用です。

いやあ、もう、めちゃくちゃ「自己輸血」でコピペしまくっちゃいました。恐縮です。こういうことに凝っちゃう性格なんですね。なかなか、直り＝治りそうもありません。

ちなみに、上で引用した文の中にある「コラージュ」と「ブリコラージュ」という言葉を、こうした文脈で自分が使っているきっかけとなった、書物とそれを書いた人物の名を、ここで紹介させてください。

『引用の織物』宮川淳（みやがわあつし）著

です。宮川氏は、故人です。実に、繊細で美しい文章を残しています。この方からも、自分は大きな影響を受けています。「引用」という問題について、深く思考された方から学んだ言葉を、自分なりに他の言葉とつむぎ、そして織り込み、それをさらに、この記事の中で引用している。何だか、不思議な心もちになります。万が一、引用ということに興味をお持ちになった方は、「宮川淳」をキーワードに、グーグルなりで検索してみることをお勧めします。面倒な方は、こういうややこしいことは、パスしちゃいましょう。

で、「引用」という行為は、「複製」＝「コピー」という行為と、重なる＝ダブる＝かぶるわけで――

>> 「マトリックス」というのは、「記号＝まぼろし発信装置」の「複製製造機＝お母さん」なのです。

これは、この記事の冒頭に挙げ、きのうの記事から引用した「マトリックス」の説明です。

>> (1) ほとんど同じように見えるものが、たくさん並んでいる。そして、ほかの場所にも、きっとたくさん並べられている

>> (2) その「もの自体」ではなくて、その「もの」の「機能＝用途＝役目＝使い道」を購入し、消費する

上の2つは、この記事の冒頭に挙げ、きのうの記事から引用した「マトリックス」というお母さんから生まれる「記号=まぼろし発信装置」のイメージです。

> (3) ある特定の「もの自体」の「機能=用途=役目=使い道」を欲するヒトもいる

これは、きょうの記事で付け加えた、「記号=まぼろし発信装置」の第3のイメージです。

――となるわけです。やっぱり、自分って凝り性ですね。やりすぎです。反省。道理で、うつになるわけです。

きょうは、そろそろ、この辺で、ストップしたほうがよさそうです。文字数制限が気になります。もし、よければ、また、遊びにきてくださいね。この行まで、読んでいただき、どうもありがとうございました。

09.02.13 そっくり

◆そっくり

2009-02-13 09:06:49 | Weblog

きのうは、自分のブログ内での引用とコピペをしまくっちゃって、痴態を演じてしまいました。今思うとお恥ずかしい限りです。

凝り性、凝り性、飛んでいけ～。うつが悪化するぞよ、飛んでいけ～。

失礼いたしました。今のは、個人的なおまじないです。ですので、きょうは、引用とコピーを、極力（＝きょくりょく）、自重します。脳裏に刻んでおきます。記憶力（＝きょくりょく）が、きょうの記事の最後まで持続すれば、の話ですけど。ちなみに、難聴者である自分には、極力と記憶力との聞き間違いが、過去何度かありました。

ところで、みなさんは、人の顔を覚えるのが得意なほうですか、苦手なほうですか？

自分は、苦手です。小さいころから苦手だったような気がします。やたら、人違いをするのです。やれ、どこどこで三橋美智也を見かけたのだ、さっき、お肉屋さんで島倉千代子がコロケを揚げていたのだと、親に言う。親はあきれ。機嫌の悪い時には、怒鳴りつける。そんな人違いのエピソードが、無数にありました。それが、今でも続いているのです。どちらかという、女性の顔を覚えるほうが苦手です。お化粧になる、失礼、お化粧をなさることと関係しているのかな、とも推測しております。

そんなわけですから、困ることがよくあります。挨拶されても気づかない。逆に、挨拶して、不審に思われてにらまれる。冗談ではなく、ほんとうに困ります。こっちは悪気がぜんぜんないので。しかも、さきほど申しましたように、自分の場合には難聴というハンディが重なりますから、話がよけいやこしくなる場合が多々あるんです。つまり、自分の場合には、「聞こえにくい」と「顔が認識しにくい」がダブルでハンディとなりますので、よけい苦労するということです。うろ覚えなのですが、次のような言い方があったような記憶があります。

「年をとるということは、知った人から無視されて、知らない人から挨拶されることだ」

とか何とか。間違っていたら、ごめんなさい。とにかく、他人を識別する能力が低下するということを指しているようです。ここでは、「年をとるということは」という部分を割愛させていただきます。で、少しスリムにして、次のように加工します。

「知った人から無視されて、知らない人から挨拶される」

以上が人の顔を覚えるのが苦手だという傾向を、割と具体的に、分かりやすく述べた言い方になると思いますが、どうでしょうか？ これに、

「声を掛けられているのに無視してしまい、声を掛けられていないのに返事をしてしまう」

が自分の場合には加わるのです。ご想像いただけましたか？ 困りますよね。

自分が家に閉じこもりがちである理由の1つは、以上のような、ダブルのハンディがあるからかなあ、とも感じています。でも、そうしたことは無関係に、もともとが引きこもりがちなんですけどね。

ここで、話を飛躍します。びゅーんと、飛びます。次のような状況に、自分が遭遇している場面を想像してほしいのです。前後関係は、無しにしましょう。ある日、突然、ある状況に、あなたが陥ってしまうのです。

あなたは、街を歩いています。連れはいません。あたりには、人がたくさんいます。ふと、気づくと、

あれーっつ！

まわりの人たち全員がそっくりなのです。外見上、区別できないのです。それなのに、各人の動きや行動はばらばらです。同じ方向へと進んでいる人たちもいれば、反対の方向へとむかっている人もいます。お店のショーウィンドウを覗きこんでたたずんでいる人もいます。道路沿いの店舗の中にいる店の人や客らしき人の姿も見えます。車や自転車に乗っている人の顔や姿も目に入る。そうした人たち、全員がそっくりなのです。で、ちょっと、発想を変えましょう。

あなたは、ニワトリの顔を見分けられますか？ ウシやブタの顔を区別できますか？ 野生のニホンザルはどうですか？ 風太くんのお仲間のレッサーパンダなら、見分けられそうですか？ スーパーや魚屋さんに並んでいる、サンマはどうですか？ デパートの屋上なんかで売られている、ジャンガリアンハムスターなら区別できる感じがしますか？ ど

うですか？ また、少し発想を変えましょう。

ニワトリは、ヒトを区別できるのでしょうか？ できそうですね。ヒトって、いうのは、素っ裸じゃないからです。服装とか、長靴とかを見て区別しそうな気がします。ニワトリの目がどんな構造になっているのかは知りません。まさか複眼だったり、魚眼だったりはないと思うのですけど。ヒトとはそうとう違うような気がしますし、似たり寄ったりかなという気がします。ただ、ニワトリがヒトと同じような、知覚をしているかどうかとなると、たぶん、かなり違うと想像しています。

おそらく、5感や第6感（※そのようなものがあればの話ですが）全部を比較すれば、ヒトとニワトリとでは、知覚の仕方に、とてつもなく大きな隔たりがあるのではないのでしょうか？ 自分はニワトリさんたちを尊敬しています。あなどってはなりません。ニワトリさんたちはヒトを、その声、匂い、醸し出す雰囲気、足音（＝歩き方）などを頼りにして、区別していそうな感じが、やっぱりします。

で、今、挙げた生き物たちの中では、野生のニホンザルが、ヒトに割と近い知覚の仕方をしているような気がしますね。では、男女を問わず住民基本台帳から無作為に選んだ100匹、いや、100人のヒトを全員素っ裸にし、髪を3カ月くらい刈ったりパーマをかけたり染めたりしないようにし、お風呂にも入れず（※週2回のシャワーくらいは許しましょうか）、もちろん、お化粧やかつらの類も禁止したとします。

そして、3カ月後に、どこかの学校の体育館にでも集めて、みんな閉じこめちゃいましょう。そこに、〇〇山の野生のニホンザルを100人、いや、100匹お招きして、ヒトと一緒に閉じこめちゃいましょう。ただし、〇〇山はヒトがつくったサル山じゃ駄目です。餌付けされたサルは、ヒト化しちゃうからです。あくまでも、自然の環境の中で生息しているニホンザルたちを招待しましょう。

さて、野生のニホンザルは、1人ひとりのヒトを見分けられるのでしょうか？ 念のために言っておきますが、自分の知り合いかどうかを見分けるのとは話が違いますよ。顔や外見で「これとあれは違う」みたいに、容易に見分けられるのでしょうか？ 逆の立場で考えてみましょう。素っ裸で、髪は伸びっぱなしのボサボサ、しかも、おそらく体臭むんむん状態のヒトは、野生のニホンザルを見分けられるのでしょうか？ ドアの鍵穴を通して互に見つめ合っているヒトとおサルさんの話に、ちょっとだけ似ていませんか？ 滑稽だと言えないこともないような、不可思議な光景ですね。笑いをさそいます。

ところで、そんな場合には、体育館はどうなるでしょうね。大混乱をきたすのではないのでしょうか？ おサルさんたちと、素っ裸の人間様の鬭争が始まるような気がします。素っ裸の人間様って、無防備ですよ。おサルさんたちは、もともと素っ裸ですから、慣れたもんです。毛だって、おサルさんのほうが、全身にふさふさしている。それで寒さや雨露をしのいでいるんですから、大したもんです。人間様たちは、隅っこに固まって震えているんじゃないのでしょうか。想像しただけで、ああ怖い。

これまでの話ですが、あまり真剣に考えないでくださいね。あくまでも、仮定の話です。例えば、フィクション=おとぎ話=紙芝居だと思ってください。さあ、どうでしょうか？ こんな質問をしておきながら、自分には想像が付きません。どなたか、想像力と創造力を発揮して、説得力のある説を打ち立てていただけませんか？ こればかりは、まさか、実際に実験するわけには、いかないでしょうね。それだけは、自信をもって言えます。ひょっとすると、「お上」が許しませんよ。「お上」ではなくても、どこからか横槍が入るに決まっています。

こうした話は、一種の禁忌=タブーなのです。「と或る尻尾のないおサルさん」の頭の中でズレが起きて、「と或る尻尾のないおサルさん+ α 」=「狂えるおサルさん」=「ヒト」=「人間様」になったという紙芝居の筋書きは、これまで何度も、このブログで紹介してきました。実は、晴れてヒトとなったおサルさんは、この類の話を好まないのです。

なぜかという「+ α 」=ズレが、許さないのです。おそらく、お鼻が高いんでしょうね。プライドが許さないという、わけの分からない、駄々っ子みみたいな理屈で説明もできるでしょうね。それに、宗教的な意味でのファンダメンタリズムが強い勢力を持つ、某・世界唯一の超大国（※どこかは、バレバレですね）なんかでは、進化論やおサルさんの話が、タブーの地域やメディアがありますね。ああ、この国でブログを書いているよかったです。ホワタリリーフ。

タブーにこだわっているわけでもないのですが、上でのいくつかの質問は保留にしたまま、最後のほうで少し触れるつもりです。いえ、最後に答えなんかはありませんので、期待はしないでくださいね。ただ、今のところは、頭の中で、

「あれっ！」とか、「ん？」とか、「がーん！」とか、

一種の微震のズレをお感じいただけたとするなら、それだけで、自分はこの行まで言葉をつづってきた甲斐があるというものです。

ただし、くどいようですが、くれぐれも真剣に考えないでくださいね。もう、春です。深く考えると、ヤバいですよ、マジで。かるーく、びびっと体感的に何かを感じとっていただく。それだけで、十分なんです。万が一、あなたの上腕から肩にかけて少しでも鳥肌が立ったら、もう、自分としては言うことありません、マジで。おふざけなんかじゃ、決してありません。本気ですよ。正気だという自信はありませんが、本気です。

実は、上で書いてきたことは、今週、テーマにしている「記号」という考え方と関係あるのです。もう少し詳しく言いますと、

「記号」

について、考えるさいには、

「そっくりなものが、いっぱいある」

ということが、鍵=キーワードになるのです。キーワード、鍵、かぎ、カギ、点を入れ替えてガキ、あれ、まあ！ひょっとして、おひさ、じゃありませんか？（※この疑問符は、わざとらしいヤラセではないだろうか？）、で、これって、もしかして、きょうの、

あのヒトは今

では、ないかいのう？

「かぎっ子」

です。

かぎっ子だった、みなさん、どうしていらっしゃいました？（※驚かせて、ごめんなさい。いったい何をやっているのかと、不審に思われている方もいらっしゃるでしょう。これって、きのうの記事の中で、予告した新企画、「あのヒトは今」です、どうぞ、よろしく）

「かぎっ子」も、次第に使われなくなっている言葉のようです。でも、現実には、まだ多数の子どもさんたちが、そうした状況に置かれています。高度成長時代の響きがある「ラベル=レッテル=呼称」ですよね。現在の経済状況と比較すると、夢のような時代。それが高度成長時代でした。

この国が、欧米のいわゆる先進国に追いつき追い越せと、それこそ国民が一丸となつてがむしゃらに働くことが可能であった時代でした。「追いつき追い越せ」の第1弾が、明治維新後の文明開化だったとすれば、第2次世界大戦後のこの国が、再起をはかって励んだ高度成長時代が、「追いつき追い越せ」の第2弾だったと言えるのではないのでしょうか？ 当時は、人手不足でした、共働きの家庭が増え、テレビ、洗濯機、冷蔵庫を月賦（=クレジット）で購入するために、そして、かわいいわが子たちの将来の学費に備えて預貯金に精を出していた時代でした。

それが、今ではどうでしょう？ 言うまでもありませんね。仕事はない。あつても、なくなる恐れがある。預貯金がどんどん減る。ちょっと前までは、「かぎっ子」とは呼ばれない、「かぎっ子」たちが、まだまだたくさんいたのです。それが今では……。政治家や官僚にこの国の舵取りを任せ、将来に期待を抱いてもいいのでしょうか？ 事は、グローバルな次元にあるのです。自分としては、政治家や官僚に望みを託すのではなく、ただただ、この大不況が過ぎ去るのを待つのみです。

自分も、かつては親が働いていて、家に帰っても誰もいなかったため、鍵を常に持ち歩いていた「かぎっ子」でした。自分は恥ずかしくてやっていませんでしたが、鍵をペンダントのように紐（ひも）に取り付けて、首から下げている子もいました。「かぎっ子」であることはちょっぴり寂しかったけど、同じような子どもたちがたくさんいたわけですし、話が暗くなるのもいやですから、このブログをお読みになっている元・「かぎっ子」のみなさん、あのころの楽しかったことを思い出しましょうよ。

当時は、テレビが唯一の楽しみでしたね？ プロレス、おもしろかったですね？ プロ

レスのヒーローもカッコよかったけど、悪玉でもなかなかいい仕事をしている役者がいました。ブラッシーになって、覚えていらっしゃるでしょうか？ 名演技でした、あの咬みつきは。ヒーローだった、ジャイアント馬場なんて、若かったですね。当時の映像を、時々BSでちらりと放映していることがありますね。敵でしたけど、ブルーノ・サンマルチノなんて、個人的には好きでした。イタリア系で、カッコいいおじさんでした。

今、思い返すと、自分とテレビの関係は、複雑です。幼いころから十代前半にかけては、テレビが大好きでした。高校に進学して、文学や哲学に興味を持ち始めてから、俗に言う偏屈になりました。色気づいてもきました。思春期の後半に、さしかったのでしょうか。ごく大ざっぱに言えば、それまで笑えたものに対して笑う気になれない。そんな心境になったのです。テレビで見る番組の質も変わりました。

うちの親は、どちらかというと民放よりはNHKという感じの人だったので、うちのテレビ画面には、ニュース、ニュース解説、特派員報告、新日本紀行、教養特集なんか、自分が小さかったころから映っていました。そういうのが映っていると、つまらないなあ、と思いながら我慢して見ていた時もあるれば、強引にチャンネルを変えて、親と大喧嘩するなんてこともありました。1家に1台の時代でしたもんね。家族が多いところなんて、熾烈な戦いが毎日繰り広げられていたのでしょうかね。

で、偏屈になり、色気づいてもきた自分が、どういうわけか、ドキュメンタリー番組を真剣に見るようになったのです。当時の世相も大いに影響していたと思います。現在に比べれば、社会全体で、政治に対する関心度や期待度がかなり高かったと記憶しています。もちろん、歌番組、お笑い番組、バラエティーも見ましたよ。でも、ちょっとシリアスな番組も見erようになってきたのでした。やがて、テレビ離れして、本や雑誌ばかり読むようになったのは、大学に進学したころでした。

みなさんの場合は、どうでしたか？ テレビと自分の関係について語る、またはエッセイでも書けそうな気がしませんか？ テレビと、この国の人たちとの間には、切っても切れない、ふかーい関係があったし、今もあると思うのですが、どうでしょうか？ 「あなたは、テレビ教信者ですか？」なんて尋ねられたら、自分なんかは、「はい、はい」と2つ返事をしそうです。ところで、あなたはテレビ教信者ですか？

*

今週は、「記号」というトリトメのないものについて、ずっと書いています。で、要点は、

(1)「そっくりなもの」が、あちこちに「いっぱいある」。

そして、その

(2)「そっくりなもの」はそっくりなものにもかかわらず、「知覚するヒト」によって、「異なるまぼろしを発している」ように知覚される。

で、忘れてならないのは、

(3)「そっくりなもの」には「お母さんがいる」

ということ。さらに大切なことは、その

(4)お母さんは、「そっくりなもの」を「産み続けている」

ということ。また、

(5)「そっくりなもの」は「知覚するヒト」によって、「消費される対象」にもなる

ことも重要である。

以上の言葉のつらなりの中の「○○○」という括弧でくくられた大切な言葉たち、つまりキーワード＝鍵について、順番に説明したいと思います。ややこしいところもありますが、辛抱して読んでいただければ幸いです。

* 「そっくりなもの」：複製、コピー、大量生産された製品＝商品と言い換えることができる。もの自体には、立ち入らないほうが賢明。立ち入るとすれば、「フェティシズム」や「フェティッシュ」という側面に注目することで、混乱を回避できるという説がある。なお、「そっくりな」は極めて人為的かつ恣意的な「印象」でもあり、時としてヒトには「そっくりな」に対し、「不気味さ」や「いかがわしさ」や「恐怖心」を覚える傾向がみられ、「拒否反応＝禁忌＝タブー」を示す場合もある。

* 「いっぱいある」：大量生産の結果である。特定の場所だけでなく、グローバル化によって、この惑星のあちこちに存在するものもある。経済学のモデル、および経済学的アプローチの活用が有効だとする説がある。マーケティングとも、きわめて高い親和性がある。

* 「知覚するヒト」：5感のみならず第6感、あるいは、その他の「知覚＝感覚」の存在を想定する必要がある。ただし、5感以外の「知覚＝感覚」については、不明な部分が極めて多い。知覚を知覚するという言葉上の不自由をどうするかも、大きな課題として残されている。脳と知覚の関係についての究明に、期待を寄せる向きもある。

* 「異なるまぼろしを発している」：(1)「まぼろし」を「記号」自体とみなして重視する立場。(2)「まぼろし」の「発する(＝出現する)」仕方、つまり、その運動＝仕組みを「記号作用」として、「記号」自体よりも、動的＝ダイナミックに扱うことを重視する立場がある。(3)「異なる」は上述の「そっくりな」と同様に、極めて人為的かつ恣意的な「印象」でもある。「機能＝用途」および「好み＝愛着＝選好」という言葉で処理することが可能だとされている。

* 「お母さんがいる」：「そっくりなもの(＝複製＝コピー)」を生み出す＝産み出す、装置および機械、または有機体が存在するという意味。今後の、ナノテクノロジー、遺伝子工学、バイオテクノロジーの発達と洗練化によって、大きな進歩と変化が期待されている。なお、「お母さん」は「マトリックス」とも呼ばれ、「マトリックス」という言葉のもつ多義性＝多層性が、多種多様な分野に影響とインスピレーションを与えている。なお、「お父さん」についての消息は不明。

* 「産み続けている」：「そっくりなもの(＝複製＝コピー)」を生み出す＝産み出す、装置および機械、または有機体は、コピーをし続けるという動作こそが、その存在理由となっている。生産中止、廃棄、モデルチェンジといった事態が発生しない限り、「お母さ

んがそっくりなものを産み続ける」という状況は続く。

*「消費される対象」：「知覚するヒト」が「異なるまぼろしを発している」「記号」を貨幣との交換、あるいは強奪・窃盗・搾取・詐取などの手段によって入手したさいに、「消費される対象」としての機能が発生する。その機能は、上述の「異なるまぼろしを発している」の（3）で説明されている通りである。

以上の説明ですが、やっぱり、ややこしいですね。

きょうは、そのうちの特に「そっくりなもの」について、前半で、ヒトや他の生き物の顔を見分けることを例にとって、あれこれと書いてみました。変な質問も、いくつかしました。「そっくりである」と知覚することの不思議さと、そのメカニズムの複雑さを、体感的に感じとっていただければ、「記号」というトリトメのないものを「感じとる」のに、とても役立つからです。たった今、「感じとる」という言葉を使い、「理解する」と書かなかったのは、トリトメのないものを、頭で理解しようとするのは、ある種の矛盾をはらんでいるからです。

もしも、あなたのまわりに、外見がそっくりな人たちが、いっぱいいたとします。それは不気味ですよ。でも、外見がそっくりなものたちが、いっぱいあったとしても、別に不気味ではありませんね。スーパーで売られるために陳列されている製品が、「そっくりなものたち」の典型例です。「そっくりなヒトの羅列」＝「不気味」と「そっくりな商品の羅列」＝「当たり前」との差は、何でしょう？

このように、自分が当たり前だと思っていることに、揺さぶりをかけたり、突拍子もない質問で軽いめまいを覚える。そのさいには、脳を使って考えてみるだけでなく、自分の知覚を総動員して「体で考えてみる」。そうしたことが、現在の人たちが忘れかけている、大切な「知覚する」といういとなみの1つだと思ふのです。

世界とは、頭による理解可能とは縁遠い「何か」なのです。その「何か」が「分かる」ことを苦渋の果てに放棄し、「分からない」or「トリトメのなさ」を体感する。そうした行為の対象となるべきものが、たとえば「そっくり」なのだと思います。個人的な意見ですが、「そっくり」はきわめて現代的な状態だと思います。

コピー＝複製がいとも簡単になったのは、ヒトの歴史という尺度から見れば、ごく最近の出来事だからです。これほど「そっくり」に囲まれた状況は、ヒトの歴史の中ではなかったと考えられます。安易に「記号」という言葉で「そっくり」を理解した気持ちになったり、お茶を濁したくありません。

きょうも長かったですね。ごめんなさい。ただ、個人的にはうれしいことが、1つあります。何とか、「過去の記事からの引用とコピペ」＝コピー＝複製をしないで、ここまで書けたということです。でも、やっぱり「そっくり」を書いてしまいました。致し方ないですね。いずれにせよ、あすも、来てくださることを願っています。

09.02.14 「東京」㊦無限大

◆「東京」㊦無限大

2009-02-14 08:53:22 | Weblog

東京東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京東京 東京
東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京東京 東京 東京 東京 東京
東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京
東京 東京 東京、東京 東京 東京東京 東京 東京 東京 東京.....

これって、きのうお話した、「そっくりなもの」＝複製＝コピーの一例です。

(1) 不気味ですか？ それとも、(2) スーパーなんかに並んでいる、大量生産された製品＝商品と同じで、何とも思わない、ですか？ あるいは、(3) こんなブログを書いている者こそが、不気味だ、あやうい、とお思いになりますか？

個人的には、誰かのブログで、以上のような文字のつらなりを見て、質問をされたな

ら、(1)→YES、不気味です、(2)→NO、何とも思わないわけにはまいりません、(3)→YES、YES、そんなことをしている人って、とっても不気味で、マジであやういと思います、という感じで回答しそうです。

文章を書き進めていく都合上、(2)と(3)は保留にして、(1)に的を絞って、お話を続けたいと思います。どうか、ご理解とご了承をお願い申し上げます。

さて、ここでは、ある人を仮定して、話を進めます。その人の意見では、「東京」という言葉——この場合では文字=活字ですが——が、ずらりと複製されて並んでいるさまは、いささか不気味だと感じています。並べた者の気が知れない、あそこが尋常ではないのではないか、という不気味さは別にして、「そっくりなもの」=複製=コピーがずらりと並んでいること自体が、何だか気味が悪いのです。

これを、スーパーの棚に陳列された缶詰や、紙パック入りの牛乳や、サンマと比べて、同じじゃないかと言われても、「いや、そうじゃない」という気持ちを強く抱いています。とはいえ、どうしてそう思うのかと尋ねられても、明快な返事ができそうな感じではありません。ただ、不気味なのです。

自分は、次のように思います。

「東京」という文字の羅列を見て不気味と覚えることは、ヒトとして、ごく自然な反応です。不気味と覚えないほうが、むしろ不気味です。なぜ不気味なのかを考える必要はない。考えたところで、ゴキブリが苦手な人にゴキブリの大群を見せて、なぜ「うげーっ」とするのかと問い詰めるようなもので、答えなんか出そうもないからです。

詳しく申しますと、体感的、あるいは生理的（※この言葉には抵抗を覚えるのですが、便利ですから使います）、または心理学的な反応について述べるさいには、言葉による説明は、あまり説得力がないと覚えるからです。ひよっとすると、

不気味の前で、人は沈黙するしかない。

と、ヴィトゲンシュタインさんなら、小声でつぶやきそうな気がします。ですので、が

らりと違った面から、冒頭の、「そっくりなもの」＝複製＝コピーの行列

——ちなみに、数学でいう「行列」も英語では matrix（※マトリックス）と言います。おもしろいですね。自分は数学がすごく苦手なので、なぜ「そっくりなもの」の「お母さん」＝マトリックスと、「行列」とがつながるのかは不明です。「お母さん」の胎内で「そっくりなもの」の「胎児」が列を成しているというイメージでしょうか？——

を眺めてみましょう。

ところで、

あなたにとって、東京って何ですか？

というか、

あなたにとって、東京ってどんな所ですか？

そんなふうに尋ねたとすれば、いろいろな答えが返ってくるでしょうね。ちょっと想像してみませんか？ 個人的に想定する回答を、以下に挙げてみます。

「仕事でよく出かける場所」、「アキバがある所」、「シブヤがある都市」、「昔、シブガキ隊のコンサートを見に行った所」、「ディズニーランドのついでに行く所」、「〇〇が都庁でふんぞり返っている間は、一銭もお金を落としたいくない都市」、「歌手の〇〇ちゃんが住んでいるまち」、「元彼の〇〇くんが、今、大学で一生懸命にラグビーをやっている所」、「原宿なんかを歩いていたら、スカウトされてタレントかモデルになれるかもしれないまち」、「有名人に出くわして、握手とかしてもらえるかもしれない街」、「むかし、わが青春時代を送った大都会」、「先祖伝来の田んぼ一反を売ったお金で、2人の息子が通っている学校のある、わが国の首都」、「司法・立法・行政が集中している、お上の巣であり牙城」、「とにかく都会」、「5年前に〇〇ちゃんと別れ話をした、豊島区西巢鴨庚申塚にある、都電荒川線の庚申塚駅のベンチがまだあるはずの所」、「よく知らないけど、怖いところ」、「よく知らないけど、いいことありそうなところ」、「2カ月に1回、表参道の〇〇にいるカリスマ美容師の△△さんにカットしてもらいに、電車を乗り継いで2時間

半かけていくまち」……

「おらっ、ちょっと待て！ さっきから、何をぐちゃぐちゃ書いてるんだ？」ああ、幻聴！ おひさですね、ゲンチョーさん。きのうはお見えに、じゃなくて、お聞こえにならなかったの、どうなさったのか、と心配しておりました。1日のご無沙汰でした。語呂が悪いですね。24時間のご無沙汰でした。ん？ それとも、48時間のご無沙汰でしたってことになるんだっけ？ 数には、めっちゃ弱いんですよ。

ご無沙汰と言えば、じゃあーん。むむっ！ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの――

「ちょい待ち！ おめー、その企画は終了したって、一昨日、言ったじゃねーか？」あっ、そうでした。つい、やっちゃいそうになりました。でも、ここまで言っちゃったんですから、もう、やっちゃいます。「おらっ、この嘘つき野郎めが！」では、もう一度、イントロから、やり直します。

――ご無沙汰と言えば。じゃあーん。むむっ！ あっ！（※何とわざとらしい感嘆詞＝感動詞であろう！）、で、これって、もしかして、きょうの

死語復活キャンペーン

では、ないかいのう？

「一週間のご無沙汰でした。玉置宏でございます」

「ロ○テ歌のアルバム」の出だしの挨拶です。覚えていらっしゃるでしょうか？ 懐かしいですね。歌謡曲という言葉が、まだ死語ではなかった時代における、日曜日のお昼の国民的楽しみの一つだった。そう言っても過言ではないのでは、ないでしょうか？ あの番組は、どこかの公会堂みたいな場所で、行われていましたよね。会場で、キャーキャー言う若い女性の声が、番組を盛りあげていました。あれって、サクラによる演出だったのでしょうか？ いずれにせよ、生＝ライブだったはずですよ。

あの歌番組の途中で、玉置さんが、ゲストの歌手に数分間インタビューするコーナーがあって、会話を終えた後に、歌手の方にチョコやガムの入った小ぶりのバスケットを、決まって渡していました。自分なんか食い意地が張っていたので、あれが欲しくて欲しくてたまりませんでした。あの番組のあと、お菓子屋さんに飛んで行きましたもの。当時の国民は、みんな甘いものに飢えていたんです。そこをあの演出は、実にうまく突いていた。今だからこそ、そう言えます。マーケティングの力って、すごいですね。

ちなみに、玉置宏さんと俳優の玉木宏さんは、もちろん別人です。玉木宏さんは「たまき・ひろし」、玉置宏さんは「た・ま・お・き・ひ・ろ・し」……。蛇足ですが、青木功さんとも別人ですよ。「あ・お・き・い・さ・お」……。

「……」は、ちょっと、思い出したことがあって、照れているんです。ご不明の方は、下ネタに詳しい、オジサンかオバサンにお尋ねください。当ブログでは、下ネタは、極力避けたいんです。「おらっ、ちょい、待ち！ 調子に乗りやがって、この下ネタ野郎！ 謝れ」ああ、ゲンチョーさん、そ、そうですね。確かに、お調子に乗りすぎました。反省します。玉置さん、ならびに、青木さん、ごめんなさい。

では、さきほどの続きをいたします。

あなたにとって、東京って、どんな所ですか？

「去年の夏に、4週間かけて通った予備校があった所」、「あたしが3歳の時に、家出をしたというパパが住んでいるらしい都市」、「おれが家出した時に、〇〇署のおまわりさんだった、△△さんと□□さんに補導されて、いろいろお世話になった都市」、「教祖様のお住みになっている聖なるパワースポットがある場所」、「2015年までに、おらがきれいなお嫁さんと、白金か白金台のマンションに住んでいるはずの、この村から1,000キロ離れた都会」、「今から20年後に、わたしがフリーのメイクアップアーティストとして、大きな鏡の前でモデルさんや女優さんなんかの脇に立って、忙しく手を動かしているはずの国際都市」、「うちの人と出会って、一緒に苦労して、一緒に事業に失敗して、5人の子どもを抱えて、一家7人でここまで逃げてきた、半生の出発点みたいなまち」「おらには、テレビで見るしか、カンケーねえ、とこ」、「塀の外の話だもんなー、けど、いつかここを出たら、一山当ててやりて一所」、「毎週、日曜になるとき、早起きして、始発なんかに乗っちゃってさ、原宿に着いてさ、代々木公園まで全力で走って行ってさ、ちーちゃんとか、まーぼーとか、えーこちゃんとかと一緒に木の下なんかで着替えてさ、ラ

ジカセ鳴らしてさ、ほかの仲間と踊ったりさ、馬鹿やったりしたまち」

——代々木公園、ラジカセ、踊る……。あれ、まあ！ ひょっとして、おひさ、じゃありませんか？（※この疑問符は、わざとらしいヤラセではないだろうか？）、で、これって、もしかして、きょうの、

あのヒトは今

では、ないかいのう？

「竹の子族」

元・「竹の子族」のみなさん、現在は、どうしていらっしゃるですか？「ホコ天＝歩行者天国」（※「イカ天」なんてのも、時期はずれますが、ありましたよね）が禁止になるまで、毎週日曜日に、踊ったりパフォーマンスみたいなことをやるのが、続いていたんですよ。中心は、中学生や高校生。元気よかったですね。こっちは、こわごわ、傍で見ていただけでしたけど、あのラジカセやアンプのでかい音には圧倒されました。

自分は中途難聴者ですから、徐々に聴力が低下してきたころで、ああいう音は耳にはよくなかったのかもしれませんが、でも、うらんでなんかいませんよ。自分で好んで、見学に行ったんですもの。みんな、楽しそうでしたね。それより、元・「竹の子族」のみなさん、現在、耳のほうは、大丈夫ですか？ ちょっぴり心配しています。で、竹の子ですが、いろんな衣装と系統があったみたいで、派閥抗争めいたごたごたも、見聞きしました。すべては過去の話、みなさん、もう落ち着かれましたか？

いつだったか、NHKアーカイブスかなんかで、みなさんの当時の映像を見ましたが、一つ印象的だったことがあります。特に、女の子たち。あのころの、みなさん、ぽっさりしていましたよね。実に健康そうに見えました。朝昼晩と3食、ばっちり食べるな、って感じ。

今ではパパやママになっている方々もいらっしゃるはずですが、おたくのお子さんたち、特にお嬢さんなんて、ずいぶんスリムじゃないですか？ 3食ばっちり食べていま

すか？ 肩も当時に比べれば、最近のギャル（※死語ですか？）たちは、かなりスリムになっていますよね。昔の女性のメイクって、今みたいに肩が極細だったり、無かったりなんてこと、なかった気がするんですけど、記憶違いですか？

さて、再開します。

あなたにとって、東京って、どんな所ですか？

「わては、ここで一生を過ごし、骨をうずめる覚悟でおま、そやから、いっさい、かかわりたくない場所ですのう」（※いったい、どこの方言ですか、それは？）、「なんてったって、都はここ、ふん」（※なるほど、そうどすか？）、「あそこはですね、ロハスでエコでリサイクルな僕たちの住む場所ではありませんね」（※はあ、ロハスさまですか、失礼しました）、「セミナーに出て、100万円の青い壺と50万円の数珠をローンで買わされた、こわいところ」（※それくらいで済んで、良かったですね）、「おれ、東京の大学で哲学やりてー」（※それは、およしなさい、お勧めできません、不幸になりますよ、ここに生きた見本が一匹います）、「わたしをトーキョーに連れてって、ねえ、オジサン、1週間くらい泊めてよ、そのうち出ていくから、ね？」（※そっ、そんな、にじり寄らないでください、あなたおいくつですか？ は、犯罪になるではありませんか、それに、このオジサンには他人様を養うようなお金がないんです）……

「おらっ、何をたくらんどる、この2千円詐欺野郎めが！」ああ、またもや幻聴。ねー、ゲンチョーさん、3日前に書いたあの詐欺のお話に、まだこだわっていらっしゃるのですか？「あたりめーだろうが、立派な犯罪だぞ！」被害者の方から、連絡がないんですよ。「じゃあ、おれに、返せ」ゲンチョーさんから、もらっていないものは返せません。「ったく、ここんところ、反抗的になってきたな、パリテキ」そんな、呼び方しないでください。何だか、テキ屋さんみたいな気分になるじゃないですか。自分のハンドルネームは、パリス・テキサスです。「だから、パリテキで、いいんじゃないかー。それで十分だよ、おめーには」相変わらず、お口が悪いですね、ゲンチョーさん。でも、助かりました。そろそろ、疲れてきたんですよ、インタビューに。「誰も、てめーに、インタビューなんて頼んでいねーつーの」本当に、冷たいんだから。

というわけで（※どういうわけ、なんでしょう？）、「そっくりなもの」=複製=コピーの一例として、「東京」という「言葉」——この場合では文字=活字ですが——を羅列し、次に、その「東京」を用いて「あなたにとって、東京って、どんな所ですか？」というアンケートというか、一口インタビューみたいなものを、想像=空想=妄想してみました。

どうして、こんなことを試みたのかと申しますと、

(0) 頭の中での一種のシミュレーションとして、

(1) 「東京」を1個のトリトメのない「記号」と仮定し、

(2) 複数の「知覚する存在であるヒト」たちの、頭を含む身体を、「舞台＝ステージ＝場」として、その「東京」という「記号」が発するさまざまな、「まぼろし＝意味＝イメージ」を記述し、

(3) その「まぼろし＝意味＝イメージ」の多様性を確認することにより、

(4) 「東京」という1個のトリトメのない「記号」の「トリトメのなさ」を体感的に感じとるために、

(5) 「東京」という1個のトリトメのない「記号」も、スーパーなどに並んでいる「大量生産された商品＝製品」と同様に、いろいろな場所に「いっぱいある」「そっくりなもの＝複製＝コピー」であることを、具体的な形で体感的に感じとり、さらには、

(6) その「記号」の発信源であるはずの「お母さん＝マトリックス」が、東京という具体的な場所などでは全然なく、むしろ、

(7) 「知覚＝錯覚するヒト」が宿命として持つ、太古に「と或る尻尾のないおサルさん」が「と或る尻尾のないおサルさん＋ α 」＝「狂えるおサルさん」＝「ヒト」＝「人間様」となったさいに起きた「頭の中のズレ」＝「＋ α 」の結果である、という仮説を打ち立ててみると同時に、

(8) 「東京」という1個のトリトメのない「記号」もまた、「大量生産された商品＝製品」と同様に、言葉やイメージのやりとりである、コミュニケーションと呼ばれる「交換」行為を通じて「消費される対象」であることを示す、

という、ある種の実験（※エクスペリメント）＝体験（※エクスペリエンス）を、みなさんと共有したい、と思ったからなのです。

今、書いた個所を読み返しましたが、ややこしいですね。実際、ややこしいのです。ただ、簡単に次のような、非常に大雑把なまとめ方も可能です。

(A) 100人のヒトの頭の中には、100個の東京についてのイメージがある。

どうでしょうか？ だいぶ、すっきりしましたよね。ただし、これ、嘘なんです。なぜなら、次のようにも言えるからです。

(B) ヒトの意識は複層的であり、一刻一刻変化しているため、100人のヒトの頭の中には、同時的に、かつ継続的に、無限の数の東京についてのイメージがある。

つまり、「意識の複層性」と「時間による意識の変容」という要素を加えたのです。そうなると、(A)よりも、ややこしくなります。さらにほかの要素を加えることも可能です。そうすれば、なおいっそう、ややこしい記述になります。ものごとを簡単に言うと嘘になる。とはいえ、詳しく言うと收拾がつかなくなる。言葉を扱うことが原因で生じる、この種のややこしさを避けるために、直感に頼るという方法もあります。

では、その方法を、試してみませんか？ まず、冒頭の「東京」の羅列を、もう一度ご覧になってください。不気味ですよ。尋常じゃないですよ。次に、3つに分かれたインタビューへの回答である、「○○○○○」、「○○○○○」、「○○○○○」……のうち、最初のかたまりを眺めてください。これも、気味が悪いですよ。

さて、これから大切なことを申します。今から、書くことを頭に入れて、目を閉じ、書かれていたことを頭の中でイメージしてみてください。いきますよ。

「東京」 \in 無限大 AND 「○○○○○」 \in 無限大（※数学とは関係ありません、あくまでも比喩です、念のため）

上の図式を頭に入れて、目を閉じ、あなたの頭の中で、「東京」と、「○○○○○」が、
どんどん増殖していくさまをイメージしてみてください。どんどん増えるのですよ。無
限大に増えていくのですよ。それで、くらっとしたとすれば、「記号というもののトリト
メなさ」をシミュレーション的に体感したとほぼ同じになる、と思うんですけど、どう
でしょうか？

誰も東京を見たり知覚した人なんていないのです。東京というのは、東京という文字
であり音声、つまり、言葉を通して各人が頭の中にいただいているイメージなのです。そ
の数は無限です。しかも刻々と変化するのです。

東京、東京。

この2つは、そっくりですよ。でも、それは、あなたの頭の中では、

そっくりなものなんかじゃなくて、ぐちゃぐちゃごちゃごちゃしたもの

なのです。それが、

2つどころか、無限に「存在する＝想像される＝イメージされる＝認識される」

のです。

ただ、それをまともにイメージすると脳がパンクしますから、適度にとというか、すご
く単純化してデータ処理しちゃうのです。これは喜ばしいことです。さもなきゃ○○し
ますよ（※○○は各自によって違います、想像してみてください）。

さて、

>ヒトは、1度に1面のテレビ画面しか見られない。

>ヒトの知覚は、1面のテレビ画面である。

という意味のことを、今週の前半で書きましたよね。まさに、そういうことなんです。

冒頭の東京の羅列を見て、ぎょっとしたとすれば、ひょっとして、あなたは、自分の頭蓋骨の内側に、ずらーりと並んでいる東京というトリトメのない記号の羅列と、その記号たちの発するイメージたちを、垣間見たような錯覚に陥ったのかもしれませんがね。ひょっとして、ですよ。比喻ですよ。深く考えないでくださいね。

もう、春です。メンタルヘルスに気を配りましょう。きょうは、調子に乗って、あなたの頭の中に土足で踏み込むような真似をしてしまいました。ごめんなさい。

自分は、スピリチュアル、ヒーリング、自己変革、自己啓発、コーチングなどが苦手です、それらもどきのことは、されたくも、したくもありません。

健康のためなら死んでもいい、みたいなことを言ったのは、自称健康オタクのサンブラザ中野さんでしたっけ？ 自分の場合には、今、挙げたようなものにすぎるくらいなら、うつそのままでもいい、とすら思っています。というか、お薬のほうが頼りになります。あとは心の持ちようでしょうか。要するに、好みの問題です。誤解なさないよう、お願い申し上げます。

ですので、きょう最後のほうでやったのは、お遊びです。深い意味は全然ありません。また、一緒に遊びませんか？ 待っています。

09.02.15 架空書評：九つの命

◆架空書評：九つの命

2009-02-15 09:45:53 | Weblog

(※以下は、架空ブックレビューです。評者名を除き、書名、著者名、画家名、出版社名、定価は、すべて架空のものです。間違っても、アマゾンなどで検索なさらないよう、ご注意ください。)

書名：『九つの命』やまなかただし作、やまなか ようこ絵、ブックス・ひよこ刊、1,260円（税込）

シットコム（＝シチュエーション・コメディ）というジャンルが、テレビ番組にある。私が、思い浮かべているのは、アメリカ製のテレビドラマの「奥様は魔女」や「アルフ」、古いところでは「ルーシー・ショー」だ。登場人物とドラマの舞台となる背景が一定していることが、シットコムの基本的な条件らしい。それが、ワンパターンを生み、それが視聴者に安心感とくつろぎを与えるというわけだ。

ただ、自分なりのシットコムの定義となると、一般的な定義とは、少しずれるような気がする。シットコムの個人的な定義は、（１）コメディである、（２）複数の約束事が存在する、（３）その約束事が枠となってストーリーのおもしろさが高まる、という３本立てのものである。３本立てではあるが、きわめて単純な定義だ。

従って、テレビドラマに限らず、主にハリウッドで製作されてきた映画のほとんどがシットコムである、とみなしていいだろう。「ミス・ダウト」などは典型的なシットコムであり、ワーナーブラザーズによって映画化された「ハリー・ポッター・シリーズ」もシットコムに入れてもいいと思っている。

シットコムにおいては、約束事が命である。ストーリー全体を貫くワンパターンであるから、どこを切っても同じという意味では、金太郎飴と同じだとも言えるだろう。それが、安定感と安心感をもたらす。同時に、その安定感をはみださないかという、はらはら、どきどきのサスペンスをも生む。「アルフ」がいい例である。実にうまく出来ている。アメリカ製テレビドラマや、ハリウッド映画の脚本は、そうした点の配慮に優れていて、感心しながら見ている。

今回、ご紹介するのは、児童書である。読み聞かせてやれば、保育園や幼稚園の園児たちでも、理解できるような、やさしく心遣いの行き届いた文体で書かれている。大人の中から見ると、切ない話なのだが、やたらおかしいシーンが連続するため、しめっぼさが全く感じられない。適所に挿入される絵もいい。「あとがき」によると、やまなかただしさんと、やまなかようこさんは、ご夫婦である。お二人の人柄がしのばれる。岐阜県の飛騨高山にお住まいとか。焼酎でも手土産にして、やまなかさんのお宅にお邪魔し、ひと時を過ごしたいと思わせるような、絶妙のコラボレーションを醸しだしている作品である。

段ボールに入れられた生後間もない9匹の子猫が、川を流れていくシーンから、物語は始まる。お乳を飲んでから数時間も経っているために、意識がしっかりしているのは、3匹しかいない。2匹、そして最後に1匹が残る。段ボールが、堰（せき）にさしかかる。そこで、段ボールは、「ぼぼーん」と宙を飛ぶ。意識がある子猫も、「ぼぼーん」と宙を舞う。「ぼぼーん」と「ぼぼーん」という、擬態語のわずかな違いに注目していただきたい。この作品では、何気ない擬態語が実に効果的に使われている。空中で「ほわーん」と舞っていた猫は、ある釣り人の魚籠（びく）の中に「ぼたりんこん」と落ちる。

驚いたのは、釣りをしていた72歳の男性、岡村次郎さん。以前猫を飼っていたことのある次郎さんは、子を産んだばかりの猫のいる知り合い宅へと、軽トラックを走らせる。タオルにくるんだ弱々しい子猫を励ますために、調子外れの声で、次郎さんが必死で子守唄を歌うさまがおかしい。中でも、「からす、なぜなくの」で始まる「七つの子」を替え歌にしようとして、奮闘する場面では、腹を抱えて笑ってしまった。

軽トラの助手席で籠に入れられ、タオルにくるまれた子猫が、車の震動をぼんやりと感じながら夢を見る。子猫は菜の花が咲き乱れる野原にいる。ぶるぶる震えていると、1匹の灰色の老猫が出てきて、子猫に言う。わしが、おまえの命を救った。おまえがいちばん、正直そうに見えたからだ。たぶん、このままでは、おまえもおまえのきょうだいたちのように、あの世に行くことになる。わしは、もう年を取りすぎていて、おまえにこれ以上、手を貸すことはできない。あとは、次郎さんがおまえを新しいお母さんのいるところへ、早く連れていってくれるかどうかにかかっている。ただ、次の約束をすれば、きっとおまえの命は助かるだろう。

ここで、さきほど述べた、シットコムに必須の約束事が示される。その子猫には、子猫自身の命を含めて、全部で9つの命が託される。託すのは、猫の神様だという。その9つの命のために一生懸命に生きる意志があれば、必ず新しいお母さんのいる所へたどり着くことができる。そのつもりがなければ、途中で、きょうだいたちと同じ運命をた

どるだろう。「おまえは、生きたいと思うか?」と、老猫が尋ねる。「はい、生きたいです。せいいっぱい、生きたいです」と、子猫は答える。

子猫は、新しいお母さん猫のいる家に預けられる。乳離れがしたら、岡村さん夫妻の家で育てられる、という条件で一時的に里子になったのである。家に帰り、「きょうは、子猫が釣れたぞ」と得意げに言った次郎さんは、夕飯のおかずが鮎の塩焼きであることを知り、妻の幸恵（さちえ）さんに、ぶつぶつ文句を言う。「あなたが、お魚を持って帰ってこないことは分かっています。何が悪いの?」と、言い返す幸恵さん。「でも、かわいい子猫を釣ったぞ。どうだ、たいしたもんだろう」と、いばる次郎さん。こんな調子の、2人の明るい会話が楽しい。

ようやく乳離れした子猫が、岡村夫妻の家にやってきた日、子猫は再び夢を見る。今度は、老猫の姿は見えず、声だけがする。「どこにいるの、おじいさん」。「わしは、今、おまえのきょうだいたちと同じところにいる。静かで、きれいなところだよ。おまえも来たいと思うかもしれないが、おまえには使命がある。約束は覚えているかい?」「はい。でも、はっきりとは覚えていません」。「そうだろうな。あの時は、生まれたばかりだったし、体が弱っていたからな」

老猫の声を聞きながら、子猫は自分に託された、自分を含めた9つの命のことで、猫の神様から与えられた使命について知る。ちなみに、この子猫は、この日、岡村夫妻によってアユと名付けられる。次郎さんが鮎の代わりに持って帰ったからである。男の子なのに、アユと名づけられたのだ。しかし、アユは自分の名前を気に入っている。

さて、アユは岡村夫妻、松永ふささん92歳、小野田怜治（おのだれいじ）さん54歳、清水ゆかりちゃん5歳、ゆかりちゃんが飼っているオカメインコのマーちゃん、坂下悠太（さかしたゆうた）くん13歳、松永ふささん宅の周辺に住む雄の野良猫、以上8つの命と、アユ自身の命を見守り、場合によってはその命を救うという約束を、神様の代理である老猫との間で確認する。

アユにとって、忙しい毎日が始まる。アユには、一種の魔法が授けられていて、瞬間的に居場所を移動したり、遠くでの出来事を察知することができる。しかし、その魔法は1日に2度しか使えない。しかも、魔法を使うと、体がひどく疲れるのである。こうした約束事を枠にして、ストーリーが展開する。これは、冒頭で私が紹介した自分流のシットコムの定義に当てはまる。

ところで、タイトルの「九つの命」だが、私は A cat has nine lives. という、英語のことわざを連想しないではいられない。書棚にある、いくつかの辞書にあったってみたが、文字通りの「猫には9つの命がある」という訳語以外に、その背景となる意味があまり書いてなく、理解に苦しんだ。インターネットを利用して、日本語と英語の両方のサイトをあちこち覗いてみたが、諸説があって、今一つよく分からない。

そこで、知り合いのアメリカ人の女性に尋ねてみた。その人は、私の家の近くにある大学で英語を教えている、かなりの物知りなのである。しかも、ありがたいことに、流暢(りゅうちょう)な日本語を話す。その人の話では、やはり定説はないとのこと。ただ普通は、猫がしぶとい生き物だ、といったニュアンスで使われているとの返事だった。猫に失礼ではないかと、私が感想を漏らすと、「その点は、同感ね」と言ってけらけら笑っていた。この話とは関係ないが、その人は、愛犬家で3匹の柴犬を飼っている。

本書のあらすじに戻ろう。先ほど紹介した順に、登場人物とアユとの関係を簡単に述べておく。岡村夫妻はアユの「正式な」飼い主。高齢の松永ふささんは、アユを自分の昔飼って雌猫だと思い込んでいる。アユは雌猫の振りをして、松永さん宅を頻繁に訪れ、松永さんの相手をする。小野田怜治さんは、農業を営んでいる。ただし、体が丈夫ではない。そのため、アユは小野田さんが、農作業をしていて危険な目に遭いそうになる度に、魔法を使って助ける。

清水ゆかりちゃんは生まれつき、両足に障害があり、車椅子と歩行器を用いて、毎日歩く練習をしている。小学校に上がるのを、楽しみにしている女の子なのである。ゆかりちゃんとアユが初めて会ったとき、ゆかりちゃんは大騒ぎする。オカメインコのマーちゃんに、アユが悪さをすると思っていたからだ。だが、アユが心やさしい猫だと分かり、ゆかりちゃんも、マーちゃんも、次第にアユに心を許すようになる。なお、ゆかりちゃんとマーちゃんとアユは、心が通じていて会話ができる。

坂下悠太くんは、本来なら中学1年生なのだが、小学校5年生の9月からほとんど学校には通っていない。学校で授業をしている時間帯は、外を歩きまわり、毎日の下校時間以降や休日、外に児童や生徒がいる時には、家でゲームをしている。悠太くんとアユとは、ある公園での遊び友達である。悠太くんは、普段は両親と姉を含め、誰とも話さない。しかし、アユに向かっては、一方的に話す。アユは悠太くんの唯一の聞き役なのである。アユと悠太くんが会話をするのではない。

アユを飼っていると思込んでいる、松永ふささんの家の近くをテリトリーにしている、雄の野良猫のブーがいる。ブーは「正式な」名前ではなく、鼻が極端に低いために、まわりの人間が与えたあだ名である。上述したように、アユは松永さんに対しては、松永さんが昔飼っていた雌猫を装っている。ブーは、そのアユが好きになる。トカゲや野鳥をプレゼントして、懸命にアユに好かれようとするが、アユは気が進まない。照れくささもあって、ブーはアユをわざと威嚇（いかく）したり意地悪をするが、いざとなるとアユの魅力に負けて「ぼへえー」とした顔になり（※どうやら猫なりに「赤面」するらしい）、すごすごと引き下がってしまう。意外と繊細でシャイなのだ。

以上のアユを含む9つの命の持ち主が、織り成す生活の断片を、やまなかたし氏は、器用な筆致で見事に処理している。なかなかの筆力を備えた作家であると、私は見た。

自分を除く8つの命を見守り、万が一のさいにはその命を救う。それが、老猫を介して、猫の神様とかわした約束である。なにしろ、アユは猫の神様から不思議な力を授かっている。さきほど触れた、瞬間移動と千里眼である。だが、その力は1日に2度しか使えない。そのうえ、その力はかなり体力を消耗させる。典型的なシットコムのフレームである。時には「わっせわっせ」と走り回り、時には自分の命をかけ、またある時には他の命を救う。思わず手に汗を握るシーンがあり、笑い転げたくなる場面がある。ページをめくるのがもどかしくなるほどのストーリー展開で、読者を楽しませてくれる。とにかくアユは忙しい。われわれがイメージしている、いつも居眠りをしている猫とは大違いなのだ。

本書の最後のほうになり、ある事実が明らかにされる。それは、例の老猫が再びアユの夢の中で現れた時に、老猫の口から語られる。今回も、老猫の姿は見え、声だけが聞こえる。「アユよ、おまえが、毎日、よくやってくれていて、わしも鼻が高い。神様の前で、おまえを推薦した甲斐がある」。それを聞いたアユは喜ぶ。しかし、その直後に、意外な話を聞かされる。アユを含む9つの命には、ある共通点があるというのだ。興味津々に耳を傾けるアユ。時折「むんぐむんぐ」と口ごもりながら、話す老猫の声。話にくい内容を口にしてはいるからだけでなく、歯がところどころ欠けているのだ。人間の年齢でいうと120歳で、猫の神様に召されたらしい。

老猫の話は長い。要約すると、9つの命は、同時にこの世からあの世へと飛び立つというのである。読者は、ここで、これまでのストーリーに巧みに伏線が張られていたことに、はっと気づく。おめでたい内容では全然ないのだが、ここでストーリーテラーとしての作者の手腕に拍手を送りたい。話がうまくつながっている。老猫の話を聞いているうちに、なるほどと思える細部が、頭に浮かぶのである。これ以上書くことは、ネタ

バレになるだろう。

ラストシーンについて触れたい。9つの命の各持ち主の最後が、場面ごとに抑制された筆致で描写される。どれもが数行で語られ、まるで新聞記事の見出しのように、簡潔に要約される。あっさりしすぎている、という意見もあるだろう。しかし、その短さが効果を上げている、と私は思う。その簡略化された描写の後の、締めくくり方がいい。

9つの命の持ち主全員が、手を取り合って、「ふわりんこふわりんこ」と空へと昇るのである。雲の階段を「ひょっこいひょっこい」と飛び越しながら、スキップを踏むように天へと向かう9つの命。ここでも、擬態語が効果的に用いられていて、話が全然暗くならない。また、本書の装丁が、心憎い。左右のページを開いて裏返し、表と裏の表紙を合わせ見ると、9つの命が雲の階段を「おっこおっこ」とか「えっこえっこ」と昇っていく場面が描かれている。本書を買ったさいに気づくことではあるが、最後まで読み終え、改めて眺めると、また違った意味を持った感慨に圧倒される。月並みな言い方であるが、児童書であるとはいえ、大人でも十分に堪能できる本である。

ところで、今年はスギ花粉の飛来が、例年より早く観測されている。以前、このブログに書かせてもらったレビューの中で触れたように、私は猫アレルギーである。スギ花粉に対してもアレルギー症状が出る。つい2週間前に、かかりつけの医師のアドバイスに従って早めに注射を打ってもらい、症状を抑える薬を飲み始めた。そのせいかどうかは分からないが、この書評を書くにあたり、くしゃみや鼻水に悩まされることはなかった。普段なら、誰かと猫の話をしているだけでも、「ひえっくしょんひえっくしょん」、「ぐしゅりぐしゅり」、「うずーうずー」となる私なのである。

<評者：孟宗竹真（もうそうだけまこと）詩人>

*

孟宗竹真氏には、「不定期に」という条件で書評をお送りいただいておりますが、日曜には書評というパターンが定着しつつあります。今週も日曜日に間に合うように原稿をお送りくださった孟宗竹氏に、厚く御礼申し上げます。

書評のバックナンバーは、第1回「架空書評：狂った砂時計」2009-01-13、第2回「架

空書評：何もかもが輝いて見える日」2009-01-18、第3回「架空書評：彼らのいる風景」2009-01-25、第4回「架空書評：ビッグ・ブラザー」2009-02-01、第5回「架空書評：PDS ジェネレーションズ」2009-02-08 です。未読の方が、今回の記事とあわせてお読みいただければ、幸いです。

なお、当ブログのバックナンバーのタイトルに短い解説とキーワードをつけたダイジェスト版、「こんなことを書きました（その1）」2009-01-19、「こんなことを書きました（その2）」2009-02-02 にも、お目を通していただければ嬉しいです。

あすは、過去2週間分14本（※2009-02-02 から2009-02-15）の記事のダイジェスト版である、「こんなことを書きました（その3）」を書き、頭の中の整理をする予定です。

孟宗竹さん、どうか来週もお願い申し上げます。（パ）

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

◆こんなことを書きました（その3）

2009-02-16 09:02:14 | Weblog

今回も、2週間分、つまり14本の記事に何を書いたのかを確認し、頭の整理をするために、「こんなことを書きました（その2）」2009-02-02 の続編を書きます。2009-02-03 から2009-02-15 までに、当ブログに掲載した14本の各文章についての、短い解説とキーワードが書いてあります。

未読の方には、こいつはこんなことを書いてきたのか、という案内になると思います。また、これまでにご一読されたことのある方には、あのわけの分からなかった文章はこういうことを書くつもりだったのか、という具合にご理解いただけるよう、できるだけ簡潔にダイジェストしようと思っております。お役に立てば幸いです。

* 「1カ月早い、ひな祭り」2009-02-03：まず、人面〇〇に代表される、ヒトが何かにヒトの顔を見てしまうという習性に注目しています。そこから出発し、お面→仮面→人形へと話を発展させ、「1カ月早い、ひな祭り」を挙行＝虚構しています。「お代理様＝お内裏様」という言葉遊びが、人形というものの本質に迫っていることを指摘し、人形は顔が命であるというフレーズをもとに「面（＝めん・おも・おもて・つら）」という言葉のコアイメージ（中心的イメージ）の分析に進みます。その分析結果から、「顔」＝「面」＝「表情」＝「化粧」＝「かつら」＝「表象」という連鎖をたどり、そこに「虎の威＝衣」を借りようとするヒトの欲求を見出しています。また、「まつりごと＝政＝祭事」の発生を紙芝居的に描いた寸劇も披露しています。キーワードは、「厚みがない＝薄っぺら」「化ける」「能面」「浅田真央」「怪しさ＝妖しさ」「権威」「代理人＝代行者」「シャーマニズム」「豆まき」です。直接書かなかったキーワードは、「宗教」「神」「政治」「司法制度」「官僚主義」です。

* 「神様になる方法」2009-02-04：ヒトと他の生き物の「嘘」の違いから話を進め、「比喩＝たとえ・たとえる＝嘘」を考察します。直喩と暗喩の例を示し、広義の比喩についても触れています。究極的な比喩としての「〇〇の神様」という言い方に注目して、その具体例を挙げながら「神様になる方法」とも言える「比喩の生成」を分析しています。また、「〇〇の神様」を自称する厚顔な人を批判しています。固いテーマなので、領収証（＝領収書）の宛名である「上様」を例にとり、最後におふざけをしています。また、特定の宗教を批判しているわけではないと断り、微妙な問題に触れたことに気遣いを示しています。

* 「かつらはずれる」2009-02-05：まず、前日テーマにした「比喩」を「比喩魔」と言い換え、言霊に配慮しています。畏怖をおぼえたのでしょうか。そこから「学魔」こと「高山宏」氏の回想に移っています。いつの間にか、この日のテーマである「かつらが、ずれる」というさいの「ずれ・ずれる」に話がずれていきます。さらに頭皮上における「かつら」の「ずれ」から、「尻尾のないおサルさん」が「狂えるおサルさん」になったさいに起きたと推察される「脳内」における「ずれ」へと、話題が移ります。その「脳内のずれ」がもう後戻りできないことに読者の注意を喚起し、自戒の念をこめて、「ヒトとして存在すること」に自省的であろうとすることの必要性と意義を訴えています。話は、ニーチェの「神は死んだ」という言葉へと飛び、自らの支離滅裂ぶりを反省して記事を終わっています。キーワードは、「言霊」「悪魔」「お祓い」「Gee!」「Oh, my God!」「宗教的意味でのファンダメンタリズム」「『善悪の彼岸』」「対義語＝反対語＝反意語」です。直接書かなかったキーワードは、「アメリカ合衆国」です。

* 「究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ」 2009-02-06：前日の記事を書いた後に「かつら」をキーワードにググって数時間を過ごしたことを語り、自分の頭髪が危機に瀕していることを告白しています。次にテーマを「もし」という、仮定を表現する言葉に移していきます。「神は、仮定から生じる」＝「神は「もし・もしも」から作られるという仮説を示し、「もし＝考える＝想像する＝疑問に思う＝頭の中がずれた結果の超ラッキー」という図式にいたります。そこから、「ヒトにとって究極の武器は比喩と仮定なのだ」という結論を導き出し、「もし〇〇のように……できたら」の「〇〇」が「現実界に存在するもの」から、「魔法＝ブラックボックス＝ブラックホール＝何でもあり＝めちゃくちゃ＝無節操＝無尽蔵＝ドラえもんのポケット」に転じた瞬間に、ヒトの飽くなき欲望が行き着くところまでいってしまったのだと、読者に訴えて記事を終えています。キーワードは、「仮定法過去」「直説法」「狂え、狂え」「衣食住」です。

* 「ひとかたならぬお世話になっております」 2009-02-07：「ヒトは森羅万象に、自分とその仲間たちの顔や姿を知覚してしまう」について、考察しています。化石化した太古のヒトの遺体におびたしい花粉が付着していたという話を紹介し、宗教の発生について考える糸口にしています。火曜日（2009-02-03）に取り上げた「お内裏様＝お代理様」という図式から、「人形（＝ひとがた・ひとかた）」に話を移し、そこから「人身御供」「生贄」「スケープゴート」のメカニズムを考察しています。また、この分野に詳しくあった「ジョルジュ・バタイユ」を紹介しています。突然、「花は、なぜ美しいか？」と読者に問いかけます。奇妙な問いを発した、どさくさに紛れて、現在の自分が経済的に逼迫していることを訴え、「出版関係者の方、お読みになっていらっしゃれば、お仕事ください。書くことでしたら、一生懸命やります」などと、ブログをハローワーク化しています。最後は、学生時代に目撃した、ある珍事件を引き合いに出し、花が「生殖器」である事実に喚起を促して締めくくっています。キーワードは、「土偶」「古墳」「埴輪」「中国のお墓」「ピラミッド」「モアイ像」「肖像画」「家族写真」「ビデオの家族の映像」「土木工事」「お供え」「献花」「供物」「動物アニメ」「ゲームのキャラクター」「アイコン」「アバター」「殖＝ふえる・ふやす＝増」「自家受粉」「他家受粉」「交配」「変人」です。

* 「架空書評：PDSジェネレーションズ」 2009-02-08：詩人の孟宗竹真（もうそうだけまこと）氏によるブックレビューの第5回目。純文学作家によるSF的長編小説。人類が何度かの世界大戦を経た208X年の、ニュー・カワサキという都市国家が舞台。全住民が、葉づけ器械づけになっている。放射能による日常的な多量の被爆に対する処置と、「人格障害症候群（PDS）」への治療および予防とが目的なのである。0歳から20歳（＝Xジェネレーションと呼ばれる）は、凶暴性・残酷性。20歳から40歳（＝Yジェネレーションと呼ばれる）が気分障害（躁・うつ・躁うつ）。40歳以上（＝Zジェネレーションと呼ばれる）ではペドフィリア（小児性愛）。こうした症候が世界的規模で起きている。その世界に、ある緊急事態が発生する。ニュー・カワサキに住むナカニシ家を中心に、悪夢のような未来を描いた作品。

* 「1人に2台のテレビ」2009-02-09：前日、電気製品の量販店で、たくさんのテレビ画面が並ぶさまを見て感じたことから、話が展開していきます。「テレビは、ヒトを「まねて」作られているのではないか？」「テレビは見るもの、パソコンの画面は読むもの、ではないだろうか？」という、かねてからの漠然とした疑問について考察しようと努力しています。また、過去のブログからの引用が増えてきたことを意識し、不安感を覚えている様子がうかがわれます。「ヒトは、テレビ放送を受信するテレビ受像機と、「自分の知覚というテレビ受像機」の2台を持っているのではないか」という問題提起をしています。キーワードは、「カジノ人間主義」「つくる・作る・創る」「発明する」「発見する」「偶然の産物・副産物」「ペニシリン」「クリエイティビティ＝創造性＝創造力」「クリエイティブ・シンキング」「発想法」「YouTube」「コラボログとモノブログ」「テレビとインターネットの合体・融合」「ハイビジョン＝高精細度テレビ＝高品位テレビ」「聞き間違い」です。

* 「人面管から人面壁へ」2009-02-10：「ヒトは、複数の画面を同時に知覚することができるのだろうか？」と問題提起をし、前々日に電気製品の量販店で行った「実験の結果」を発表しています。異なった画像が映し出されている3台のテレビの画面を見ていて、自分が聖徳太子のように、同時に3台の映像に集中することができなかつたと報告しています。自分の知覚の情報処理能力に欠陥があるのではないか、という疑問を棚上げし、「ヒトは、1つのテレビ画面にしか、集中できない」と、とりあえず結論づけています。そこから、(1)「ヒトは、1度に1台のテレビ受像機だけなら、マジで観ることができる」、(2)「ヒトは、1度に1個の自分という存在として世界を知覚している」、(3)「ヒトは、自分という存在の知覚処理能力に合わせて、テレビを作っている」と、強引に論を進めています。このあたりで、個人的に重要な、ある自覚にいたっています。それは、約10日前に書いた「カジノ人間主義」2009-01-30というタイトルの記事で、「表象」「表象作用」については、自分の書きたいことを書き尽くしたという思いです。そこから、「表象＝シンボル＝代理＝代行」という、それまでのワンパターンをいったん「忘れたふりを装い」、今後はしばらく「記号」という言葉に軸足を移す決意をしています。「すべてのものは、「記号」という幻（まぼろし）を発している」というフレーズをもとに、テレビは、「人面管＝ブラウン管を使って、テレビ放送を受信する機械」から、「人面壁＝壁のように薄型化された画面で、高精細度テレビ放送（＝ハイビジョン）を受信する機械」に進化＝出世した、という仮説を提起しています。振り返って読むと、転機に立っている記事です。愛着を覚えます。キーワードは、「テロップ」「多重人格」「メディアリテラシー」「テレビ番組の台本」「やらせ」「テレビ教・テレビ教徒」「ボードリヤール」「マトリックス」「キアヌ・リーヴス」「シミュラクル」「シミュレーション」「魔＝ゴースト＝醜さ＝見にくさ＝画質の悪さ＝ノイズ」「幻＝まぼろし＝魔滅し」です。

*「マトリックス」2009-02-11：前日に造語した「人面管」と「人面壁」を定義していません。次に「人面」を『そこにヒトの顔など存在するはずがないことを承知しつつ、そこにヒトの顔を知覚してしまう』という錯覚と、基本的には同じ『仕組み＝からくり＝脳および身体の働き』である」、と自説を述べています。この説を前提に、ネガティブとポジティブという「反意語」とみなされているペアを例にとって、言葉という比喩を真に受けてしまう、ヒトの習性に警鐘を鳴らそうとしています。さらに、テレビを引き合いに出し、「ヒトは、イメージの存在しないところに、存在しないイメージを知覚する」という習性の好例だと訴えています。印刷用語である、活字の「母型（ぼけい）＝マトリックス＝matrix」という言葉が、さまざまな意味を持っていることに触れ、matrix という語の中心的なイメージ（＝コア・イメージ）が、「母＝母体＝産み出す＝生み出す＝殖（※生殖、繁殖、養殖の殖です）＝複製の原型（＝原形）」であると述べています。ここで、かつて自分が犯した「詐欺」について告白し、被害者に対して連絡を求めています。『マトリックス』というのは、『記号＝まぼろし発信装置』の『複製製造機＝お母さん』である」から出発し、「記号＝まぼろし発信装置」の第1のイメージは、(1)「ほとんど同じように見えるものが、たくさん並んでいる。そして、ほかの場所にも、きっとたくさん並べられている」、第2のイメージは、(2)「商品そのものではなくて、そのものの『機能＝用途＝役目＝使い道』を購入し、消費する」である、と論を進めたところでブログの文字数制限に引っかかり、記事を終えています。キーワードは、「活字のデザインおよびデザイナー」「写植＝写真植字」「苦学生」「角川文庫と新潮文庫の区別」「多数陳列された商品・製品」です。

*「こんなマヨじゃ、いやだ！」2009-02-12：「記号＝まぼろし発信装置」の典型例として、スーパーに並ぶ商品のうちから、マヨネーズを取り上げています。マヨネーズを消費するということが、どんな行為なのかを説明しようと努めています。「商品その『もの自体』ではなくて、そのものの『機能＝用途＝役目＝使い道』を購入し消費する」という点に注意を促したのち、「ある特定の「もの自体」の「機能＝用途＝役目＝使い道」を欲するヒトもいる」という点にも、読者の注意を促しています。ここで、「幻聴＝ゲンチョーさん」のちゃちゃが入り、「モラトリアム人間」に言及したことから、「死語復活キャンペーン」に続いて、「あのヒトは今」という新企画を思いつきます。また、このところ、過去の記事からの引用が増えたことについて、言い訳＝弁解＝弁明をしています。また、引用が戦略にもなるという身勝手な論理を展開し、「宮川淳」著「引用の織物」の名を引用している点も、現在読み返すとお恥ずかしい限りです。自棄を起こして、引用とコピペをしまくっている文章になっています。キーワードは、「マトリックス」「マヨラー」「フェティシズム」「フェティッシュ」「哲学＝ポリシー＝生き方＝価値観＝世界観」「ニート」「フリーター」「ラベル＝レッテル」「記号論」「記号学」「コンピューター」「2進法」「情報処理・データ処理」「熱」「運動」「独創性＝オリジナリティ」「寄せ集め＝コラージュ＝パッチワーク＝ごった煮」「手仕事＝ブリコラージュ」「複製＝コピー」です。直接書かなかったキーワードは、「ロラン・バルト」です。

*「そっくり」2009-02-13：前日に繰り広げた、過去の自分の記事からの過度の引用とコピペを恥じ、この日の文章にはいっさい「自己輸血」をしていません。幼いころからの傾向である「顔が認識しにくい」と、中途難聴者であることによる「聞こえにくい」という日々の経験をもとに、「そっくりである」ということについて考察を試みています。ヒトが他の生き物を見分けられるかという、素朴な疑問から出発し、逆に他の生き物がヒトを見分けられるか、という問いを読者に投げかけています。素っ裸の状態、3カ月間、美容院にも理容店にも行くことを禁じられ、入浴も制限されたヒト100人と、野生のニホンザル100匹を、体育館に閉じ込めたらどうなるか？ こんな突拍子もない質問を読者にし、頭の柔軟体操、あるいはショック療法を試みるという、一種のおふざけをしています。「と或る尻尾のないおサルさん」の頭の中でズレが起きて、「と或る尻尾のないおサルさん+ α 」＝「狂えるおサルさん」＝「ヒト」＝「人間様」になったという、当ブログでお馴染みの紙芝居の筋書きを、別の視点から、具体的かつ直接的に読者にシミュレートし、体感してほしいという願いからの一種の「おふざけ」です。また、「トリトメのない」「記号」という、このブログでの新しいテーマについて考えるさいには、いくつかの既成観念を取り払う必要があると述べ、その第1弾を試みています。最後のほうでは、かなり踏み込んだ議論を展開しています。気合を入れて書いた記事です。未読の方には、ぜひ、ご一読願いたいと思っております。

*「東京」(E 無限大) 2009-02-14：「トリトメのない」「記号」について考えるための、頭の柔軟体操、ショック療法、あるいは一種のおふざけの第2弾です。「東京」という文字を羅列し、さらには「東京」についてのイメージを羅列することにより、「不気味」「尋常ではない」という感じを体感していただくことが、第1の狙いです。このように解説することは、ネタバレをするようなものなので、この日の記事を未読の方には、まず記事を読んでいただきたいと思っています。「言葉」を用いて学問をすることに伴うジレンマと、それを回避するための手段としての「体感」および「直感」の利用についても、自説を述べています。なお、この文章では、当ブログの本来のスタンスに反する「ある実験」をしました。その言い訳として、スピリチュアル、ヒーリング、自己変革、自己啓発、コーチングといった分野に関する個人的な意見を述べ、読者への理解を求めています。また、既に終了したはずの「死語復活キャンペーン」を復活させています。

*「架空書評：九つの命」2009-02-15：詩人の孟宗竹真（もうそうだけまこと）氏によるブックレビューの第6回目。児童書。主人公は猫のアユ。雄である。生まれて間もないアユが、8匹のきょうだいと一緒に段ボールに入れられて川に捨てられる場面から始まる。次々ときょうだいが意識を失っていき、アユだけが生き残る。アユは拾われ、ある老夫婦のもとで暮らすことになる。アユ1匹が生き残ったのにはわけがあった。猫の神様のお使いである老猫と、ある約束をしたからである。自分を含む9つの命を見守り、時にはその命を救うという使命を与えられたアユ。約束と同時に、アユには瞬間移動と

千里眼の2つの魔法が授けられる。アユと、残る8つの命の持ち主たちとの交流が、コメディタッチで描かれる。ラスト近くで、声だけとなった老猫が再び登場し、アユにあることを打ち明ける。アユは驚く。ラストシーンは、せつない。しかし、作者のストーリーテリングの技は、その悲しい結末を美しいイメージで描き、ポジティブなものへと転じるのに成功している。

以上です。

あとがき

あとがき

哲学がしたーい。誰々が何々と言ったなんて、関係ない。自分の頭と体で考えてみたーい。インプットする暇などない。アウトプットに全力をあげよう。今ここにある手持ちのものを総動員して、言語、哲学、表象について、考えてみたい。哲学を庶民の手に！

うつを患いながらも、以上のような気持ちで、いわば憂さ晴らしに書き始めたのが、本書のもととなったブログでした（「うつせみのあなたに」というブログは、現在も開店いたしております）。いったん始めたら、そればかりを律儀に続ける——これこそ、まさに、うつになりやすい典型的な性格だと思います。

そうした性格の私は、ほぼ1年間にわたり毎日毎日（ときおりダウンもしましたが）、ブログ記事にしては長いものを書き続けたのでした。その結果、生まれたのが本書です。テーマは、人間の原点である「表象の働き」＝「代理の仕組み」——「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いるという仕組み——です。

具体的には、言語、哲学、社会現象、表象文化が、私にとっての思考の対象になりました。今でも、そのスタンスは変わりません。そうした分野を、駄洒落を頻発し、遊び心を持ち、あくまでも素人の立場から、自由奔放に論じる。上述の「表象の働き」を、読み手に話しかけるように、なるべくややこしくならないように書きつづる（とはいっても、ややこしくならざるを得ない部分もありますけど）——。それが、本書の一貫した態度です。

今思えば、心の病をかかえていたものの（現在もかかえています）、贅沢な時間を過ごした気がします。なにしろ、自分のいちばん興味のある、「何か」の代わりに、その「何か」ではないものを用いる」という仕組みについて、考えることができたのですから。

『うつせみのあなたに 第1巻～第11巻』の各記事タイトル

第1巻

08.12.19 今日は誕生日

08.12.20 地図は現地ではない

08.12.21 消えてしまいたい指数

08.12.22 言葉に振りまわされる毎日

08.12.23 狂ったサル

08.12.24 あえて、その名は挙げない

08.12.25 遠い所、遠い国

08.12.26 横たわる漱石

08.12.27 信じてはいけない言葉

08.12.28 そして、話はお金に行き着く

08.12.29 匿名性の恐ろしさ

08.12.30 再び「消えてしまいたい指数」について

08.12.31 その点、ナンシー関は偉かった

09.01.01 私家版『存在と無』一序文一

09.01.02 論理の鬼

09.01.03 うつとあ・そ・ぼ、あるいは意味の構造について

09.01.04 haiku と俳句、ベースボールと野球

09.01.05 翻訳の可能性＝不可能性

09.01.06 ひとり歩きを言い訳の道具にしてはならない

09.01.07 名のないモンスター、あるいは外部の思考

09.01.08 見えないものを見る

09.01.09 読めないけど分かる言葉

09.01.10 聞こえるけど聞けない言葉

09.01.11 目は差別する

09.01.12 投資って何だろう？ お金って何だろう？

09.01.13 架空書評：狂った砂時計

09.01.14 ん？

09.01.15 「ん」の不思議

09.01.16 あなたなら、どうしますか？

09.01.17 やっぱり、ハンコは偉い

09.01.18 架空書評：何もかもが輝いて見える日

09.01.19 こんなことを書きました（その1）

第2巻

09.01.20 それは違うよ

09.01.21 ま～は、魔法の、ま～

- 09.01.22 なぜ、ケータイが
- 09.01.23 お口を空けて、あーん
- 09.01.24 冬のすずめ
- 09.01.25 架空書評：彼らのいる風景
- 09.01.26 交信欲＝口唇欲
- 09.01.27 ケータイ依存症と唇
- 09.01.28 オバマさんとノッチさん
- 09.01.29 もしかして、出来レース？
- 09.01.30 カジノ人間主義
- 09.01.31 コラブログとモノブログ
- 09.02.01 架空書評：ビッグ・ブラザー
- 09.02.02 こんなことを書きました（その2）
- 09.02.03 1カ月早い、ひな祭り
- 09.02.04 神様になる方法
- 09.02.05 かつらはずれる
- 09.02.06 究極の武器はヒューヒューともしもしなのだ
- 09.02.07 ひとかたならぬ世話になっております
- 09.02.08 架空書評：PDSジェネレーションズ
- 09.02.09 1人に2台のテレビ
- 09.02.10 人面管から人面壁へ

09.02.11 マトリックス

09.02.12 こんなマヨじゃ、いやだ！

09.02.13 そっくり

09.02.14 「東京」CE 無限大

09.02.15 架空書評：九つの命

09.02.16 こんなことを書きました（その3）

第3巻

09.02.17 ああでもあり、こうでもある

09.02.18 差別化

09.02.19 飽きっぽくて、忘れっぽい

09.02.20 まぼろし

09.02.21 トリトメのない話

09.02.22 架空書評：奪還

09.02.23 おいしくない社会

09.02.24 あきらめない

09.02.25 最後のとりでを守る

09.02.26 やっぱり CHANGE なのだ

09.02.27 イエス・アイ・キャン

09.02.28=10.06.26 うつせみのあなたに

- 09.03.01 なぜ、お父さんがいないの？
- 09.03.02 女か男か？
- 09.03.03 ヒトは本を読めない
- 09.03.04 作者はいない
- 09.03.05 おくりびと vs. 千の風になって
- 09.03.06 毎度ありがとうございます
- 09.03.07 ゆうれいをはらう
- 09.03.08 こんなことを書きました（その4）
- 09.03.09 要するに、まなかな、なのだ
- 09.03.10 女心を男が歌う
- 09.03.10-09.03.12 でまかせしゅぎじっこうちゅう（前編）
- 09.03.13-09.03.15 でまかせしゅぎじっこうちゅう（後編）
- 09.03.16-09.03.25 うつせみのうつお
- 09.03.26-09.03.27 かわる（1）～（5）
- 09.03.28-09.03.29 かわる（6）～（10）
- 09.03.30 なる（1）～（3）
- 09.03.31 なる（4）～（6）
- 09.04.01 なる（7）～（8）
- 09.04.02 なる（9）～（10）
- 09.04.03 たとえる（1）～（2）

09.04.04 たとえる (3) ~ (4)

09.04.05 たとえる (5) ~ (6)

09.04.06 たとえる (7)

09.04.07 たとえる (8)

09.04.08 たとえる (9)

09.04.06-09.04.09 でまかせしゆぎじっこうちゅう

09.04.10-09.04.16 うつせみのうつお

09.04.17 たとえる (10)

09.04.18 こんなことを書きました (その5)

第4巻

09.04.19 平安時代のテープレコーダー

09.04.20 言葉を奪われる

09.04.21 「事実=意見」=両方ともでたらめ

09.04.22 「人間=機械」説 (1)

09.04.23 4月23日にギャグる

09.04.24 「人間=機械」説 (2)

09.04.25 「人間=機械」説 (3)

09.04.26 反「人間=機械」説

09.04.27 あう (1)

09.04.28 あう (2)

- 09.04.29 あう (3)
- 09.04.30 あう (4)
- 09.05.01 あう (5)
- 09.05.02 あう (6)
- 09.05.03 あう (7)
- 09.05.04 こんなことを書きました (その6)
- 09.05.05 スポーツの信号学 (1)
- 09.05.06 ドラマ信号論 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (1)
- 09.05.07 信号論から見た経済 (2)
- 09.05.08 信号学的視線論 (1)
- 09.05.09 信号学的視線論 (2)
- 09.05.10 信号論 (1)
- 09.05.11 もくじをつくりました
- 09.05.12 信号論 (2)
- 09.05.12 信号論 (3)
- 09.05.13 こんなことを書きました (その7)

第5巻

- 09.05.14 かく・かける (1)

09.05.15 かく・かける (2)

09.05.16 かく・かける (3)

09.05.16 かく・かける (4)

09.05.17 かく・かける (5)

09.05.18 かく・かける (6)

09.05.19 かく・かける (7)

09.05.19 かく・かける (8)

09.05.20 占い・占う

09.05.21 賭け・賭ける

09.05.22 書く・書ける (1)

09.05.22 書く・書ける (2)

09.05.23 こんなことを書きました (その8)

09.05.24 と、いうわけです (1)

09.05.24 と、いうわけです (2)

09.05.25 あられる・あらず (1)

09.05.26 あられる・あらず (2)

09.05.27 あられる・あらず (3)

09.05.28 あられる・あらず (4)

09.05.29 あられる・あらず (5)

09.05.30 あられる・あらず (6)

09.05.31 あらわれる・あらわす (7)

09.06.01 あらわれる・あらわす (8)

09.06.02 こんなことを書きました (その9)

第6巻

09.06.03 つくる (1)

09.06.04 つくる (2)

09.06.05 つくる (3)

09.06.06 つくる (4)

09.06.07 テリトリー (1)

09.06.08 テリトリー (2)

09.06.08 テリトリー (3)

09.06.09 テリトリー (4)

09.06.10 テリトリー (5)

09.06.11 テリトリー (6)

09.06.12 テリトリー (7)

09.06.13 こんなことを書きました (その10)

09.06.18 なわ=わな

09.06.19 台風と卵巣

09.06.20 出る

09.06.21 うんちと言葉

09.06.22 地と知と血 (1)

09.06.22 地と知と血 (2)

09.06.23 「あつい」と「わからない」

09.06.24 ぼーっとする、ゆえに我あり

09.06.25 時の神＝あわいわあい (1)

09.06.25 時の神＝あわいわあい (2)

09.06.26 こんなことを書きました (その 11)

第 7 卷

09.06.27 空前の「純文学」ブーム

09.06.28 「時間」と「とき」

09.06.29 「揺らぎ」と「変質」

09.06.30 不自由さ (1) 2010 年

09.06.30 不自由さ (2) 2010 年

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (1)

09.07.01 ぐるぐるゆらゆら (2)

09.07.02 うたう

09.07.03 まつはいつまでも、まつ

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (1)

09.07.04 あわいあわい・経路・表層 (2)

- 09.07.05 マンネリズム・マニエリズム
- 09.07.06 こんなことを書きました（その 12）
- 09.07.07 いみのいみ
- 09.07.08 何となく
- 09.07.14 記述＝奇術＝既述
- 09.07.15 3人のゲンちゃん
- 09.07.16 あつきのせい？
- 09.07.17 システムと有効性と比喻
- 09.08.01 気になるというか
- 09.08.02 もう1つ気になることが
- 09.08.03 さらに気になることが
- 09.08.04 できないのにできる
- 09.08.05 何もないところから
- 09.08.06 めちゃくちゃこじつけて
- 09.08.07 銃が悪いのではなく
- 09.08.08 どうにもならないときには
- 09.08.25 こんなことを書きました（その 13）

第8巻

- 09.08.11 たわむれる
- 09.08.12 なつかれる

09.08.13 げん・幻 -1-

09.08.14 げん・幻 -2-

09.08.15 げん・幻 -3-

09.08.16 げん・幻 -4-

09.08.17 げん・幻 -5-

09.08.18 げん・幻 -6-

09.08.19 げん・幻 -7-

09.08.20 げん・幻 -8-

09.08.21 げん・幻 -9-

09.08.22 げん・幻 -10-

09.08.30 こんなことを書きました（その 14）

09.08.23 げん・言 -1-

09.08.24 げん・言 -2-

09.08.26 げん・言 -3-

09.08.27 げん・言 -4-

09.08.28 げん・言 -5-

09.08.29 げん・言 -6-

09.08.31 げん・言 -7-

09.09.01 げん・言 -8-

09.09.XX げん・言 -9-

09.09.XX げん・言 -10-

09.09.XX げん・現 -1-

09.09.XX げん・現 -2-

09.09.XX げん・現 -3-

09.09.XX こんなことを書きました（その 15）

09.09.04-09.09.26 小品集（1）

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

第9巻

09.09.04 お墓参り

09.11.11 言葉とうんちと人間（言葉編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（うんち編）

09.11.12 言葉とうんちと人間（人間編）

09.11.13 代理だけの世界（1）

09.11.14 代理だけの世界（2）

09.11.15 代理だけの世界（3）

09.11.19 代理だけの世界（4）

09.11.27 1年前の記事を読んで

09.11.28 今、考えていること

09.11.29 社会復帰はあきらめました

09.11.30 代理だけ

09.12.01-09.12.11 うつせみのあなたに（再録）

09.12.XX こんなことを書きました（その16）

09.12.02 でまかせ・いず・む

09.12.03 もてあそばれるしかない

09.12.04 わかるはわかるか

09.12.05 翻訳の可能性と不可能性

09.12.06 わかるという枠

09.12.07 わかるはわからない

09.12.08 わかるはプロセス

09.12.09 3つの枠

09.12.10 ちょっとないんですけど

09.12.11 あなたとは違うんです

09.12.XX こんなことを書きました（その17）

第10巻

09.12.06 ヒトいろいろ

09.12.07 信号としての石川君

09.12.08 コトバとチカラ

09.12.09 ごめんなさい

- 09.12.10 政治とは「分ける」こと
- 09.12.11 きな臭い話
- 09.12.08 ブログ廃人と呼ばれて
- 09.12.09 続・社会復帰はあきらめました
- 09.12.10 ブログと心中？
- 09.12.11 よくないなあ
- 09.12.12 素面でいたい
- 09.12.13 儀式
- 09.12.14 爪を切る
- 09.12.15 わける（1）
- 09.12.16 わける（2）
- 09.12.XX こんなことを書きました（その18）
- 09.12.16 二句
- 09.12.19 ずらす
- 09.12.20 かえるのではなくてかえる
- 09.12.21 とりとめもなく
- 09.12.22 パラレル
- 09.12.23 日本語にないものは日本にない？（1）
- 09.12.24 日本語にないものは日本にない？（2）
- 09.12.25 日本語にないものは日本にない？（3）

09.12.26 日本語にないものは日本にない？（４）

09.12.27 日本語にないものは日本にない？（５）

10.01.12 かえるはかえる

10.01.13 かえるにかえる

10.01.14 もどるにもどれない

10.01.15 け＝く

10.01.16 まことにまこと

10.01.17 まことはまことか（前半）

10.01.17 まことはまことか（後半）

10.01.18 本物の偽物（前半）

10.01.18 本物の偽物（後半）

10.01.19 からから

10.01.20 2010年1月20日にギャグる

10.01.21 こんなことを書きました（その19）

第11巻

10.01.22 夢の素（1）

10.01.23 夢の素（2）

10.01.24 夢の素（3）

10.01.24 夢の素（4）

- 10.02.02 うつせみのたわごと -1-
- 10.02.02 うつせみのたわごと -2-
- 10.02.03 うつせみのたわごと -3-
- 10.02.04 うつせみのたわごと -4-
- 10.02.06 うつせみのたわごと -5-
- 10.02.07 うつせみのたわごと -6-
- 10.02.08 うつせみのたわごと -7-
- 10.02.09 うつせみのたわごと -8-
- 10.02.10 うつせみのたわごと -9-
- 10.02.11 うつせみのたわごと -10-
- 10.02.12 うつせみのたわごと -11-
- 10.02.13 うつせみのたわごと -12-
- 10.02.14 うつせみのたわごと -13-
- 10.02.15 うつせみのたわごと -14-
- 10.02.16 「外国語」で書くこと
- 10.02.17 揺さぶり、ずらし、考える
- 10.02.19 動詞という名の名詞
- 10.02.21 名詞という名の動詞（前半）
- 10.02.21 名詞という名の動詞（後半）
- 10-02-25 不思議なこと

10.02.27 はかる -1-

10.02.28 はかる -2-

10.02.XX はかる -3-

10.02.XX はかる -4-

10.03.XX こんなことを書きました (その 20)

10.03.04 代理としての世界 -1-

10.03.05 代理としての世界 -2-

10.03.06 代理としての世界 -3-

10.03.07 代理としての世界 -4-

10.03.09 代理としての世界 -5-

10.03.11 代理としての世界 -6-

代理としての世界 (改訂版) (1)

代理としての世界 (改訂版) (2)

代理としての世界 (改訂版) (3)

代理としての世界 (改訂版) (4)

奥付

奥付

うつせみのあなたに 第2巻

<https://puboo.jp/book/11920>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/11920>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/11920>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

うつせみのあなたに 第2巻

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
